埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第185集

美里町

広木上宿遺跡

——縄文時代編——

県道広木折原線関係埋蔵文化財発掘調査報告

——II——

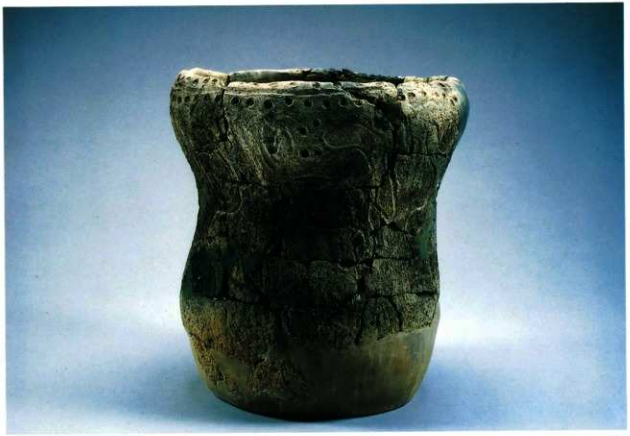
1997

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

第 6 号住居跡出土土器

第17号住居跡出土土器

第81号土壙出土土器



埋甕

序

首都圏に位置する埼玉県は、人口の増加に伴い県民の生活圏が拡大し、産業活動が高度化しています。それらに対応するために埼玉県では、道路の特性に応じた体系的な道路網の整備が行われています。

特に、県道については県内1時間道路網構想を目指した整備とともに、地域間の連携を高めるための整備が進められています。この県道広木折原線も、その一環として建設工事が計画されました。

県道広木折原線は美里町広木から寄居町折原に至る路線で、国道254号線と国道140号線を結ぶ道路であります。

道路建設予定地内には複数の遺跡の所在が知られております。これらの埋蔵文化財については協議が重ねられた結果、当事業団が発掘調査を実施して、その記録を保存することになりました。今回報告いたします広木上宿遺跡は、美里町に所在する遺跡であります。

発掘調査の結果、縄文時代や古墳時代から奈良・平安時代の集落跡、また中世の寺院関連遺構などが検出され、土器や石器、鉄製品などが出土しました。

特に、漆箱に伴って発見された金・銀・金銅・銅・鉄の5種類の金属で作られた5基の小型宝塔と5本の小型未開敷蓮華は、全国にも類を見ないもので、平成7年3月に埼玉県有形文化財に指定されました。

これらの発掘調査の成果は、縄文時代編と古代・中世編との2冊に分けて報告されることになり、平成8年度には第1分冊として「古代・中世編」を報告しましたが、今回は第2分冊として「縄文時代編」を報告することになりました。

縄文時代では、中期の住居跡がまとまって発見されたほか、早期・前期の土器や石器が出土し当時の様子を知る貴重な資料となりました。

本書が、古代・中世編とともに、埋蔵文化財の保護に関する教育・普及の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く御活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行にいたるまで多大な御協力を賜りました教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、十木部道路建設課、同本庄土木事務所、美里町教育委員会、並びに地元関係者各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　荒井　桂

例 言

1．本書は、児玉郡美里町に所在する広木上宿遺跡の発掘調査報告書（縄文時代編）である。

2．遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

広木上宿遺跡（H．KMZYK）

児玉郡美里町大字広木字上宿2988番地他

平成４年７月10日付け委保第５の802号

平成５年６月４日付け委保第５の501号

3．発掘調査は、県道広木折原線（美里地内）建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整のあと、埼玉県土木部道路建設課の委託によって、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．本事業は、第１章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査について、平成４年度は今井宏、田中広明、西口正純が担当し、平成５年度は石坂俊朗、山本靖が担当し、平成４年４月１日から平成５年12月28日まで実施した。整理報告書作成作業は上野真由美が担当し、平成８年４月１日から平成９年３月31日まで実施した。

5．遺跡の基準点測量と航空写真は、株式会社東京航業研究所に委託した。縄文土器のカラー写真は小川忠博氏に委託した。土器胎土分析は第四紀地質研究所に委託した。

6．発掘調査時の遺構写真撮影は各担当者が行った。遺物撮影は、大屋道則、上野が行った。

7．出土品の整理・図版の作成は上野が行い、一部伊藤浩子が行った。

本文の執筆は、Ⅰ－１を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、それ以外は上野が行った。

8．本書の編集は、上野があたった。

9．本書にかかる資料は平成９年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

10．本書の作成にあたり美里町教育委員会からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

凡 例

1．本書の遺跡全測図におけるX・Yの座標値は、国土標準平面直角座標第IX系に基づく座標値を示している。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。

2．遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構図　　住居跡…1/60　土壙…1/60

遺物　　土器・石器…1/3

その他のものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度表記して示している。

3．全測図等に示す遺構表記の略号は以下のとおりである。

SJ…住居跡　SB…掘立柱建物跡

SK…土壙　SD…溝跡　SQ…基壇状遺構

4．挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

遺構断面図斜線部分――地山

住居跡内網掛け部分――炉跡範囲

土器断面網掛け部分――繊維混入

5．遺構図中に示したドットは、遺物の出土位置及び接合関係を示し、番号は遺物実測図のそれと一致する。

6．遺構断面図における水平数値は、海抜高度を示しており、単位mである。

目次

口　絵
序
例　言
Ⅰ　発掘調査の概要 ……1
　1　調査に至るまでの経過 ……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 ……2
　3　発掘調査・整理・報告書刊行の組織 ……3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 ……4
Ⅲ　遺跡の概要 ……8
Ⅳ　発見された遺構と遺物 ……14
　1　先土器時代 ……14
　2　縄文時代 ……14
凡　例
目　次
　(1)　住居跡 ……14
　(2)　土壙 ……94
　(3)　埋甕 ……105
　(4)　不明遺構 ……107
　3　グリッド出土遺物 ……108
　4　その他の遺物 ……144
Ⅴ　結語 ……146
付　編 ……159

挿図目次

第1図　埼玉県の地形図 ……4
第2図　美里町周辺の地形 ……5
第3図　周辺の遺跡 ……7
第4図　遺跡全測図 ……9
第5図　遺跡周辺の地形 ……13
第6図　先土器時代出土石器 ……14
第7図　第5号住居跡 ……15
第8図　第5号住居跡遺跡分布図・出土遺物(1) …16
第9図　第5号住居跡出土遺物(2) ……18
第10図　第5号住居跡出土遺物(3) ……19
第11図　第6号住居跡 ……21
第12図　第6号住居跡出土遺物(1) ……22
第13図　第6号住居跡出土遺物(2) ……24
第14図　第6号住居跡出土遺物(3) ……25
第15図　第6号住居跡出土遺物(4) ……26
第16図　第6号住居跡出土遺物(5) ……28
第17図　第6号住居跡出土遺物(6) ……30
第18図　第6号住居跡出土遺物(7) ……31
第19図　第8号住居跡 ……33
第20図　第8号住居跡遺跡分布図・出土遺物(1) …34
第21図　第8号住居跡出土遺物(2) ……36
第22図　第8号住居跡出土遺物(3) ……38
第23図　第8号住居跡出土遺物(4) ……39
第24図　第8号住居跡出土遺物(5) ……40
第25図　第9号住居跡 ……41
第26図　第9号住居跡出土遺物(1) ……42
第27図　第9号住居跡出土遺物(2) ……44
第28図　第9号住居跡出土遺物(3) ……45
第29図　第13号住居跡・出土遺物 ……47
第30図　第14・20号住居跡・第14号住居跡出土遺物(1) ……49
第31図　第14号住居跡出土遺物(2) ……50
第32図　第14号住居跡出土遺物(3) ……52
第33図　第14号住居跡出土遺物(4) ……53
第34図　第20号住居跡出土遺物 ……54
第35図　第17号住居跡出土遺物 ……56
第36図　第17号住居跡出土遺物(1) ……58
第37図　第17号住居跡出土遺物(2) ……59
第38図　第17号住居跡出土遺物(3) ……60
第39図　第17号住居跡出土遺物(4) ……62
第40図　第17号住居跡出土遺物(5) ……63
第41図　第19号住居跡 ……65
第42図　第19号住居跡出土遺物 ……66
第43図　第21号住居跡・出土遺物 ……68
第44図　第22号住居跡 ……70
第45図　第22号住居跡出土遺物 ……71
第46図　第23号住居跡・出土遺物 ……72
第47図　第24号住居跡 ……73
第48図　第24号住居跡出土遺物 ……74
第49図　第26号住居跡・出土遺物 ……75
第50図　第26号住居跡出土遺物 ……76
第51図　第28号住居跡 ……79
第52図　第28号住居跡出土遺物(1) ……80
第53図　第28号住居跡出土遺物(2) ……81
第54図　第83号住居跡出土遺物 ……82
第55図　第84号住居跡・出土遺物(1) ……83
第56図　第84号住居跡出土遺物(2) ……84
第57図　第84号住居跡出土遺物(3) ……86
第58図　第84号住居跡出土遺物(4) ……87
第59図　土壙 ……95
第60図　第81・82号土壙遺物出土状態 ……96
第61図　土壙出土遺物(1) ……97
第62図　土壙出土遺物(2) ……98
第63図　土壙出土遺物(3) ……100
第64図　土壙出土遺物(4) ……101
第65図　埋甕 ……105
第66図　不明遺構・出土遺物(1) ……106
第67図　不明遺構出土遺物(2) ……107
第68図　グリッド出土土器(1) ……109
第69図　グリッド出土土器(2) ……110

第70図　グリッド出土土器(3) ……113
第71図　グリッド出土土器(4) ……114
第72図　グリッド出土土器(5) ……116
第73図　グリッド出土土器(6) ……117
第74図　グリッド出土土器(7) ……118
第75図　グリッド出土土製品・石製品 ……119
第76図　グリッド出土石器(1) ……120
第77図　グリッド出土石器(2) ……121
第78図　グリッド出土石器(3) ……122
第79図　グリッド出土石器(4) ……123
第80図　グリッド出土石器(5) ……124
第81図　グリッド出土石器(6) ……125
第82図　グリッド出土石器(7) ……128
第83図　グリッド出土石器(8) ……129
第84図　グリッド出土石器(9) ……130
第85図　グリッド出土石器(10) ……133
第86図　グリッド出土石器(11) ……134
第87図　グリッド出土石器(12) ……135
第88図　グリッド出土石器(13) ……136
第89図　グリッド出土石器(14) ……137
第90図　グリッド出土石器(15) ……138
第91図　その他の遺物 ……144
第92図　中期の住居跡と遺跡周辺の地形……147
第93図　広木上宿遺跡出土の縄文中期土器(1)……148
第94図　広木上宿遺跡出土の縄文中期土器(2)……149
第95図　周辺の遺跡出土の縄文中期土器……151
第96図　グリット出土土器・石器 ……154

表目次

第1表　住居跡出土石器一覧表 ……89
第2表　住居跡柱穴深度表 ……92
第3表　土壙一覧表 ……104
第4表　土壙出土石器一覧表 ……104
第5表　グリッド出土石製品・土製品一覧表 ……140
第6表　グリッド出土石器一覧表 ……140
第7表　遺構新旧対照表 ……145
第8表　剥片分類表 ……157

図版目次

図版1　広木上宿遺跡航空写真
図版2　広木上宿遺跡航空写真
図版3　第5号住居跡
　第6号住居跡
図版4　第8号住居跡
　第8号住居跡・第8号住居跡炉跡断面
　第8号住居跡土器出土状況・第8号住居跡土鈴出土状況
図版5　第9号住居跡土層
　第9号住居跡全景
図版6　第13号住居跡全景
　第9号住居跡炉跡・第9号住居跡炉跡断面
　第13号住居跡炉跡・第13号住居跡炉跡断面
図版7　第14号住居跡土層断面
　第14号住居跡出土遺物
図版8　第17号住居跡全景
　第17号住居跡遺物出土状況
図版9　第17号住居跡炉跡・第17号住居跡埋甕
　第19号住居跡埋甕・第19号住居跡埋甕土層断面
　第20号住居跡全景
図版10　第21号住居跡全景

第22号住居跡全景
図版11　第23号住居跡全景
第23号住居跡炉跡・第23号住居跡炉跡断面
第24号住居跡炉跡・第24号住居跡炉跡断面
図版12　第24号住居跡全景
第26号住居跡全景
図版13　第28号住居跡全景
第83・84号住居跡縄文調査区全景
図版14　第71号土壙全景・第72号土壙全景
第73号土壙・第74号土壙出土遺物
第74号土壙全景・第76・77号土壙全景
第78号土壙全景・第80号土壙全景
図版15　第81号土壙遺物出土状況・第81号土壙全景
第82号土壙全景・第82号土壙遺物出土状況
埋甕遺構・埋甕内側土器
不明遺構
図版16　出土土器(1)
図版17　出土土器(2)
図版18　出土土器(3)
図版19　出土土器(4)
図版20　出土土器(5)
図版21　出土土器(6)
図版22　出土土器(7)・出土石器
図版23　第5号住居跡出土遺物
図版24　第6号住居跡出土遺物(1)
図版25　第6号住居跡出土遺物(2)
図版26　第6号住居跡出土遺物(3)
第8号住居跡出土遺物(1)
図版27　第8号住居跡出土遺物(2)
第9号住居跡出土遺物(1)
図版28　第9号住居跡出土遺物(2)
図版29　第14号住居跡出土遺物(1)
図版30　第14号住居跡出土遺物(2)
第20号住居跡出土遺物
図版31　第17号住居跡出土遺物(1)
図版32　第17号住居跡出土遺物(2)
図版33　第22号住居跡出土遺物
第23・24号住居跡出土遺物
図版34　第26号住居跡出土遺物
第28号住居跡出土遺物
図版35　第26・28号住居跡出土遺物
第84号住居跡出土遺物(1)
図版36　第84号住居跡出土遺物(2)
図版37　第71号土壙出土遺物
第78・80号土壙出土遺物
図版38　第81号土壙出土遺物
第82号土壙出土遺物
図版39　グリッド出土土器(1)
図版40　グリッド出土土器(2)
図版41　グリッド出土土器(3)
図版42　グリッド出土土器(4)
図版43　土製円盤・土鈴側面・土鈴下面
土鈴上面・土鈴X線写真（側面より）
土鈴X線写真（上面より）・抉状耳飾
図版44　グリッド出土石器(1)
図版45　グリッド出土石器(2)
図版46　グリッド出土石器(3)
図版47　グリッド出土石器(4)
図版48　グリッド出土石器(5)
図版49　展開写真(1)
図版50　展開写真(2)

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査にいたるまでの経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、そして「埼玉の新しい92（くに）づくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため様々な施策を講じている。

県民の生活環境の保全と道路交通の安全性を重視し生活圏の拡大への対応、高度化する産業活動の円滑化などをはかるための道路網の整備はその一環として展開されている。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした開発事業と文化財の保護について迅速に対応するため、関係各部局、機関と定期的な調整会議のほか、日頃協議を重ね調整を図ってきたところである。

平成３年度に県土木部道路建設課長から美里町広木地内に計画された県道広木木野線の建設工事予定地における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて照会があった。

工事予定地には周知の埋蔵文化財包蔵地「広木上宿遺跡」（遺跡 No.56-002）内にあり、現地を踏査したところ、丘陵頂部を中心として多量の縄文土器、土師器などの散布が認められ、この時期の遺構が所在することが明らかであると判断された。このため道路建設課長あて下記の旨回答した。

1　工事予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「広木上宿遺跡」が所在する。

2　工事計画し、やむを得ず現状を変更する場合は文化財保護法の規定の手続きをとり、事前に記録保持のための発掘調査をすること。

その後の協議で、工事計画の変更が不可能であると判断されたため、平成4年度に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査については財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、道路建設課、文化財保護課の三者で調整し、平年４年４月から12箇月の予定で着手することとし、道路建設課において調査に要する経費が予算措置された。

平成４年度の発掘調査の進行に伴い、遺跡範囲が南北及び東側に拡大することが明らかになったため、平成４年12月11日に拡大する範囲を確認し、埋蔵文化財包蔵地変更増補手続きをとった。美里町教育委員会教育長あて、埋蔵文化財包蔵地調査カード（変更増補）を添えてこの旨通知した。調査対象面積の増加に伴い発掘調査は平成５年度に継続することとなった。

文化財保護法第57条３項の規定による埋蔵文化財発掘通知が平成４年５月６日付け道建第51号で知事から提出され、平成４年５月19日付け教文第3-38号で発掘調査実施についての通知を行った。文化財保護法第57条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から平成４年３月31日付け財理文第956号で提出された。届出に対し文化庁長官から平成４年７月10日付け委保第５の802号で指示通知があった。

平成５年度の調査については平成５年４月１日付け財理文第12号で発掘調査届が提出され、文化庁長官から平成５年６月８日付け委保第527号で指示通知があった。

なお、平成５年度調査対象地の中で未買収であった一部の地区の遺構確認調査を平成６年７月29日に実施したが、すでに畑造成のため遺構確認面まで掘削された状態であった。

（埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課）

第170集広木上宿遺跡より転載

2．発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

平成４年４月１から平成５年12月28日まで実施し、調査面積は8,600m²である。

平成４年度

調査区北半分の5,000m²の調査を行った。

プレハブ設置、器材運搬などの発掘準備と平行し、重機による表土除去作業を行った。表土除去作業終了後順次遺構の調査に着手した。

９月には、金銅製小型宝塔と漆箱が発見され、11月28日に現地説明会を開催した。

３月には航空写真撮影・測量を実施した。

平成４年度の調査では、縄文時代と古墳時代から平安時代の集落跡と中世寺院関連遺構を発掘した。

平成５年度

調査区南半分の3,600m²の調査を行った。

調査は排土置場等の関連から、便宜的に北側から5A～5D区の４区に分けて実施した。用地買収の関係から5D区の調査は行っていない。各区の位置は、5A区が43～49グリッド、5B区が49～59グリッド、5C区が60～66グリッド付近である。

5A区は中世寺院遺構と予想される方形基壇状の高まりが存在していたため、人力によって表土を除去した。方形基壇状部の調査終了後、下層の集落跡の発掘に着手し、８月に航空写真を実施した。

5C区は5A区の集落跡の調査と平行して、重機による表土除去作業を実施した。5A区の調査終了後、順次遺構の調査を行った。

5B区の調査は、5C区の調査終了後、引き続いて実施した。12月に5B・5C区の航空写真撮影を行い、調査を終了した。

なお、平成４・５年度の未買収地の内100m²については、平成６年度に埼玉県教育委員会が遺構の確認調査を行った。しかし既に削平されており、遺構・遺物は検出されなかった。

整理・報告書刊行

平成７年４月３日から２ヵ年度の計画で実施し、平成８年３月31日に第１分冊を刊行した。第２分冊は平成８年４月１日から平成９年３月31日にかけて行った。

４月から６月にかけては、出土遺物の水洗・注記および接合・復元を行った。

７月から11月には、遺構の図面のトレース・版組と遺物の実測・トレース、また11月には遺物の版組も並行して行った。

12月から１月にかけて、遺物の写真撮影、原稿執筆・割付の作成を行った。入稿後校正作業を行い、３月に報告書を刊行した。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)発掘調査

平成４年度

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事 兼管理部長	倉持悦夫
理事 兼調査部長	栗原文蔵
管理部	
庶務課長	萩原和夫
主査	贄田清
主事	菊池久
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	長瀧美智子
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
調査部	
調査部副部長	梅沢太久夫
調査第三課長	鈴木敏昭
主任調査員	今井宏
主任調査員	西口正純
調査員	田中広明

平成５年度

理事長	荒井桂
副理事長	富田真也
専務理事	横川好富
常務理事 兼管理部長	柴崎光生
理事 兼調査部長	中島利治
管理部	
庶務課長	萩原和夫
主査	贄田清
主事	菊池久
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	長瀧美智子
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
調査部	
調査部副部長	高橋一夫
調査第三課長	村田健二
主任調査員	石坂俊朗
調査員	山本靖

(2)整理・報告書刊行

平成８年度

理事長	荒井桂
副理事長	富田真也
専務理事	吉川國男
常務理事 兼管理部長	稲葉文夫
理事 兼調査部長	小川良祐
管理部	
庶務課長	依田透
主査	西沢信行
主任	長瀧美智子
主事	菊池久
専門調査員 兼経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
資料部	
資料部長	梅沢太久夫
主幹 兼資料部副部長	谷井彪
専門調査員 兼整理第一課長	今泉泰之
調査員	上野真由美

II　遺跡の立地と環境

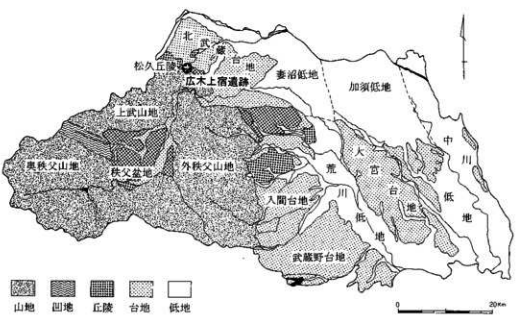
広木上宿遺跡は埼玉県児玉郡美里町大字広木字上宿に所在し、JR八高線松久駅の西方約2.5kmに位置している。東経約139°09′20″、北緯約36°10′08″付近である。美里町の地形は南から北に向って、標高100～150mの丘陵地帯、標高100m以下の低地帯へと続いている（第2図）。

山地帯は、秩父山地・上武山地の山脚が北東方向へ延びている。丘陵地帯は、町の東部を北東方向に諏訪山・山崎山へと続き、北西部は生野山から浅見山にかけて延びている。また低地帯は丘陵地帯に囲まれて、盆地状に形成されている。低地帯には蛇行地形が見られ、この地域が河川の氾濫原であったことがわかる。現在、丘陵部には畑地や桑畑が、低地部には水田が広がっている。

河川は、利根川水系に含まれる小山川、志戸川、天神川やこれらの支流が、町内を南西から北東方向へと流れている。これらの河川によって丘陵部が開析され、丘陵と扇状地が入り組んだ複雑な地形をしている。

町内には数多くの池沼が存在し、その多くは灌漑用

第1図　埼玉県の地形図



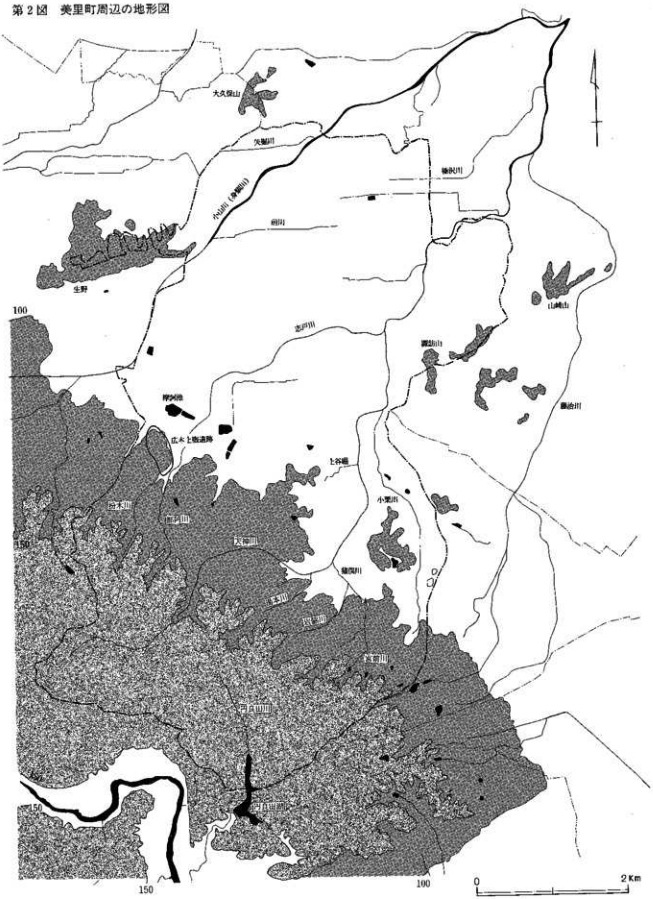
として人工的に造られたものである。なかでも広木上宿遺跡の北東約50mにある摩訶池は、伝説から奈良時代には既にあったものと考えられている。

広木上宿遺跡は上武山地から続く松久丘陵西部の、「卜永山」と呼ばれる一支丘上に立地している。この支丘は北側を身馴川（小山川）、南側を志戸川によって開析され、西から東へと下降しながら延びる痩せ尾根状のものである。

広木上宿遺跡の周辺には、河川によって開析された丘陵と扇状地が入り組んだ複雑な地形を背景にして、数多くの遺跡が営まれている。広木上宿遺跡の周辺の遺跡は、弥生時代以降の遺跡は古代・中世編において述べているので、ここでは先土器時代、縄文時代の遺跡について述べる。先土器時代・縄文時代の遺跡は、美里町では丘陵や台地上やその縁辺部を中心に分布している。美里町の北に広がる低地帯では遺跡の分布は少ないが、河川の氾濫で形成された沖積土内に埋没していることも考えられる（第3図）。

先土器時代の遺跡は、美里町において本格的な発掘

第２図　美里町周辺の地形図



例がなく、出土した先土器時代の石器はほとんどが他の時代の遺構の調査中に単独に出土したものである。先土器時代の石器が出土した遺跡としては、甘粕山遺跡群（11　水村他1980）の東山遺跡や如来堂A・B遺跡、安光寺遺跡(14　増田他1981)、薬門寺西山遺跡(17 美里町1986）がある。このうち東山遺跡からは表土直下のソフトローム層から細石刃核、細石刃、尖頭器、ナイフ形石器が出土している。周辺の地域では、本庄市古川端遺跡(8　柿沼他1978)、岡部町北坂遺跡(22　増田他1981)などから先土器時代の石器が出土している。

縄文時代草創期の遺跡は美里町では、甘粕山遺跡群(11) の如来堂B・C遺跡からまとまった資料ではないが、爪形文土器が出土している。岡部町では西谷遺跡(23　栗原他1961)で出土した爪形文土器、多縄文系土器が良く知られている。岡部町東光寺裏遺跡（6）からは爪形文土器が出土している。

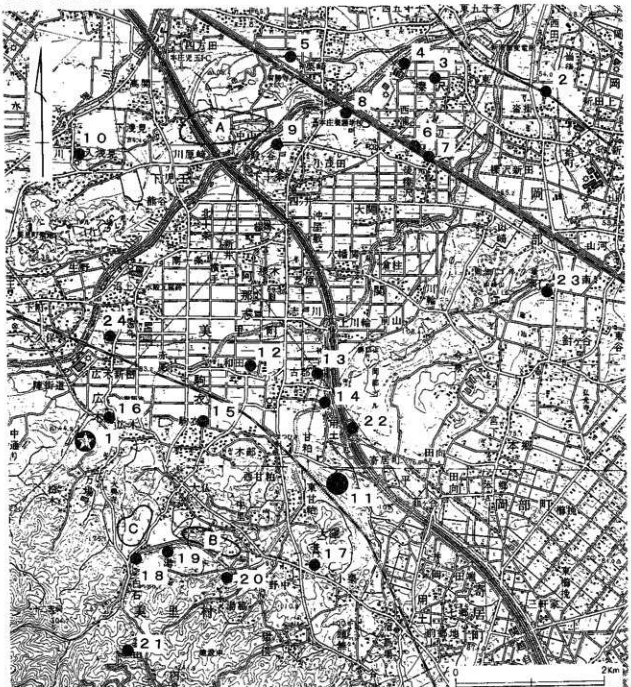
早期の遺跡としては早期・前期を主体とした甘粕山遺跡群(11) が知られる。如来堂A遺跡では、撚糸文系土器の終末期と考えられる無文の土器群が多量に出土している。他に登所遺跡（18　美里町1986）からは沈線文系土器片、白石城遺跡（19　中村1979）から条痕文系土器片が出土している。本庄市宥勝寺北浦遺跡（5　滝口他1980）からは押型文土器片が出土している。

前期になると美里町では前期後半の諸磯期を中心にして、遺跡内の住居跡の検出が増加している。馬浜期の住居跡は、登所遺跡（18）で３軒が発掘されている。羽黒山古墳群（B　長滝1991）からも住居跡が１軒検出されている。諸磯期になると、多数の住居跡が発掘されている。登所遺跡を含めた白石古墳群（C）では、諸磯ｂ期を中心として10軒以上の住居跡が検出されている。北貝戸遺跡（15　菅谷他1977）では諸磯ａ期の住居跡が３軒、南志渡川遺跡（12　岡本1982）では諸磯ａ期１軒、ｂ期２軒が調査されている。白石城遺跡(19)、薬門寺西山遺跡(17)においても諸磯ａ・ｂ期の住居跡を発掘している。諸磯ｃ期の住居跡は検出されていないが、栗山遺跡(21　岡本他1983)、薬門寺西山遺跡（17）、登所遺跡（18）において、土器片が出土している。立地は、白石城・登所・西山遺跡などは丘陵上に北貝戸・南志戸川遺跡では台地の縁辺部に位置している。美里町では諸磯期の遺跡が他の時期に比べ多く、周辺地域と比べ特徴的である。

中期の遺跡は中葉から後半にかけての時期がほとんどである。広木上宿遺跡と同じ丘陵に存在する原恵神社前遺跡（16　中村）では、阿玉台期の住居跡が１軒発掘されている。勝坂期、阿玉台期の土器を出土する遺跡としては他に、塚本山古墳群（A）があり、森浦遺跡(13 岡本他1983)、峯遺跡(20　岡本他1983)、栗山遺跡(21)では勝坂期の土壙、住居跡が検出されている。中期後半の加曽利Ｅ期になると、周辺の地域では台地平坦部に立地する児玉町の将監塚・古井戸遺跡（石塚1986 宮井1989）がある。数多くの住居跡が検出されており、拠点的な集落と言える。美里町では山間部の栗山遺跡（21）から加曽利Ｅ期の住居跡が２軒発掘されている。美里町では遺物の散布地は多いが、加曽利Ｅ期の住居跡の発掘例は少ない。広木上宿遺跡では、加曽利Ｅ期を中心に住居跡が17軒検出されており、美里町における拠点的な集落となる可能性もある。他の周辺の地域では岡部町水窪遺跡で加曽利Ｅ期の住居跡が２６軒発掘されている。他に岡部町では大寄遺跡(４　佐藤1979）から加曽利ＥⅢ期の埋甕が検出されている。

後期、晩期になると、遺構の発掘例はないが単独で土器がいくつか出土している。後山王遺跡（24　美里町1986）では称明寺期の浅鉢が表土直下の砂利層から単独で出土している。また村後遺跡(９　美里町1986)では加曽利Ｂ期の完形土器が出土している。甘粕山遺跡群では晩期終末の土器片が多量に出土している。

第3図　周辺の遺跡



1広木上宿遺跡　2水江遺跡　3西浦北遺跡　4大寄遺跡　5勝寺北浦遺跡
6東光寺浦遺跡　7伊勢塚遺跡　8古川端遺跡　9村後遺跡　10深町遺跡
11甘柏山遺跡群　12南志渡川跡　13森浦遺跡　14安光寺遺跡　15北貝戸遺跡
16薭振神社前遺跡　17菁門寺西山遺跡　18登所遺跡　19白石城遺跡　20峰遺跡
21栗山遺跡　22北坂遺跡　23西谷遺跡　24後山王遺跡　A塚本山古墳群
B羽黒山古墳群　C白石古墳群

Ⅲ　遺跡の概要

広木上宿遺跡は埼玉県児玉郡美里町大字広木字上宿2988番地他に所在し、JR八高線松久駅の西方2.5kmに位置している。東経約139°09′20″、北緯36°10′08″付近である。

遺跡の範囲は、南北約190m、東西約80mである。西から東に張り出す痩せ尾根状の支丘を、南北に横切るように所在している。平成4年4月から平成5年12月まで調査した面積は、約8,600m²である。調査区は、遺跡のほぼ中央部を南北方向に縦断する。

調査区の地形は、40～50グリッド付近から尾根の項部にあたる。北側は、身馴川（小山川）によって開析された低地帯へと下る緩斜面である。南側も緩斜面を下り、さらに比高差約4mの崖を経由して緩やかな傾斜をもつ平坦面に至る。再び比高差約1m程の段を経由して、平坦面が約45mほど続き志戸川に至る。

発掘調査によって発見された遺構は、住居跡88件、掘立柱建物11棟、墓壇状遺構1基、配石遺構1基、土壙165基、溝跡25条、井戸跡1基、埋甕1基、ピット多数である。時期は、縄文時代から中・近世にいたるものである。また石器集中は検出されなかったが、先土器時代の石器が数点出土している。

縄文時代の遺構は、調査区北半部の緩斜面部の24～34グリッドの間で発見されている。中期後半を中心とするもので、住居跡17軒、土壙13基、埋甕1基を検出した。住居跡のうち9軒が24～26グリッド間に、集中している。遺構は、調査区の南半部には検出されなかった。調査区のある尾根は、北東方向に高低差を緩やかにつけながら張り出して行く。住居跡の集中する標高110m付近は、尾根の中段付近で現在の状況では高低差のほとんどない平坦な張り出し面になっており、縄文時代の中期の遺物が地表面で多く観察されている。遺構は調査区の南半部には確認されず、また中期の遺物も北半部以外では少ないことから、中期の集落は住居跡の集中する調査区の北半部から東側に広がっていくものと思われる。遺構から遺物は土器、石器が多量に出土し、他に土鈴、土製円盤が出土した。

遺構外の縄文時代の遺物は、遺構のある北側の緩斜面からは縄文時代前期、中期を主体とする土器、石器、土鈴、土製円盤、抉状耳飾が出土している。遺構が検出されなかった調査区の南緩斜面からは縄文時代早期、前期の土器、石器が出土した。特に溝や土壙が複雑に切り合う調査区の南端に近い62、63グリッド付近の溝の覆土内から多く出土している。縄文時代の早期、前期の遺構または包含層が存在していたと考えられる。

古墳時代の遺構は調査区のほぼ全面で、奈良・平安時代の遺構は尾根項部から南緩斜面に発見された。遺構は住居跡70軒、掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基が検出された。遺物は土師器・須恵器をはじめとして、鉄器・玉類・土錘・などが出土した。

中世の遺構は尾根項部付近に集中している。小型宝塔と小型未開敷蓮華を出土した第48号土坑をはじめとして、墓壇状遺構1基、掘立柱建物跡8棟、溝跡10条が発見された。遺物は瓦、かわらけ、板碑、古銭などが出土した。

尾根項部から南側の46～60グリッドにかけて、調査前には墓壇状遺構の存在を予想させる、方形土壙状や階段状の現況が認められた。断面観察による確認調査の結果では版築や人為的な土盛りを行なった形跡はなかった。また中世寺院を区画すると考えられる第15号溝跡が中央を通る。

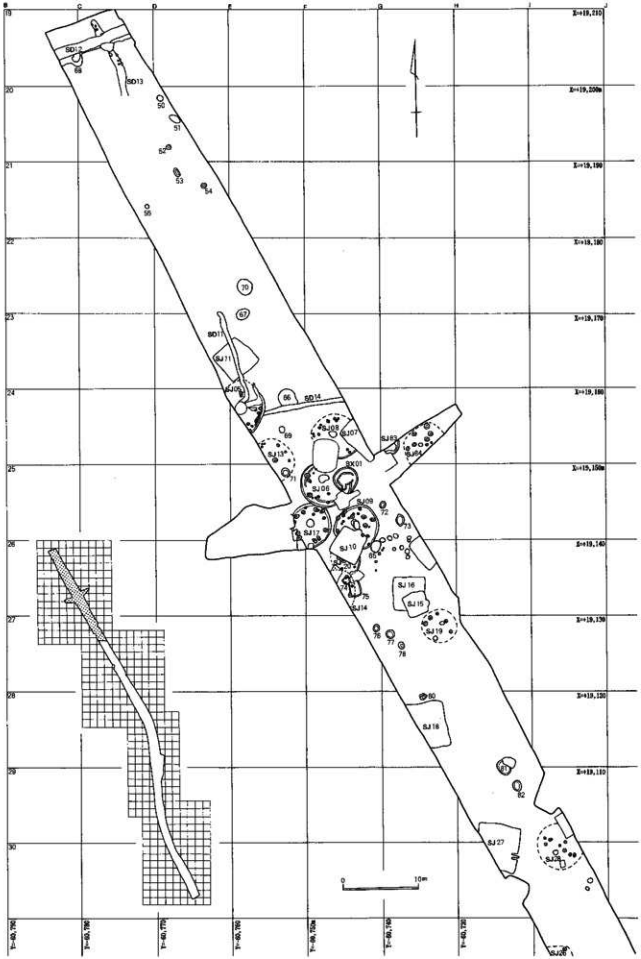
近世の遺構は、土壙墓8基と貯蔵用施設6基が発見された。土壙墓からは、柄鏡や煙管などの副葬品が出土した。

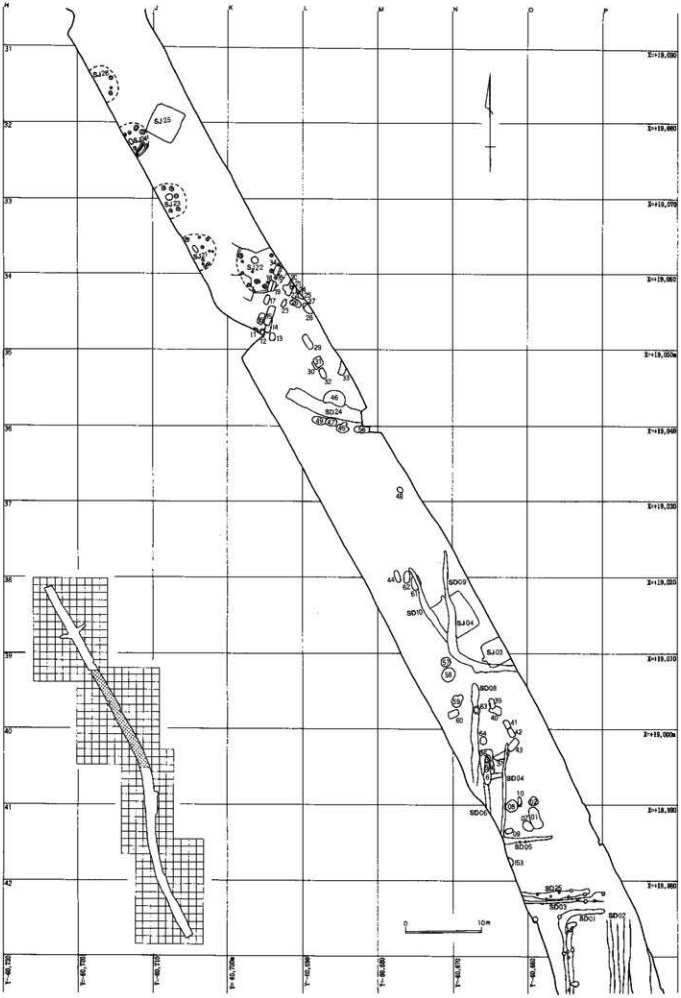
ほかの土壙141基、溝跡15条については、時期を確定する資料が欠けている。

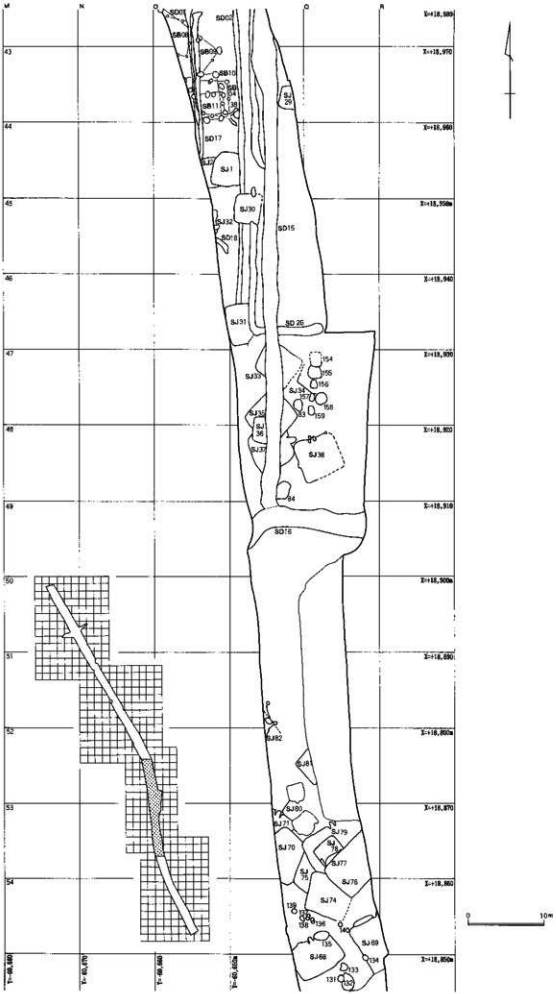
古墳時代以降の遺構と遺物については平成7年度に古代・中世編として報告書が刊行されている。

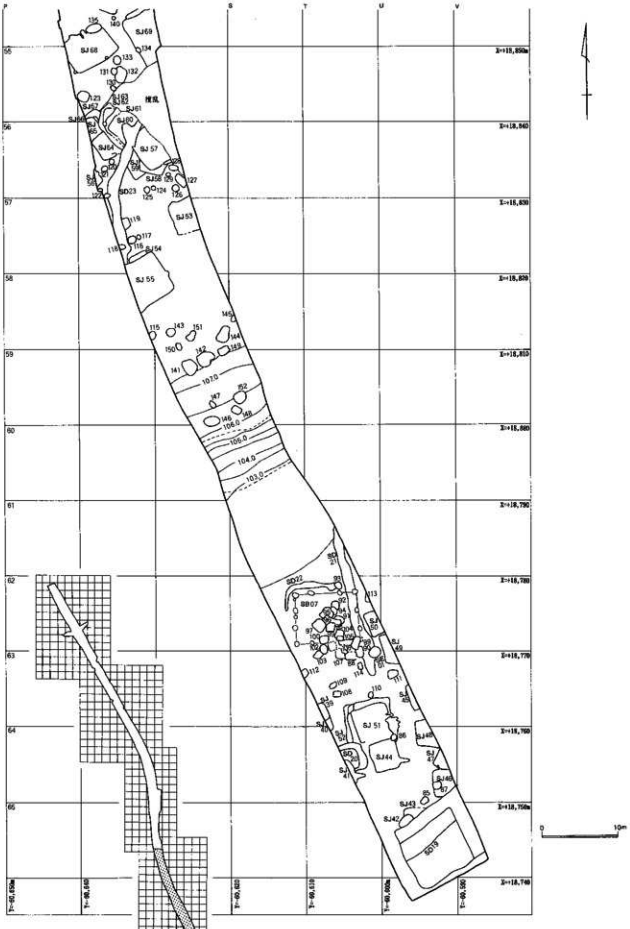
本報告は、縄文時代編として縄文時代の遺構と遺物について行なう。

第４図　遺跡全測図




SJ26
SJ25
SJ22
SD24
SD09
SD10
SJ04
SJ03
SD08
SD04
SD06
SD05
SD01
SD02
SD03
SD01
0
10m


M
N
O
R
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
SD01
SD02
SB04
SB10
SB11
SD17
SJ1
SJ30
SJ32
SD18
SD15
SJ31
SD 25
SJ33
SJ35
SJ36
SJ37
SJ38
SD16
SJ52
SJ81
SJ80
SJ71
SJ70
SJ79
SJ77
SJ76
SJ74
SJ69
SJ68
10m

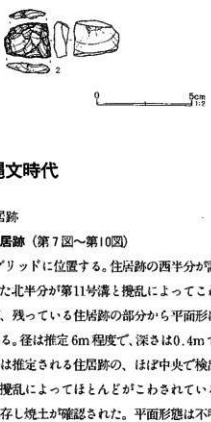

P
S
T
U
V
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
SJ69
SJ68
SJ57
SJ55
SJ53
SJ51
SJ44
SJ42
SD15
SD07
SD23
SD72
107.0
106.0
105.0
104.0
103.0
0
10m

第５図　遺跡周辺の地形

Ⅳ　発見された遺構と遺物

1　先土器時代

第6図　先土器時代の出土石器



広木上宿遺跡から先土器時代の石器は、2点出土した。表採されたものと、縄文時代の住居跡に混入していたもので、出土位置や層位は不明である。他に黒曜石やチャートの剥片や砕片が出土しているが、いずれも縄文時代などの遺構を調査中に検出したもので、縄文時代のものと区別はできなかった。1はナイフ形石器で黒曜石製の縦長剥片を用いる。先端は鋭角で、基部の左側は両面から剥離調整を行なって、抉りを入れている。長さは4.9cm、幅は1.6cm、厚さは0.5cm、重さは4.3gである。表採品である。2は良質のチャート製の削器である。側縁に刃部を作りだすもので、下半部を欠損する。長さは1.9cm、幅は2.4cm、厚さは0.7cm、重さは4.0gである。縄文時代の住居跡である第8号住居跡内より出土したが、石質や石器の形状から先土器時代の石器とした。

2　縄文時代

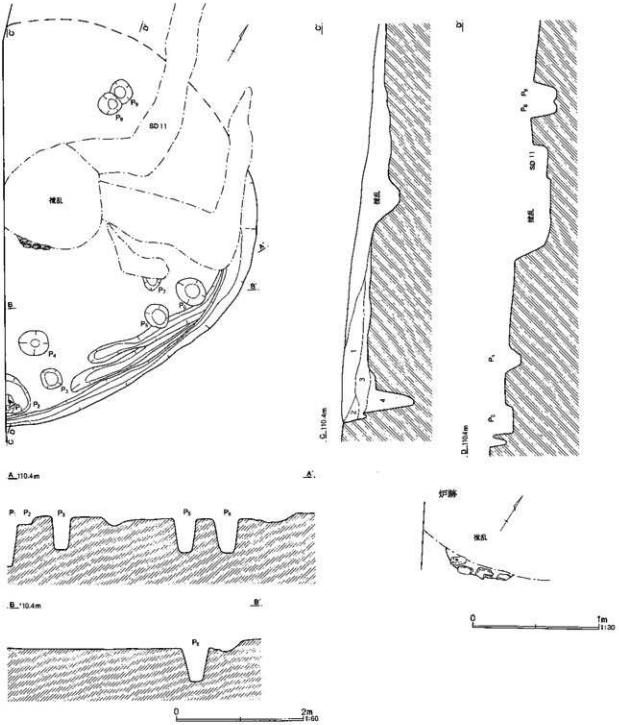
（1）住居跡

第5号住居跡（第7図～第10図）

E-24グリッドに位置する。住居跡の西半分が調査区外で、また北半分が第11号溝と攪乱によってこわされているが、残っている住居跡の部分から平面形は円形と思われる。径は推定6m程度で、深さは0.4mであった。炉跡は推定される住居跡の、ほぼ中央で検出されている。攪乱によってほとんどがこわされているが、炉石が残存し焼土が確認された。平面形態は不明である。周溝は部分的に3重に巡っている。柱穴は、住居跡と推定される範囲内で9本が検出されている。主柱穴は深さからはP1、P3、P5、P6、P8、P9のいずれかが相当すると思われるが全体が不明なため、確定はできない。住居跡の中央部の攪乱の深い部分には近現代の陶器などが混入していた。時期は中期後葉である。

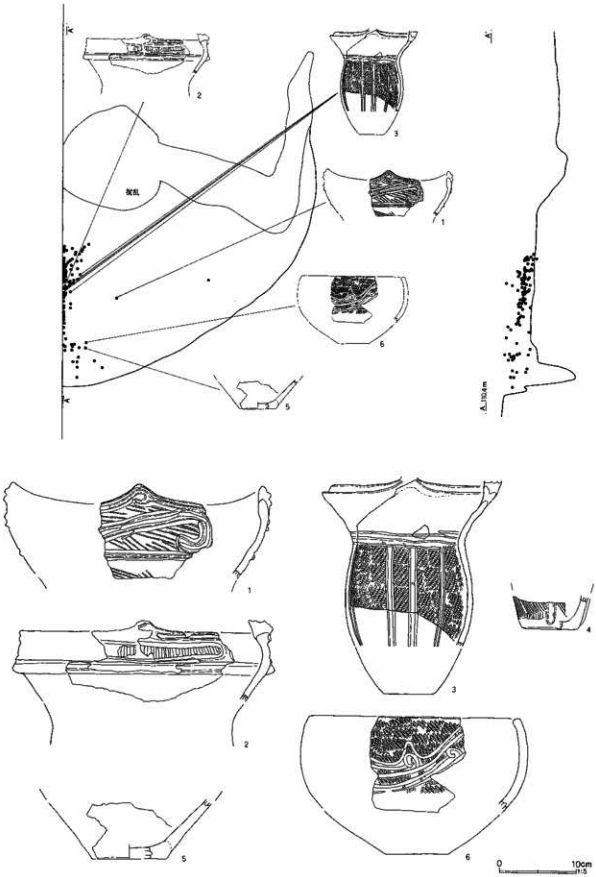
遺物は住居跡南半部の調査区外との境界部分で、集中して出土した。1はキャリパー形の深鉢形土器で、口縁部と頸部の一部が残存している。口縁は4単位の波状口縁と推定され、口縁に沿って一本の隆帯が貼り付けられ波頂部で小さく渦を巻く。頸部との境は隆帯で区画し、間は幅広の二本の隆帯によってS字状に貼り付けられいる。いずれの隆帯も両側に沈線が引かれている。地文はLの撚糸文が横から斜め方向に施され、頸部にも斜め方向に施文されている。2はキャリパー形の深鉢形土器で、口縁部と頸部の破片である。口縁には波状部の一部が残されている。割れ口から、波状部には橋状の把手が施されていたと思われる。隆帯で口縁部と頸部は区画され、間は縦方向の沈線で埋められる。3は頸部から無文の口縁が外側に開く、深鉢形土器である。口縁は一部波状に施されるが、単位は不明である。口縁の端部は、間に溝をいれて内側と外側とに口縁が段を持つように加工されている。頸部に巡っている沈線は、端部が胴部の沈線の懸垂文の上端部につなげて終了する。そのため1本目の頸部の沈線を胴部の懸垂文の上端につなげると、次は2本目の

第7図　第5号住居跡



1　黒褐色土　堅緻　粘性なし　ローム粒子少量　炭化物粒子・白色粒子多量
2　茶褐色土　堅緻　粘性なし　ローム粒子多量　炭化物粒子・焼土粒子微量
3　暗茶褐色土　堅緻　粘性なし　ローム(径5mm～10mm)少量　炭化物粒子量
4　暗黄褐色土　堅緻　粘性あり　ロー(径20mm～30mm)多量　炭化物粒子少量

第８図　第５号住居跡遺跡分布図・出土遺物(1)



沈線を１本目の沈線の上段より引き始めて、１本目とは別の胴部の懸垂文の上端につなげる。また次は３本目を引き始めるというように施文される。全体の半分が欠損しているため、全容は不明だが視覚的には３本の沈線で頸部を区画するように見える。胴部には２本１組の懸垂文が垂下する。地文は、縦方向の単節 RL の縄文が施される。沈線間の地文は粗く磨り消される。４は深鉢形土器の胴部下半と底部の一部である。一本の隆帯が垂下しており、両側にはなぞりが入る。地文は R の撚糸文で、斜め方向に施文する。５は無文の浅鉢形土器で、胴部と底部の一部が残る。６は口縁部と胴部の一部が残る鉢形土器である。口縁の一部に赤彩の痕跡がわずかに残るが、その範囲は不明である。文様は口縁から胴部上半部に施され、胴部下半部は無文である。地文は横方向の単節 RL で、その上に沈線が施される。沈線は連弧状に巡らされると推定される。沈線は多い部分で４本が確認されるが、１本ごとに端部が渦巻状の沈線で止められており、３の頸部と胴部の沈線の施文の手法と似ている。

７～11は勝坂系の土器である。７、８は口縁の波状部の把手の一部である。７は内側の２本の隆帯上に細かい刻み目を施す。８は口縁の端部の内側と外側の両側の隆帯上に、細かい刻み目を２条施し間には１本の沈線が施される。外側の横方向の隆帯上には、大きく刻みが施される。９、10、11は深鉢形土器の口縁部の破片である。９は厚い隆帯が貼り付けられ隆帯上には刻みが施される。10は三角形状の刺突によって渦巻き状に施文する。11は風化が激しい。

12～30、33は加曽利 E 系の土器で、キャリパー形の深鉢土器である。12～20、22、23は口縁部の破片である。12は口縁に橋状の把手を付ける。口縁部は端部が渦を巻く２本の隆帯を貼り付ける。地文は R の撚糸文である。13、14は口唇を粘土紐により肥厚させて、間に沈線を施す。口縁は低い波状になる。13は L、14は R の撚糸文が地文となる。15は口縁部に２本隆帯による渦巻き文を施す。口縁は波状となり、波頂部には把手が付いていたと考えられる。地文は横方向の単節 RL の縄文である。16は２本隆帯で口縁部に文様を施し、間は沈線で埋める。17、18は12～16と比べ口縁部の屈曲がやや緩やかなもので、口唇直下の隆帯の上側はなでられており、沈線は引かれていない。17は地文は横方向の単節 RL の縄文で、18は横方向の単節 LR の縄文である。19は波状口縁で、口唇に沈線を施し波頂部で渦を巻く。口縁部は２本隆帯で文様を施すが、残存部からは孤状なのか、端部が渦を巻くかは不明である。地文は細かい条線を施す。20、22、23は隆帯による頸部の区画が残るもので、20は２本の隆帯で22、23は１本の隆帯で区画する。23の口縁部文様の隆帯は、上からなでられて低く偏平なものである。21、24～30は胴部の破片である。21、24、25は隆帯による懸垂文が施されるもので、21は２本隆帯が蛇行して垂下し、24は２本隆帯の端部が渦を巻く。地文は24が L の撚糸文、21、25は単節 RL の縄文である。26～30は沈線によって懸垂文が施文されるもので、26～28は沈線が直線的に垂下するもので、27は半裁竹管によって２本１組６本の沈線が垂下している。29、30は１本の沈線が蛇行して垂下する。地文は26～28、30は縦方向の単節 RL の縄文、29は L の撚糸文である。33は頸部の破片で、頸部と胴部は3本の沈線によって区画される。頸部は無文である。地文は単節 RL の縄文である。

31、32、34は連弧文系の土器で、31、32は口縁部の破片で２本沈線で施文される。地文は31は L の撚糸文、32は R の撚糸文が施文される。34は3本沈線で頸部を区画するもので、地文は R の撚糸文である。

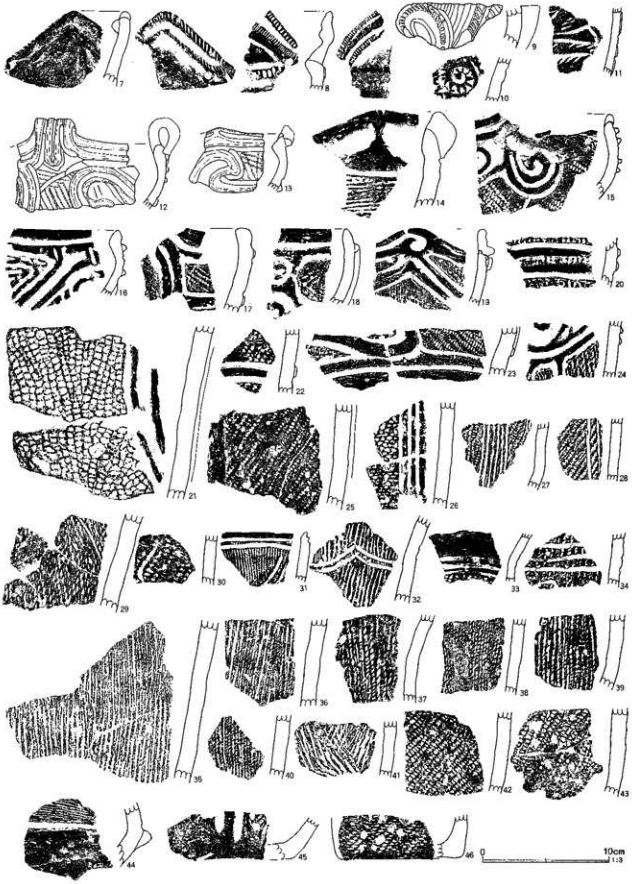
35～43は地文のみが施される胴部の破片である。35～40は L の撚糸文が縦方向に施され、41は斜め方向に L の撚糸文が施される。42、43は地文は単節 RL の縄文が施される。

44は浅鉢形土器の破片で、口縁部文様帯を持ち地文には細かい撚りの L の撚糸文が施される。

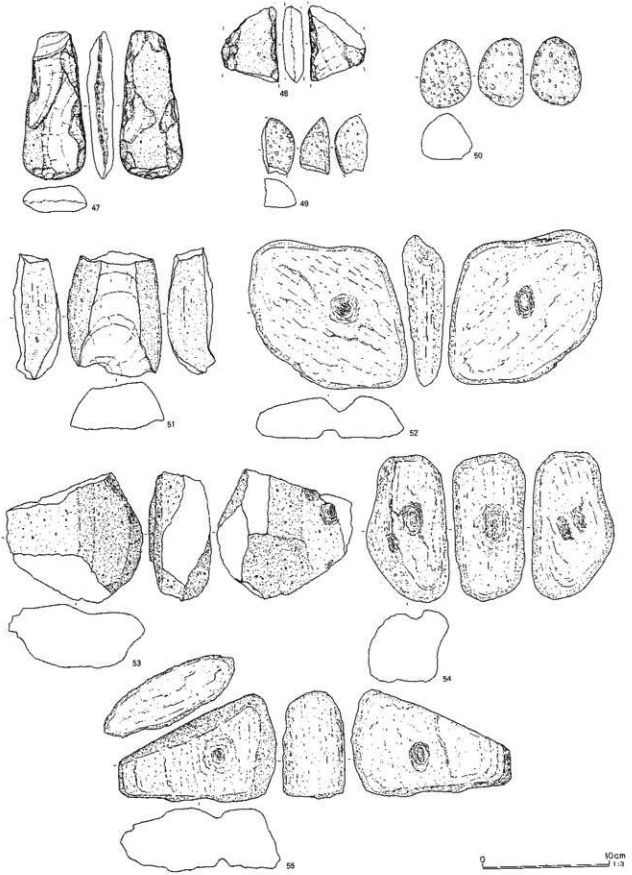
45、46は底部の破片で45は2本の沈線の懸垂文が垂下している。地文は縦方向の RL の縄文である。

47～55は出土した石器である。47、48は打製石斧で

第９図　第５号住居跡・出土遺物(2)



第10図　第５号住居跡・出土遺物(3)



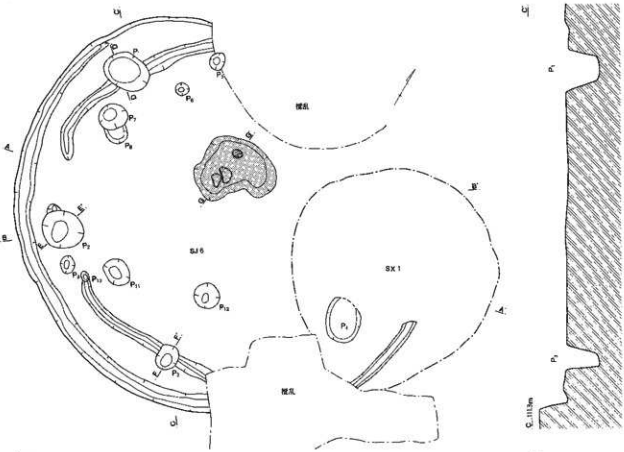
47は偏平な礫を最小限度の剝離によって、形を作り出しており、両面に自然面を残す。両側縁の一部は刃潰しを行なう。刃部は摩耗している。48は胴部の一部のみが残存するもので、表面に大きく自然面を残す。49、50は小形の軽石製の磨石で、平坦な磨面が49は1面、50は3面確認できる。51は磨石でほとんどが破損しているもので、一部分に磨面が残存している。52～55は磨面が残るものもあるが、凹部を持つことから凹石として分類した。52は表裏面に一個所ずつ凹部が残り、右の側面に磨面がある。53は破損品で、残る部分から裏面には複数の凹部があったと推定される。両面ともに平坦な部分には磨面が確認できる。54は三面に凹部が残る。55は表裏面に一個所ずつ凹部を残し、頭部面には磨面が確認できる。遺物は中期後葉を主体とする。

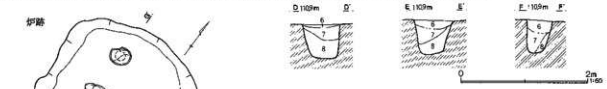
第6号住居跡（第11図～第18図）

E-25、F-25グリッドに位置する。第6号住居跡の北側には第8号住居跡があり、本来は一部重複していたと考えられるが、第6号住居跡の北半分は攪乱や不明遺構によってこわされているため先後関係は確認できなかった。また第6号住居跡の南の一部は第17号住居跡と重複している。図上では第6号住居跡の周溝が第17号住居跡の周溝をこわしているように見えるが、第17号住居跡は第6号住居跡よりも床面が高くまた第6号住居跡発掘後に検出されて発掘しているため第17号住居跡の周溝が検出できなかったもので、先後関係は確認していない。住居跡の残っている部分から住居跡の平面形は円形であると思われる。径は推定6m程度で、深さは確認面より約0.3mであった。炉跡は住居跡の中央よりやや北よりで検出されている。不定形なもので、炉石に転用されたものと思われる石皿の破片と、埋甕炉として使用された土器の底部の部分が検出された。周溝は壁に沿って1重と、内側にもう1重が検出されている。柱穴は12本が検出され、主柱穴と考えられるP1、P2、P3、P4の一部が内側の周溝をこわして作られていることから、外側に拡張した可能性が考えられる。内側の周溝には、P5、P7、P11、P12の柱穴が伴うと思われる。時期は中期後葉である。

遺物は土器、石器ともに多量に出土している。広木上宿遺跡で検出した住居跡のなかで一番の出土量であったが、復元できた土器はほとんどなかった。また第6号住居跡は北側と南側と2軒の住居跡が切りあっているため、遺物が混入している可能性は高い。1は口縁部文様帯がやや内側に傾く小形の深鉢形土器で、口縁部と胴部の一部を残存する。口縁部と胴部には隆帯で区画し、口唇直下にも隆帯を1本巡らす。口縁部の文様は6単位の横方向の隆帯を貼り付けて、端部を渦巻状にする。隆帯に沿ってやや幅広の沈線を施文する。端部渦巻き状の隆帯の間は沈線によって6単位の楕円形に区画する。口縁部文様帯の上下幅が狭いため、横長な楕円形となる。隆帯はいずれも薄く偏平なものである。胴部は6単位で3本1組の沈線の懸垂文が直線的に垂下する。沈線は細く浅く施文するもので、間の地文は磨り消さない。胴部懸垂文の位置は口縁部の渦巻き部分からややずれる。地文は口縁部は横方向、胴部は縦方向の単節LRの縄文である。2は頸部がくびれ口縁が開くもので、胴部は上半で膨らみ下半は細くくびれて底部に台が付く台付深鉢形土器である。口唇部はなでて平坦な面を作り出す。口縁部から底部にかけて器面全体に縦方向の単節LRの縄文を地文として施文している。頸部には2本の沈線を巡らして胴部と区画し、2本の沈線の間に上下交互に斜め方向から深く刺突を加えており、視覚的には波状に隆帯を貼り付けているように見せている。胴部は頸部区画の沈線の直下に施文した横方向の沈線と、胴部に直線的に垂下する懸垂文の沈線をつないで幅広の「冂」字状に区画している。4単位を施文する。4単位の幅は等分されていない。図画した「冂」字の外側には、沈線で蕨手状の懸垂文を4単位施文する。台は脚部分を作り出し、地面と接する面をやや広い平坦面にして自立できるようにしている。台の底部には粗いけずりの痕が見られる。表面は半月状に粘土を削って段をつけ、段に沿って沈線でなぞっている。2単位の文様が施されている。台

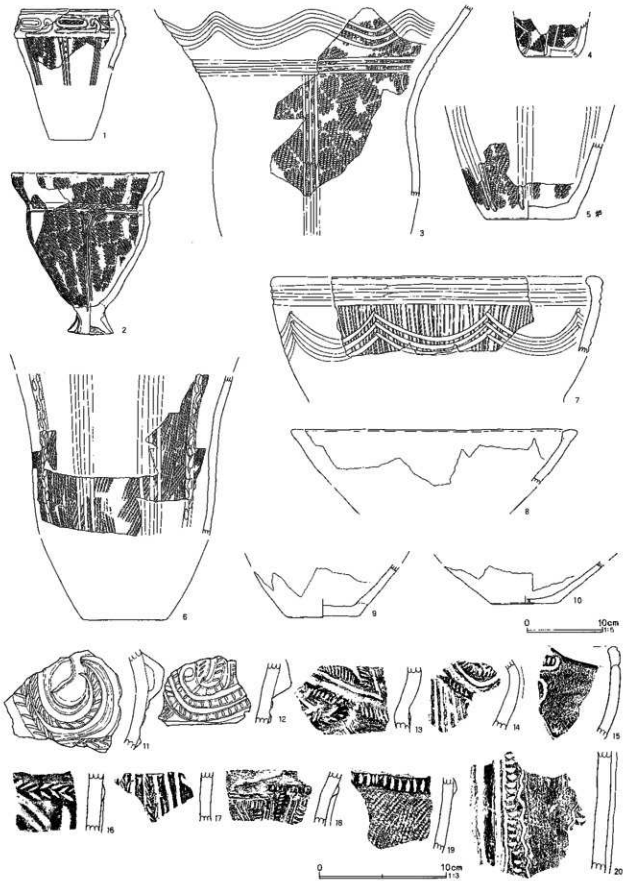
第11図　第6号住居跡





1　茶褐色土　砂質　炭化物・白色粒子微量
2　黒褐色土　炭化物・白色粒子少量
3　黒　色　土　堅緻　ローム粒子・炭化物微量
4　茶褐色土　ロームブロック(径5mm～20mm)少量
5　茶褐色土　砂質　ローム粒子多量
6　暗黄褐色土　堅緻　ローム粒子多量　ロームブロック(径10mm～20mm)少量
　　炭化物・焼土粒子微量
7　暗茶褐色土　堅緻　ローム粒子・ロームブロック(径10mm～20mm)少量
8　茶褐色土　堅緻　ロームブロック・炭化物粒子多量

第12図　第６号住居跡・出土遺物(I)



部分に地文は施文されない。3はキャリパー形の深鉢形土器の頸部文様帯から胴部にかけての大形の破片である。地文は頸部文様帯をふくめて胴部にかけて斜めから縦方向に単節RLの縄文が施文される。頸部と胴部の区画は3本の沈線を巡らせ、胴部には懸垂文が施される。3本1組の直線的に垂下する沈線と1本が蛇行して垂下する沈線が施される。頸部には連弧状に3本1組の沈線が巡らせてある。いずれも沈線間は磨り消されていない。4は胴下半から底部にかけての深鉢形土器の破片である。地文は0段多条のLRの縄文が縦方向に施文される。胴部には沈線によって1本の蛇行する懸垂文と2本の直線的な懸垂文が交互に施文される。沈線は深く施文されている。5は炉跡内に埋められていた深鉢形土器の胴部の一部と底部である。胴部は2本1組の隆帯による懸垂文を底部の直上まで、6単位直線的に垂下させる。地文は縦方向の単節RLの縄文である。6は深鉢形土器の胴部の破片である。2本沈線の懸垂文が3単位か4単位施文されたあと、間に3本沈線の懸垂文などを施文していくと考えられる。2本沈線間には雨だれ状の刺突が左右交互に上から下に施文される。胴上部では深くしっかりと刺突が入るが、胴部の下の方では刺突ではなく、ごく浅く雨だれ状になでつけられるように施文される。間に施文される3本沈線も、ごく浅くなでつけられている程度である。残っている部分では、他に蛇行する1本の沈線がかすかに見えるがごく浅いため不明瞭である。そのため胴部の文様の単位は不明確である。地文は縦方向と斜め方向のLの撚糸文である。7は連弧文系の深鉢形土器の口縁部の破片である。口唇の直下に3本の沈線を巡らす。口縁部には3本の沈線が連弧状に推定で8単位巡らすと考えられる。地文は条線で深くしっかりと施文されている。8は無文の浅鉢形土器で、口縁部分の破片である。9は無文の鉢または浅鉢形土器の底部である。10は無文の浅鉢形土器の底部の破片である。10は内側にかすかに赤彩らしい赤色の痕跡が見られるが確定はできない。

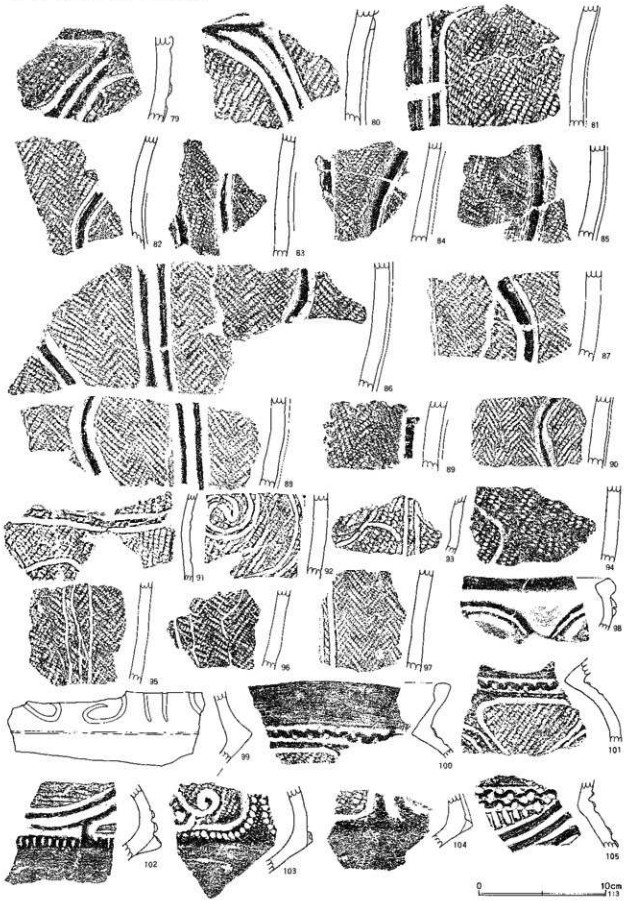
11～20は勝坂系の土器である。11～15は口縁部の破片で、11は隆帯上に綾杉状に刻みを入れ、隆帯の一部は橋状に盛り上げて貼り付ける。橋状部分の上には渦を巻くように沈線を2本入れ、沈線の間には刻みを入れる。12は2本の隆帯が端部で厚みを持って渦を巻くもので、隆帯上には刻みをいれる。厚みを持った隆帯の側面には隆帯に合わせて沈線が渦を巻き、他は縦方向に刻みを入れる。胎土には多量の黒色の長石を混入する。13は沈線で三角に区画された内側に沿って爪形文が施される。隆帯上には刻みが施文される。14は上に刻みを入れた隆帯で区画し、縦方向の沈線を隆帯の下方に施し隆帯の上方には沈線で区画をし内側を爪形文を施文する。爪形文にはC字状の爪形文を縁取る。15は波状になる口縁部の一部で、沈線と内側に爪形文がみられる。16～20は頸部から胴部の破片である。16は横方向の薄い隆帯上には綾杉状に刻みを施す。隆帯によって区画された内側には沈線を施文する。17は縦方向の沈線を施文し、沈線間の一部に綾杉状に爪形文を施文する。11、16、17は同一個体ではないが、白色の小石が多量に入る胎土や色調が同じである。18は隆帯によって区画し、間を沈線や爪形文を施文して埋めるものである。19は幅広の隆帯上に刻みを入れる。胴部の地文は斜め横方向の単節RLの縄文である。20は縦方向の隆帯に沿って両側に半裁竹管による沈線を施文する。沈線の外側には横位渦の爪形文を施文し、さらに波状の沈線を沿わして施文している。器面は縦方向にみがきに近く丁寧に調整されている。

21～45は加曽利E系のキャリパー形の深鉢形土器である。21～33は口縁部の破片である。21、22は隆帯で区画された口縁部を2本隆帯を貼り付けるもので、隆帯の端部は渦を巻くものと思われる。地文は縦方向のLの撚糸文を施文する。21、22ともに接合はしないが胎土、色調ともに同じで同一個体の可能性がある。23は波状または橋状把手をもつと推定される口縁部の破片である。口縁部は隆帯によって区画され、間を縦方向の沈線を施文する。24は口縁部に沈線で渦巻き文を施文する。胎土に小石や5mm大の網雲母片岩片を混入する。25～27は隆帯で区画された口縁部文様帯の

第13図　第６号住居跡・出土遺物(2)

第14図　第６号住居跡・出土遺物(3)

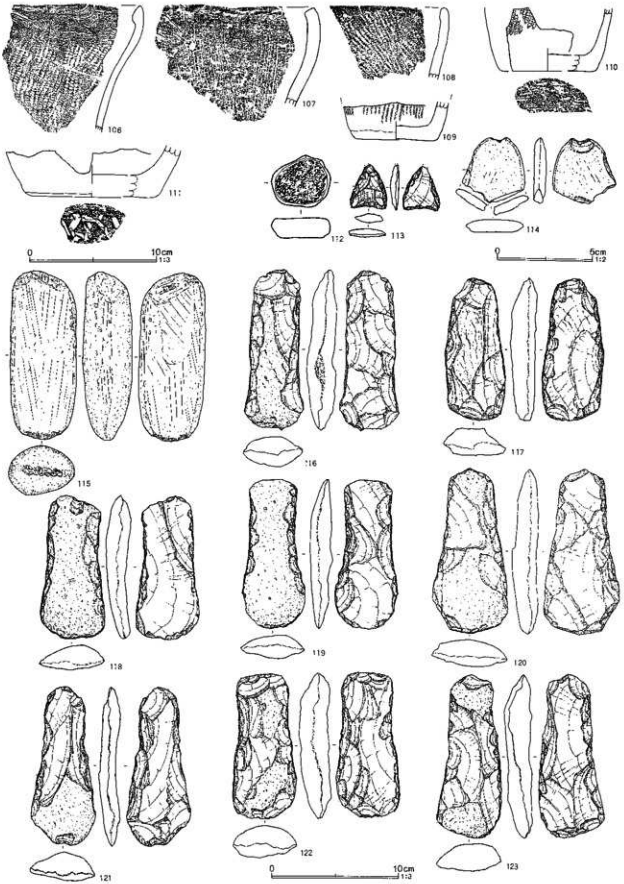
第15図　第６号住居跡・出土遺物(4)



渦巻く部分が残っているもので、いずれも１本隆帯で施文されて隆帯には沈線を沿わせている。27の隆帯は低く偏平になる。地文は25は横方向の単節 RL の縄文、26は横方向の単節 LR の縄文である。28は口縁部を１本隆帯で楕円形に区画するもので、隆帯貼り付け後丁寧になでつけてから隆帯に沿って沈線を施文している。地文は横方向の単節 RL の縄文である。29は２本の隆帯が連弧状に口縁部を巡るもので、口唇直下の横方向の隆帯の下に貼り付けられた小突起状に突出する渦巻き文と弧の頂部がつながるものである。胴部には沈線による懸垂文が施文されている。渦巻きの突起の下から３本の沈線が直線的に垂下し、間に１本の蛇行沈線が垂下する。地文は縦方向に条線が器面全体に施文される。30は１本は剥落しているが２本の隆帯が連弧状に口縁部を巡り、頸部に区画する隆帯が１本巡る。地文は縦方向に RL の縄文が口縁から頸部にかけて施文される。31は口縁部は沈線によって渦巻き文が連続して施文されていたと推定される。頸部は隆帯によって区画される。区画した隆帯より胴部にかけて、半裁竹管による沈線の懸垂文が直線的に垂下する。沈線は半裁竹管によって３回重複して引かれる。地文は縦方向の単節 RL の縄文が施文され、頸部無文帯に相当した部分の地文は磨り消されている。32、33は口縁部文様帯の破片で32は２本隆帯を貼り付けて施文している。地文は L の撚糸文を横方向らに施文する。33は隆帯と沈線によって施文するものである。34～38は頸部から胴部にかけての破片でいずれも沈線によって頸部と胴部が区画される。34は横方向に３本の沈線を２段巡らせ間を３本の縦方向の沈線によって結ぶ。地文は L の撚糸文を施文する。35の地文は縦方向の単節 LR の縄文が施文される。36は蛇行する沈線の懸垂文が胴部に残る。地文は０段多条の RL の縄文が斜め方向に施文される。37は頸部で３本沈線によって区画し、胴部は区画した沈線に一部重ねて沈線の懸垂文を施す。懸垂文は逆 U 字状に垂下する沈線と蛇行する沈線を施す。地文は縦方向の単節 RL の縄文で、沈線間は磨り消さない。38は半裁竹管を用いる２本１組の細い沈線が、極浅く施文される。胴部の懸垂文は蛇行するものと直線的に垂下するものがある。地文は単節 RL の縄文が縦方向に施文されるが、一部なでによって磨り消されている。39～45は胴部の破片である。39～43は隆帯によって胴部に懸垂文が施文されるもので、いずれも２本１組の隆帯が直線的に垂下する。隆帯に沿って沈線を施すのは39のみで他は隆帯の貼り付け後両側をなでつけている。地文は39～41は L の撚糸文を縦方向に施文する。42、43の地文は条線で、いずれも極浅く施文されている。42は密に細かく施文し43は粗く施文している。44、45は胴部の懸垂文が沈線によって施文されるもので、44は蛇行するしっかりと施文された沈線が垂下している。45は底部に近い胴部の破片で１本の沈線が直線的に垂下している。地文は44、45ともに縦方向の単節 RL の縄文である。

46～59は連弧文系の上器である。46～55は口縁部の破片である。46～48、50は口唇直下に２本の沈線を巡らせ、その間を上下交互の刺突によって波状に作りだしているが、47、48は細い隆帯を貼り付けてから刺突を行なっている。50はさらに３本目の沈線を巡らせている。46、48は口縁部を３本沈線で連弧状に施文する。47は連続して波状にゆるやかに施文していく。50は弧の頂部が残っている。地文は46は縦方向に条線を施文する。47、50は縦方向の L の撚糸文を施文する。48は縦方向に単節 LR の縄文を施文する。49は半裁竹管によって２本１組の沈線を施文する。地文は縦方向の単節 RL の縄文である。51は口唇直下に沈線を巡らさないもので、２本の沈線を連弧状に口縁部に施文する。地文は風化のため摩滅していて不明瞭だが、縦方向の R の撚糸文を施文している。52は3本の沈線によって口縁部に連弧状に施文するもので、弧の底部に口唇直下に巡らしている沈線から縦方向に２本の沈線を引きその間を左右交互の刺突によって、波状に作り出す。地文は L の撚糸文を縦方向に施文する。53は口唇直下に３本の沈線を巡らす。地文は L の撚糸文を施文する。54は口縁部に連弧状に施された沈線が４本あるもので、地文は縦方向の条線である。55は頸部の区

第16図　第６号住居跡・出土遺物(5)

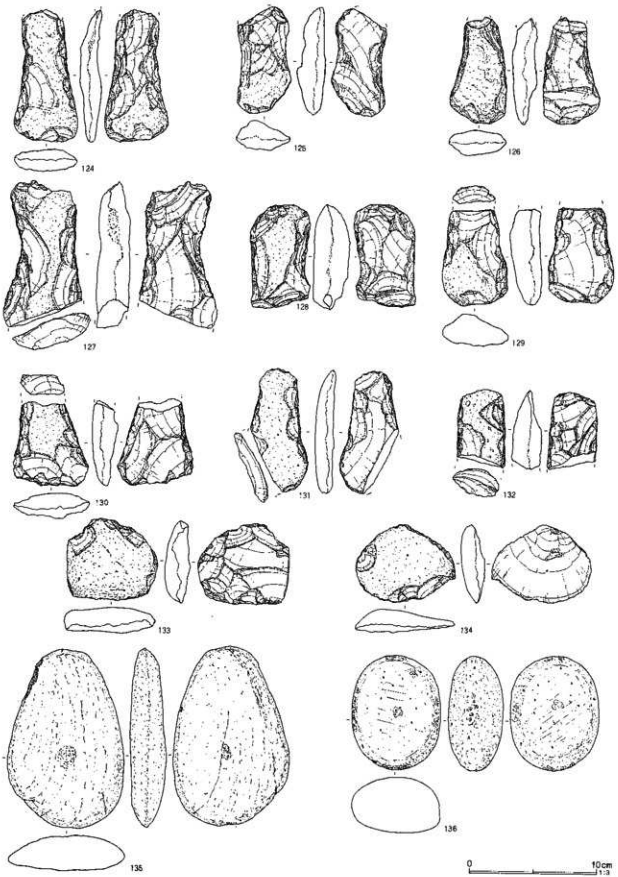


画に隆帯を貼り付け上下に沈線を巡らして２本Ｈの隆帯には上下交互に刺突を入れて波状に作り出す。地文は縦方向のＬの撚糸文を施す。56～59は頸部から胴部の破片である。56、57は頸部の区画が残るもので、56は隆帯に沿って沈線を巡らせ上下交互に刺突して波状に作り出している。57は上下の刺突を２段行なうもので、波状に２段作り出される。胴部は連弧状に施文された沈線に沿って破損している。56、57の地文は条線で、57は沈線状に施文される。58、59は胴部の沈線による沈線の連弧文の一部が残る。59は連弧部分に縦方向の沈線が垂下する。地文は58は条線、59はＬの撚糸文を施文する。

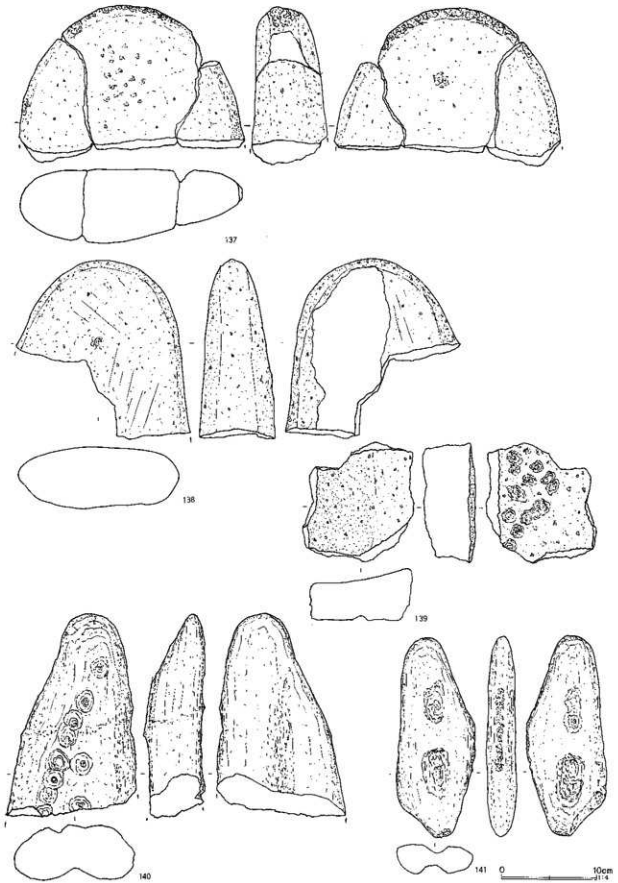
60～97は曽利系の深鉢形土器である。60～62は口唇直下を横方向に区画し、その直下より胴部文様が施文される。60は口唇直下の隆帯の上下に沈線を巡らせ、上下交互に刺突を行なって隆帯を波状に作り出す。端部が渦巻く蕨手状の沈線を垂下して施文する。61は口唇直下に２本の沈線を巡らせ、その間を上下の交互刺突で波状に作り出す。胴部は横方向の沈線と直線的に垂下する沈線が枠状につながる間に蕨手状の沈線を垂下させる。61、62の地文は縦方向の単節ＲＬとＬＲの縄文を交互に施文して矢羽状に作り出す。63、64は直線的に立つ口縁部文様帯からくびれを持たずに胴部から底部にいたる土器である。63は小形の土器で幅広の隆帯を貼り付けその上に沈線によって文様を施文する。地文は条線である。64は口縁部を隆帯と沈線によって施文し、胴部は２本隆帯の懸垂文を直接的に垂下させる。地文は縦方向の単節ＲＬの縄文である。65～69は胴上部の破片で60～62と同様な胴部の文様を持つものである。65、69は隆帯に沿って沈線が枠状に引かれ、隆帯上に蕨手状に沈線を施文する。枠状に囲まれた沈線内には65は横方向に沈線を施文し、69は縦方向の単節ＬＲとＲＬの縄文を交互に施文し、矢羽状に作り出している。66は蕨手状の懸垂文を沈線で胴部に垂下させる。地文は縦方向の単節ＲＬの縄文である。67は無文の口縁部を持つと推定される。頸部は２本沈線間に隆帯を貼り付け、その上下に交互刺突を施して波状に作り出す。胴部は横と縦の沈線を枠状に結び枠と枠の間には渦巻き状の沈線の施文が残存する。枠内には両端が渦巻くＳ字状に沈線を施文し「S」のまわりをさらに沈線で囲む。地文はＬの撚糸文が縦方向に施文される。68は縦方向の２本隆帯を胴部に貼り付ける。２本のうち１本の上端には隆帯で渦巻きが付けられる。隆帯に沿って沈線が引かれ、枠状に作り出している。地文は縦方向の単節ＲＬの縄文を施文する。70～97は胴部の破片である。70、71は地文に綾杉状に沈線を施文するもので、70は沈線で直線的な懸垂文と蛇行する懸垂文を施文する。71は隆帯によって胴部に懸垂文を施文する。72～78は胴部を隆帯によって大形の渦巻文や懸垂文を施文する土器の胴部破片である。72、73、76は接合はしないが同一個体である。いずれも隆帯に沿って沈線が施され文様を区画していく。区画した内側には形に合わせて地文として短沈線が施文される。79、80も大形の渦巻文を隆帯によって胴部に施文したものと考えられる。地文は縦方向の単節ＲＬの縄文である。81～90はいずれも地文を縦方向の単節ＲＬとＬＲの縄文を交互に施して羽状にしているものである。胴部には隆帯によって懸垂文が施される。直線的に垂下する懸垂文は２本、蛇行する懸垂文は１本の隆帯で交互に施文する。83～85、90はなでにより隆帯の断面形が三角形状になる。他はすべて隆帯の両側に沿って沈線を施している。86、88は同一個体と考えられる。91～94は沈線によって胴部に大形の渦巻文や懸垂文が施されるものである。地文はいずれも縦方向の単節ＲＬの縄文である。95～97は地文を縦方向の単節ＲＬとＬＲの縄文を交互に施して矢羽状にするもので、沈線による懸垂文が施される。直線的な懸垂文と蛇行懸垂文を交互に施文すると考えられる。95、96の沈線は極浅く施されている。

98～105は浅鉢形土器である。98は弧状に貼り付けられた隆帯上に沈線を施す。99は内外面ともによくみがきがかけられるもので、肩は絞をつけて「く」の字状に張り出す。肩部には両端部が渦巻く沈線などの文様が施文される。100、101、105は口縁部は無文で口縁

第17図　第６号住居跡・出土遺物(6)



第18図　第６号住居跡・出土遺物(7)



部と肩部の区画には二本の沈線を巡らせて間に隆帯を貼り付け、上下交互に刺突して波状に作り出す。102は2段波状に作り出す。100と101の肩部には沈線で区画して文様が施されると考えられる。地文は斜め縦方向にRLの縄文を施文する。105の胴部は隆帯によって施文され、間に縦方向の沈線を施文する。102から104は屈曲した肩部から胴部にかけての破片で、いずれも胴部は無文である。2本隆帯によって文様が施文され、肩部の隆帯状には刻みを入れる。地文は横方向の単節LRの縄文である。103は隆帯によって肩部を区画し、隆帯の縁に円形の刺突を入れる。区画内には地文の単節RLの縄文を縦方向に施文し、渦巻きなどを沈線によって施文する。隆帯状には縦方向と横方向に単節RL縄文を施文する。106～108は地文のみが施されている鉢形土器である。106は単節RLの縄文を斜め縦方向に施文する。口縁部は横方向に磨り消される。107の地文は条線で口唇部は横方向になでられる。108は斜め横方向に単節LRの縄文を施文する。109～111は底部の破片で、110と111の底面には網代痕が残存していた。110の地文は単節RLの縦方向の縄文で、109の地文はRの撚糸文である。

112は土製円盤である。土器の無文部の破片を使用しており、周縁は良く摩耗している。縦2.7cm、横3.1cm、厚さ1.1cm、重さ9.1gである。

113～141は出土した石器である。打製石斧が大半を占める。113は石鏃で裏面に大きく主要剥離面を残し、側縁から調整を施して形を作っている。基部には縦方向に擦痕が観察された。114は石錐で、半分を欠損する。115は全体を丁寧に磨いているため磨製石斧としたが刃は鋭く作り出していない。刃部先端は敲打痕など摩滅しているため、敲石として使用されていた可能性もある。

116～132は打製石斧である。ほとんどの側縁部は刃潰し状に摩滅している。116と117は側縁が直線的なものでいわゆる短冊形である。116、117ともに表面に自然面を残す。

118～122、124、127、129～131は刃部に最大幅があるいわゆる撥形である。刃部は131以外は丸みをおびる。118～122、131は裏面に大きく一次剥離面を残し、側面から第二次剥離と調整剥離を加えて形を作り出す。131は刃部を欠損する。124は両面に自然面を残すもので調整は刃部にはほとんど加えず、基部の形を作り出すための剥離調整のみおこなっている。偏平な自然礫を利用したものと思われる。127は刃部を欠損する。側縁は浅く抉りが入る。129、130は基部を欠損する。130の刃部は直線的である。

123、125、126は刃部が左右どちらかに偏るものである。123は刃部と基部に自然面を残すもので、刃部は裏面から剥離を施し表面からは加えない。125は基部先端を欠損する。側縁の中央部は浅く抉りが入る。126の左側縁は破損後も使用されている。基部先端を欠損する。128は刃部を欠損後に剥離調整を行った痕跡があるが、再利用されたかは不明である。

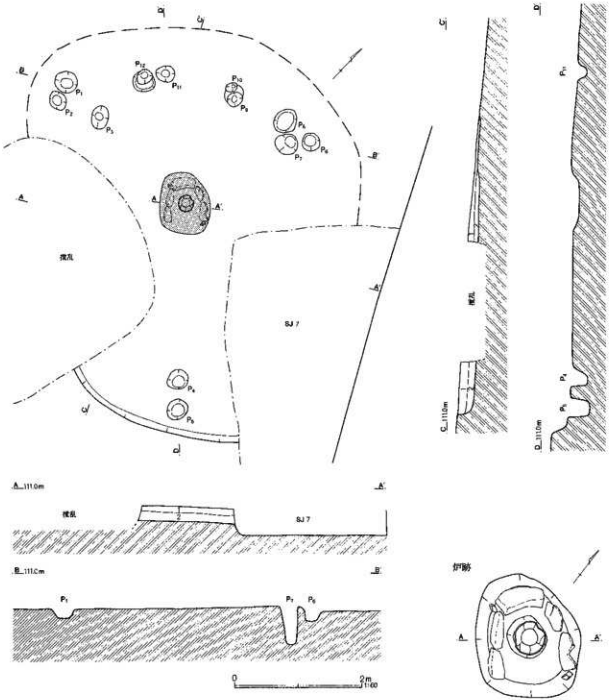
133、134は掻器である。表面に大きく自然面を残す。133の基部は両面より剥離調整を加えて形を整えている。刃部は第一次剥離面側からのみ剥離調整を行なう。134は剥片の素材をそのまま利用して、自然面側の側縁から剥離調整を加えて形を整える。

135、136は磨石で、表裏2面が磨面として使用されているもので中央には敲打による浅い凹みがある。135は偏平な礫を利用したものである。136の磨面は表面が滑らかになっておりよく使用されたことがわかる。周縁は敲打痕がほぼ全周しており、敲石としても使用している可能性がある。

137～139は石皿の破片である。137と138は炉跡内より検出されたもので、炉石として転用されたものと思われる。137は被熱のため石質がもろくなっている。表面に使用面が残る。138は裏面側は被熱のため変色しており、器面も荒れている。表面には使用面がよく残る。139は表面は使用のため摩滅する。裏面には凹みが複数残っている。140、141は凹石である。140は凹みが表面に複数残るものである。141は表裏面に2個所ずつ凹みが残るもので、側縁部には敲打痕が認められる。

遺物の主体となる時期は中期後葉である。

第19図　第８号住居跡

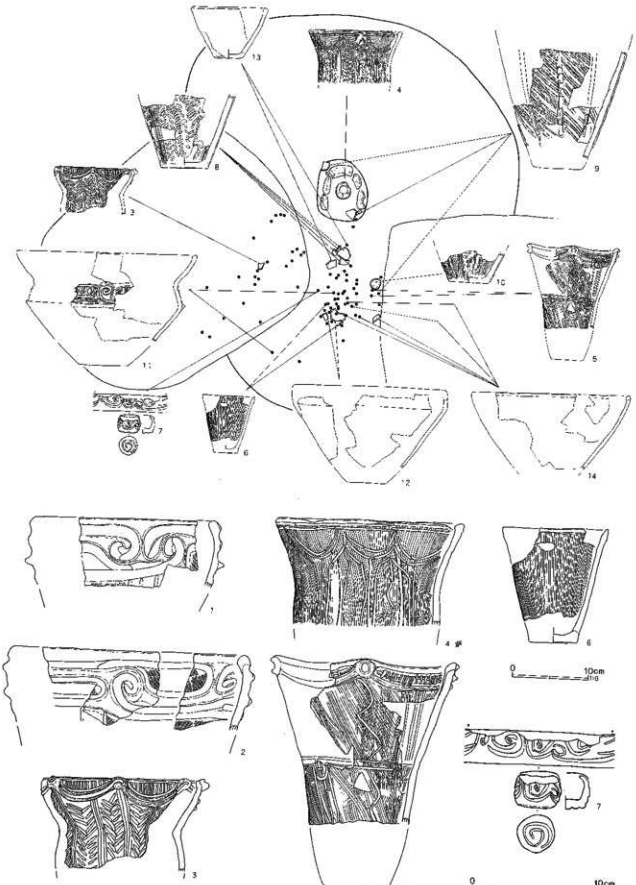


1　暗茶褐色土　緻密　粘性なし　ローム粒子少量　炭化物粒子多量
2　黒 褐 色 土　堅緻　粘性弱　ローム粒子多量　ロームブロック少量

炉跡

1　黒 褐 色 土　砂質　炭化物粒子・焼土粒子少量
2　黒　色　土　緻密　粘性なし　ローム粒子微量　炭化物粒子・焼土粒少量
3　暗黄褐色土　緻密　ローム粒子多量　炭化物粒子・焼土粒子少量
4　黒 褐 色 土　堅緻　砂質　ローム粒子少量

第20図　第８号住居跡遺跡分布図・出土遺物(1)



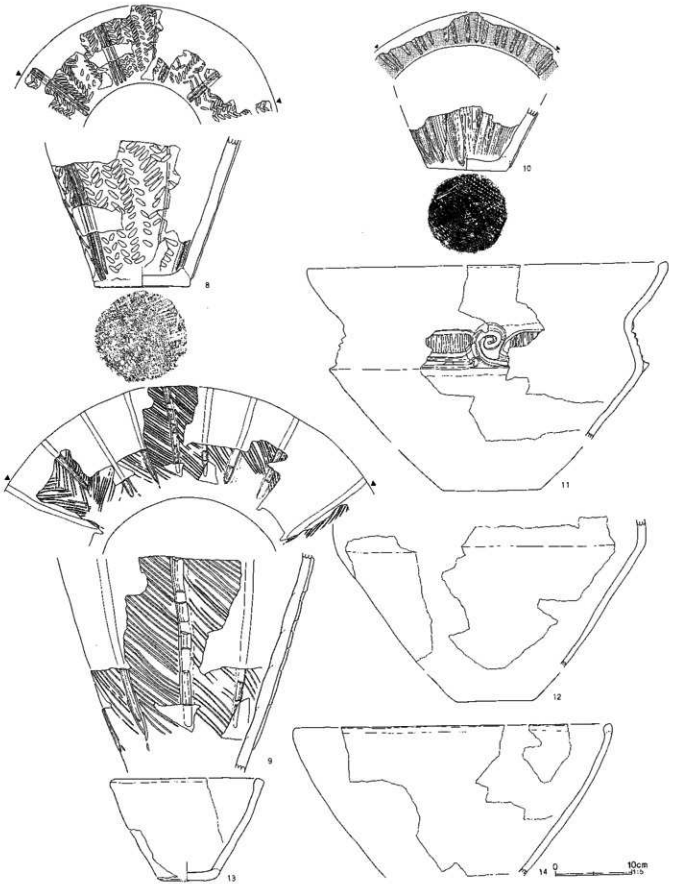
第８号住居跡（第19図～第24図）

F-24グリッドに位置する。攪乱と平安時代の第７号住居跡によって住居跡の半分がこわされている。住居跡の北半分は削平されており覆土は確認できなかった。覆土は南側の一部分で確認できたのみである。南側の一部は第６号住居跡と重複すると考えられるが確認できなかった。検出された柱穴の位置から住居跡平面形は隅丸方形と推定される。長径は推定６ｍ余さは確認できた部分で0.2mであった。主軸は N-22°-Wである。炉跡は中央やや北よりで検出された。炉の形状は石囲埋甕炉である。周溝は検出されなかった。柱穴は12本検出した。住居跡の形に沿って柱がめぐる多柱穴の住居跡であると考えられる。時期は中期後葉である。

遺物は覆土の残っていた南半部より多量に検出された。1、2はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部の破片で、口縁部は降帯によって渦巻文と楕円区画文が連結して巡るものと推定できる。1、2ともに隆帯の両側は幅広の沈線が深く施文されている。胴部に１は３本沈線、２は２本沈線の直線的な懸垂文が垂下する。沈線間は磨り消される。地文は１、２とも胴部は縦方向の単節 LR の縄文を施文する。２の口縁部は横方向の単節 RL の縄文が施文される。３は口縁部には連弧状に２本隆帯を貼り付け、弧の頂部に渦巻状の隆帯を貼り付けて小突起状につくりだす。口縁部の隆帯の内側は沈線によって区画し、中に縦方向の沈線を施す。胴部は弧の頂部と底部から２本沈線の懸垂文が施文される。地文は懸垂文の間に短沈線を綾杉状に施文する。４は胴下半を欠損する炉跡に埋設されていた上器である。連弧文系の土器で口唇直下は２本の沈線を巡らせる。口縁部には３本沈線で連弧状に弧が７単位巡っている。弧の３本目の沈線は間をつながず胴部の懸垂文と連結している。胴部懸垂文は弧の底部の位置に３本の沈線が施文される。弧の頂部の位置からは蛇行懸垂文が１本沈線で施文される。胴部の懸垂文は浅くなでるように施文されており、明瞭ではない。地文は細かい縦方向の条線である。５は約半分が残る深鉢形土器である。口縁部は４単位のゆるやかな波状になると推定される。波状口縁に合わせるように口縁部には隆帯が弧状に貼り付けられる。口縁の波頂部には隆帯と連結して輪の形に隆帯を貼り付ける。隆帯の内側は沈線によってやや弧状の楕円形に区画され、区画内は横方向に沈線を施したあとで縦方向に短沈線を施文する。胴部には波頂部の位置からは沈線の蛇行懸垂文が垂下し、波底部の位置は隆帯直下から３本の沈線を直線的に垂下させる。胴部懸垂文の施文後に胴部のくびれ部分には区画するように２本の沈線を横方向に巡らす。３本沈線の懸垂文と交差する部分では端部を巻く沈線を施文するが欠損のため、形状は明確ではない。地文は細い条線で縦方向と斜め方向に不規則に重なりあって施文される。６は小形の深鉢形土器で約半分が残る。器面には地文のみが縦方向に条線が施文される。口唇部は横方向になでて、胴下半から底部にかけては丁寧にみがいて器面を調整している。底面もみがきによって平らに作り出している。７は上鈴の破片である。当初はミニチュア土器の可能性も考えたが端部の文様の途切れが全周することから、上部が剝落したものと考えられ、本来は上面部分を板状の粘土で閉じた土鈴であると考えられる。内部は空洞で上玉や小石が入っていたと思われる。器面の文様は沈線で施文される。下面は渦巻状に施文する。側面は渦巻やＳ字状の文様を連続して全周に施文されている。

８、９は口縁部を欠損する大形の深鉢形土器で、胎土に多量の小石を混入しているのが器面で観察できる。８は胴部に隆帯による懸垂文が４単位施文される。３単位は１本隆帯で、残り１単位は３本隆帯が垂下している。また２個所に１本の沈線による懸垂文が施文されている部分がある。隆帯は貼り付け後隆帯に両側をなでつけるのみで、部分的に隆帯の剝落が見られる。地文は懸垂文の施文後に雨だれ状の短沈線が綾杉状に施文される。施文は雑で均一ではない。底部には網代痕がみられる。９は胴部に８単位の１本隆帯の懸垂文が施文される。隆帯に沿って細い沈線が施文されるが、隆帯の貼り付け位置の印につけられた可能性も考えられる。隆帯は貼り付け後に両側を粗くなでるのみで、

第21図　第８号住居跡出土遺物(2)

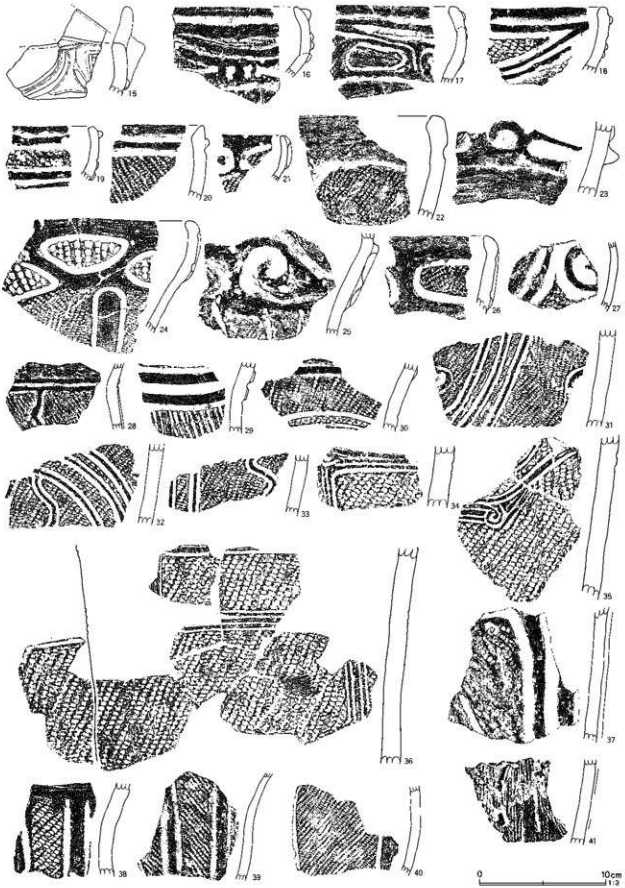


部分的に剥落する。地文は隆帯貼り付け後に８つに区画された個所に条線が施文される。条線は右下がりの斜方向で６区画内を施文し、１区画は左下がりの斜方向、残り１区画は両方向の条線を綾杉状に施文している。10は深鉢形土器の胴下半から底部である。胴部は条線による地文の施文後に直線的に垂下する隆帯の懸垂文を施文する。懸垂文は２本隆帯と１本隆帯とを交互に施文するが１個所１本隆帯となる個所に、２本隆帯を貼り付けている。単位は10単位である。隆帯は両側からよくなでつける。底部には網代痕が観察された。11～14は浅鉢形土器である。11は口縁下を屈曲させて肩部を作り出し、肩部から胴部も大きく屈曲し屈曲部には隆帯を三角形状に盛り上げて貼り付ける。肩部の文様は隆帯によって渦巻文と楕円区画文を施文する。隆帯には沈線が沿って施文されており、端部が渦巻く。楕円区画内は縦方向の沈線によって埋められる。肩部以外は無文である。12～14は鉢に近い形状でいずれも無文である。12は垂直に立つ口縁部から大きく屈曲する。内面は丁寧にみがいている。外面は粗いけずり状の整形痕が残る。13は小形のもので、外面は斜め方向に整形した痕跡が残る。内面は横方向にみがきを行なう。14は丁寧にみがきを行い器面が光沢を持つ。内外面ともに口縁部から胴上部は横方向にみがきを行い、胴下半は斜方向にみがきを行なう。

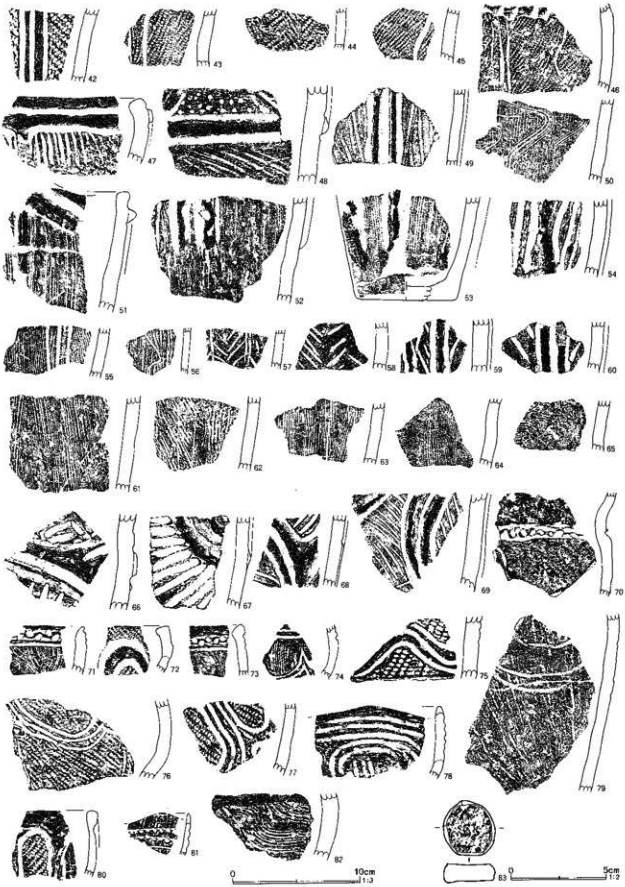
15～47は加曽利Ｅ系のキャリパー形の深鉢形土器である。15～20、23、28～30、47は他とくらべて古い様相を持つ。15～27、47は口縁部から頸部にかけての破片で、15は波状口縁に把手が付くものである。16は２本隆帯で口縁部を施文し、頸部無文帯を持つ。地文は縦方向のＲの撚糸文である。17は隆帯によって渦巻と楕円区画が施文されるもので、頸部無文帯を持つ。楕円区画内は施文されない。18、19は２本隆帯で口縁部を施文するもので、地文は18は横方向の単節 LR の縄文、19は横方向の単節 RL の縄文である。20は口唇下に隆帯が１本巡るもので、地文は横方向の単節 RL の縄文が施される。23は口縁部と頸部無文部の破片で隆帯による渦巻が残る。47は楕円区画内を縦方向の沈線で埋める。21、22、24、26は隆帯と沈線によって口縁部に渦巻や楕円区画を施文するもので、口唇下を巡る沈線などは施文されない。21は地文は斜め横方向の単節 LR の縄文を施文する。22の地文は横方向の単節 LR の縄文を施文する。24は口縁部は隆帯と沈線で三角形に近い小区画に分け、区画内は縦方向に結節沈線を施文する。胴部の懸垂文は逆Ｕ字状に施文し、間は丁寧に磨り消す。地文は口縁部直下は横方向、胴部は縦方向に単節 RL の縄文を施文する。25、27は隆帯に沿って幅広の沈線を施文し口縁部の渦巻文が残る。25は胴部は沈線による懸垂文を施し、間隔を開けて施文された沈線文間は丁寧に磨り消される。地文は25は単節 RL の縄文、27は単節 LR の縄文を縦方向に施文する。

28～46は頸部から胴部の破片である。28は頸部無文部と胴部を２本の細い隆帯で区画し、胴部には隆帯で蛇行懸垂文を施文する。地文は斜め方向の単節 LR の縄文である。29の地文はＬの撚糸文で、２本隆帯で頸部を区画する。30は頸部無文帯に斜め縦方向の単節 RL の縄文を施文する。31～33は同一個体で、半裁竹管による２本1組の沈線で胴部に大形の渦巻文や懸垂文を施文するものである。地文は斜めから縦方向に単節 RL の縄文を施文する。34、35は同一個体で厚手で大形の土器である。文様は４本沈線でほどこされ胴部の上半は二段の横方向の沈線が巡り二段間は縦の懸垂文で結ばれるが、胴部の下半の懸垂文にはつながらないようである。沈線の縦と横の連結部分には34のように渦巻を持つ懸垂文が施文されると思われる。地文は縦方向の単節 RL の縄文を施文する。35は胴部の破片で沈線による懸垂文が残る。地文は縦方向の単節 RL の縄文を施文する。37、41は隆帯の懸垂文が胴部に施文される。37は隆帯で区画された内側に蛇行沈線の懸垂文が施文されるもので、地文は縦方向の単節 LR の縄文を施文する。41の地文はＲの撚糸文である。38～40、42～43、45、46は胴部に沈線で懸垂文を施文するもので、38～40、42は沈線間を磨り消す。地文は38は縦方向の単節 RL の縄文を施文し、39は０段多条の LR の

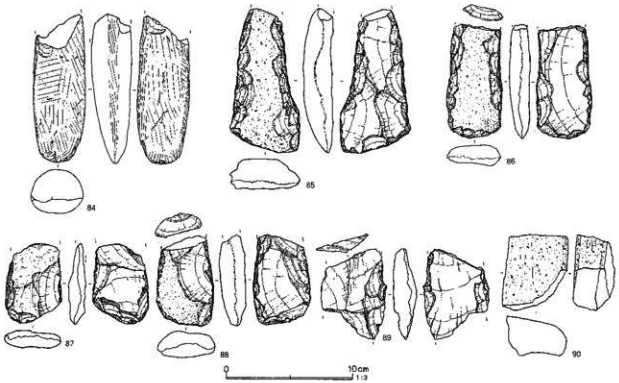
第22図　第８号住居跡出土遺物(3)



第23図　第８号住居跡出土遺物(4)



第24図　第8号住居跡出土遺物(5)



縄文、40は0段多条のRLの縄文を縦方向に施文する。42は複節LRLの縄文を縦方向に施文する。43、45、46は単節RLの縄文を縦方向に施文する。44は単節のRLとLRの縄文を交互に施文して矢羽状にするもので、曽利系である。

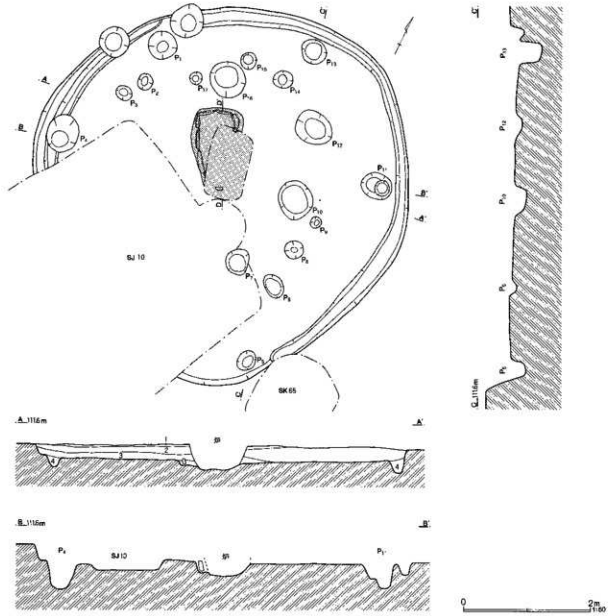
48～69は地文に条線または短沈線をほどこすもので、曽利系の土器が含まれる。48は口縁が直線的に立ち上がると思われるもので、口縁部は隆帯で施文し間を円形の刺突で埋める。地文は斜め方向の条線である。49、54は胴部に隆帯で懸垂文を施文するもので、49の地文は幅広な沈線状に浅く施文し、54は沈線状にしっかりと施文する。51～53は同一個体で、口縁から直線的に底部に至る器形で波状口縁に沿って隆帯を施文し、胴部は口縁の波頂部から2本隆帯の懸垂文を施文する。地文は細かい条線である。50、55、56は胴部に沈線で懸垂文を施文するもので地文は細かい条線である。57～60は地文が短沈線を綾杉状に施文するもので、57は沈線の懸垂文を施文し、59、60は隆帯の懸垂文を施文する。61～65は地文が条線の胴部の破片である。66～69は胴部に隆帯で大形の渦巻文と懸垂文を施文するもので、66～68は隆帯の施文後に短沈線を埋めていくもので、69は地文に条線をひいた後隆帯で施文するものである。

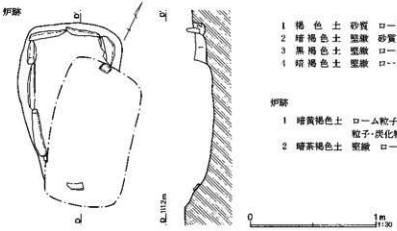
70～79は連弧文系の土器である。70は地文はなく無文の土器であるが、胴に残る沈線が弧状のため連弧文系とした。頸部の区画は深く引いた2本の沈線間に上下交互に刺突を加えて波状に作り出す。71、73は地文は条線で口唇下には交互刺突によって波状に作り出された文様が巡る。72は2本沈線間を磨り消し文様が深い波状に施文される。地文は口唇直下は一段横方向に胴部は縦方向の単節RLが施文される。74は地文はLの撚糸文である。75は沈線間を磨り消すもので地文は縦方向のRLの縄文である。79は連弧文の大きく開いた2本沈線間を磨り消す。地文は条線である。

82は鉢形土器で地文は流水状の条線を施す。80は逆U字状に区画された内側に縦方向の単節RLの縄文を施文する。81は波状口縁で沈線の上に刺突を加えている。地文は条線である。

83は土製円盤である。胴部の破片を使用しているが、器面は摩滅しており文様は不明である。周縁は良

第25図　第9号住居跡



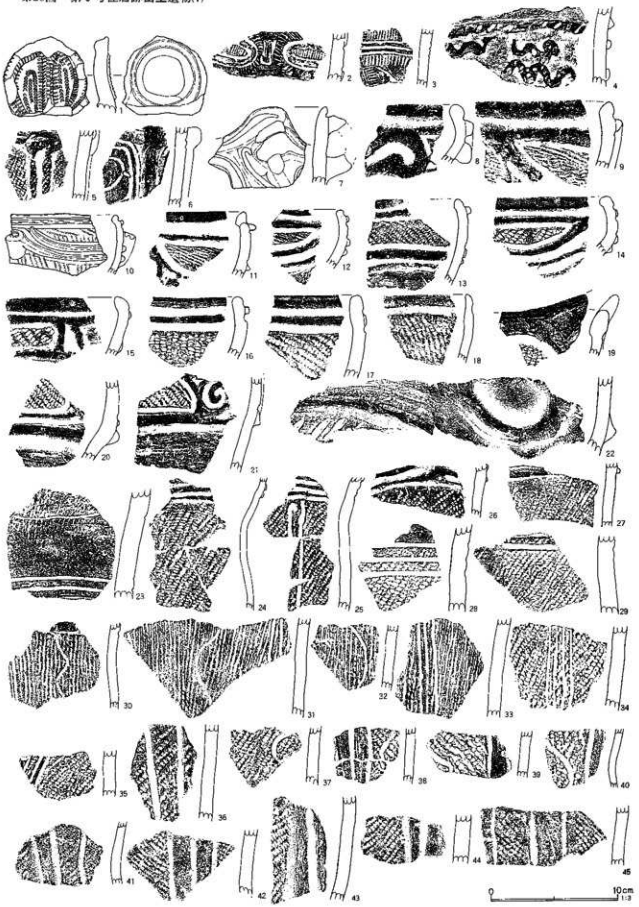


1　褐　色　土　砂質　ローム粒子・炭化物微量
2　暗褐色土　堅緻　砂質　ローム粒子少量　焼土粒子・炭化物微量
3　黒褐色土　堅緻　ローム粒子少量　焼土粒子・炭化物微量
4　暗褐色土　堅緻　ロームブロック少量

炉跡

1　暗黄褐色土　ローム粒子少量　ロームブロック(径10mm～30mm)多量　焼土粒子・炭化物粒子微量
2　暗茶褐色土　堅緻　ロームブロック微量

第26図　第９号住居跡出土遺物(1)



く磨られている。平面形はほぼ円形で長径は2.9cm、厚さは2.8cm、重さは8.8gである。

84～90は石器である。84は磨製石斧で刃部を丁寧に作り出しており、全体によく研磨されている。基部は欠損する。85～89は打製石斧で完形品はない。85は刃部が右に偏る。86はいわゆる短冊形の打製石斧である。89以外は表面に自然面を残す。90は磨石で2面に磨面が認められた。遺物の主体となる時期は中期後葉である。

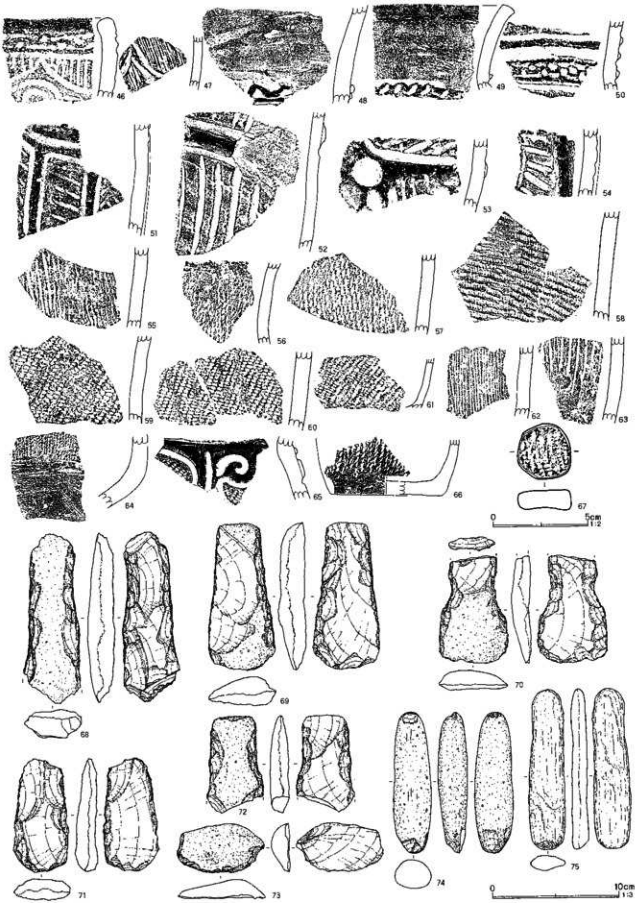
第9号住居跡（第25図～第28図）

F-25、26グリッドに位置する。平安時代の住居跡である第10号住居跡が北半部に大きく重複する。第6号住居跡と第17号住居跡が西側に接しており、北側は第20号住居跡と接している。住居跡の平面形はほぼ円形で、長径5.8m、短径5.8m、深さ0.2mであった。周溝は壁に沿って1条が巡り、壁際の周溝がこわす形で一部分で2条検出された。柱穴は17本検出された。主柱穴はP1、P4、P5、P11、P13であると推定される。炉跡は中央よりやや北よりで検出された。後世の遺構によってそのほとんどがこわされている。炉跡の形態は石囲炉と炉石が縦長の長方形にならんで検出された。掘りかたもほぼ同じ形で検出され、規模は推定で長径1.2m、短径0.8m、深さ0.1mである。主軸は炉跡などからN-29°-Wを指す。時期は中期後葉である。

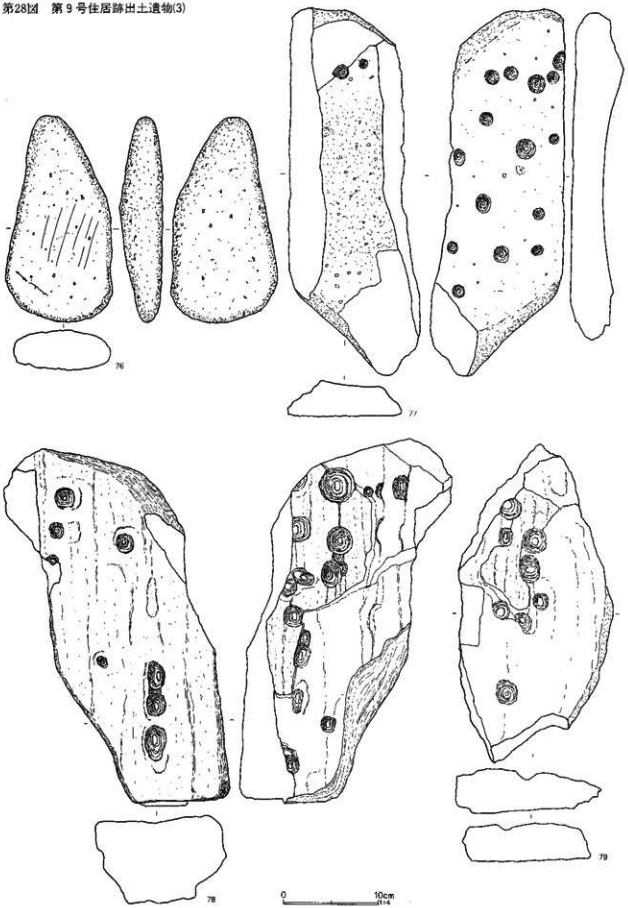
遺物は完形品や復元できるものはなかった。1～6は勝坂系の深鉢形土器である。1は口縁部に付く円形の把手部分で降帯上には刻みが細かく施文される。隆帯の内側は爪形文が細かく隆帯に沿って施文される。裏側は隆帯が円形に貼り付けられる。2は隆帯で楕円に区画され隆帯上には刻みが付けられ、楕円区画内には沈線を巡らせ、爪形文を連続して横方向に施文する。3は半裁竹管によって区画された内側に連続して爪形文を施文する。4は頸部の破片で横方向に貼り付けられた1本の隆帯のFに波状に2本の隆帯を貼り付ける。横方向の隆帯上には幅広な刻みが付けられ、波状の隆帯上には刺突が加えられる。5、6はボタン状の小突起から隆帯が垂下する。5は2本の隆帯が垂下し、突起上には刺突が加えられ、垂下する降帯上には地文と同じ斜め方向の単節RLの縄文が施文される。6は沈線文を施す。

7～45は加曽利E系のキャリパー形の深鉢形土器である。7～23は口縁部から頸部にかけての破片である。7は橋状把手の付く波状口縁の一部である。8～14は2本隆帯で口縁部に文様を施文するもので、弧を描き端部を渦巻くものである。10は連弧状に降帯が施文されるもので、下の隆帯の弧の頂部に小突起状に粘土を貼り付けて渦巻文を施文する。9～12の地文はLの撚糸文を口縁部に横方向に施文する。10は胴部では縦方向に施文する。13は頸部無文部を持つもので、口縁部に横方向の単節RLの縄文を地文として施文する。14の地文は横方向の単節LRの縄文である。15は1本降帯で楕円形に区画するもので、地文は横方向の単節RLの縄文を施文する。16、17は口唇直下を隆帯で区画する。16の地文は斜め方向の単節RLの縄文で、17は縦方向の単節LRの縄文である。18は口唇下を沈線で区画する。地文は横方向の単節RLの縄文である。19は波状口縁部で口唇直下の横方向の区画はされていない。沈線の区画内に斜め方向に単節RLの縄文が施文される。18、19は他と比べ時期が新しいものである。20、21は頸部無文帯を持つもので、地文は横方向の単節RLの縄文を施文する。22は大形の深鉢形土器の口縁部の破片である。23は頸部無文帯部分に地文のLの撚糸文が磨り残されているもので口縁部と区画する隆帯の剥落の痕跡が残る。頸部と胴部は3本沈線によって区画する。24～30は頸部から胴部の破片で24、26、27は降帯で頸部と胴部を区画する。地文は斜め方向にRLの縄文を施文する。25、28～30は沈線で区画する。25は胴部に2本の沈線の懸垂文が垂下するもので、うち1本は端部を折り曲げる。28は頸部無文帯を持つ。30は胴部に1本の沈線による蛇行懸垂文が施文される。地文は25、28、29は縦方向に単節RLの縄文を施文する。30はRの撚糸文を縦方向に施文する。31～45は胴部の破片である。いずれも胴部に沈線で懸垂文を施文

第27図　第９号住居跡出土遺物(2)



第28図　第9号住居跡出土遺物(3)



するもので、隆帯を使用しているものはない。31～33は地文がRの撚糸文で胎土や色調から同一個体である可能性が高い。文様は1本の蛇行懸垂文と3本の直線的な懸垂文を施文する。沈線文間は狭く磨り消さない。34～37は地文が縦方向に単節RLの縄文が施文される。34～36の沈線文間は磨り消さない。35は半裁竹管によって施文される。38～45は間隔を持って施文される2本または3本沈線の間を磨り消すもので38～41には1本沈線の蛇行懸垂文の施文がある。地文は38、42、45は縦方向に単節LRの縄文が、40、41、43、44は縦方向に単節RLの縄文が施文されるもので39は無節のLの縄文が施文される。

46、47は連弧文系の深鉢形土器で口縁部の破片である。46は口唇下に3本の沈線を巡らせ、上2本の沈線間には上下交互に刺突を加え、沈線文間を波状に作り出す。連弧状に施文される沈線の弧の頂部下には渦巻き文が施文される。地文は沈線状の太い条線である。47は2本の沈線で口縁部に連弧状に施文するもので、地文は条線である。

48～54は曽利系の深鉢形土器である。48～50は大きく広がる無文の口縁部を持つもので、48は頸部に隆帯を波状に貼り付ける。49は頸部の隆帯上に斜め方向に刺突を加え波状に作り出す。50は頸部に3本の隆帯を貼り付け、下の2本の隆帯間を上下交互の刺突によって波状に作り出している。50の地文は縦方向の条線である。51～54は胴部に隆帯によって大形の渦巻文や懸垂文を貼り付けた後、短沈線を施文して器面を埋めていくものである。53は隆帯の連結部分に円形の窪みをつける。37の隆帯上は平らになでつけられている。

55～63は深鉢形土器の胴部の地文のみが施文される破片である。55はRの撚糸文が縦方向に施文される。56、57はLの撚糸文が縦方向に施文される。58は0段多条のLRの縄文が縦方向に施文される。59～61は単節RLの縄文を縦方向に施文する。61は底部に近い破片である。62、63の地文は条線である。

64、65は浅鉢形土器の破片である。64は胴部の屈曲する部分で口縁部はそのまま直線的に立つものと思われる。口縁部には細かい撚りのLの撚糸文が縦方向に施文される。胴部は無文である。65は肩部に文様を施す浅鉢形土器の破片である。肩部には隆帯で渦巻文と楕円文を施文するもので、地文は横方向の単節LRの縄文である。

66は深鉢形土器の底部の破片である。胴部には縦方向のLの撚糸文を施文する。底部付近は横方向のなでによって地文を磨り消す。

67は土製円盤である。胴部の破片を利用しており器面には地文の斜方向に施文する単節RLの縄文が残る。周縁は打ち欠いて平面を円形に整えたあと良く磨られている。長径2.9cm、厚さ1.0cm、重さ8.8gである。

68～72は打製石斧で平面形は刃部に最大幅を持ついわゆる撥形である。71以外は表面に自然面を大きく残す。68、72は刃部を欠損し、70は基部を欠損する。70は側縁に抉りが入るものである。側縁部はいずれも刃潰し状に磨滅している。

73は掻器で表面に自然面を残す縦長の剥片を横方向に使用している。素材の形を生かし調整は刃部に表面側より加えているのみである。

74、75は器面全体が磨かれている棒状の石器である。74は両先端に敲打の痕跡があるもので、敲石として利用されていたと考えられる。75は磨石または砥石として利用された可能性がある。

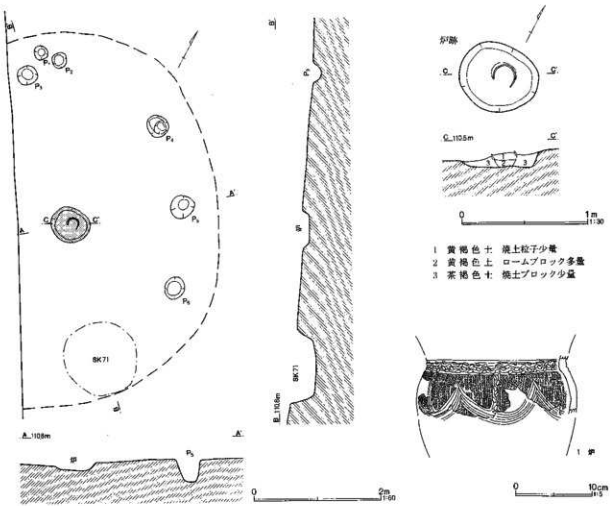
76は磨石で、表裏面の2面に磨面がある。

77は石皿である。破損後炉石として転用されたもので、器面の一部は被熱により赤く変色している。表面は使用のため擦り減っている。表面の一部と裏面には複数の凹部があり、凹石としても使用されていたと考えられる。

78、79は凹石である。78は破損後炉石として転用されたものである。器面の一部は被熱のため赤く変色する。両面とも凹部が複数あるが、表面には磨面があり石皿としても使用されたと考えられる。79の裏面は大きく剥落している。表面には凹穴が複数残されている。

遺物の主体となる時期は中期後葉である。

第29図　第13号住居跡・出土遺物



第13号住居跡（第29図）

E-24、25グリッドに位置する。床面まで削平されており、炉跡と柱穴の一部が検出できたのみである。住居跡の半分は調査区外で、住居跡内には縄文時代中期の第71号土壙が重複する。南側には第5号住居跡が、北側には第6号住居跡が接している。柱穴は炉跡を中心に6本が検出された。住居跡の形は柱穴の位置から円形であると推定され、径は6ｍ程度と推定される。炉跡は住居跡の中央付近より検出された。中央に土器を埋設する埋甕炉である。掘りかたは円形で長径0.6m、短径0.55m、深さは確認面より0.1mである。土器は頸部から胴部の一部が正位置に埋設されているが、炉跡の上部は削平されていることから、使用時は口縁部まで存在した可能性がある。

遺物は覆土が削平されているため1の炉跡の埋設土器のみで、他は検出されなかった。

1は頸部から胴部の上半部を残存するもので、連弧文系の深鉢形土器である。頸部がくびれて口縁部が開いていく形と考えられる。頸部は3本の沈線を巡らせ、その間に刺突を上中下と3段交互に施文して、2条の波状の隆帯のように作り出す。残存する胴上部には3本の沈線によって6単位の弧が連弧状に施文される。弧は左から右方向に施文されており、弧の底部には頸部より2本沈線の懸垂文が連結して施文される。2本の沈線間には左右交互に刺突が縦方向に施文され、波状に作り出している。地文はRの撚糸文が縦方向に施文される。口縁部にも3本沈線が連弧状に施文されていたと考えられる。時期は中期後葉である。

第14号住居跡（第30図～第33図）

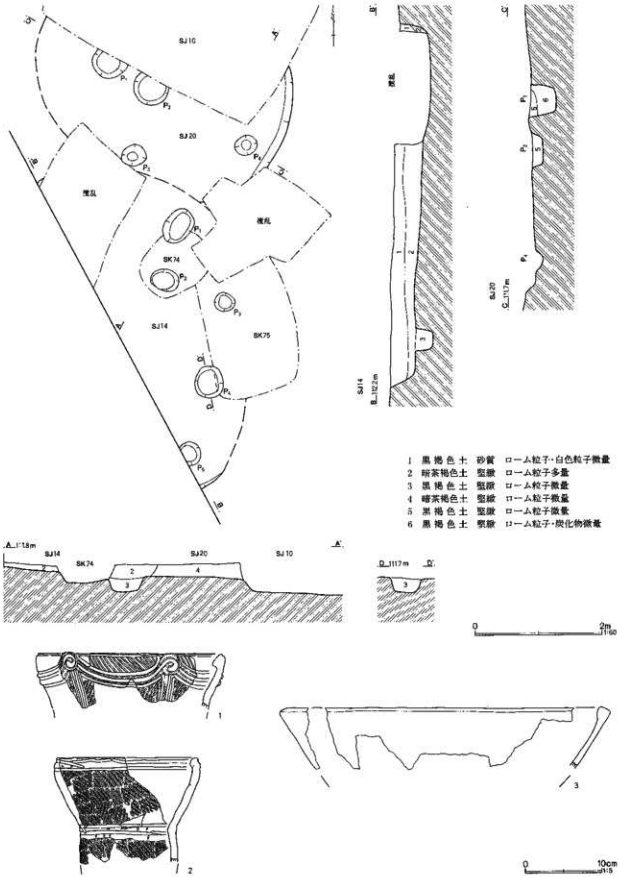
F-26グリッドに位置する。住居跡の西半分は調査区外のため検出できなかった。第20号住居跡、第74号土壙、第75号土壙と重複している。重複関係は土層断面からは第14号住居跡が第20号住居跡より新しいが覆土が同じ暗茶褐色土だったため明確な第14号住居跡の壁は検出できなかった。第74号土壙は縄文時代のもので、土層断面からは第14号住居跡が古い。第75号土壙は平安時代以降のもので、底が住居跡の確認面にあたる浅いものである。重複や攪乱が激しいため住居跡の平面形は明確ではないが、柱穴の配置などからほぼ円形であったと考えられる。規模は調査区境界の土層断面より、径は5.5m程度で深さは0.4mである。柱穴は5本検出された。主柱穴は配置からはP1、P3、P4、P5が相当すると推定される。炉跡は検出されなかった。時期は中期後葉である。

遺物は少ない範囲内だが土器と石器が多量に出土した。第20号住居跡、第74号土壙とはお互いに遺物が混入している可能性が高い。1は深鉢形土器の口縁部の破片である。口唇部から2本の隆帯を連弧状に口縁部に施文するもので、口唇と接する弧の頂部では隆帯の端部を渦巻状に施文する。口縁部は口唇と隆帯の内側に沿って沈線で区画し、中を斜め方向に沈線を施文して埋める。胴部は隆帯の弧の形に沿って沈線を施文し弧の頂部で胴部に懸垂させて枠状に区画していく。区画と区画の間には隆帯の渦巻部とつながる1本の沈線が直線的に垂下する。地文は斜め方向に単節RLの縄文を施文する。2は胴部を欠損する深鉢形土器である。口唇直下に2本の沈線が巡るが、粗雑な施文のため幅が一定せず2本がつながって1本の沈線になる部分がある。頸部の区画も2本の沈線を巡らせる。同様に粗雑で沈線のつなぎは大きくずれ、沈線間は一定の幅をもたずに施文されている。口縁部、胴部ともに文様はなく、地文のみが施文される。地文は2種類の0段多条のRLの縄文を横方向に施文する。部分的に縦方向にも施文している。3は無文の浅鉢形土器の口縁部分である。大きく開く口縁部から屈曲などをもたず底部にいたる器形である。器面が荒れていない内面にはみがき状の丁寧な調整により、光沢が残る。

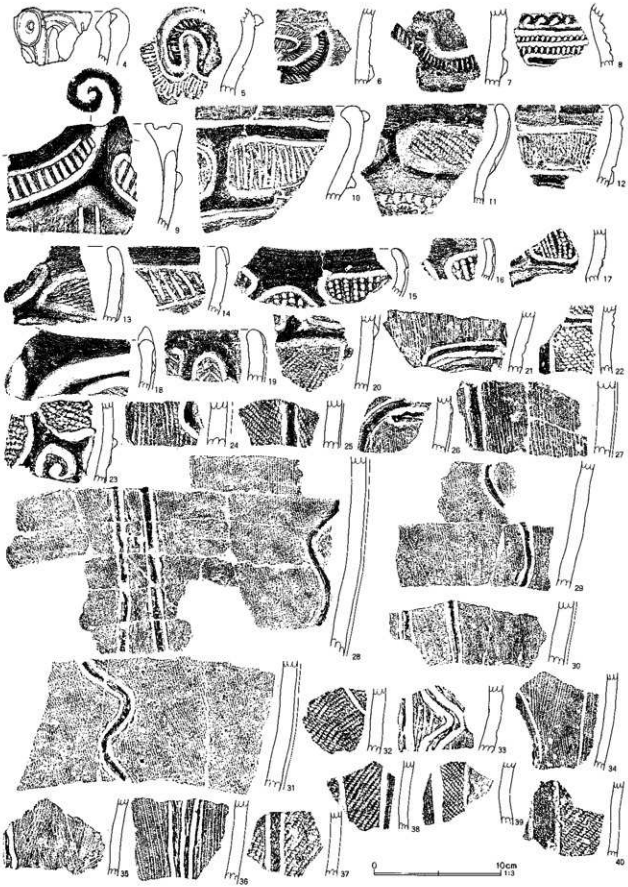
4～8は勝坂系の土器である。4、5は口縁部の破片で4は隆帯にボタン状の偏平な粘土板をはりつける。5は口縁部に隆帯を貼り付け、隆帯上には刻みを施す。隆帯に沿って施文された沈線の外側は爪形文が施文され、半裁竹管によるC字状の刺突が縁取る。6、7は円筒形になる深鉢形土器の破片で、6は隆帯の内側に2重に引かれた沈線内に連続して爪形文を施文する。8は上部に無文の口縁部を持つものである。

9～40は加曽利E系のキャリパー形の深鉢形土器である。9～19は口縁部の破片である。9は波状口縁を持つもので口縁の形にあわせて口縁部には1本の隆帯を波状に施文する。口縁の波長部分は上部に平坦面を持たせる把手状に作り出される。把手の平坦面には隆帯で渦巻文を貼り付け、口縁部の隆帯につながる。口唇と隆帯間は沈線によって区画され内側を縦方向の沈線を施文して埋める。胴部には隆帯の頂部より2本の沈線による懸垂文が垂下する。間は磨り消す。地文はRの撚糸文である。10～14、18は隆帯によって渦巻文と楕円区画文を交互に施文するものと考えられる。楕円区画内には10は縦方向の沈線、11、18は横方向に単節RLの縄文、12は縦方向の条線、13は斜め方向に単節RLの縄文、14は斜め方向に短沈線を施文する。10は口唇直下に沈線が巡り口縁部文様帯と区画し、頸部には無文帯が残るもので他より古い様相を示す。11は頸部に半円状の浅い刺突を巡らせる。刺突の上下は無文となり、頸部無文帯内に施文された文様と考えられる。18は波状口縁の一部で隆帯に沿って幅広な沈線を施文するため、隆帯は微隆起状になる。15～17は不定形な横長の楕円区画が複数口縁に施文されたり口縁部の破片と推定される。15、16は同一個体で区画内は結節沈線を縦方向に施文する。17の区画内は下から上の縦方向に爪形状に細かく施文する。19は逆U字状に縦長に区画される部分の一部が残る口縁だが下部は破損のため不明である。区画内は短沈線が鋸歯状に入る。20～22は頸部の区画が残る破片である。20は隆帯で区

第30図　第14・20号住居跡・第14号出土遺物(1)



第31図　第14号住居跡出土遺物(2)



画し地文は縦方向の単節 RL の縄文である。21は逆弧状に施文された沈線が残る。地文は条線である。22は沈線で区画し胴部懸垂文の沈線間は磨り消される。地文は複節 RLR の縄文を縦方向に施文する。24～40は胴部の破片である。24～31は隆帯によって懸垂文や渦巻文が施文されるものである。24は地文は R の撚糸文、25の地文は縦方向の単節 LR の縄文である。26は2本隆帯で渦巻文を施文したと考えられ、地文は細かい条線が施文される。27～31は同一個体の大形の深鉢土器であるが、接合はしなかった。間をやや開く2本の直線的な懸垂文と、1本の蛇行する懸垂文が交互に施文される。隆帯は両側を沈線によって削られ細くなり綾が鋭くなっている。地文は細い条線が残く斜め方向や縦方向に施文されている。32～40は沈線で懸垂文を施文するものである。32は蛇行懸垂文の一部が残るもので地文は単節 RL の縄文が斜め方向に施文される。33～36は沈線間を磨り消さないもので、地文は斜め方向や縦方向に条線が施文される。37～40は胴部懸垂文の沈線間を磨り消すものである。地文は37、38は縦方向の単節 RL の縄文を施文する。39は縦方向の単節 LR の縄文を施文する。40は複節の RLR の縄文を縦方向に施文する。

23、41～50は曽利系の深鉢形土器である。23は隆帯によって胴部に渦巻文を施文するもので、地文は斜め方向に撚りのゆるい複節 RLR を施文する。41は口唇下に巡らせた2本の沈線の間に円形竹管による刺突を不規則に加えている。胴部には沈線で懸垂文を施文する。地文は縦方向の単節 RL の縄文を施文する。42は口唇下に3本の沈線を巡らせ、上2本の沈線間を上下に刺突を交互に加えて波状に作り出す。口縁はやや波状になる。43、44は口縁に1本の隆帯を逆弧状に施文するもので、弧の頂部は口唇につながる。43は口縁部の隆帯によって区画された中をさらに沈線で区画しその中を縦方向の短沈線で埋める。胴部は弧の頂部から1本沈線の懸垂文を垂下する。その両側の沈線は隆帯に沿って枠状につながると考えられる。44は口縁部の隆帯の内側を縦方向の短沈線で埋める。胴部は弧の頂部から2本の沈線の懸垂文を施文し、他は斜方向の短沈線を不規則に施文して埋めている。45～48は胴部に隆帯で懸垂文や渦巻文を施文するもので、間を短沈線を施文して埋めている。49、50はやや長めの短沈線を斜め方向に施文するもので、49は胴部に2本沈線の懸垂文を施文する。50は隆帯が剝落している。

51～53は連弧文系土器である。51の口縁部は沈線によって連弧文が施文され、52は頸部を隆帯で区画する。53は頸部を沈線で区画し、胴部には波状に近い連弧文が細かく2本沈線で施文される。地文は51は斜め方向と縦方向の L、52は縦方向に R、53は斜め方向と縦方向に R の撚糸文が施文される。

54～58は胴部に地文のみが残る深鉢形土器の破片である。54は縦方向の L の撚糸文、55は縦方向の0段多条の RL の縄文、56は縦方向に複節 RLR の縄文、57は縦方向に単節 RL の縄文が施文される。58は流水文状の細かい条線が施文される。

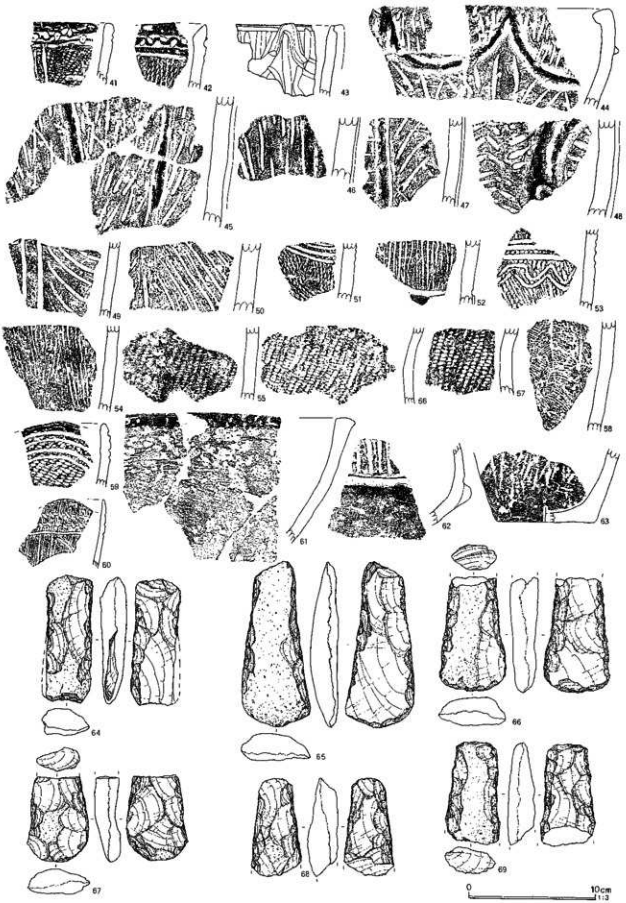
59、60は小形の上器の波状口縁部の破片である。59は波状口縁に沿って4本の沈線を口唇直下に施文する。地文は単節 RL の縄文を縦方向に施文する。60は薄手の上器で内側も丁寧に横方向になでて調整される。口唇下には3本の沈線が巡らせ、上2本の沈線状には刺突が加えられる。胴部には沈線の蛇行懸垂文の一部が残る。地文は細かい条線である。

61、62は浅鉢形土器である。61は無文で赤彩の痕跡がわずかに見えるが、器面が荒れているため明確ではない。62は肩部を持つもので、大きく屈曲する肩部には櫛目区画内を埋める縦方向の沈線が残る。

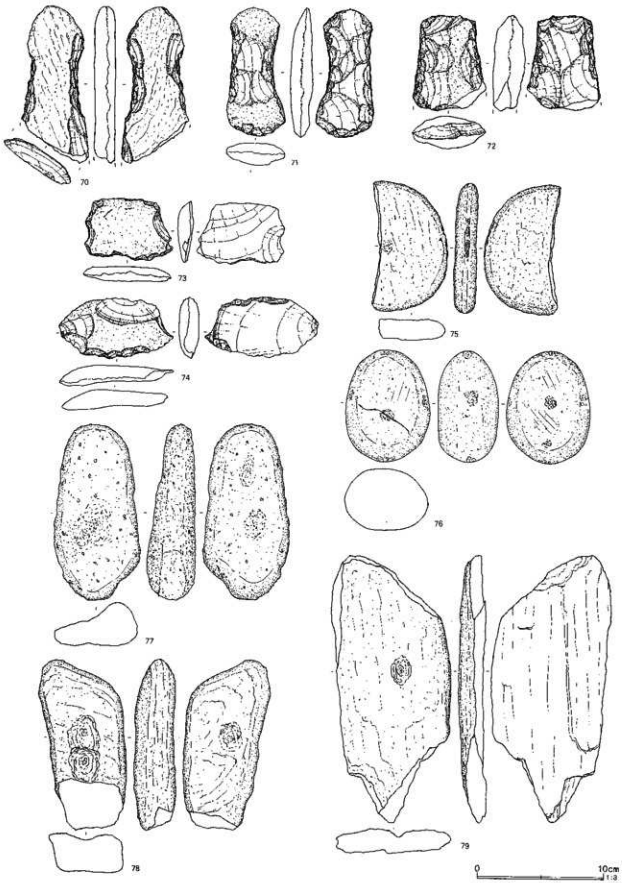
63は底部の破片で沈線による懸垂文が施文され地文は L の撚糸文が縦方向に施文される。

64～79は出土した石器である。64～72は打製石斧である。64は基部幅と刃部幅が変わらない短冊形で、65～72は刃部に最大幅がある撥形である。すべて表面に自然面を残し、71は偏平な自然礫の側縁から調整を加えるのみで両面に大きく自然面を残す。完形品は65と71のみで他は一部を欠損する。平刃は64のみで他の残存している刃部は丸刃である。70、71は側縁にゆる

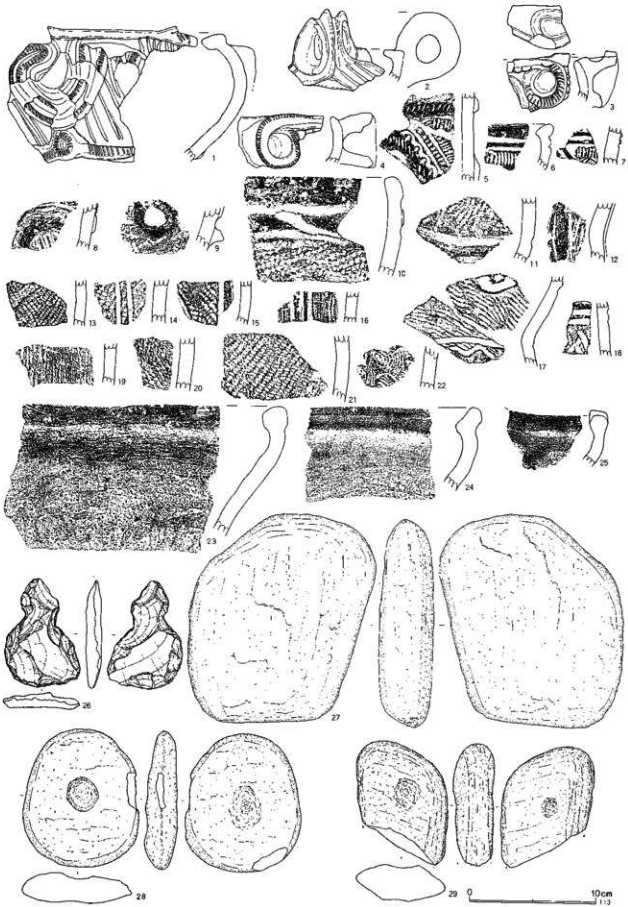
第32図　第14号住居跡出土遺物(3)



第33図　第14号住居跡出土遺物(4)



第34図　第20号住居跡出土遺物



やかに抉りを入れる。

73、74は掻器である。いずれも素材の剥片に刃部のみ簡単な調整を加える。73は横長の剥片、74は縦長の剥片を使用している。

75～77は磨石である。75は偏平な円礫を使用しており磨面は表裏の２面で表面の中央付近と側縁の一部に敲打痕が残る。76は磨面は表裏の２面で、両面の中央付近と側縁の一部に敲打痕が残る。77は表裏の２面に磨面がある。表面には大きく凹みが残る。裏面には敲打の痕が残る。

78、79は凹石で、79は破損品の一部である。

出土土器は加曽利Ｅ系が主体を占め、時期は中期後葉である。

第20号住居跡（第30図、第34図）

F-26グリッドに位置する。住居跡の北半分は平安時代の第10号住居跡によってこわされている。また南側は第14号住居跡と重複している。重複関係は土層断面から第14号住居跡が新しい。攪乱も受けるため、平面形は推定だが円形と考えられる。径は不明で深さは覆土が0.2mであった。柱穴は４本検出されたが主柱穴は不明である。炉跡は検出されなかった。時期は中期中葉から後葉である。

遺物は狭い範囲のため少なく、完形品や復元できるものはなかった。１～９は勝坂系の土器でいずれも口縁部の破片である。１は２本の隆帯で大きく施文されるもので渦巻状の施文が残る。頸部は隆帯で区画され一部突起状に円形の隆帯を貼り付ける。隆帯上には刻み目が施される。地文は縦方向に粗く細い沈線が施文される。２は眼鏡状の橋状把手で把手は３本の粘土紐で作り出す。３は端部が渦巻く隆帯を口縁部に突出して立体的に貼り付けているもので、口唇部に平坦な面を三角形状に作り出し隆帯を渦巻状に施文する。隆帯上には刻みを加え、半裁竹管によって縁取る。隆帯の側面には半裁竹管を縦方向に施文する。４は口縁部に隆帯が斜めに円筒状に突出して貼り付けられたもので、隆帯の縁は渦巻状に作り出しており刻みを加える。５は隆帯によって区画された内側を沈線によって区画しその間を爪形文を連続して施文する。隆帯上には刻みを施し、隆帯の側面には縦方向の刻みとＣ字状の刺突が施文される。６、７は半裁竹管による沈線で区画された内側を爪形文を連続して施文する。８は楕円区画の隆帯の内側を半裁竹管によって縦方向に施文する。９は円形のボタン状の突起を頸部に貼り付ける。10～16は加曽利Ｅ系の深鉢形土器である。10、11は口縁部の破片で10の地文は斜め方向に複節のLRLの縄文を施文する。12～16は胴部の破片である。12、13は隆帯で懸垂文を施文する。12の地文は条線である。13は蛇行する隆帯が剥落している痕跡がある。地文は縦方向の単節のLRとRLの縄文を交互に横方向に施文して矢羽状に作り出す。14～16は沈線で懸垂文を施文するものである。14の地文は縦方向の単節RLの縄文を施文するもので沈線間は磨り消さず地文が残る。15は沈線間は磨り消し、地文は縦方向の単節LRの縄文を施文する。16は地文は縦方向の条線である。

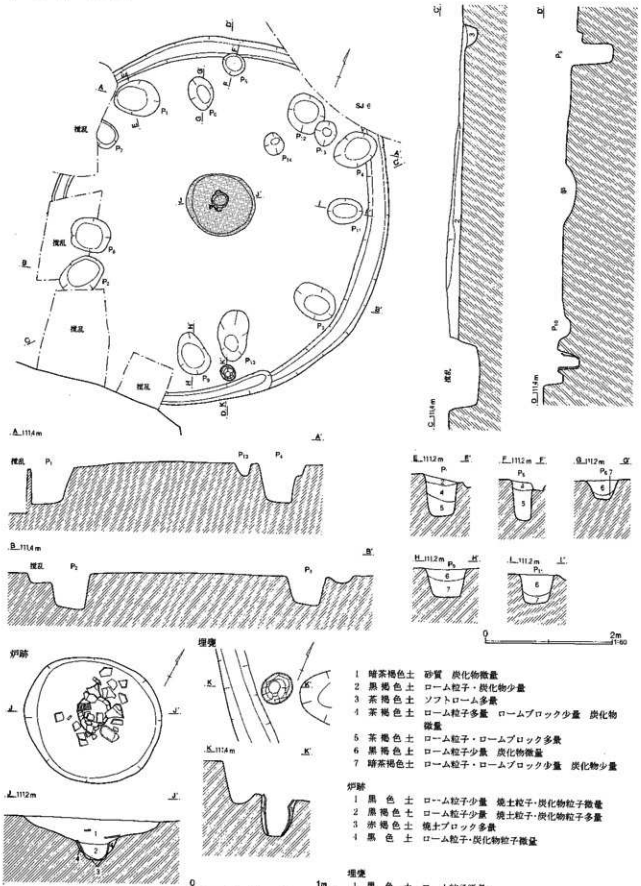
17、18は連弧文系の深鉢形土器である。17は頸部に１本の沈線を巡らせその下に細かく波状に沈線を施文する。口縁部も波状に施文する可能性がある。地文は無節のＬの縄文が斜め方向と縦方向に施文される。18は頸部を沈線で区画し胴部に連弧文の頂部が残るもので、地文は縦方向の単節LRの縄文が施文される。

23～25は浅鉢形土器である。色調は赤褐色である。口縁は内側に折れ内面に綾を持つ。口唇下には横方向にくぼみを巡らし段をつける。25は波状口縁を持つ。

26～29は出土した石器である。26は石匙である。基部には抉りをいれて柄を作り出す。抉りには刃潰し状に細かい剥離が残る。１次剥離を大きく残し調整は最小限である。27は磨石である。磨面は表裏の２面であるが、石皿の可能性もある。28、29は凹石である。28は裏面の凹部は浅く敲打の痕が残る。28は表裏の２面、29は側縁の平坦部に磨面が残る。

出土土器は勝坂系が多く時期は中期中葉から後葉と考えられる。

第35図　第17号住居跡



1　暗茶褐色土　砂質　炭化物微量
2　黒褐色土　ローム粒子・炭化物少量
3　茶褐色土　ソフトローム多量
4　茶褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック少量　炭化物微量
5　茶褐色土　ローム粒子・ロームブロック多量
6　黒褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量
7　暗茶褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量　炭化物少量

炉跡
1　黒色土　ローム粒子少量　焼土粒子・炭化物粒子微量
2　黒褐色土　ローム粒子少量　焼土粒子・炭化物粒子多量
3　赤褐色土　焼土ブロック多量
4　黒色土　ローム粒子・炭化物粒子微量

埋甕
1　黒色土　ローム粒子微量

第17号住居跡（第35図～第40図）

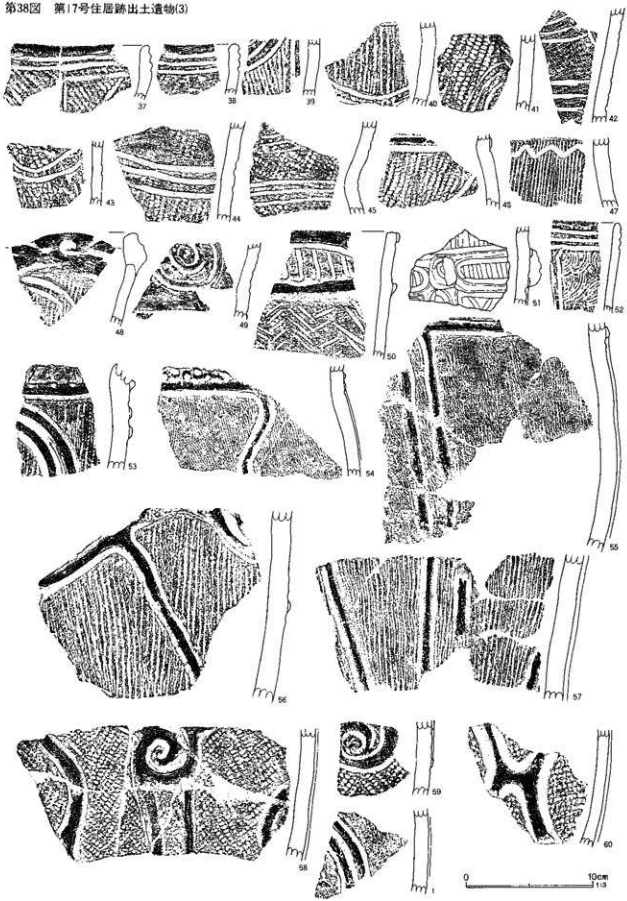
E-25、F-25グリッドに位置する。住居跡の東側は攪乱によってこわされていた。北側の一部は第6号住居跡と重複する。第6号住居跡の確認面と第17号住居跡の床面の高さに差がなく、また第6号住居跡を発掘した後で第17号住居跡が確認されたため、先後関係は遺構の掘り込みからは不明である。住居跡の平面形はほぼ円形で、主軸方向に長径5.5m、短径5.3m、深さは確認面より0.2mであった。主軸方向はN-26°-Wである。周溝は1条巡る。柱穴は14本検出された。主柱穴は深さなどからP1、P2、P3、P4、P5が相当するものと思われる。やや内側にはP6、P7、P8、P11、P12が巡り立て替えなどの可能性も考えられる。炉跡ははぼ中央で検出された。形態は埋甕炉で炉体土器が中央部分に埋設され、覆土内からは土器が多量に検出された。入り口部からは埋甕が正位で検出された。時期は中期後葉である。

遺物は炉跡を中心に出土した。1はキャリパー形の深鉢形土器である。口縁部は連弧状に隆帯を8単位貼り付け、弧の頂部は渦巻をつけて小突起状に張り出す。口唇直下には1本沈線を巡らし、隆帯の上側に沿って施文される沈線は小突起の渦巻内で止まる。隆帯によって区画された口縁部の弧状の区画内は弧の沈線が口唇下の直線に結びついて区画するAと、沈線で完全に囲むBの2種がAAABBBABという割り振りで、8つに区画する。胴部には沈線で懸垂文が施文されている。弧の頂部の下からは2本の直線的な懸垂文が施文され、弧の底部の下からは1本の蛇行懸垂文が施文される。地文は口縁部から胴部にかけて条線が施文され、その後隆帯などの文様が施文されている。2は埋甕に使用された深鉢形土器である。底部は破損する。口縁部は無文で外側に開く。頸部は2本の沈線を巡らし沈線間には雨だれ状の短沈線を逆ハの字状に施文していく。胴部は器面全体にわたって短沈線を施文する。文様は不規則で図の正面では端部が渦巻く文様の下には2本沈線を直線的に垂下させその間に交互に刺突する。正面の左側には綾杉状に施文する部分が広がり右側には稲妻状に縦に短沈線を施文しその間を短沈線で不規則に埋めていく部分が広がる。地文は一見条線に見える細いRの撚糸文が縦方向と斜め方向から施文される。3は頸部からやや内湾して広がる無文の口縁部を持つ深鉢形土器である。口縁は4単位の波状口縁である。胴下半を欠損する。頸部の区画は4本の沈線を巡らせ、上下交互に刺突を加えて中間の2本の沈線間を波状に作り出している。胴部は沈線で文様が施文される。文様は1つの弧と半分の弧を作り1単位とし、弧の端部と頂部の4個所を渦巻状に施文する。そのまわりを2本の沈線で囲み2個所を懸垂文状に垂下させる。単位は4単位で入れ子状に施文し、単位の間には先がつながる2本の蛇行懸垂文の一部が残る。地文はLの撚糸文が縦方向に施文される。4は胴部の一部が残存するもので、無文の口縁部を持つと考えられる。頸部は沈線で区画し、胴部には2本沈線の懸垂文が狭い間隔で施文される。胴部と頸部の沈線がつながる部分があることから、頸部を巡る沈線は端部を胴部の沈線とつなげて階段状に施文されている可能性がある。懸垂文間は雨だれ状の短沈線が逆ハの字の綾杉状に施文される。5は頸部と口縁部の部分を使用した炉体土器である。口縁部は雨だれ状の短沈線を綾杉状に施文する。頸部は2本沈線で区画するが、2本の沈線をつなげるように出発し最後は上下の沈線をつなげるように上段の沈線を施文し、最初と最後は故意にずらして連結しない。胴部は逆U字状の区画が大きく4単位施文される。区画の境には渦巻状の沈線が残るが下部は破損のため不明である。区画内には口縁部と同様の短沈線が綾杉状に施文される。6は口縁部が開いて無文となると推定される深鉢形上器で胴上部の半分が残存する。頸部は隆帯を巡らし隆帯の間に2本の沈線を施文し上下交互の刺突を行なって波状に作りだす。胴部は大形の渦巻文が隆帯によって施文される。隆帯上には端部を渦巻く沈線を施文し、2本隆帯状にする。渦巻文は横方向に隆帯によって連結するものと思われる。渦巻文から一部隆帯が突出する部分がある。隆帯の両側には沈線を施文する。下部の文様は不明である。地

第36図　第17号住居跡出土遺物(1)

第37図　第17号住居跡出土遺物(2)

第38図　第17号住居跡出土遺物(3)



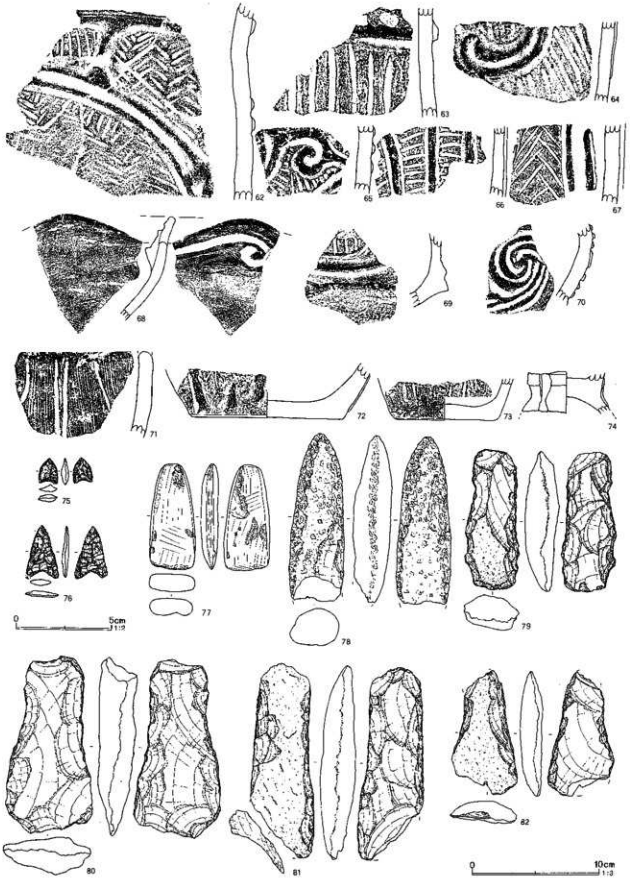
文はLの撚糸文を縦方向に施文する。7は胴部の破片で頸部には沈線の一部が残る。胴部は3本沈線で連弧文が施文される。地文は縦方向に単節RLの縄文が施文される。一部に地文が消される縦方向のナデがみられる。8は胴上部の破片で、頸部には3本の隆帯が巡っているのが残る。胴部は3本沈線の直線的な懸垂文が垂下する。地文に縦方向の条線を施し、その上に深い条線を不規則に弧状に施文する。9は深鉢形土器で底部から口縁部の一部が残存する。文様は沈線で施文する。口縁部はL字状に横方向に連結していく沈線を施文すると考えられ、円文を施文する部分がある。胴部は4の胴部と同様な施文方法と考えられる。図の正面は円文か蕨手状の懸垂文になるかは不明である。地文は口縁部から底部まで縦方向の細かい条線が施文される。底部の主編はなでの痕が残る。10は胴上部の一部のみが残存するもので、3本沈線の連弧文が施文されている。懸垂文は弧の頂部の下にのみ施文され2本ないし3本の直線的な懸垂文と1本沈線の蛇行懸垂文が交互に施文される。地文は細かい条線が縦方向と斜め方向から施文される。11は口縁部の一部で、口唇下には深い沈線が上側に施文される隆帯が1本巡る。頸部は2本沈線で区画される。地文は口縁部は横方向に単節LRの縄文が施文される。12は無文の波状口縁部である。13は口縁部と胴上部を破損し、地文は縦方向の条線が深く施文される。沈線などの施文は見られない。

14～20は勝坂系の深鉢形土器である。14は口縁部は無文で胴部は隆帯が渦巻き状に施文される。隆帯の上に沈線を入れ、一部には刺突状の刻みを施文する。15は波状口縁部で波状部には隆帯を楕円状に貼り付け隆帯上と隆帯の内側は沈線で施文する。隆帯の一部に刻みが入る。16は隆帯を渦巻状に貼り付け、隆帯上に沈線を施文する。17は口縁部で2本隆帯を貼り付け文様を施文する。沈線で器面を埋める。18、19は隆帯で区画された胴前文様帯部分で文様は沈線で施文されている。20は隆帯によって区画されるもので、内側は沈線を施文し三叉文の一部が残る。

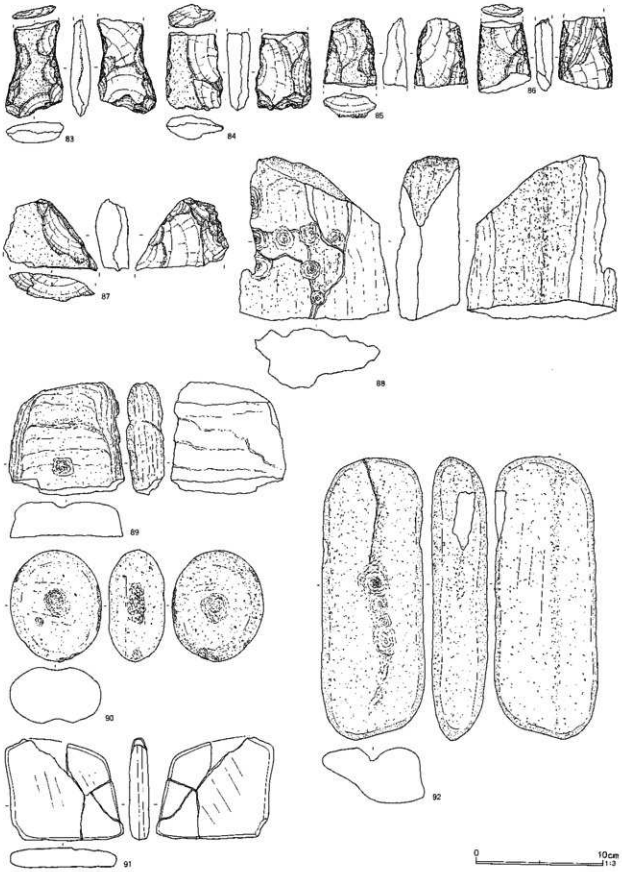
21～34は加曽利E系のキャリパー形の深鉢形土器である。21～26は口縁から頸部の破片である。21は隆帯による口縁部の渦巻文が残る。22、23は口縁部に連弧状に2本隆帯を貼り付けるもので、23は剥落しているが弧の頂部は渦巻状になる。22は口唇直下は沈線を巡らせており隆帯によって区画された内側には斜めに短沈線を施文する。地文は斜め方向にLの撚糸文を施文する。23は口唇直下は1本沈線と隆帯を巡らせ、隆帯の内側は沈線で区画する。胴部には沈線による懸垂文が残る。地文は縦方向の条線である。24は口縁部の湾曲がゆるやかで、頸部には無文帯がある。口縁部は隆帯によって渦巻文と楕円文を施文すると考えられる。内側の隆帯に沿って幅広な沈線が深く施文される。隆帯の口唇側と頸部側には沈線は施文しない。口縁部の楕円区画内は斜め方向に沈線を施文する。25は頸部無文部に磨り残した地文が残る。地文は口縁部は横方向、胴部は縦方向と斜め方向の単節RLの縄文である。26は半裁竹管を使用して頸部を区画する。地文はLの撚糸文で頸部無文部にも施文される。27から34は胴部の破片で、懸垂文が施文される。隆帯が施文されるのは27のみで他は沈線の懸垂文を施文する。27の地文はRの撚糸文で縦方向に施文する。28～34は沈線で施文するもので28～31、33は直線的な懸垂文と蛇行懸垂文が残るもので、沈線間は狭く磨り消さない。地文は28、31、33は縦方向の条線を施文する。29は縦方向のRの撚糸文、30は縦方向に単節RLの縄文を施文する。32、35は間隔を開けて施文した沈線間を磨り消すもので、32の地文は縦方向に複節のLRLの縄文を施文する。35は単節RLの縄文を縦方向に施文する。34は底部に近い胴部の破片で懸垂文が残るが、沈線間は磨り消さず、簡単なナデが認められる。53は内面も丁寧に横方向になでて調整する小形の土器である。間隔を狭く施文した2本沈線の懸垂文が残る。沈線間は丁寧になでられている。地文は撚りの細かいLRの縄文を縦方向に施文する。

37～47は連弧文系の深鉢形土器である。37、38は口縁部が残り、口唇下に3本の沈線を巡らせる。37の口唇下の3本目の沈線は弧の底部につながる懸垂状の沈

第39図　第17号住居跡出土遺物(4)



第40図　第17号住居跡出土遺物(5)



線につながって止まる。地文は37が縦方向の単節 LR の縄文で、38は縦方向の単節 RL の縄文を施文する。39～45は口縁部から頸部にかけての破片で、2本または3本の沈線によって連弧文が施文されている。39は連弧文の沈線間の地文を磨り消し、弧の頂部からは沈線が垂下する。42、45は頸部を3本の沈線で区画する。地文は39は縦方向の条線、40はLの撚糸文を縦方向に施文する。41、44は斜め方向に単節 RL の縄文を施文する。42は斜め方向に0段多条の RL の縄文を施文する。43は無節 L の縄文を施文する。45は単節の LR と RL の縄文を縦方向に矢羽状に交互に施文する。46、47は胴上部の破片で、46は頸部の隆帯による区画が残る。地文は単節 RL の縄文を斜め方向に施文する。47は頸部に施文された横方向の沈線の直下に細かく波状に沈線を施文する。地文は L の撚糸文を縦方向に施文する。

48～67は曽利系の深鉢形土器である。48～52は口縁部の破片である。48は肥厚する波状口縁で口縁の直下から稲妻状の2本沈線を垂下させる。地文は縦方向の R の撚糸文を施文する。49は開く口縁部から頸部でくびれる部分で、口縁部には渦巻状に沈線が施文される。頸部は沈線で区画する。50～52は口縁部から底部まで直線的な器形の上器で、50は口縁部の隆帯が弧状に施文されると考えられる。隆帯内は縦方向の沈線を施文したのち、沈線で隆帯内を区画する。胴部は綾杉状に短沈線を施文する。51は口縁部に隆帯で楕円区画を施文する。楕円区画の連結部分には丸い粘土を突起状に貼り付け、突起の表面に沈線で渦巻文を施文する。楕円区画内と口縁部分は縦方向の沈線を施文する。胴部は突起から隆帯を2本垂下させ、地文は綾杉状に短沈線を施文する。52は薄手の焼成の良好なもので口唇下に3本の沈線を巡らせ、3本目は胴部の沈線で施文する懸垂文とつながり枠状となる。地文は条線を流水状に施文する。53～67は頸部から胴部の破片である。比較的大形の上器となるものが多い。63以外は隆帯で胴部に渦巻文や懸垂文を施文するものである。53は2本隆帯で大形の渦巻文を施文するもので頸部の隆帯の上の沈線部分に刺突の痕が残る。地文は L の撚糸文を縦方向に施文する。54は頸部を区画する隆帯の1本に上下交互に刺突を加え、波状に作り出す。地文は条線である。55は2本隆帯で直線的に垂下する。両側は沈線でなぞるが下半部は浅くなりなでつけるのみになる。地文は R の撚糸文を縦方向に施文する。56は大形の渦巻文を施文する土器と考えられる。隆帯の両側は沈線が施文されるが、胴下半は浅いなぞりに変わる。地文は縦方向の L の撚糸文である。57は胴下半部で2本隆帯の懸垂文が垂下する。地文は縦方向の R の撚糸文である。58、59は同一個体で二本隆帯の直線的な懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文が交互に、渦巻文が部分的に施文される。地文は縦方向の単節の LR と RL の縄文が矢羽状に施文される。60は大形の渦巻文の連結部分と考えられる。地文は複節の RLR の縄文が斜め方向に施文される。61、62、64は2本隆帯で人形渦巻文を施文するものである。61の地文は細い条線で、62は隆帯の施文後、縦方向の短沈線や綾杉状に雨だれ状の短沈線を埋めていく。64は斜め方向に短沈線を施文する。65は渦巻文を残すもので、隆帯の形にそって短沈線を施文していく。63は縦方向の沈線が胴部に残る。66は横方向の短沈線を隆帯間に施文し、67は綾杉状に施文する。

68～70は浅鉢形土器である。68は波状口縁部で内面に段を作る。内面の口唇直下に沈線を施文し段の幅が広くなる波状部で渦を巻く。69、70は器面に赤彩の痕跡が残る。

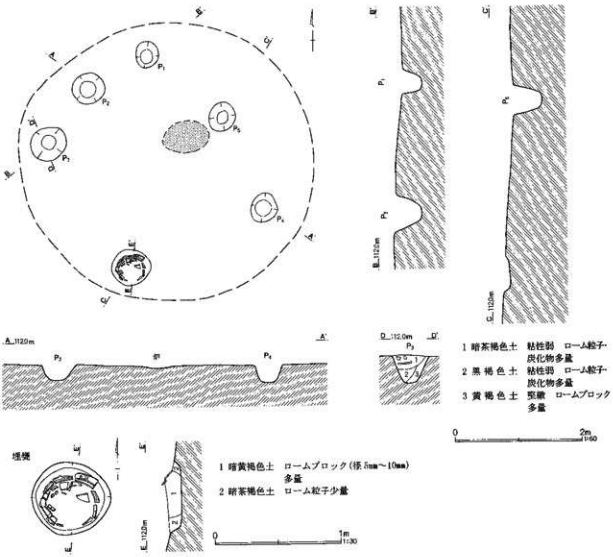
71は深鉢形土器の胴部の破片だが、口縁部を欠損後に擬口縁を作り再利用したものである。

72～74は底部で、74は台付土器の台部分である。72は隆帯、73は沈線の懸垂文が胴部に施文される。72、73とも地文は条線である。74は隆帯が台部分に施文されている。

75～92は出土した石器である。75、76は石鏃で、75は側縁が丸みをもって外湾するもので、基部はやや内湾する。76は左基部の先端を欠損するもので、側縁は鋸歯状である。薄く丁寧な作りである。

77、78は磨製石斧である。77は小形のもので刃部に

第41図　第19号住居跡



刃こぼれ状の痕跡がある。78は刃部を欠損する。器面全体に敲打痕が残るもので、磨製石斧の研磨の工程で欠損した未製品とも考えられる。

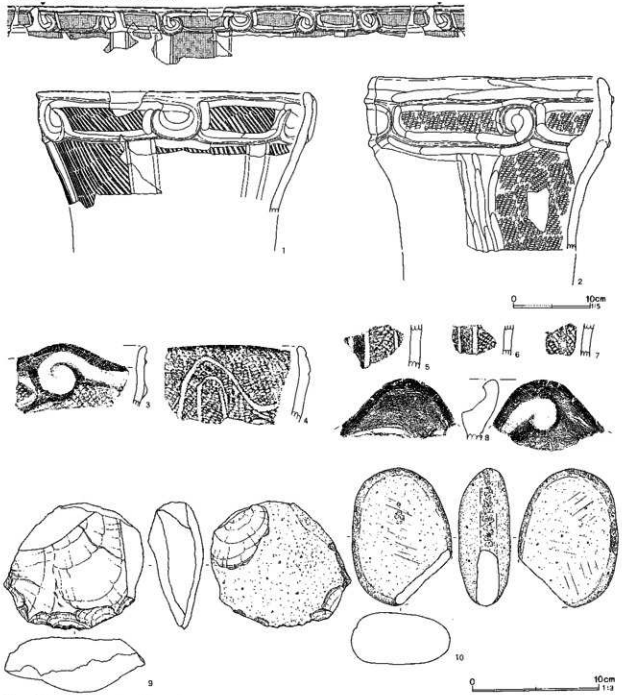
79～87は打製石斧である。ほとんどが基部や刃部を欠損するものである。80以外は表面に白然面を残す。また側縁部の中央付近は刃潰し状に磨滅している。79は基部と刃部幅が変わらない短冊形である。80～86は破損品もあるが平面形は刃部が最大幅となる撥形となる。80、81は他と比べ大形のものである。83は側縁にゆるやかに抉りが入る。87は基部のみ残存しているもので、全体の形状は不明である。88、89、92は凹石である。88は器面に複数の凹みが残る。89は表面と側縁の一部が残存するものである。92は表面に深い凹みと数箇所の浅い凹みがある。裏面の溝状に窪む部分にも敲打された痕が残る。表面と裏面の平坦部には磨面が残る。

90は磨石である。表裏面とも良く磨面が残る。表裏に1個所ずつゆるやかな凹みがある。側縁部には敲打痕が残る。

91は砥石である。薄手の作りで一部を欠損している。四角形に近い形状である。

出土した土器は復元した土器を中心に曽利系が多く、次に連弧文系が多く加曽利E系は破片でしかないのが特徴的である。中心となる時期は中期後葉であると考えられる。

第42図　第19号住居跡出土遺物



第19号住居跡（第41図、第42図）

G-27グリッドに位置する。覆土と床面の一部が削平されていたが、柱穴の一部と埋甕が検出されたため住居跡と判明した。柱穴や埋甕の配置から住居跡の平面形は円形で規模は径4.5m程度と推定される。柱穴は5本検出された。いずれも深さは変わらず配置からはP1～P4が主柱穴と考えられる。P1からは第42図2の土器が出土した。住居跡の埋甕が検出された。第42図1の土器が口縁を下にした逆位置に埋設されていた。削平のため上器もこわされているため埋設当初の形態は不明である。残存していた埋甕の掘り方は、長径が0.55m、短径が0.6m、深さは0.15mでほぼ円形である。第41号住居跡の中央やや北よりに地面に被熱した部分を炉跡の範囲とした。炉跡と確定するならば、主軸は埋甕と結んでN-27°-Wである。

時期は中期後葉と考えられる。

遺物は床面まで削平されているため覆土の遺物はなく、埋甕として埋設された土器と柱穴内から出土した遺物がすべてである。

1は埋甕として埋設された土器で、口縁部と胴上半の一部のみが残存する深鉢形土器である。口縁部と頸部に1本ずつ隆帯を巡らす。口唇部の隆帯から上から下にむかって渦を巻く左巻と右巻の2種類の渦巻文の隆帯を6つ頸部の隆帯と連結して施文する。左巻と右巻の向かい合う渦巻文の2つを合わせて一単位として2単位を施文する。3単位めは右巻と左巻の順になるように順序を入れ替えている。順序が替わることによって、渦巻が向かい合わなくなる。沈線は隆帯の内側にのみ隆帯にそって施文している。沈線は幅広で隆帯をなでつけるように施文されるため、隆帯は下方に傾斜し綾が突出して断面が三角形状になる。頸部の隆帯の下側はなでによって一部地文が磨り消される。胴部には口縁部の文様と合わせることなく不規則に、2本1組みの沈線の懸垂文を施文する。間隔を開けて施文された2本沈線の間は磨り消されている。6単位が胴部に残存しているが、破損のため不明な部分があり、6単位以上の施文が考えられる。地文は無節のRの撚糸文を斜め方向に口縁部から胴部まで施文しており、条線のように見える効果をだしている。胎土には小石が多量に混入される。2は住居跡の柱穴P1内より出土したものである。口縁部の一部と胴上半部の一部が出土している深鉢形土器である。口唇直下には隆帯を巡らせる。口縁部は楕円区画状に隆帯を施文し口唇下の隆帯と連結する。隆帯の端部は1つおきに、下から上に巻き込む渦巻文を施文する。楕円区画の単位は4単位と推定され、渦巻文は2単位施文されると考えられる。隆帯の両側に幅広のなぞりに近い沈線を施文することによって、隆帯が両側から削られ細く綾が突出するようになる。沈線は深くなぞりながら施文するために、何回かにわけて施文され痕跡が器面に残っている。胴部には口縁部と同じ幅広の沈線が懸垂文として施文されている。沈線は直線的ではなくゆるやかに曲っている。沈線の施文の間隔は狭く、間は粗雑に地文を磨り消している。地文は口縁部から胴部まですべて縦方向の単節RLの縄文で施文している。1と同様に胎土には小石が多量に混入していた。

3、4は口縁部の破片で、3は波状口縁部である。口縁部は隆帯によって渦巻文と楕円区画文が施文されると考えられる。幅広のなぞり状の沈線が隆帯に沿って施文されるため隆帯は微降起状になる。波頂部で渦巻文を施文する。地文は複節RLRを横方向に施文する。4は深鉢形土器で1本沈線を波状に施文する。波状沈線の波底部の下には丸みを帯びた沈線の先端が残る。これを蕨手状の懸垂文とすれば、1本目の沈線が波状に巡り、波頂部にそって逆U字状の沈線の懸垂文が施文され、波底部には蕨手文の沈線の懸垂文が施文されるという構成になる。地文が磨り消されている部分はない。地文は1本目の波状に巡る沈線と口唇部の間の上部には横方向の単節RLの縄文が施文される。他は縦方向の単節LRの縄文が施文される。

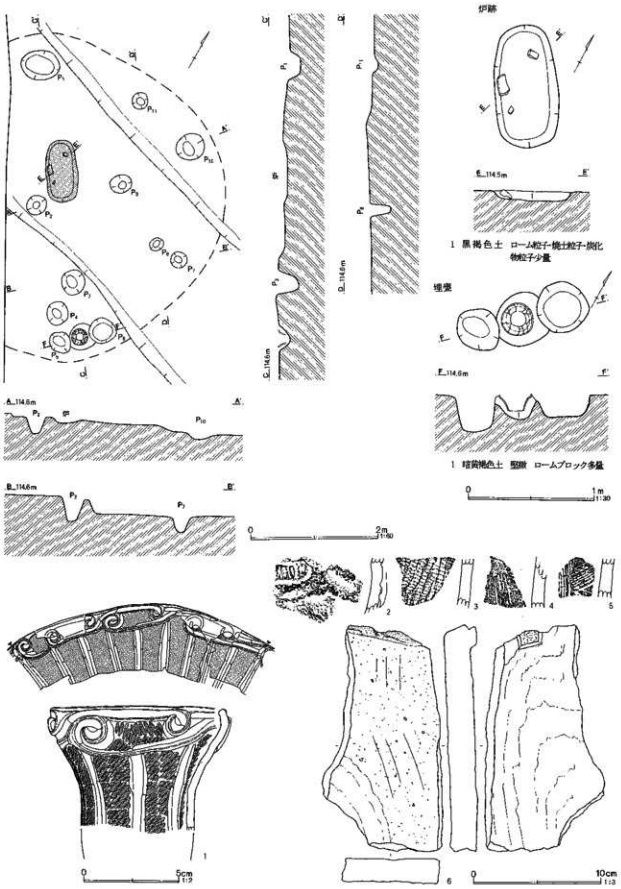
5～7は深鉢形土器の胴部の破片である。5は沈線による直線的な懸垂文が施文される。やや間隔を開けて施文された沈線間は磨り消されている。地文はRLの縄文を縦方向に施文している。6は5と同一個体である可能性が高い。胴部の懸垂文は3本の沈線を施文していたと考えられる。沈線間は磨り消され、地文は単節RLの縄文を縦方向に施文している。7の地文はLRの縄文が縦方向に施文されている。

8は浅鉢形土器の波状口縁部の破片である。内面が見える大きく口縁が広がる器形と考えられる。内面の波状口縁部には端部が渦巻になる幅広のなぞり状の沈線が施文される。外側には本来の口縁部分にそって沈線が施文され、波頂部の部分で下に巻き込んでいる。

9、10は出土した石器である。9は磨製石斧である。側縁の一部を欠損する。裏面に大きく自然面を残す。表面側から剥離調整を行い、刃部を作り出す。10は磨石である。磨面は表裏の2面で、側縁には一周して敲打の痕跡が残る。

出土した遺物は施文方法など似通っておりすべて同時期であると考えられる。時期は中期後葉である。

第43図　第21号住居跡・出土遺物



第21号住居跡（第43図）

J-33グリッドに位置する。住居跡の西側は調査区外のため検出できなかった。南から北方向は段状に深く削られている。南の一番高い部分が埋甕の出土状況から住居跡の床面に近いと考えられ、他は床面も削平されている。平面形は埋甕と柱穴の配置からほぼ円形と推定される。規模は径5m程度と考えられる。主軸方向はN-34°-Wである。柱穴は住居跡と考えられる範囲内で11本が検出された。主柱穴は深さや位置から P1、P4、P7、P10、P11と考えられる。入り口部には埋甕が検出され、底部を欠く深鉢形土器が正位置で埋設されていた。埋甕の掘り方はほぼ円形で長径が0.5m、短径が0.45m、深さは0.2mである。埋甕の両側に位置するP5、P6は入り口部の施設との関係が考えられる。炉跡はほぼ中央で縦長の隅丸方形状に検出された。上部を削平されているため形態は不明であるが、石の破片が炉跡内より検出されており石囲炉であった可能性もある。残存していた掘り方部分は長径が0.95m、短径が0.5m、深さは0.1mであった。住居跡の時期は中期後葉である。

遺物は埋甕として埋設された土器以外は、炉跡や柱穴の覆土内より数点が検出されたのみであった。

1は埋甕として埋設された土器で、加曽利E系の深鉢形土器である。底部を欠損する。口縁部は方端部が渦巻く隆帯を連続して4単位を施文する。口唇部の渦巻文とは入れ子状に3単位を施文し、4単位目は下から巻き上がる渦巻文が口唇部に連結して単独で施文される。隆帯にそって太い沈線が深くなぞるように施文され、隆帯の断面が三角形状に綾をつくる。隆帯の胴部側は一部残いなで状の調整をするのみである。胴部には2本沈線の懸垂文が9単位施文される。地文は隆帯や沈線の施文後に充填される。胴部懸垂文の一部は地文施文後に、沈線上をなぞって重なった地文を磨り消している。地文は口縁部は形に合わせて単節RLの縄文を縦や横方向に施文する。胴部は縦方向に単節RLの縄文を施文する。2本沈線の間は施文されない。2は口縁部の破片で2本隆帯が施文されている。隆帯の内側に沿って沈線を施文し、中は縦方向に沈線を施文する。3は胴部の破片で地文のみが残るものである。地文は斜め方向に単節RLの縄文が施文される。4は胴部の破片で縦方向の条線が地文として施文される。5は条線を細かく刺突しながら施文していくもので、縦方向と斜め方向の施文が残る。6は石皿の破片である。表面と側面の一部以外はすべて破損されている。表面はほぼ平坦で使用面が残る。遺物は埋甕の埋設上器が住居跡にともなうと考えられ時期は中期後葉である。

第22号住居跡（第44図・第45図）

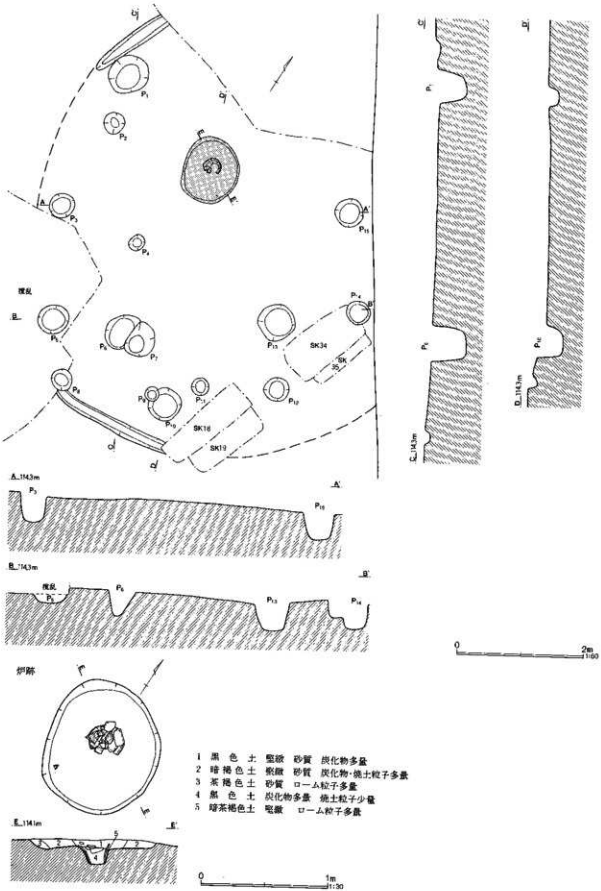
K-33、34グリッドに位置する。住居跡東側の一部は調査区外のため検出できなかった。また北側と西側の一部は攪乱によってこわされている。住居跡内には平安時代以降の第18号、第19号、第34号、第35号土壙が重複している。住居跡は覆土は削平されており、ほぼ床面が確認面として検出された。周溝は部分的に一条検出されており、住居跡の壁にそっていたと考えられる。周溝や柱穴の配置から平面形はほぼ円形と推定される。径は6m程度と考えられる。柱穴は住居跡と考えられる範囲内で15本が検出された。主柱穴は深さや配置より、P1、P3、P6、P10、P12、P14が想定されるが明確ではない。炉跡は住居跡のやや北よりで検出された。平面形は円形でほぼ中央部より炉体土器が検出された。他に炉跡の中央付近からは礫や土器などが少量出土した。炉跡の残存していた掘り方は長径が1.05m、短径が0.9m、深さは0.1mで土器が埋設された部分は土器の径と同じ大きさで掘り込まれ、深さは確認面から0.2mであった。

住居跡の時期は中期後葉である。

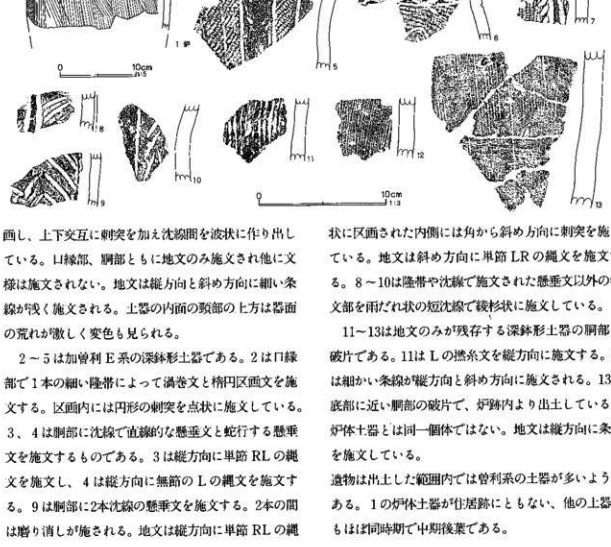
遺物は炉跡を中心に出土し、それ以外はほとんど検出されなかった。形を復元できたのは1の炉体土器のみであった。

1は炉体土器で口唇部分と胴部下半を欠損する。頸部から口縁部に開いていく器形の深鉢形土器であるが、屈曲はゆるやかである。頸部は2本の沈線によって区

第44図　第22号住居跡



第45図　第22号住居跡出土遺物



画し、上下交互に刺突を加え沈線間を波状に作り出している。口縁部、胴部ともに地文のみ施文され他に文様は施文されない。地文は縦方向と斜め方向に細い条線が浅く施文される。土器の内面の頸部の上方は器面の荒れが激しく変色も見られる。

2～5は加曽利E系の深鉢形土器である。2は口縁部で1本の細い隆帯によって渦巻文と楕円区画文を施文する。区画内には円形の刺突を点状に施文している。3、4は胴部に沈線で直線的な懸垂文と蛇行する懸垂文を施文するものである。3は縦方向に単節RLの縄文を施文し、4は縦方向に無節のLの縄文を施文する。9は胴部に2本沈線の懸垂文を施文する。2本の間は磨り消しが施される。地文は縦方向に単節RLの縄文を施文する。

6～11は曽利系の深鉢形土器である。6は口縁部が無文になる土器である。頸部に2本の沈線を巡らし沈線の間は雨だれ状の刺突を逆ハの字状に施文している。胴部には端部を渦巻く沈線の一部が残る。地文は斜め方向と縦方向に単節LRの縄文を施文する。7は頸部を区画する沈線の一部と胴部の懸垂文の一部が残る破片である。胴部には3本沈線の懸垂文が施文される。左側の2本の沈線の間には雨だれ状の刺突を向きを変えず連続して施す。頸部と胴部の沈線によって四角形状に区画された内側には角から斜め方向に刺突を施している。地文は斜め方向に単節LRの縄文を施文する。8～10は隆帯や沈線で施文された懸垂文以外の無文部を雨だれ状の短沈線で綾杉状に施文している。

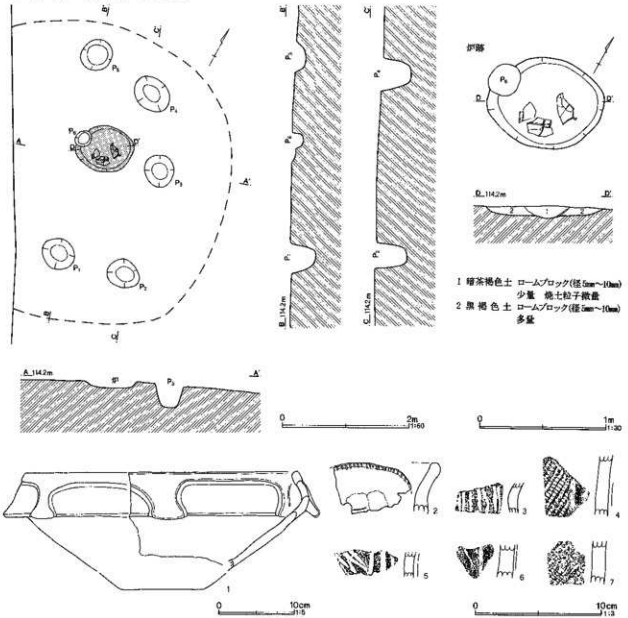
11～13は地文のみが残存する深鉢形土器の胴部の破片である。11はLの撚糸文を縦方向に施文する。12は細かい条線が縦方向と斜め方向に施文される。13は底部に近い胴部の破片で、炉跡内より出土しているが炉体土器とは同一個体ではない。地文は縦方向に条線を施文している。

遺物は出土した範囲内では曽利系の土器が多いようである。1の炉体土器が住居跡にともない、他の土器片もほぼ同時期で中期後葉である。

第23号住居跡（第46図）

J-32、33グリッドに位置する。住居跡の西側は調査区外のため検出されなかった。覆土と床面の一部は削平されており、炉跡を中心として柱穴が検出された。柱穴の配置から住居跡の平面形は円形で径は5m程度と推定される。柱穴は6本が検出されたが、細くて浅いP6以外のP1～P5は、主柱穴になる可能性が高い。炉跡は推定される住居跡のほぼ中央で検出されている。上部は削平されているため浅い掘り込みを確認したの

第46図　第22号住居跡・出土遺物



みである。そのため炉跡の形態は不明であるが、炉跡内からは炉体土器がこわされた形で出土した。検出された炉跡の掘り方は長径が0.92m、短径が0.7m、深さは0.1mであった。

出土した少量の遺物のほとんどは炉跡内から出土した。1は炉体土器で底部を欠損する浅鉢形土器の口縁部と胴部の一部である。口縁は頸部にむかって外側に張り出すように、粘土を貼り付ける。胴部は大きく屈曲して底部に至る。張り出した口縁部には幅広の隆帯を口唇下に巡らし、楕円区画を作り出すように6単位の幅広の隆帯を張り出し部分の先端に向かって垂下させる。区画された楕円区画内は隆帯に沿って幅広のなでが残く沈線状に施される。地文はなく胴部は無文である。口縁部のごく一部に赤彩と思われる赤色の痕跡が観察される。2は阿玉台系の土器で口縁部の把手部分である。把手の接合部には指頭痕が残る。端部には刻みが施される。3～7は胴部の破片で、3の地文は条線である。4～6は胴部に隆帯の懸垂文が施文される。4の地文は縦方向に単節RLの縄文を施文する。5は斜め方向に短沈線を6は斜め方向に沈線状の条線を施文する。7は縦方向に単節RLの縄文を施文する。

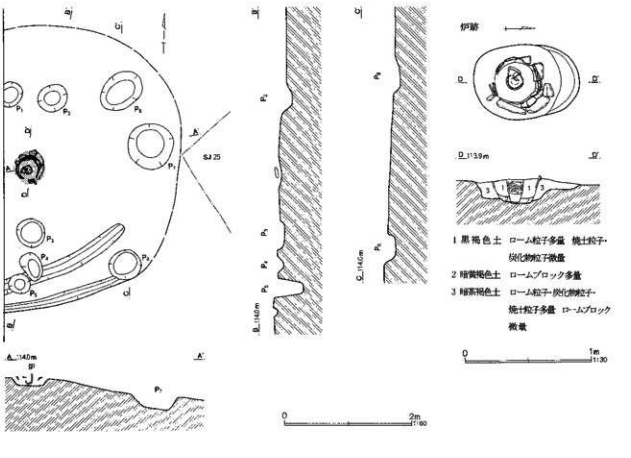
遺物の時期は中期中葉から後葉である。

第24号住居跡（第47図、第48図）

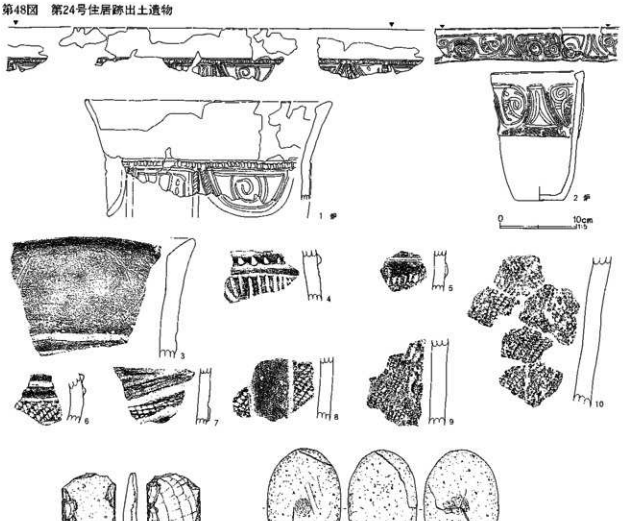
I-32グリッドに位置する。住居跡の西側は調査区外のため検出できなかった。西から東にむかって斜面状になっている。削平されたため覆土はなく炉跡と柱穴が検出されたため住居跡と確認された。平面形は柱穴の配置から隅丸方形の可能性がある。規模はおおよそ径5 m程度と考えられる。周溝は2条検出されたが斜面が落ちる東側では検出できなかった。柱穴は8本が検出された。主柱穴は深さと配置からP1、P5、P6、P7、P8が相当する。炉跡は柱穴でかこまれた中央付近で検出された。炉体上器は2個体が正位置で大形の上器の内側に小形の土器が埋設される形で検出された。外側の炉体上器のまわりは石で囲むもので、炉跡の形態は石囲埋甕炉である。炉跡の掘り方は楕円形で長径0.85m、短径0.58m、深さ0.18mである。時期は中期中葉から後葉である。

遺物は覆土がないため炉体上器以外の遺物は炉跡や柱穴内を主体として検出された。1は外側の炉体土器で胴上部から口縁部を使用している。頸部からやや外反して無文の口縁部が開いていく。頸部は隆帯で区画される。胴部には1本の隆帯によって方形や楕形の区画が施文される。隆帯の両側には沈線が施文される。区画内には沈線によって渦巻文などが施文される。一部には刺突も施される。隆帯上には刻みが施される。胴下半部は欠損するため不明である。2は内側に埋設されていた炉体土器である。口縁の一部を破損するのみで、ほぼ完形の土器である。器形は円筒状で1とくらべかなり小形の上器である。口縁部は幅の狭い無文部で、胴部の中央付近に隆帯を巡らし、間は口縁部から隆帯を垂下させて楕形状に区画する。楕形の区画内には環状の隆帯を施文する。区画内や環の内部は沈線で渦巻文などを施し、一部は刺突状に施文する。楕形の区画の間の三角形状にあいた部分には沈線で三叉状に施文する。隆帯上には単節RLの縄文を縦方向や横方向に施文する。部分的に刻みを施す。胴下半は無文である。

第47図　第24号住居跡



第48図　第24号住居跡出土遺物



3～5は勝坂系の深鉢形土器で3は無文のやや開く口縁部である。沈線による頸部の区画が残る。4は隆帯によって楕形に区画された内側に縦方向の沈線を施文するもので、隆帯上には刺突を加える。5は隆帯の下側に爪形文を施文する。隆帯の上側には半裁竹管による沈線を施文する。

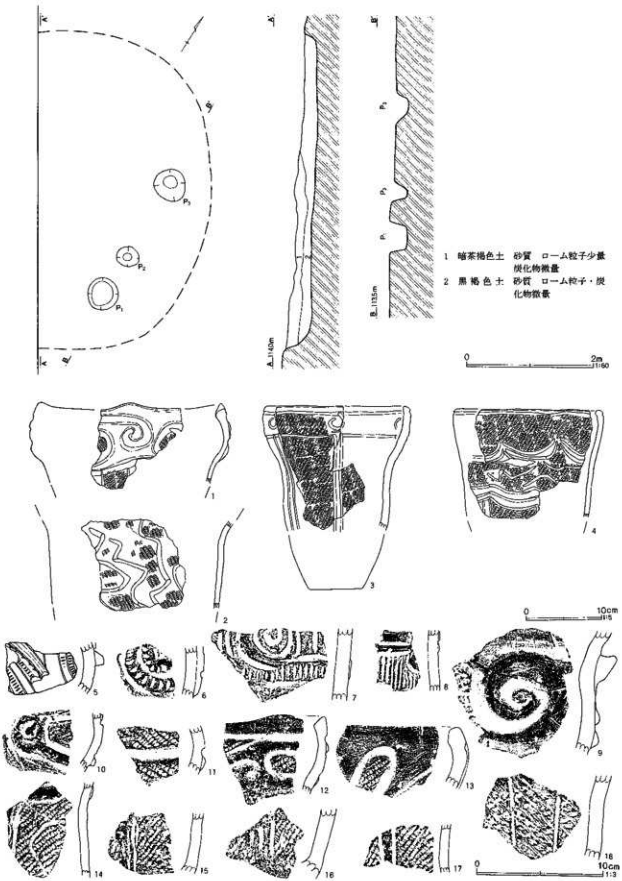
6～8は加曽利E系の深鉢形土器である。6、7は口縁部で6は2本隆帯を口唇下に施文する。地文は横方向の単節LRの縄文を施文する。7は隆帯上に単節LRの縄文を斜め方向に施文する。8は胴部の破片である。胴部に2本沈線の懸垂文を施文し、沈線間は磨り消す。地文は縦方向に単節RLの縄文を施文する。

9、10は地文のみの深鉢形土器の破片である。地文は9、10とも斜め方向に単節RLの縄文を施文する。

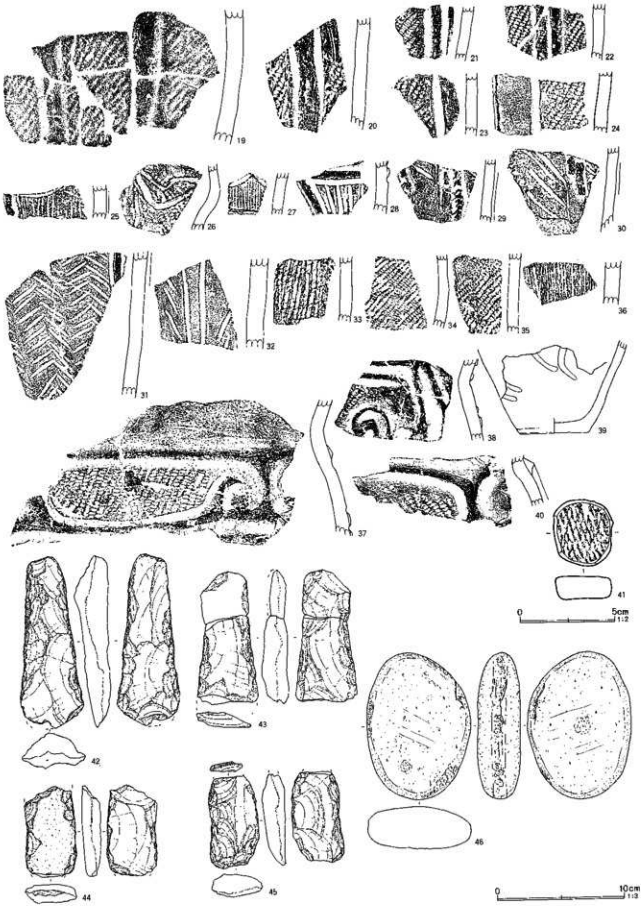
11、12は出土した石器である。11は打製石斧で刃部を破損する。表面には大きく自然面を残し、裏面には1次剥離を大きく残す。2次剥離は側縁から最小限に施す。12は柱穴のP7内より出土した磨石である。被熱したように変色している。磨面は器面全体に及び、表裏の中央部は敲打による凹みが残る。

遺物は勝坂終末の土器が炉体土器を始めとして主体を占める。時期は中期中葉から後葉である。

第49図　第26号住居跡・出土遺物



第50図　第26号住居跡出土遺物



第28号住居跡（第49図、第50図）

I-31グリッドに位置する。住居跡の西半分は調査区外ため検出できなかった。覆土は削平されており確認面では柱穴が確認できたのみであったが、調査区境の土層断面に住居跡状に掘り込みが検出された。また、調査区境の覆土内には土器や石器が混入していたことから住居跡とした。柱穴が3本検出されたのみで、周溝などは検出されなかった。炉跡も調査区外の西半部分にあると考えられる。住居跡の範囲は上層断面より推定して図に示したが形状は不明である。規模は上層断面上では径4.9mで掘り込みの深さは0.35mである。

遺物は土器の破片と石器が出土しており、破片のうち数点は復元実測することができた。

1はキャリパー形の深鉢形土器で、ゆるやかな4単位の波状口縁となる。口唇直下には1本の沈線が巡らされる。口縁部は隆帯によって施文された渦巻文と楕円区画文がややくずれて連結するもので、幅広ななで状の浅い沈線が隆帯に沿って施文される。胴部は沈線で懸垂文が施文され、沈線間は磨り消される。地文は口縁は横方向、胴部は縦方向の単節RLの縄文が施文される。2は胴部の破片で波状に近い蛇行懸垂文が沈線で斜めに胴部に複数施文される。地文は0段多条のRLの縄文が斜め方向に施文される。地文は部分的に磨り消される。3はキャリパー形の深鉢形土器の口縁から胴部にかけての破片である。口唇直下は1本の沈線を巡らす。口唇直下の沈線からぶらさげるように沈線で渦巻文を施文する。単位は6単位と推定される。胴部は頸部の横方向の沈線と胴部の沈線のと懸垂文とをつなげて枠状に区画していく。地文は0段多条のRLの縄文を斜め方向に施文していく。4は口縁から胴部の間のくびれがほとんどない連弧文系の深鉢形土器である。口縁部は基本的には2本沈線で連弧文を粗雑に施文し沈線の間は磨り消す。3本沈線によって施文される波状に近い連弧文が胴部のものとすると、間の波状にとぎれどきれに施文されている沈線は頸部の区画のくずれたものと考えられる。胴部の連弧文の波長部からは2本または3本沈線による懸垂文が直線的に垂下する。胴部に施文された沈線の間は地文を磨り消す。地文は縦方向に単節RLの縄文を丁寧に口縁部から胴部まで施文する。

5～8は勝坂系の土器で口縁部から頸部にかけての破片である。5は大きく湾曲する口縁部は隆帯で区画される。隆帯にそって半裁竹管による2本1組の沈線が引かれ、区画の内側は沈線間に爪形文を施文する。隆帯上には刻みを施文する。隆帯区画の外側にあたる隆帯脇には半裁竹管によるC字状の刺突が入る。6は渦巻状に施文された隆帯上に刻みが施される。7は円筒状の上器で隆帯によって区画された内側を沈線による渦巻文などを施文するもので、隆帯上には刻みが施文される。8は頸部から胴部の破片で2本隆帯によって頸部は区画される。

9～24は加曽利E系の深鉢形土器である。9～13は口縁部の破片である。9は大形の土器で口縁部の隆帯による渦巻文を残す。地文は単節LRの縄文を横方向に施文する。10は口縁部を隆帯で区画して施文するもので、円形に隆帯を施文する部分である。口縁部の区画内は地文は横方向に単節LRの縄文を施文する。11は隆帯をけげるように幅広の沈線を施文するもので、胴部は隆帯に重ねて地文を施文する。地文は単節RLの縄文を横方向に施文する。12は波状口縁部で口唇下には沈線を1本巡らす。口縁部は隆帯によって渦巻文や楕円区画文を施文するもので、隆帯の両側は沈線がそって施文する。地文の縦方向に施文される単節RLの縄文は区画内に施文される。13は口唇下に区画はないが12と同様隆帯によって渦巻文などが施文されるもので、区画内には縦方向に施文した単節RLの縄文の地文が残る。14～24は胴部で沈線によって直線的または蛇行の懸垂文が施文されるものである。18以外は沈線間を磨り消すものである。地文は17、21は0段多条のRLの縄文を縦方向に施文する。18は単節Rと無節Lを L方向に撚り合わした縄文を縦方向に施文する。他は縦方向にRLの縄文が施文される。

25～27は連弧文系の深鉢形土器である。25は連弧文

から隆帯が懸垂する。地文はRの撚糸文を縦方向に施文する。26は連弧文の形がくずれているもので、連弧文からは沈線が懸垂する。地文は斜め方向にRLの縄文を施文する。27の地文は細かい条線である。28～32は曽利系の深鉢形土器の頸部から胴部の破片である。28は胴部に隆帯で渦巻文を施文するものと考えられ、隆帯の施文の形にそって短沈線を施文していく。29～32は隆帯または沈線による懸垂文を胴部に施文しその間に短沈線を斜め方向に施文していくもので、31、32は綾杉状に施文する部分が残る。

33～36は地文のみが残る深鉢形土器の胴部の破片である。33はLの撚糸文を縦方向に施文する。34は縦方向に0段多条のRLの縄文を、35は縦方向に単節RLの縄文を施文する。36は縦方向の条線を施文する。

37、38、40は浅鉢形土器で無文の口縁部から屈曲して肩部を持つもので、隆帯によって施文される渦巻文や楕円区画文は肩部に施される。地文は楕円区画内などに施される。37、38は斜め方向に単節RLの縄文を施文する。40は横方向に単節RLの縄文を施文する。

39は深鉢形土器の底部付近の破片である。胴部には沈線による懸垂文が施文されている。胎土や色調などから2と同一個体である可能性がある。

41は土製円盤で地文がLの撚糸文が施文される胴部の破片を使用している。周縁は形を整えた後に磨られている。長さ3.52cm、幅3.17cm、厚さ1.25cm、重さは16.7gである。

42～46は出土した石器である。42～45は打製石斧で完形品はない。いずれも風化がいちじるしく残りが悪い。42、43は刃部に最大幅のある撥形石器である。自然面を表面に残す打製石斧は、44のみで他の住居跡とは異なる。

46は偏平な磨石で表裏の2面が磨面でよく使用されている。側縁には敲打の痕跡がある。また磨面にも中央部などに敲打痕がある。

遺物は加曽利E系の土器が主体に出土しており、連弧文系の土器は文様がくずれているものが多い。遺物から時期は中期後葉である。

第28号住居跡（第51図）

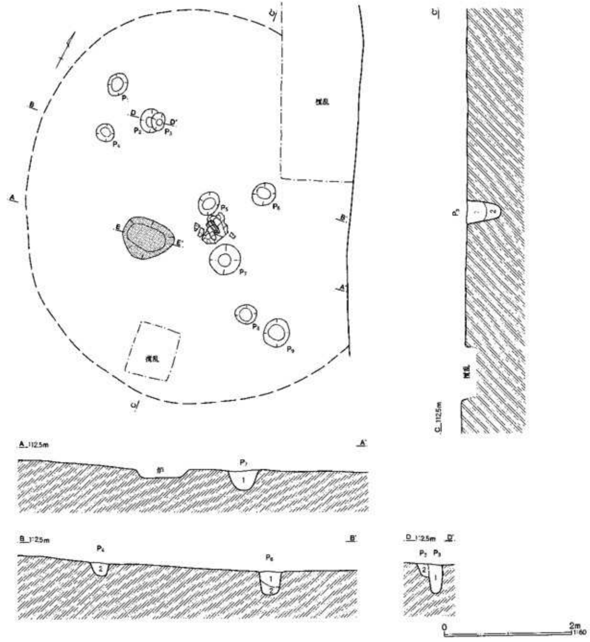
I-29、30グリッドに属する。東側は調査区外にあたる。住居跡内には攪乱が残る。住居跡の検出面は床面直上で住居跡の範囲は確認できたが、明確な掘り込みは検出されなかった。平面形は円形で長径は6mである。周溝は検出されなかった。柱穴は9本検出された。P3、P5、P6、P8は他に比べ深いものだが主柱穴は確定できなかった。炉跡は住居跡のやや南側にかたよって検出された。炉跡の形態は地床炉で、掘り方は楕円形である。規模は長径0.82m、短径0.64m、深さは0.14mである。時期は中期である。

遺物は覆土がほとんどないため、出土量は少なかった。復元できたのは1個体のみであった。

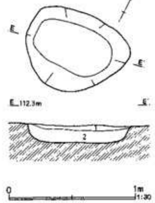
1は炉跡東側のP5、P7の間に上からつぶされたような形で床面よりやや上で検出された。底部を欠損するものだが、状態は悪く遺物の取り上げ時に細かくくずれてしまった。実測は復元できた部分のみをした。器形はやや外に開く口縁部から頸部がくびれ、胴上部が大きく張り出す。口縁部と頸部の区画に隆帯を巡らし、口縁部は隆帯によって楕円区画を作り出す。楕円の下辺の隆帯上には下方から押圧状の刻みを施す。区画内は楕円形に2重の幅広の結節沈線を施文する。頸部には波状沈線を平行に2列巡らす。胴上部には頸部と区画する隆帯の下に幅をあけて隆帯を巡らし、胴部文様帯を作る。文様帯には湾曲する隆帯を貼り付けて横長な楕円区画文を作り出す。楕円の上辺の隆帯上には不規則に押圧状の刻みを施す。区画と区画の間の空いた部分には、隆帯を懸垂させて上下の隆帯間をつなげている。楕円区画内に施文はなく、区画に沿ってなでが加えられるのみである。胴下半は輪積の痕跡を1段残し、輪積の上には連続して指頭圧痕文を施す。

2～7は勝坂系の深鉢形土器である。2～4、6、7は隆帯上に刻みを施す。2、3は細かい刻みを施す。2は口縁部の楕円区画内に沈線を施文しその間を爪形文を細かく連続して施文する。3は胴部に半裁竹管による縦方向の沈線が残る。4は隆帯の下に爪形文を施文する。4は文様を区画する隆帯の両側に半裁竹管に

第51図　第28号住居跡



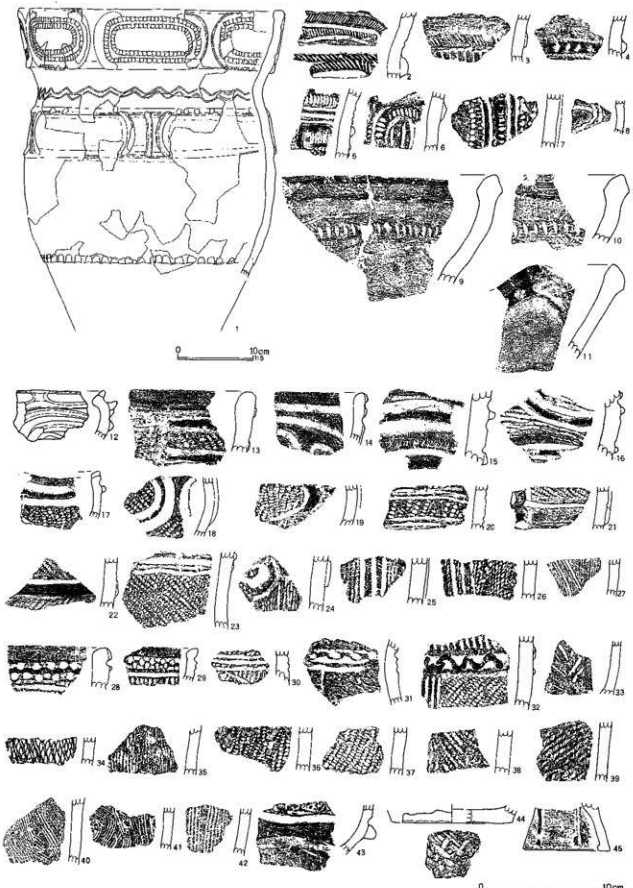
炉跡



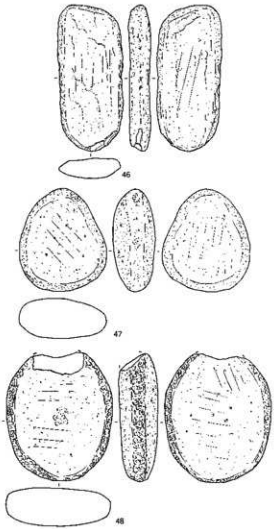
1　黒褐色土　堅緻　ローム粒子・炭化物少量
2　黄褐色土　堅緻　ロームブロック多量　炭化物微量

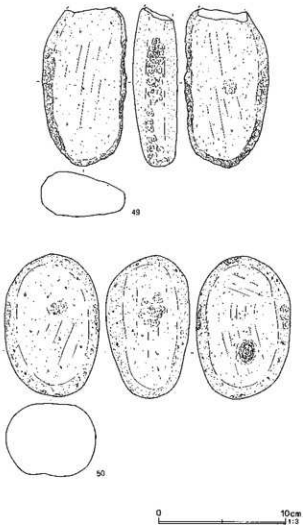
炉跡
1　黒褐色土　堅緻　炭化物(最大5mm)少量　焼土粒子極微量
2　茶褐色土　堅緻　炭化物微量

第52図　第28号住居跡出土遺物(1)



第53図　第28号住居跡出土遺物(2)



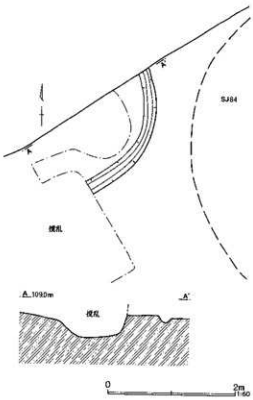


よる2本1組の沈線を施文した内側に爪形文と刺突文を施文する。8は阿玉台系の深鉢形土器で沈線で施文する。胎土には金雲母が混入する。

9～11は1～8の時期にともなう浅鉢形土器である。9、10と同一個体で口唇下には内外面ともなぞりを入れて段を作り出す。胴部には1列の爪形文を施文する阿玉台系のものである。11は波状口縁で口唇下になぞりを入れて段を作り出す。口縁部分に赤彩の痕跡が認められる。

12～27は加曽利E系の深鉢形土器である。17～22は口縁部から頸部の破片で、隆帯によって口縁部に楕円区画や渦巻を施文するものである。12は口縁部の隆帯上に深く沈線を施文する。13は地文は横方向の単節RLの縄文を施文する。15、16は地文に撚糸文を施文するもので、15は縦方向にRの撚糸文、16は横方向にLの撚糸文を施文する。16は2本隆帯によって口縁部を施文する。17、18は隆帯の両側を幅広の沈線をなぞるように施文し、隆帯が細い隆起状になる。17は波状口縁である。17の地文は単節RLの縄文を横方向に施文する。18の地文は口縁部区画内は横方向で他は縦方向に単節RLの縄文を施文する。19は地文として横に近い斜め方向の単節LRの縄文を施文する。20は斜め方向の単節RLの縄文を施文する。21、22の口縁部には単節RLの縄文を横方向に施文する。22の胴部は縦方向に同じ地文を施文する。23～27は頸部から胴部の破片である。23は隆帯による頸部の区画が残る。地文は複節のRLRの縄文を横方向に施文する。24、25はLの撚糸文を縦方向に施文するもので、胴部には隆帯で

第54図　第83号住居跡



渦巻文や懸垂文を施文する。26、27は沈線で渦巻文や懸垂文を施文するもので、26の地文は斜め方向のLの撚糸文を施文する。27の地文は細い条線である。

30は連弧文系の土器である。地文は条線である。

28、29、31～33は曽利系の土器である。28は隆帯の両側に施文される上下の沈線上に、円形の刺突を交互に施文する。29は28と同様に口唇下の沈線に刺突を加えるもので、沈線間は波状に作り出される。28、29は連弧文系となる可能性もある。31は頸部に3本沈線を巡らし、上2本の沈線に交互に刺突を加えて波状に作り出す。胴部には間を磨り消す沈線の懸垂文を施文する。地文は単節LRの縄文を縦方向に施文する。32は頸部の区画は隆帯によるもので2本の隆帯の間に波状に隆帯を施文する。地文は縦方向の単節RLの縄文を施文する。33は胴部に単沈線を綾杉状に施文する。

34～42は地文のみが残る胴部の破片である。地文はLの撚糸文を34は斜め方向に35は縦方向に施文する。36、37は単節RLの縄文を斜め方向に施文する。38はLRの縄文を39は無節のRの縄文を縦方向に施文する。40は撚りの細いRの撚糸文を斜め方向に施文する。41は流水文状に42は縦方向に条線を地文として施文する。

43は浅鉢形土器で胴部の屈曲部に隆帯を貼り付けて張り出した屑の端部を作り出す。

44は底部の一部で網代痕が明瞭に残る。45は台付土器の台部分で、台部分には沈線の施文と剥落した隆帯の痕跡が残る。

46～50は出土した石器ですべて磨石類である。46～49は比較的偏平な自然礫を使用しており、磨面は表裏面の2面である。50は厚みのある石を使用し、磨面は表裏面と平坦面を持つ側面の3面である。47～49の磨面は良く使用されている。すべての磨石の側縁部には必ず敲打の痕跡があり、48、49は特に顕著であった。48～50の磨面の一部には敲打による浅い凹みが残る。50の裏面の凹みはやや深い。

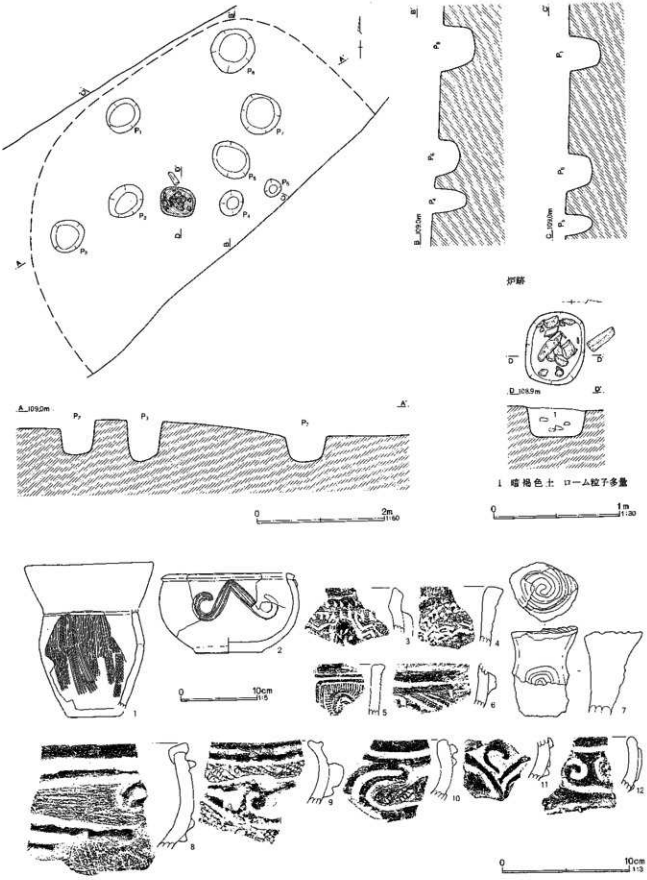
遺物は中期中葉と中期後葉の土器が混じって出土している。中期後葉の土器も時期がまとまっておらず、1の復元した土器が住居跡に伴うものと考えると時期は中期中葉である。

第83号住居跡（第54図）

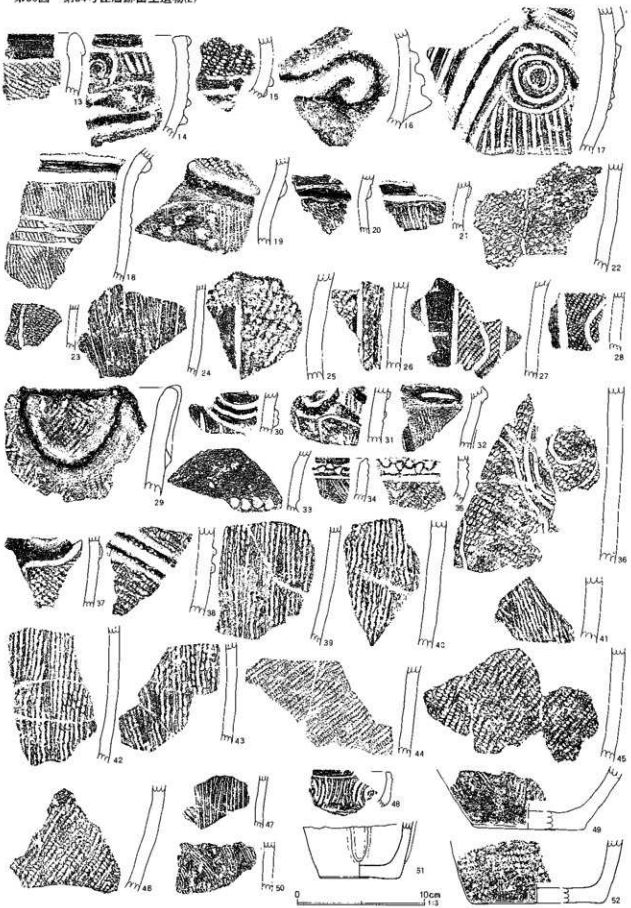
G-24グリッドに位置する。住居跡の北側は調査区外で検出できなかった。床面も削平されているため住居跡の掘り込みは確認できなかった。また攪乱が著しい場所で住居跡のほとんどがこわされ、周溝の一部が検出されたのみである。柱穴や炉跡は検出されなかった。周溝から平面形は円形または、隅丸方形であったと推定される。東側には第84号住居跡が接している。

遺物はひどい攪乱のため住居跡に伴うものは検出できなかった。G-24グリッドからは中期の勝坂式から加曽利E式の土器が主体的に出土しており、また住居跡の周辺は中期後葉の住居跡が集中して出土している。これらのことから時期は中期中葉から後葉の範囲内であると考えられる。

第55図　第84号住居跡・出土遺物(1)



第56図　第84号住居跡出土遺物(2)



第84号住居跡（第55図～第58図）

G-24グリッドに位置する。調査区が東方向に突出している部分である。調査区の幅が狭いため住居跡の半分しか検出できなかった。覆土は削られており住居跡の掘り込みは確認できなかった。確認面からは周溝は検出されなかった。炉跡と柱穴の配置から住居跡の平面形は円形または隅丸方形と推定される。住居跡の規模は長径が5mから6m程度と考えられる。柱穴は住居跡の範囲内と推定できる部分で8本を検出した。主柱穴は深さや位置などから P1、P2、P8がその一部に相当すると考えられる。炉跡は住居跡の中央付近から検出された。掘り方の形状は隅丸方形である。炉跡の覆土内からは炉石として使用された可能性のある礫が出土していることから、炉跡の形態は石囲炉の可能性もある。時期は中期後葉である。

遺物は覆土がなかったため、炉跡や柱穴を中心として住居跡と推定される範囲内の遺物を取り上げた。住居跡以外の遺物が混入している可能性は高い。

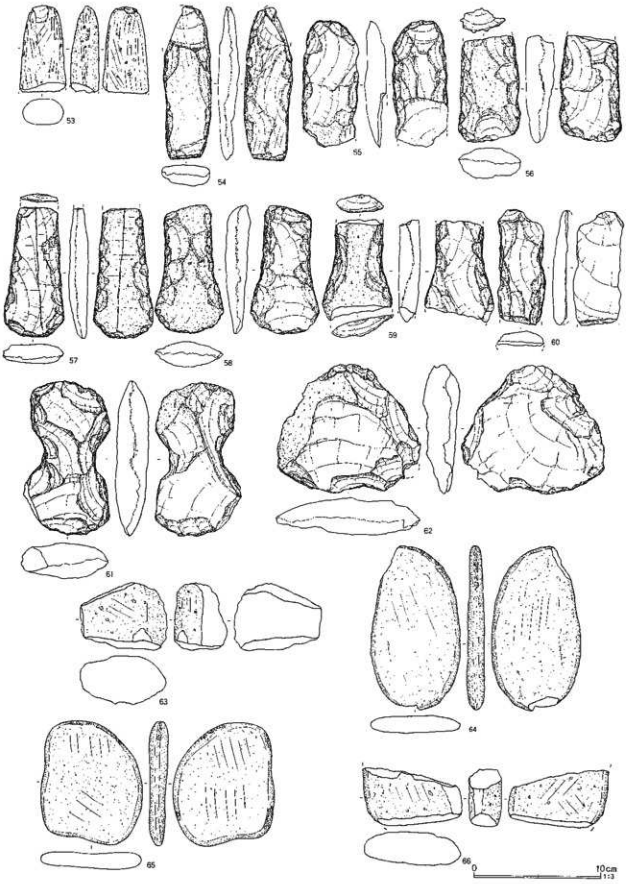
1は口縁は欠損するが、頸部から開く無文の口縁部が付くと考えられる小形の深鉢形土器である。頸部から胴下半の破片である。頸部には沈線が残るが上部に隆帯がつく可能性もある。胴部は地文が施文される。地文はLの撚糸文を縦方向に施文し、胴部上半は撚糸文にかさねて縦方向の条線を施文する。2は浅鉢形土器である。口縁部はやや外方向に傾いて平坦面をなす。胴部は丸みを帯びてそのまま底部にいたる。胴上半には端部が渦を巻く隆帯を対称的に貼り付けて1単位として、4単位を貼付すると思われる。隆帯の上には沈線が施され2本隆帯の効果を出す。隆帯の両側には隆帯に重ねて沈線を施文する。隆帯が剥落した部分には沈線の一部が残っている。地文は施文されない。赤彩は口唇の平坦部や内面に痕跡がある。外面は隆帯上の沈線の隙間に赤彩が良く残っている。

3、4は阿玉台系の土器の口縁部分である。3は突起状の隆帯の上に刺突を加える。同じ施文具で口唇下には2列の連続刺突と一部に結節沈線が施文される。隆帯の両脇には2本の平行する波状沈線が施される。4は口縁部を隆帯によって楕円に区画される。区画内は隆帯に沿って楕円状に2重の結節沈線が施文される。区画の中央には2本の平行する波状沈線を施文する。胎土には金雲母が多量に混入される。

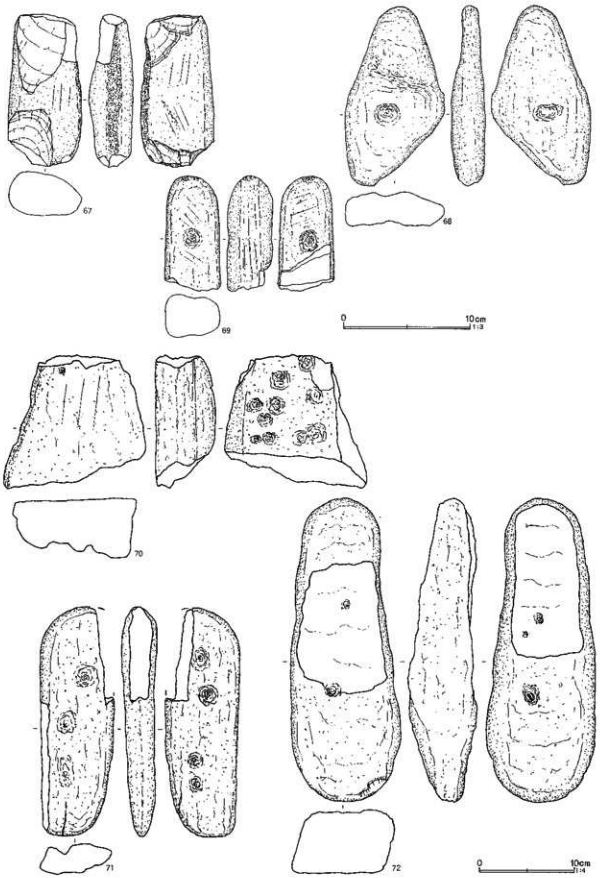
5～7は勝坂系の土器である。5は小形の円筒状の土器で半裁竹管による沈線で区画された中は沈線で渦巻文などを施文し、空いている部分に細かく爪形文を施文する。6は口縁の隆帯上に細かい刻みを施す。口縁部は半裁竹管による沈線が施文され、空いている部分には櫛歯上の施文具で刺突を行なう。7は口縁部の把手の部分で、把手の頂部の平坦面には沈線で渦巻文が施文され、把手の外面にも沈線で渦巻文を施文する。

8～28は加曽利E系のキャリパー形の深鉢形土器である。8～17は口縁部の破片である。8、10は口縁部に2本隆帯を横S字上に貼付するものである。地文は8は口縁部は横方向胴部は縦方向のLの撚糸文を施文する。10は横方向の単節LRの縄文を施文する。9、11は口縁部の中央に2本隆帯を横方向に巡らせ、部分的に菱形上に隆帯間を広げその中に隆帯で渦巻文を貼り付ける。地文は横方向に単節RLの縄文を施文する。12は隆帯によって渦巻文と楕円区画文が施文される。13は口縁部に単節RLの横方向の縄文を施文するものである。14は平坦面を持つ口唇部で、頸部と2本隆帯で区画した口縁部には沈線で渦巻文や楕円区画文を施文する。楕円区画内は縦方向の沈線を施文する。頸部は無文帯を持つ。15の地文は単節RLの縄文を縦方向に施文する。16は頸部と区画する隆帯が突出して渦巻文を施文する。17は大形の土器で、口縁部で隆帯を波状に施文し波頂部には円形の粘土を貼付し、沈線で二重の輪を施文する。隆帯に沿って沈線が施文される。隆帯によって区画された内側は沈線を施文する。18～21は頸部から胴部の破片で頸部は隆帯で区画される。18の胴上部には3本の沈線が横方向に巡り、頸部の隆帯と3本沈線の間が本来は頸部無文帯であったと考えられる。地文は縦方向と斜め方向に条線が施文される。19は口縁部は単節RLの縄文が横方向に施文され、頸部からは条線が施文される。頸部は横方向に地

第57図　第84号住居跡出土遺物(3)



第58図　第84号住居跡出土遺物(4)



文の条線を粗雑に磨り消すが、一部磨り残す。20は斜め方向にRの撚糸文を施文する。21は縦方向にLの撚糸文を施文する。22～28は胴部の破片で沈線による懸垂文を施文する。22はナデ状に沈線が残く施文される。地文は単節LRの縄文を縦方向に施文する。23は縦方向に単節RLの縄文を施文する。24は底部に近いもので3本の直線的な懸垂文と1本の蛇行する懸垂文が残る。地文は斜め方向に条線が施文される。25～28は懸垂文の沈線間を磨り消す。地文はすべて同じで単節RLの縄文で縦方向に施文される。26は磨り消しが粗雑で地文の磨り残しがある。27、28は直線的な懸垂文の施文間に蛇行懸垂文を施文する。

29～38は曽利系の深鉢形上器である。29は口縁部に口唇とつなげて隆帯を連弧状に貼付するもので、地文は単節RLの縄文を器面全体に不規則に縦方向と横方向に施文する。30は弧状の幅広の隆帯上に沈線を施文する。胴部には短沈線が施文される。31はやや開く口縁部に隆帯で渦巻文などを施文するもので隆帯の区画内は沈線を施文する。胴部は垂下する沈線と横に巡る沈線をつないで枠状に施文する。地文はRの撚糸文が縦方向に施文される。32は口唇部に沿って楕円状の隆帯を連続して貼付して口縁部とするので、胴部には隆帯が懸垂する。地文は斜め方向にLの撚糸文を施文する。33は無文の開く口縁部と頸部の区画に円形状の刺突を施文する。34、35は口唇下に3本の沈線を巡らし、上の2本の沈線に上下交互の刺突を加えて沈線間を波状に作り出す。地文は34は流水文状の条線、35は単節RLの縄文を縦方向に施文する。34、35は連弧文系の土器の口縁部の可能性がある。36～38は胴部に沈線や隆帯で大形の渦巻文や懸垂文を施文するものである。36の地文は単節LRの縄文を縦方向に施文する。37は複節LRLの縄文を縦方向に施文する。38は単節LRの縄文を縦方向に施文する。

39～50は深鉢形土器の胴部の破片で地文のみが残るものである。39、42、43は同一個体でRの撚糸文を縦方向に施文する。40、41はLの撚糸文を縦方向に施文する。44は0段多条の単節RLの縄文が縦方向に施文される。45、46は同一個体で撚りのゆるい単節RLの縄文が縦方向に施文される。47、50の地文は細かい条線で47は縦方向や斜め方向に施文し、50は流水状に施文される。

48は浅鉢形上器の口縁部で沈線が重弧文状に施文される。

49、51、52は底部の破片である。49の地文は条線である。51は1本隆帯の懸垂文が4単位施文されている。地文は磨り消されているらしく不明である。52は地文は斜め方向に単節LRの縄文が施文される。

53～72は出土した石器である。53は磨製石斧の基部である。器面には調整のための敲打痕が残る。

54～61は打製石斧である。54～56は基部と刃部幅が変わらない短冊形で57～59は撥形である。54は斜め方向に擦痕が入るが磨きの痕跡かは不明である。55は刃部、56は基部を欠損する。58、59は側縁部にゆるやかな抉りが入る。60は欠損が激しいため形状は不明である。61はいわゆる分銅形の打製石斧で、側縁の抉り部分は丁寧に敲潰しを施す。61は形状や石材から中期よりも古い可能性がある。

62は掻器である。裏面には大きく一次剥離面を残し刃部には簡単な調整を加える。

63、64は磨石である。64は偏平なもので側縁の一部に敲打痕が残る。

65、66は砥石である。65は両面を砥石面として使用する。側縁の一部には敲打痕が残る。

67は磨面もあるが側縁の敲打痕が顕著であり敲き具として利用していることから敲石として分類した。

68、69、71、72は凹石である。68、69は磨面も持ち凹みは一面に一個所ずつである。71は複数凹みが存在するもので72も剥落しているが、複数の凹みが存在していたと考えられる。

70は石皿の破片で、裏面には複数の凹みが残る。

遺物は加曽利E系と曽利系が多く、その中で時期幅がある。時期は中期後葉である。

第1表　住居跡出土石器一覧表

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第10図 47	第5号住居跡	打製石斧	11.60	4.92	1.90	148.39	砂岩	
第10図 48	第5号住居跡	打製石斧	5.90	4.55	1.70	47.89	砂岩	
第10図 49	第5号住居跡	磨製石斧	4.45	2.60	2.30	16.85	軽石	
第10図 50	第5号住居跡	磨製石斧	5.40	4.10	3.60	56.92	軽石	
第10図 51	第5号住居跡	磨製石斧	9.90	7.40	3.68	349.05	安山岩	
第10図 52	第5号住居跡	凹石	11.90	12.41	3.30	652.74	絹雲母片岩	
第10図 53	第5号住居跡	凹石	10.20	10.80	5.00	491.46	多孔質安山岩	
第10図 54	第5号住居跡	凹石	11.65	6.60	5.75	674.27	絹雲母片岩	炉跡
第10図 55	第5号住居跡	凹石	8.50	12.65	4.95	700.00	絹雲母片岩	
第16図113	第6号住居跡	石錘	2.38	1.87	0.48	2.04	砂岩	
第16図114	第6号住居跡	石錘	5.12	5.02	0.95	34.95	緑泥片岩	
第16図115	第6号住居跡	磨製石斧	14.20	5.26	3.90	476.00	凝灰岩	
第16図116	第6号住居跡	打製石斧	12.60	4.70	2.30	149.03	ホルンフェルス	
第16図117	第6号住居跡	打製石斧	11.18	4.98	2.15	134.78	ホルンフェルス	
第16図118	第6号住居跡	打製石斧	11.30	5.15	2.00	122.05	砂岩	
第16図119	第6号住居跡	打製石斧	11.70	5.10	1.80	109.82	砂岩	
第16図120	第6号住居跡	打製石斧	12.95	6.00	2.10	177.42	砂岩	
第16図121	第6号住居跡	打製石斧	12.50	5.10	2.25	90.82	ホルンフェルス	
第16図122	第6号住居跡	打製石斧	11.40	5.00	2.50	166.18	砂岩	
第16図123	第6号住居跡	打製石斧	12.90	5.20	1.70	149.32	砂岩	
第17図124	第6号住居跡	打製石斧	10.30	5.20	1.75	92.86	ホルンフェルス	
第17図125	第6号住居跡	打製石斧	8.48	4.30	2.30	82.88	ホルンフェルス	
第17図126	第6号住居跡	打製石斧	8.40	4.60	2.00	74.14	ホルンフェルス	
第17図127	第6号住居跡	打製石斧	11.50	6.35	2.80	221.75	砂岩	
第17図128	第6号住居跡	打製石斧	8.20	4.88	2.90	151.07	ホルンフェルス	
第17図129	第6号住居跡	打製石斧	7.50	5.20	2.55	110.44	砂岩	
第17図130	第6号住居跡	打製石斧	6.72	6.20	2.10	82.52	砂岩	
第17図131	第6号住居跡	打製石斧	9.69	4.65	1.50	69.65	砂岩	
第17図132	第6号住居跡	打製石斧	6.12	3.85	2.40	58.94	砂岩	
第17図133	第6号住居跡	掻器	6.41	7.30	2.05	115.53	ホルンフェルス	
第17図134	第6号住居跡	掻器	6.13	7.98	1.90	90.54	ホルンフェルス	炉跡
第17図135	第6号住居跡	磨石	14.10	9.30	2.80	509.45	緑泥片岩	
第17図136	第6号住居跡	磨石	9.00	7.05	4.35	417.59	安山岩	
第18図137	第6号住居跡	石皿	16.80	24.25	8.10	4150.00	閃緑岩	炉跡
第18図138	第6号住居跡	石皿	19.05	18.70	8.13	2693.52	安山岩	炉跡
第18図139	第6号住居跡	石皿	12.75	11.91	5.65	862.70	多孔質安山岩	
第18図140	第6号住居跡	凹石	21.60	13.80	6.60	2119.70	絹雲母片岩	
第18図141	第6号住居跡	凹石	21.20	8.50	3.19	790.08	絹雲母片岩	
第24図 84	第8号住居跡	磨製石斧	11.68	4.17	3.45	221.79	凝灰岩	
第24図 85	第8号住居跡	打製石斧	11.30	5.10	2.40	172.10	砂岩	
第24図 86	第8号住居跡	打製石斧	8.80	4.25	1.70	93.61	砂岩	
第24図 87	第8号住居跡	打製石斧	6.32	4.50	1.35	42.39	ホルンフェルス	
第24図 88	第8号住居跡	打製石斧	7.18	4.58	2.10	82.08	砂岩	
第24図 89	第8号住居跡	打製石斧	7.10	5.22	1.87	58.02	ホルンフェルス	
第24図 90	第8号住居跡	磨石	5.95	5.25	3.30	100.28	多孔質安山岩	
第27図 68	第9号住居跡	打製石斧	13.35	4.50	2.20	156.21	砂岩	
第27図 69	第9号住居跡	打製石斧	11.58	5.35	2.30	144.76	砂岩	
第27図 70	第9号住居跡	打製石斧	8.45	5.55	1.57	78.80	砂岩	
第27図 71	第9号住居跡	打製石斧	8.90	4.42	1.70	82.99	ホルンフェルス	床直
第27図 72	第9号住居跡	打製石斧	7.62	4.58	1.50	66.85	砂岩	
第27図 73	第9号住居跡	掻器	6.93	3.92	1.51	36.41	ホルンフェルス	床直
第27図 74	第9号住居跡	敲石	11.15	3.05	2.32	120.28	ホルンフェルス	床直
第27図 75	第9号住居跡	磨石	12.70	2.95	1.30	68.87	絹雲母片岩	
第28図 76	第9号住居跡	磨石	21.60	11.45	4.60	1092.13	多孔質安山岩	床直
第28図 77	第9号住居跡	石皿	39.00	14.20	—	3420.00	点紋緑泥片岩	炉跡
第28図 78	第9号住居跡	凹石	38.15	23.50	11.10	9880.00	絹雲母片岩	炉跡

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第28図 79	第9号住居跡	凹石	33.90	16.55	4.70	3076.58	絹雲母片岩	床直
第32図 64	第14号住居跡	打製石斧	9.80	3.70	2.10	89.32	砂岩	
第32図 65	第14号住居跡	打製石斧	13.08	5.47	2.20	156.00	砂岩	
第32図 66	第14号住居跡	打製石斧	9.20	5.28	2.25	131.26	砂岩	
第32図 67	第14号住居跡	打製石斧	6.78	4.90	2.02	73.44	砂岩	
第32図 68	第14号住居跡	打製石斧	8.10	4.38	2.10	87.87	砂岩	
第32図 69	第14号住居跡	打製石斧	7.72	3.95	2.45	80.59	砂岩	
第33図 70	第14号住居跡	打製石斧	12.30	5.35	1.65	141.85	点紋緑泥片岩	
第33図 71	第14号住居跡	打製石斧	10.13	4.60	1.75	91.37	砂岩	
第33図 72	第14号住居跡	打製石斧	7.50	5.82	2.55	129.31	砂岩	
第33図 73	第14号住居跡	掻器	4.90	7.00	1.20	43.30	ホルンフェルス	
第33図 74	第14号住居跡	掻器	4.82	9.00	1.58	68.99	真岩	
第33図 75	第14号住居跡	磨石	10.25	5.99	1.80	146.95	絹雲母片岩	
第33図 76	第14号住居跡	磨石	8.80	6.70	4.80	421.90	安山岩	
第33図 77	第14号住居跡	磨石	13.50	6.95	3.30	406.10	多孔質安山岩	
第33図 78	第14号住居跡	凹石	13.85	6.85	3.90	297.61	絹雲母片岩	
第33図 79	第14号住居跡	石皿	21.00	9.60	2.15	441.77	絹雲母片岩	
第34図 26	第20号住居跡	掻器	8.51	6.00	1.25	52.02	粘板岩	
第34図 27	第20号住居跡	磨石	16.40	15.35	4.40	1504.36	絹雲母片岩	
第34図 28	第20号住居跡	凹石	10.90	9.20	2.60	356.12	点紋緑泥片岩	
第34図 29	第20号住居跡	凹石	9.60	7.30	3.21	276.24	絹雲母片岩	
第39図 75	第17号住居跡	石鏃	1.38	1.03	0.41	0.38	黒曜石	
第39図 76	第17号住居跡	石鏃	2.77	2.72	0.38	1.12	黒曜石	
第39図 77	第17号住居跡	磨製石斧	8.20	3.60	1.38	73.91	凝灰岩	
第39図 78	第17号住居跡	磨製石斧	13.20	4.38	3.20	236.01	ホルンフェルス	
第39図 79	第17号住居跡	打製石斧	11.03	4.30	2.70	140.89	砂岩	
第39図 80	第17号住居跡	打製石斧	14.10	6.91	2.95	277.67	ホルンフェルス	
第39図 81	第17号住居跡	打製石斧	15.28	5.10	2.75	251.63	ホルンフェルス	
第39図 82	第17号住居跡	打製石斧	9.78	5.25	1.70	76.91	砂岩	
第40図 83	第17号住居跡	打製石斧	7.55	4.58	1.60	58.27	砂岩	
第40図 84	第17号住居跡	打製石斧	6.13	4.43	1.85	57.55	ホルンフェルス	
第40図 85	第17号住居跡	打製石斧	5.42	4.20	2.05	49.77	砂岩	
第40図 86	第17号住居跡	打製石斧	5.70	4.30	1.42	46.19	砂岩	
第40図 87	第17号住居跡	礫器	5.61	7.43	2.65	92.59	硬質砂岩	
第40図 88	第17号住居跡	石皿	12.85	12.00	5.50	792.35	絹雲母片岩	
第40図 89	第17号住居跡	凹石	8.90	9.15	3.00	292.55	絹雲母片岩	
第40図 90	第17号住居跡	磨石	8.80	7.30	4.45	384.14	安山岩	
第40図 91	第17号住居跡	砥石	8.00	9.42	1.60	112.92	砂岩	
第40図 92	第17号住居跡	磨石	22.30	8.25	4.50	1333.59	点紋結晶片岩	
第42図 9	第19号住居跡	礫器	10.10	11.10	4.40	518.63	砂岩	
第42図 10	第19号住居跡	磨石	10.90	7.90	4.10	523.07	安山岩	床直上
第43図 6	第21号住居跡	石皿	17.90	9.50	2.60	580.92	緑泥片岩	
第48図 11	第24号住居跡	打製石斧	8.25	4.50	1.20	61.67	砂岩	
第48図 12	第24号住居跡	打製石斧	8.70	5.90	5.50	350.93	安山岩	P7
第50図 42	第26号住居跡	打製石斧	13.51	5.07	2.75	138.25	砂岩	
第50図 43	第26号住居跡	打製石斧	10.45	4.86	2.15	108.63	ホルンフェルス	
第50図 44	第26号住居跡	打製石斧	7.16	4.10	1.50	65.81	点紋緑泥片岩	
第50図 45	第26号住居跡	打製石斧	7.28	4.10	1.85	65.73	ホルンフェルス	
第50図 46	第26号住居跡	磨石	11.60	8.30	3.50	486.63	閃緑岩	
第53図 46	第28号住居跡	磨石	11.40	5.22	1.80	163.92	安山岩	
第53図 47	第28号住居跡	磨石	8.10	6.95	3.40	270.01	安山岩	
第53図 48	第28号住居跡	磨石	10.12	8.50	3.11	412.80	安山岩	
第53図 49	第28号住居跡	磨石	12.50	6.75	3.55	448.98	安山岩	
第53図 50	第28号住居跡	磨石	11.30	7.50	6.70	829.87	安山岩	
第57図 53	第84号住居跡	磨製石斧	6.86	3.69	2.22	95.08	凝灰岩	
第57図 54	第84号住居跡	打製石斧	12.02	3.90	1.65	104.28	凝灰岩	
第57図 55	第84号住居跡	打製石斧	9.91	4.43	1.80	79.92	ホルンフェルス	
第57図 56	第84号住居跡	打製石斧	8.40	4.93	2.27	113.14	砂岩	

図版番号	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備　考
第57図 57	第84号住居跡	打製石斧	10.20	4.78	1.50	100.93	結晶片岩	
第57図 58	第84号住居跡	打製石斧	10.11	5.50	1.95	112.94	砂岩	
第57図 59	第84号住居跡	打製石斧	8.00	5.51	1.70	94.29	砂岩	
第57図 60	第84号住居跡	打製石斧	3.90	9.00	1.15	41.22	ホルンフェルス	
第57図 61	第84号住居跡	打製石斧	6.88	12.20	2.70	239.37	ホルンフェルス	
第57図 62	第84号住居跡	掻器	10.08	11.40	3.00	319.52	頁岩	
第57図 63	第84号住居跡	磨石	5.30	6.80	4.25	178.11	安山岩	
第57図 64	第84号住居跡	磨石	12.90	7.18	1.42	198.59	点紋緑泥片岩	
第57図 65	第84号住居跡	砥石	9.80	8.06	1.45	142.93	砂岩	
第57図 66	第84号住居跡	砥石	4.53	7.95	2.60	99.88	砂岩	
第58図 67	第84号住居跡	敲石	12.02	5.80	3.52	363.28	ホルンフェルス	
第58図 68	第84号住居跡	凹石	14.10	7.85	2.80	348.84	絹雲母片岩	
第58図 69	第84号住居跡	凹石	9.07	4.50	3.62	244.07	点紋緑泥片岩	
第58図 70	第84号住居跡	石皿	14.15	15.23	6.40	1770.79	点紋緑泥片岩	
第58図 71	第84号住居跡	凹石	24.40	8.05	3.80	951.12	絹雲母片岩	炉跡
第58図 72	第84号住居跡	凹石	32.40	11.75	7.45	3670.00	絹雲母片岩	

第２表　住居跡柱穴深度表

第5号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)	P6 (m)	P7 (m)	P8 (m)	P9 (m)
床　　面	109.79	109.77	109.80	109.74	109.76	109.94	109.71	109.35	109.32
ピット底面	109.03	109.61	109.27	109.53	109.22	109.22	109.46	108.92	108.91

第6号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)	P6 (m)	P7 (m)	P8 (m)	P9 (m)	P10 (m)
床　　面	110.69	110.76	110.75	110.62	110.64	110.69	110.72	110.71	110.79	110.79
ピット底面	110.15	110.12	110.22	110.47	110.41	110.46	110.07	110.58	110.62	110.43

ピット番号	P11 (m)	P12 (m)
床　　面	110.75	110.75
ピット底面	110.36	110.38

第8号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)	P6 (m)	P7 (m)	P8 (m)	P9 (m)	P10 (m)
床　　面	110.45	110.46	110.46	110.53	110.58	110.44	110.43	111.12	110.43	110.42
ピット底面	110.29	110.33	110.00	110.26	110.23	110.25	109.87	110.35	110.22	110.29

ピット番号	P11 (m)	P12 (m)
床　　面	110.40	110.43
ピット底面	110.25	110.17

第9号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)	P6 (m)	P7 (m)	P8 (m)	P9 (m)	P10 (m)
床　　面	110.00	111.03	111.03	111.07	111.15	111.08	110.07	111.06	111.02	111.03
ピット底面	110.72	110.91	110.83	110.61	110.85	110.97	109.82	110.81	110.84	110.84

ピット番号	P11 (m)	P12 (m)	P13 (m)	P14 (m)	P15 (m)	P16 (m)	P17 (m)
床　　面	110.99	111.00	110.83	110.99	110.99	111.00	111.00
ピット底面	110.61	110.75	110.57	110.72	110.69	110.36	110.79

第13号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)	P6 (m)
床　　面	110.2	110.23	110.22	110.35	110.45	110.55
ピット底面	110.01	110.12	110.07	110.13	110.09	110.46

第14号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)
床　　面	111.34	111.27	111.29	111.53	111.70
ピット底面	111.10	111.00	111.09	111.27	111.28

第17号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)	P6 (m)	P7 (m)	P8 (m)	P9 (m)	P10 (m)
床　　面	110.90	110.87	111.07	111.03	110.94	110.95	110.93	110.01	111.11	111.08
ピット底面	110.28	110.47	110.57	110.40	110.30	110.62	110.48	110.55	110.59	110.89

ピット番号	P11 (m)	P12 (m)	P13 (m)	P14 (m)
床　　面	111.05	111.00	110.99	111.01
ピット底面	110.57	110.55	110.61	110.55

第19号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)
床　　面	111.60	111.68	111.75	111.64	111.63
ピット底面	111.29	111.43	111.33	111.38	111.18

第20号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)
床　　面	110.93	111.32	106.25	95.40
ピット底面	110.92	111.10	103.65	94.75

第21号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)	P6 (m)	P7 (m)	P8 (m)	P9 (m)	P10 (m)
床　　面	114.29	114.40	114.51	114.55	114.54	114.50	114.18	114.19	114.30	114.16
ピット底面	114.09	114.14	114.11	114.03	114.17	114.29	113.92	113.85	114.16	114.05

ピット番号	P11 (m)
床　　面	114.14
ピット底面	113.81

第22号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)	P6 (m)	P7 (m)	P8 (m)	P9 (m)	P10 (m)
床　　面	114.08	114.08	114.11	114.04	113.93	114.08	114.05	114.16	114.04	113.96
ピット底面	113.62	113.64	113.66	113.8	113.79	113.56	113.54	114.00	113.63	113.65

ピット番号	P11 (m)	P12 (m)	P13 (m)	P14 (m)	P15 (m)
床　　面	114.00	114.01	114.00	113.87	113.38
ピット底面	113.64	113.5	113.41	113.51	113.37

第23号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)	P6 (m)
床　　面	114.14	114.14	114.08	114.04	114.06	114.12
ピット底面	113.73	113.62	113.71	113.55	113.82	113.88

第24号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)	P6 (m)	P7 (m)	P8 (m)
床　　面	113.70	113.61	114.51	113.75	113.70	113.62	113.49	113.52
ピット底面	113.31	113.45	113.57	113.54	113.31	113.48	113.11	113.27

第26号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)
床　　面	113.35	113.28	113.20
ピット底面	113.01	113.02	113.00

第28号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)	P6 (m)	P7 (m)	P8 (m)	P9 (m)
床　　面	112.18	112.15	112.12	112.22	112.08	112.07	112.15	112.06	112.08
ピット底面	111.91	111.93	111.68	111.99	111.57	111.66	111.82	111.57	111.89

第84号住居跡

ピット番号	P1 (m)	P2 (m)	P3 (m)	P4 (m)	P5 (m)	P6 (m)	P7 (m)	P8 (m)
床　　面	108.68	108.88	108.83	108.02	108.81	108.76	108.67	108.64
ピット底面	108.24	108.33	108.18	108.27	108.37	108.35	108.21	108.10

（2）土壙

広木上宿遺跡から発見された土壙は165基であった。そのうち縄文時代の土壙は13基である。いずれも縄文時代の住居跡が検出されている調査区の北半部から発見されている。遺物は縄文時代中期中葉から後葉のものが出土しており、土壙の時期もそれに相当すると考えられる。

第52号土壙（第59図）

D-20グリッドに位置する。調査区の北斜面が降りた部分で検出された。形状や発掘の覆土の状況より縄文時代とした。遺物は出土しなかった。

第53号土壙（第59図）

D-21グリッドに位置する。北側には第52号土壙が位置する。遺物は出土しなかったが、形状や発掘の覆土の状況から縄文時代とした。

第54号土壙（第59図）

D-21グリッドに位置する。西側に第53号土壙が位置する。形状や発掘の覆土の状況から縄文時代とした。遺物は出土しなかった。

第71号土壙（第59図・第61図）

E-25グリッドに位置する。第13号住居跡内に重複して検出された。第13号住居跡の覆土が削平されていたため、検出状況から新旧関係はわからなかった。

遺物は土器片が出土した。1、2は勝坂系のやや外反して開く無文の口縁部である。口唇は折り返し状に内側に段を作る。3～5、9は加曽利E系または曽利系と考えられる。3は波状口縁部で口唇下に2本の沈線が巡り、胴部は綾杉状に細い短沈線を施文する。薄い丁寧なつくりである。4は頸部でくびれ胴部が張るもので、頸部は隆帯で区画し胴部は幅広な結節沈線を縦方向に施文する。5は胴部を枠状に沈線で区画する。地文はLRの縄文を斜め方向と縦方向に施文する。9は胴部の破片で2本隆帯の懸垂文を貼付し隆帯の両側はなでている。2本の隆帯間の地文は簡単に磨り消しており、地文がほとんど磨り残されている。地文は縦方向に0段多条のRLの縄文を施文する。6～8、10は地文のみが残る胴部の破片である。6、7は同一個体で地文は斜め方向に単節LRの縄文を施文する。8、10は縦方向に単節LRの縄文を施文する。11は底部の破片である。遺物は中期後葉の時期の土器が主体的に出土している。

第72土壙（第59図、第61図）

F-25、G-25グリッドに位置する。

遺物は少量出土した。1は口縁部を隆帯で区画して施文するもので、区画内は縦方向に沈線が施文されている。2は沈線で懸垂文を浅く施文する胴部の破片で、地文はLRの縄文を縦方向に施文する。3、4は縦方向や斜め方向の細かい条線を地文として施文する。

5～7は出土した石器である。5、6は打製石斧で大きさは違うが平面形状がほぼ同じもので、剥離調整も似通っている。ともに基部を破損する。8は石皿である。裏面の一部が剥落する。表面が使用されていた。遺物は加曽利E系の土器が出土しており、時期は中期後葉である。

第73号土壙（第59図、第61図）

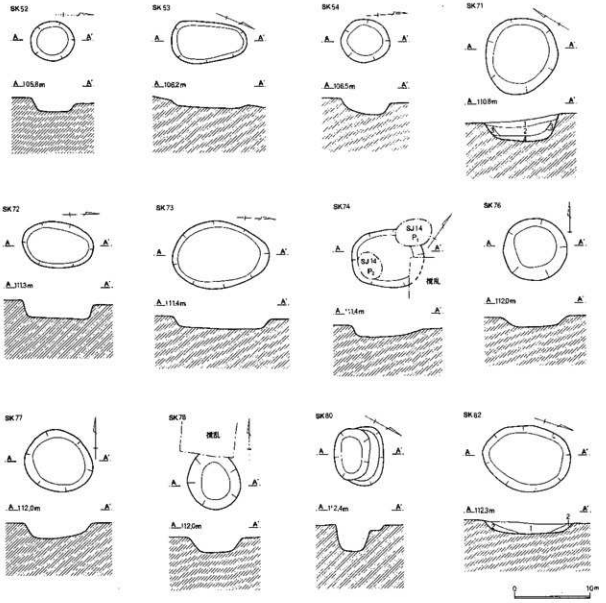
G-25グリッドに位置する。北側には第72号土壙が検出されている。

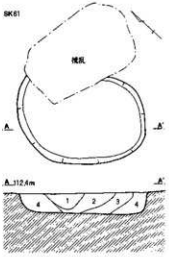
遺物は土製円盤を1点出土した。胴部の破片を使用するもので、周縁を打ち欠いて形を作り出している。文様は沈線による懸垂文と斜め方向の短沈線が残る。長さは3.25cm、幅は3.12cm、厚さは1.12cm、重さは15.03gである。文様から土製円盤は曽利系の深鉢形土器の胴部を使用しており、時期は中期後葉と考えられる。

第74号土壙（第59図、第62図）

F-26グリッドに位置する。第14号住居跡内に重複して検出された。住居跡の上層断面より先後関係は第74号土壙が住居跡の覆土をこわして掘りこんでおり住居

第59図　土壙





第７１号土壙
1 暗茶褐色土　堅緻　ローム粒子・ロームブロック(径５mm～10mm)少量　白色微粒子微量
2 黒 褐 色 土　堅緻　ローム粒子多量　ロームブロック(径５mm～10mm)微量　炭化物粒子多量
3 黄 褐 色 土　ローム粒子・ロームブロック多量
4 茶 褐 色 土　堅緻　ローム粒子少量　・焼土粒子微量

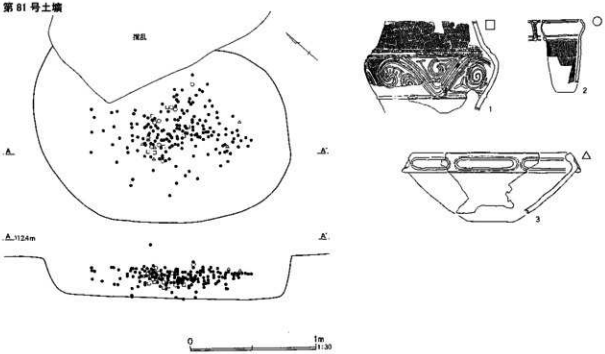
第８１号土壙
1 暗茶褐色土　砂質　炭化物微量
2 黒 褐 色 土　炭化物少量
3 茶 褐 色 土　ローム粒子・炭化物少量
4 黄 褐 色 土　ローム粒子・ロームブロック(径20mm～50mm)多量

第８２号土壙
1 茶 褐 色 土　ローム粒子・炭化物少量
2 暗茶褐色土　ロームブロック(径５mm～15mm)微量

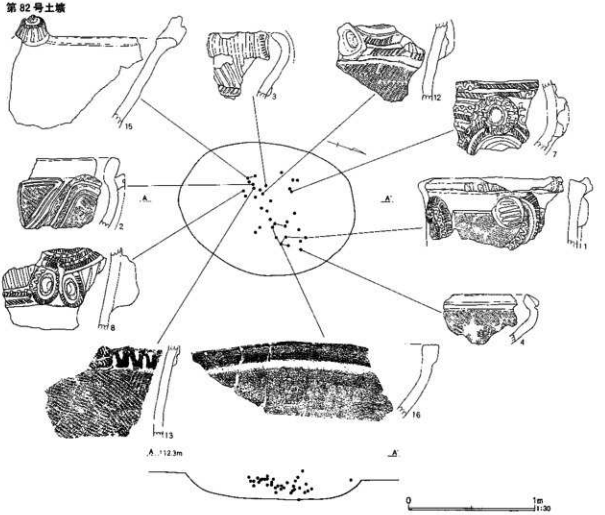
0　2m　1:60

第60図　第81・82号土壙遺物出土状態

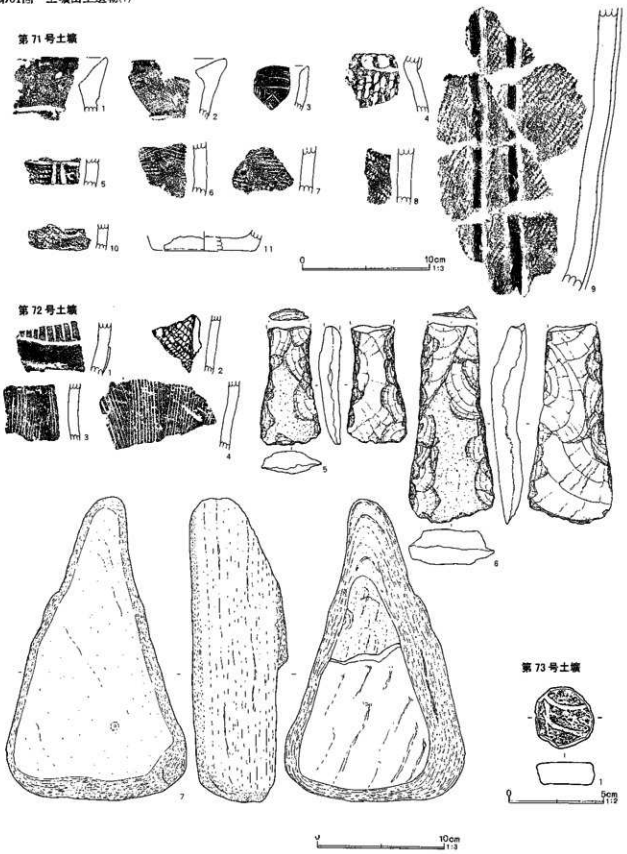
第81号土壙



第82号土壙

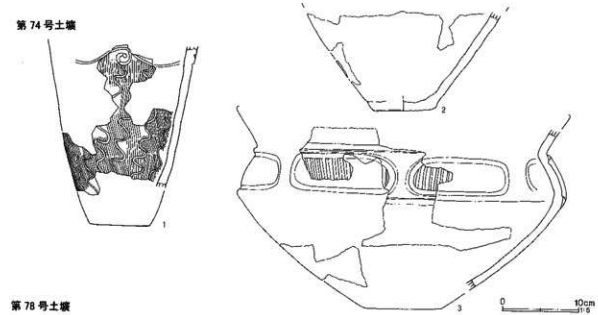


第61図　土壌出土遺物(1)

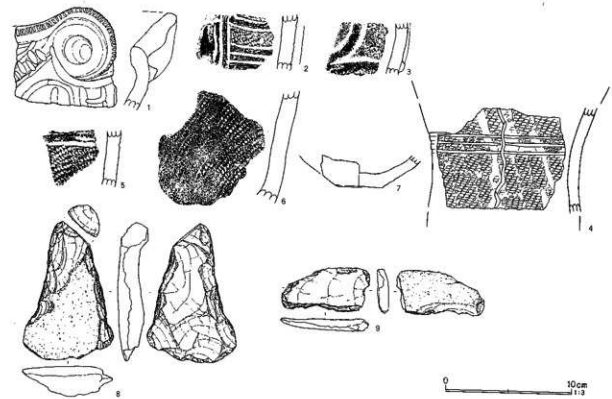


第62図　土壙出土遺物(2)

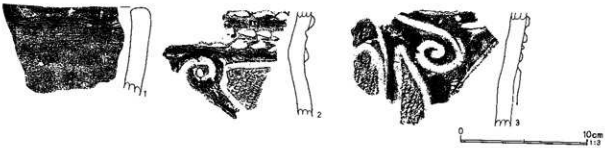
第 74 号土壙



第 78 号土壙



第 80 号土壙



跡より新しい。

遺物は3個体が復元できた。1は直上に口唇部がつくと推定される筒状になる深鉢形土器である。口唇部、底部は欠損する。施文は沈線によって行われている。口縁部は沈線を連弧状に施文し、弧の頂部は渦巻文を施文する。胴部は細かい波状の1本沈線が斜め方向に頸部から底部に垂下するもので、規則性はなく多数を密に施文している。途中で切れる沈線の端部が渦巻状になるものもある。地文は細かい条線を斜め方向と縦方向に施文する。2は無文の鉢の形状に近い浅鉢形土器である。口縁部を欠損するもので、胴部には縦方向の器面調整痕が残る。3は浅鉢形土器で口縁部と胴下半を欠損する。無文の口縁部から屈曲して肩部を作り出している。肩部には文様を施文し、隆帯による楕円区画が残されていた。区画内は縦方向の沈線を施文する。遺物は第14号住居跡より若干新しい。時期は中期後葉である。

第76号土壙（第59図）

F-27グリッドに位置する。第77号・第78号土壙が近接して検出されている。覆土は暗茶褐色土でローム粒子が多量に混入していた。遺物は出土しなかったが、形状や覆土から第78号土壙と時期は変わらないと考えられる。時期は中期後葉である。

第77号土壙（第59図）

G-27グリッドに位置する。第76号・第78号土壙と近接している。覆土は暗茶褐色土でローム粒子を多量に混入していた。遺物は出土しなかったが、形状や覆土から第78号土壙と時期は変わらないと考えられる。時期は中期後葉である。

第78号土壙（第59図・第62図）

G-27グリッドに位置する。第76号・第77号土壙と近接する。覆土は暗茶褐色土でローム粒子を多量に混入していた。

遺物は土器の破片と石器が数点出土した。1は波状口縁部で波頂部に隆帯を突出させて円形に貼り付け、中を円形に窪ませる。隆帯の上には刻みを施す。口縁部を区画する隆帯には左右交互から幅広な刻みを施し区画内は沈線で文様を施文する。2は隆帯で区画した内側に沈線で文様を施文する。地文は横方向に単節LRの縄文を施文する。3は口縁部の破片で隆帯で施文する渦巻文の一部が残る。4は頸部から胴部の破片で3本の沈線によって頸部を区画する。沈線間は磨り消さない。波状の沈線を口縁部から頸部の区画文の上を通過して胴部まで垂下させている。地文は斜め方向に単節RLの縄文を施文する。5は頸部を沈線で区画するもので沈線間は地文を磨り消している。地文は単節RLの縄文を斜め方向に施文する。6は胴下半の破片で地文のみが残る。地文は斜め方向に施文した単節RLの縄文である。7は浅鉢形土器の底部片で、残っている胴部分は無文であった。

8、9は出土した石器である。8は基部を欠損する撥形の打製石斧で、表面には大きく自然面が残る。刃部の調整は裏面からのみおこなわれる。9は縦長の剥片を利用した掻器である。剥片の長辺の一方に、簡単な調整剥離で刃を作り出している。遺物から時期は中期後葉である。

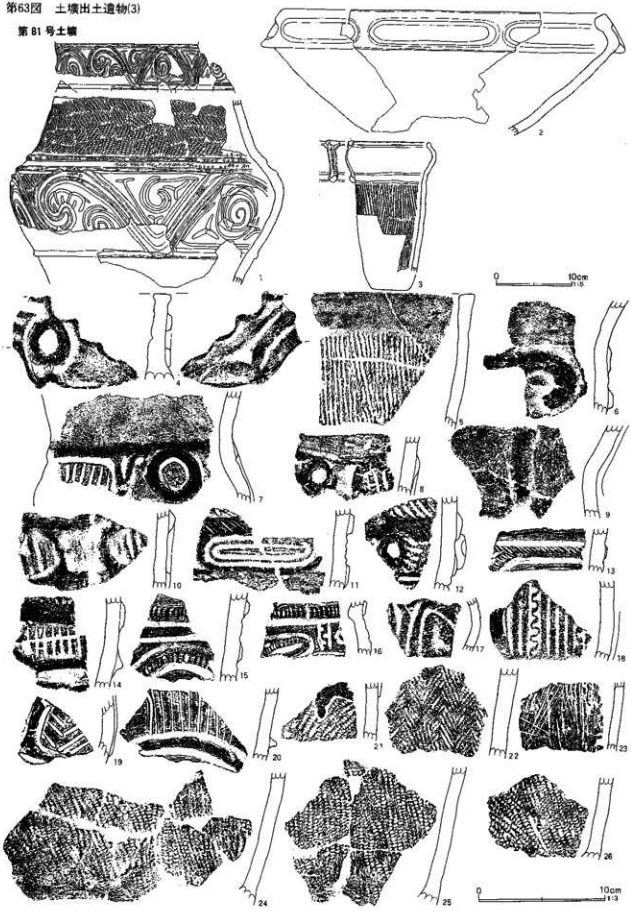
第80号土壙（第59図・第62図）

G-28グリッドに位置する。平安時代の第18号住居跡と隣接する。覆土は茶褐色土でハードロームを若干含んでいた。

遺物は土器の破片が少量出土している。1～3はいずれも曽利系の深鉢形土器である。1は頸部でくびれ口縁が開く器形の無文の口縁部である。2は頸部を隆帯で区画する。隆帯の間には沈線を2本施文し、2本の沈線上には雨だれ状の刺突を同じ方向に連続して施文する。胴部は隆帯で文様を施文し渦巻文が残るが、渦巻からのびる隆帯が大形の渦巻文になる可能性が高い。地文は0段多条のRLの縄文を縦方向に施文する。1と2は接合はしなかったが、胎土や色調から同一個体と考えられる。3は胴部に隆帯で渦巻文などを

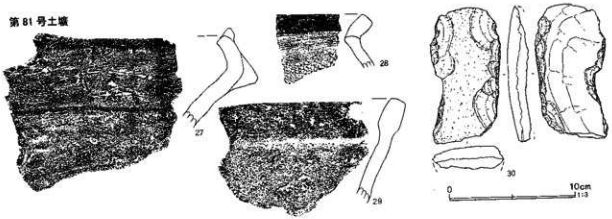
第63図　土壙出土遺物(3)

第81号土壙

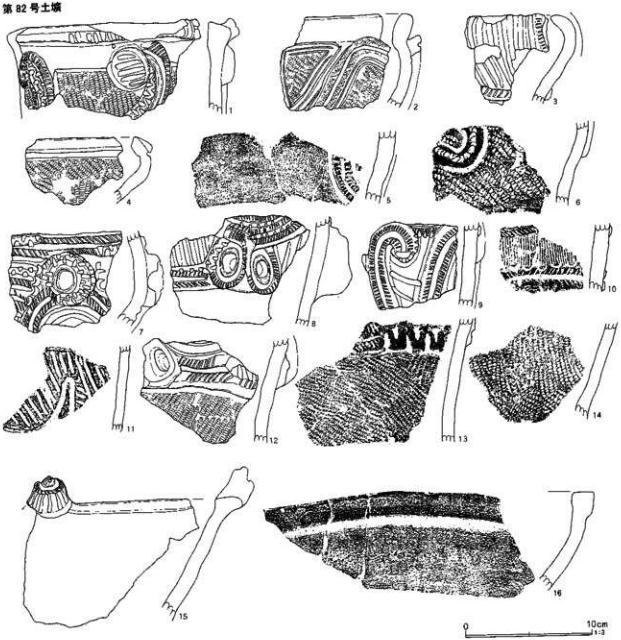


第64図　土壙出土遺物(4)

第81号土壙



第82号土壙



施文する上器である。地文は単節 RL の縦方向の縄文を施文する。遺物の時期は中期後葉である。

第81号土壙（第59図、第60図、第63図、第64図）

H-28、29グリッドに位置する。一部が撹乱をうける。第82号土壙の北側に隣接している。

遺物は土器片を中心として多量に出土し、3個体が復元できた。出土状態は第60図で示されるように土壙の中央付近に集中して出土しており、2層と3層が主に遺物を包含する層位である。

1は本来は頸部無文帯のあるキャリパー形の深鉢形土器であったと考えられる。しかし2段の隆帯を巡らせる口縁部となるべき場所に、胴部と考えられていた破片が接合し上下が不明となってしまった。隆帯や沈線が頸部無文帯部を下にした状態で、施文を行なっているため便宜的に無文部を下にした状態で図示した。底部はなく土器の使用時の上下関係は不明である。口縁部は2本隆帯によって区画され、区画内は沈線によって渦巻文や三叉文などが施文される。地文は単節 RL の縄文を斜め方向や横方向に施文する。口縁部上部の2本隆帯のうち、上の隆帯は地文を施文後に貼付されている。隆帯間はなでて地文を消している。口縁部の区画の中に沈線が施文されない狭い区画内は地文を斜め方向や縦方向に施文して空間を埋めている。隆帯上には地文を隆帯の方向にそって斜めや縦方向に施文する。上部の器面に施文される地文は上半部の円筒状部分は横方向に施文し、口縁文様帯にかけて角度を持って広がる部分は斜め方向に施文している。

2は浅鉢形土器で口縁部が外に張り出して面を作り、大きく屈曲して底部にいたる。エラ状に張り出した口縁部には隆帯によって楕円区画を作りだす。楕円内は隆帯にそって丁寧ななぞりを入れ、隆帯の貼付部分は斜めに落ちる段となっている。他に施文はなく無文である。

3は小形の深鉢形土器で底部を欠損する。口縁部は無文で丸みを帯びて強く内湾し、胴部は円筒状となる。頸部は2本の沈線を巡らし胴部と区画される。胴部は地文のみで R の撚糸文を縦方向に、3回に分けて施文している。口縁部は一個所のみ隆帯を口唇から頸部に垂下させて貼り付けている。端部は欠損しているが、隆帯の形状は縦に伸びたS字状であったと考えられる。隆帯上には刻みが施される。

4は橋状把手部分で、外面には隆帯によって円環状の貼付がされている。内面には沈線の施文が残る。縁はトサカ状に波打つように作り出されている。5は口縁部が無文の筒状の上器で、胴部には地文のみが施文される。地文は L の撚糸文が縦方向に施文される。

6、9は口縁部がくびれた頸部から外側に広がる土器で、6は胴部に隆帯による渦巻文が残る。9は口縁部に縦方向の隆帯が垂下する。7は底部の直上で胴部が算盤玉状に張り出した部分で、隆帯による楕円区画文円環状の隆帯の貼り付けが残る。

8、10～15は深鉢形土器の胴部の文様帯部分である。15以外は隆帯によって楕円に区画された文様帯が残る。8は楕円区画内に縦方向の沈線を施文する。楕円区画の横の辺の隆帯上に円環状の隆帯を貼り付ける。隆帯上には刻みがまばらに施される。10は楕円区画内は縦方向の沈線を施文する。11は区画内に楕円の形の沈線を2重に施文する。隆帯上には浅く細い刻みを施す。12は円環状の隆帯を斜めに突出するように貼り付けるもので、突出する側面部には沈線状に刻みを加える。13は隆帯上に刻みを丁寧に施文する。14は縦方向の沈線で区画内を施文する。15は区画内に渦巻状の隆帯を貼り付けていたと考えられる。隆帯上には先が櫛歯状の施文具で刺突を行なう。16は胴部が張り出すもので隆帯上に15と同様な櫛歯状の刺突がある。また縦方向に垂下して施文した沈線には左右交互からの刺突が施されている。17～19は内湾する口縁部分で17は沈線を施文し間に単節 LR の縄文を施文する。18、19は隆帯によって区画され18は縦方向の沈線を区画内に施文し、一個所二本の沈線上に左右交互の刺突を加え、沈線間を波状に作り出す。19は逆ハの字に短沈線を施文する。20は口縁部がそのまま開く土器で頸部に隆帯を貼付する。口縁部には縦方向に沈線を施文する。

21～26は胴部の破片である。21は渦巻状の隆帯を貼り付けが残る。地文は斜め方向に単節 RL の縄文を施文する。22は縦方向の単節 LR と RL の縄文を交互に施文して矢羽状に作り出す。23は条線を不規則に縦方向や斜め方向に施文している。24～26は同一個体で底部に近い破片である。単節 RL の縄文を横方向に施文するもので、1の上器と胎土や色調などが良く似ているが、接合はしなかった。27～29は浅鉢形土器で、27は口縁部が大きく屈曲する。口縁部の一部が盛りあがっており、把手などが存在していた可能性がある。28は断面が角状の口唇部を持ち、口縁部下で大きく屈曲し肩部を作りだす。肩部には RL の縄文が横方向に施文される。29は口唇は平坦で内外面に段を持つもので、大きく開く口縁部から直線的に底部にいたる器形である。

30は打製石斧で刃部を欠損する。粗雑なつくりで、刃部を欠損するとしても定形的に作られていない。表面には大きく自然面が残る。遺物はほぼ同時期のものと考えられる。時期は中期後葉である。

第82号土壙（第59図、第60図、第64図）

H-29グリッドに位置する。第81号土壙の南側に隣接する。

遺物は土壙の中央付近から出土した。すべて土器の破片である。1～14は深鉢形土器である。1は幅広な面を口唇部に持つもので、筒状の器形になる。口唇の一部には上下両方向からの刺突が加わる。口唇が破損している部分には把手などが付く可能性がある。口唇下から胴部には隆帯によって文様を施文する。隆帯の端部は巻き込んで施文し、ボタン状の突起をつけるものもある。隆帯上には刻みを入れる。隆帯のうち1本に交互刺突を加え波状に作り出す。胴部は沈線を施文して区画し、中に地文を残す。地文は単節 RL の縄文を斜め方向に施文する。2は隆帯を施文して胴部を区画するものである。隆帯上に地文の縄文を施文した後、隆帯の上に深く沈線を加えていく。隆帯によって区画された胴部は、半裁竹管による沈線が口縁部と区画しながら隆帯の形に沿って施文される。区画内には地文部分が残る。地文は単節 LR の縄文を縦方向に施文する。3～6は口縁部が内湾して頸部がくびれるものである。3は口縁部を隆帯で区画し、隆帯上には刻みを施す。区画内は深く沈線を縦方向に施文する。4は幅広に外に張り出した口唇部を持つもので、口唇直下は沈線を巡らす。地文は口唇下は単節 RL の縄文が横方向に1段施文され、内湾して内側に屈曲する部分は斜め方向に施文する。5は地文が無文の口縁部に隆帯を貼り付けるもので、隆帯上は分割するように沈線を施文し、沈線の両側に刻みを加える。6は地文は単節 RL の縄文が口縁部に横方向に施文され、隆帯によって文様を施文している。隆帯の上には結節沈線が断面が U 字状に抉れるように施文される。7は隆帯で文様を施文し区画していくもので、隆帯上には刻みを施し一部は交互刺突を加える。曲線を描く隆帯の頂部には円形に隆帯を斜めに盛りあげて突起状に貼付し、隆帯上は交互刺突を加えて装飾する。区画内は沈線を施文し、沈線の施文間には交互刺突や爪形文などが施文される。8は隆帯によって口縁部を区画して施文していく。頸部区画の隆帯の上に突起状に隆帯を貼付し、眼鏡状に2つの穴を開けるが穿孔はしていない。隆帯上には刻みを加えるが部分的に刺突や交互刺突が施文される。区画内は沈線を施文する。9は胴部文様帯の破片である。文様帯を隆帯によって区画施文していくもので、隆帯の上には刻みを加え、区画内は沈線を施文する。隆帯の端部は厚みを持って丸く巻き込んでおり、部分的に隆帯側面に刺突を加える。10は隆帯を楕円区画に施文するものである。隆帯上には刻みが施される。上辺の隆帯下に沿って半裁竹管による半円の爪形文が残る。楕円区画内は細い条線を施文する。11は沈線による区画が残されるもので、区画内は短沈線を施文する。12、13は頸部から胴部の破片で、12は隆帯で文様を施文し区画していくもので、区画内は沈線を施文する。頸部には区画の間には円環状の隆帯の貼り付けが残る。隆帯の上には刻みを施すが、円環状の隆帯にはなにも施文しない。地文は単節 LR の縄文を横方向に施文す

る。13は頸部を区画する隆帯の一部が残る。残存している隆帯の上には沈線で分割し刻みを施文する部分と、短沈線状の刺突を隆帯の上下交互から刺突し波状に作り出す部分がある。地文は単節 RL の縄文を横方向や斜め方向に施文する。14は地文のみが残る胴部の破片で、単節 RL の縄文が横方向と斜め方向に不規則に施文される。15、16は浅鉢形土器である。15は大きく開く口縁から直線的に底部にいたる器形で、口唇部には把手が円筒状に貼付される。面をつくる上面は渦状に加工される。上面の稜線上には刻みが施文される。把手の側面部には縦方向に沈線が施文される。16は口縁部から内湾しながら底部にいたる。口唇部は平坦面を持ち端部の断面が四角になる。外面の口縁部部分は段を持つ。出土している土器はほぼ同時期と考えられる。時期は中期後葉である。

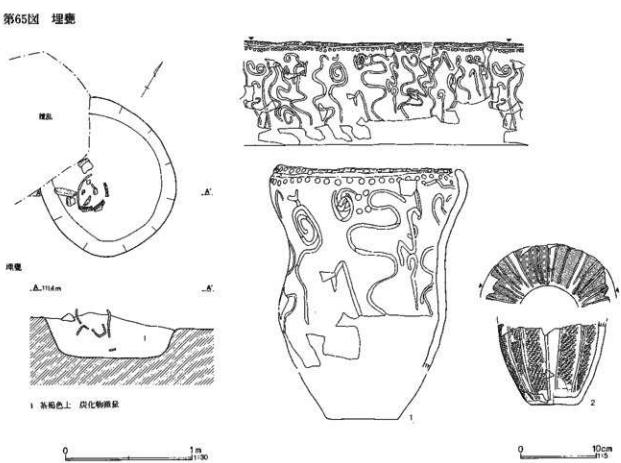
第3表　土壙一覧表

番　号	グリッド	形状	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備　　考
52	D-20	円　形	0.70	0.60	0.17	
53	D-21	楕円形	1.20	0.65	0.08	
54	D-21	円　形	0.78	0.67	0.18	
71	E-25	円　形	1.25	1.15	0.35	第13号住居跡内
72	F,G-25	楕円形	1.12	0.74	0.25	
73	G-25	楕円形	1.55	1.06	0.16	
74	F-26	楕円形	1.14	0.92	0.15	第14号住居跡内
76	F-27	円　形	1.02	0.96	0.15	
77	G-27	円　形	1.10	0.95	0.23	
78	G-27	円　形	0.90	0.85	0.23	
80	G-28	楕円形	0.80	0.75	0.45	
81	H-28,29	楕円形	2.00	1.33	0.33	
82	H-29	楕円形	1.41	1.05	0.18	

第4表　土壙出土石器一覧表

図版番号	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石　材
第60図 第72号土壙- 5	打製石斧	9.35	4.85	1.80	78.25	砂　岩
第60図 第72号土壙- 6	打製石斧	15.80	6.73	2.80	283.77	ホルンフェルス
第60図 第72号土壙- 7	石　皿	23.97	14.27	7.80	316.00	点紋緑泥片岩
第61図 第78号土壙- 8	打製石斧	10.93	7.08	2.38	157.61	砂　岩
第61図 第78号土壙- 9	磨　石	3.50	6.98	1.02	28.01	頁　岩
第63図 第81号土壙-30	打製石斧	10.69	5.70	1.70	103.82	ホルンフェルス

第65図　埋甕



（3）埋甕（第65図）

G-25グリッドに位置する。広木上宿遺跡内で縄文時代中期の住居跡が集中しているグリッドである。遺構は第72号土壙と第73号土壙の中間で検出された。一部分が攪乱によってこわされている。平面形は楕円形で長径1.3m、短径1.0m、深さは確認面より0.35mであった。

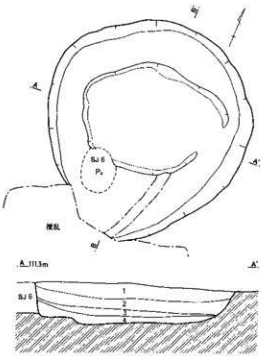
遺物は正位置で2個体土器が埋設されていた。底部を欠く深鉢形土器の中に胴上半を欠く深鉢形土器が入る形で出土した。表面には自然礫が検出されている。

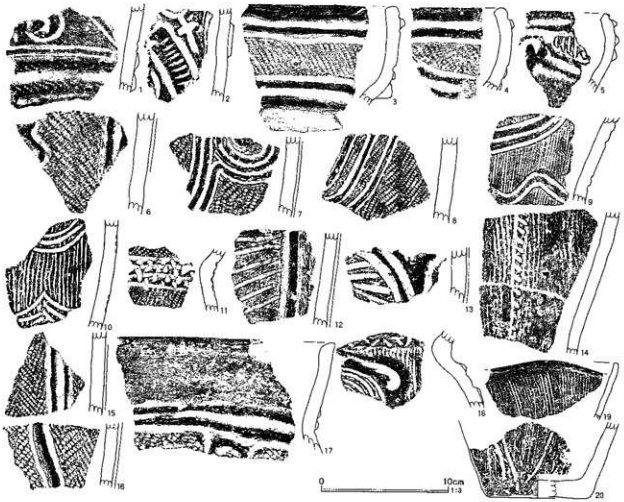
土器は遺構の底面よりもやや浮いた形で出土した。1は外側の埋設土器である。器形は口縁部が内湾し胴上部でゆるやかにくびれ、胴下半でやや張り出して底部にいたる。口唇下に1本の沈線を巡らし沈線の上下に円形刺突を横方向に巡らしていく。4つの円形刺突が胴部に張り出して方形に施文される部分を正面とした。胴部は沈線によって施文されるのみで地文はなく、縦方向のけずりの痕跡が器面に残る。胴部の沈線は基本的に懸垂文が大きく蛇行して垂下するもので、端部は渦巻くものや、蕨手状のものや、折れ曲がるものなどがある。口縁部では横方向に沈線が施文され、端部を向かいあって渦巻く文様が施文されるものや、波状のものなどがある。

2は内側の埋設土器である。器形は胴が張り出して底部にいたるもので1とくらべるとやや小形の深鉢形土器である。胴部には沈線によって懸垂文を施文している。直線的な2本の沈線と、2本の沈線が絡み合って垂下するものが複数施文される。絡み合う沈線を蛇行沈線としても、直線的な沈線とは規則性をもっていない。地文は沈線施文後に施文され、沈線間を磨り消す部分は直線的な懸垂文間だが規則的に磨り消し部分を作ってはいない。地文は単節RLの縄文を縦方向に施文する。

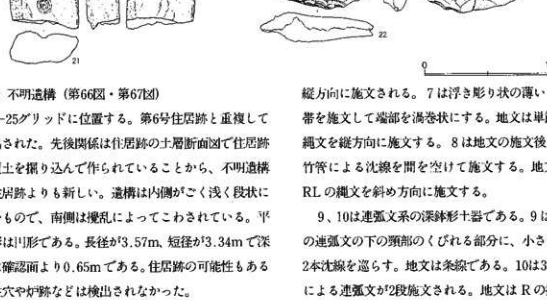
遺物から時期は中期後葉である。

第66図　不明遺構出土遺物(1)





第67図　不明遺構出土遺物(2)



（4）不明遺構（第66図・第67図）

F-25グリッドに位置する。第6号住居跡と重複して検出された。先後関係は住居跡の土層断面図で住居跡の覆土を掘り込んで作られていることから、不明遺構が住居跡よりも新しい。遺構は内側がごく浅く段状に窪むもので、南側は攪乱によってこわされている。平面形は円形である。長径が3.57m、短径が3.34mで深さは確認面より0.65mである。住居跡の可能性もあるが柱穴や炉跡などは検出されなかった。

遺物は土器を主体に出土しているが、第6号住居跡の遺物が混入している可能性は高い。1、2は勝坂系の土器で隆帯によって区画された内側に渦巻文などを沈線で施文する。1は隆帯上に横方向に単節RLの縄文を施文する。2は隆帯上には刻みが加えられる。3～8は加曽利E系のキャリパー形の深鉢形土器である。3～5は口縁部でありいずれも口唇直下に隆帯を巡らす。3は口唇下の隆帯の上下に細いナデ状の沈線を施文する。頸部とは2本の隆帯で区画し隆帯の上下に、やや太い沈線を施文する。頸部には無文帯がある。口縁には地文の単節RLの縄文を横方向に施文する。4は口縁部の隆帯は2本である。地文は単節RLの縄文を横方向に施文する。5は口唇下に隆帯を1本巡らす。口縁部には2本隆帯を連弧状に貼付する。弧頂部には隆帯を渦巻状に貼付してやや突出する。口唇下の隆帯と渦巻文はつながらず、間に沈線状のなぞりが入る。隆帯によって区画された中には沈線を縦方向に施文する。頸部は無文帯となる。6～8は胴部の破片である。6は隆帯によって懸垂文が施文される。隆帯の両側に沈線は施文されない。地文は単節LRの縄文が縦方向に施文される。7は浮き彫り状の薄い3本の隆帯を施文して端部を渦巻状にする。地文は単節RLの縄文を縦方向に施文する。8は地文の施文後に、半裁竹管による沈線を間を空けて施文する。地文は単節RLの縄文を斜め方向に施文する。

9、10は連弧文系の深鉢形土器である。9は3本沈線の連弧文の下の頸部のくびれる部分に、小さな波状の2本沈線を巡らす。地文は条線である。10は3本の沈線による連弧文が2段施文される。地文はRの撚糸文を縦方向に施文する。

11～16は曽利系の深鉢形土器である。11は頸部に4本の沈線を巡らす。沈線上には4段にわたり交互に刺突を加えて、沈線間を波状に作り出している。地文は斜め方向に単節RLの縄文を施文する。12～16は胴部の破片で14以外は隆帯によって懸垂文や渦巻文などを施文するものである。12、13は隆帯の施文間を短沈線で埋める。15、16は単節RLとLRの縄文を縦方向に交互に施文して、矢羽状に作り出している。14は胴部に2本の沈線を垂下させ沈線の施文の間に雨だれ状の刺突を上から下に施文する。地文はLの撚糸文を縦方向に施文する。17、18は浅鉢形土器である。開く無文の口縁から頸部がくびれて肩部を作りだしている。肩部は隆帯によって区画して文様を施文する。17は区画内に地文の単節LRの縄文が横方向に施文される。18は沈線を施文する。頸部の沈線間には刺突を加える。19は鉢形上器の波状口縁部で縦方向の条線で地文が施文される。20は胴部から底部の破片である。地文は条線である。胴部に沈線による懸垂文が残されている。出土遺物の時期は中期後葉である。

3　グリッド出土遺物

(1) グリッド出土土器（第68図～第74図）

グリッドからは早期から後期にかけての土器が出土した。早期の土器は主に調査区の南斜面部から出土している。前期後半から中期の土器は北斜面部から主体的に出土している。中期の土器は南斜面からはほとんど出土していない。

第Ⅰ群土器（第68図1～9）

早期の撚糸文系土器群を一括した。1、2は口縁部の破片である。1は無文のもので、胎土に多量の黒い長石を含む。2は口縁部がやや外反する。口唇下に狭い無文部をあけて撚糸文を斜め方向に施文する。器面状態が悪いため原体の撚りの方向は不明である。3～9は胴部の破片である。3は外反して開く口縁部を持つと考えられる。Lの撚糸文が外反する部分より下に縦方向に施文される。4は底部に近い破片で、Lの撚糸文がやや斜め方向に施文される。5はLの撚糸文が斜め方向に粗く施文される。6はRの撚糸文を縦方向に施文する。7はLの撚糸文を間隔を開けて縦方向に施文する。ごく浅い施文で部分的に条痕状になる。8は底部に近いものでLの撚糸文を縦方向に施文する。9はRの撚糸文を密に縦方向に施文する。

第Ⅱ群土器（第68図10～51）

早期の沈線文系土器群を一括した。田戸下層式にあたるもので、文様の施文の違いによって分類した。

第1類（第68図10）

縄文を施文するもので、1点のみが出土した。

10は口唇が肥厚せず先端が丸みを持つもので、器形はやや口縁が内湾し、浅く胴部でくびれて底部に至るものである。文様の施文は、口縁部は細い沈線を口唇下に横方向に巡らしたのち口唇部から斜め方向に、横の沈線の上を通って施文していく。胴部には横方向に単節RLの縄文を施文する。胎土や施文などから、三戸式である可能性もある。

第2類（第68図11～34）

沈線によって文様を施す土器群を一括した。11、12は口縁部で、11は口唇部がやや外傾して面を作り口縁部が外反する。口唇上には細い沈線で刻みを入れる。外反する口縁の下から、太い沈線が格子目状に施文される。12は口唇部がやや外傾して面を作る。口縁からやや外反して胴部にいたる。口唇上は摩滅が激しく施文の痕跡は認められなかった。口唇直下には細い沈線を狭い範囲で横方向に施文する。細い沈線の下から胴部にかけて斜め方向に太い沈線が施文される。

13は細い沈線で横方向に、継ぎ足し状に多条に施文するもので、一部格子目状に施文される。他よりも古い様相を示すもので、三戸式である可能性もある。

14～25は胴部の破片で横方向に沈線が施文されるものである。14～18は細い沈線で施文されるもので、14～16は継ぎ足し状に多条に横方向に施文される。17は上部の沈線は継ぎ足し状で下部の沈線は1本沈線状に施文される。18は横方向に1本沈線状に施文される。19～25は太い沈線で継ぎ足し状に横方向に施文される。25は底部に近いものである。

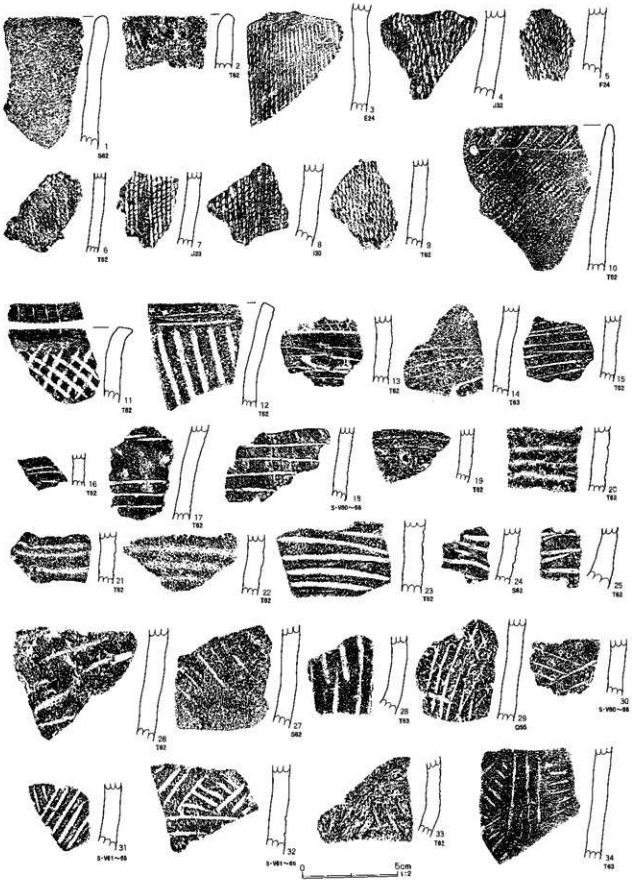
26～34は斜めや縦方向に沈線を施文するものである。26～28は太い沈線を斜めに施文するもので、28は底部近くの破片である。29は格子目状に沈線を施文する。30、31は鋸歯状に沈線を施文する。32、33は横方向の沈線で区画しているもので、横の沈線にそって32は長短の向きの違う斜方向の沈線を施文し、33は鋸歯状に施文する。34は縦方向の沈線によって区画され、縦の沈線にそって横方向の沈線や斜め方向の沈線を施文する。沈線は30がやや細いが、他は太い沈線を施文する。32は区画する横の沈線がやや細いが器面が風化しているため明確ではない。33、34は同じ太さの沈線で施文される。

第3類（第69図35～40、42～45）

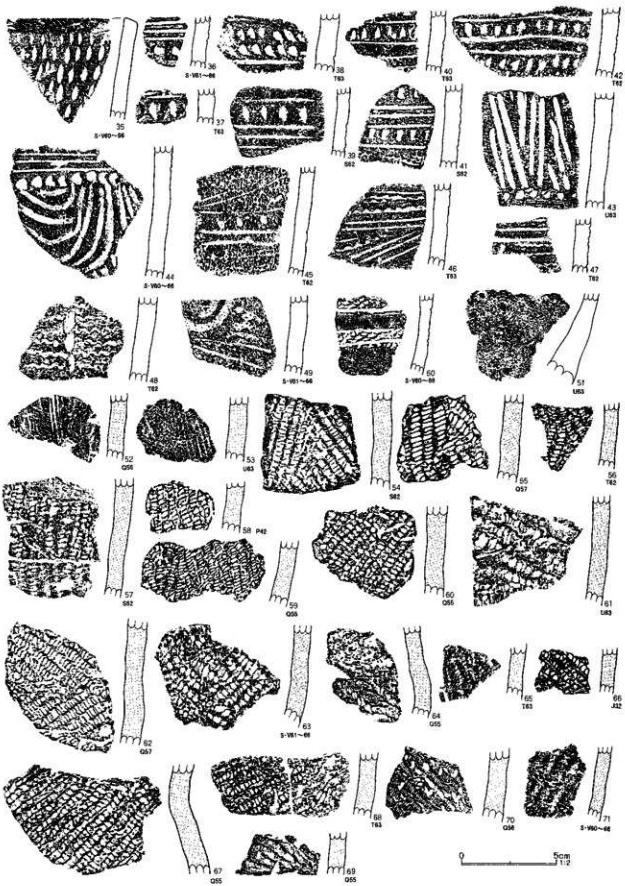
刺突文を施文する土器を一括した。

35は刺突文のみを施文している口縁部である。外傾

第68図　グリッド出土土器(1)



第69図　グリッド出土土器(2)



して面を持つ口唇部には細かく刻みを入れる。文様は刺突文のみで、横方向に巡らした段を複数作っていくものである。35以外は刺突文と沈線文とがあわせて施文されている土器である。

36～40、42は横方向に施文された沈線と刺突文を合わせて施文している。36～39は刺突文によって区画していると考えられるもで、刺突文の上下に横の沈線文が施文される。36は角頭状の刺突文である。38は二2段の刺突文が施文される。40、42は施文された横方向の沈線の間に刺突文が施文されるものである。

43、44は細い沈線文と刺突文が並列して横方向に巡って区画するもので、区画の上または下には太い沈線によって文様を施文する。43は鋸歯状に、44は波状に沈線を施文する。

45は刺突文の上下を横方向の沈線でかこんで区画し、その上下を上は斜め方向の沈線、下は横方向の沈線を施文する。

第4類（第69図41、46～50）

貝殻腹縁文を施文する土器である。

41は横方向に施文されている沈線文と刺突文の間に斜めに施文している。46、47は斜め方向や横方向に施文された沈線の間に沈線文の形にそって施文している。48は貝殻腹縁文を横方向に何重にも巡らしたのち、縦方向に刺突文を施文し区画している。49は沈線文の施文の空いた部分に施文する。50は2本の幅の狭い沈線文の区画内に斜めに連続して施文する。46、47は比較的大きめの貝殻腹縁文である。

第5類（第69図51）

無文の底部の破片である。尖底となるものである。

第Ⅲ群土器（第69図52～69）

前期前半の胎土に多量に繊維を含む土器群を一括した。

第1類（第69図52～66）

胎土に多量に繊維を含むもので、胎土や整形などが古い様相のものを一括した。花積下層式に相当すると考えられる。

52、53は胴部の破片で条痕文が器面に斜め方向に施文されるものである。

54～61はいずれも胴部の破片である。54～56、62～64は羽状縄文を施文する。54、62は0段多条の縄文を施文している。64は無節のLと0段多条のRLが施文される。他は単節の縄文を施文する。57～59、61、65、66は横方向に施文された縄文が残されるもので、57、58、65、66は単節RLの縄文、59、61は0段多条のRLの縄文を施文する。

第2類（第69図67～71）

胎土に繊維を多量に含むもので、黒浜式に相当するものと考えられる。

67は胴上部でくびれて口縁部が外反する器形と考えられる胴上部の破片である。内面をなでて丁寧に整形する。地文は単節LRの縄文を横方向に施文する。68～71は胴部下半にかけての破片である。68は羽状縄文を施文するもので、0段多条の縄文で施文する。内面は横方向に丁寧になでて整形している。69～71は無節の縄文を施文するもので、69、70は無節R、71は無節Lである。

第Ⅳ群土器（第70図72～101）

前期後半の土器群を一括した。諸磯b式と諸磯c式に大別できる。

第1類（第70図72～84）

諸磯b式の土器を一括した。72、73は爪形文が施文される。胴部上半で屈曲して口縁部が開く器形の屈曲する部分と考えられる。2列の爪形文が施文されている。72は爪形文の下の胴部に横方向に単節RLの縄文を施文する。

74～82は浮線文を施文するもので、74～77は地文施文後にやや幅の広い浮線文を横方向に施文する。施文後に上からなでつけられており、厚みはほとんどない。浮線文上には斜め方向の刻みが施され、浮線文が複数列の場合は向きを変えて施文する。75の上方の浮線文はほとんど平らになでられており、刻みは施されない。地文はすべて単節RLの縄文で横方向に施文する。

78～82は細い浮線文を施文するものである。浮線文は上からなでつけてはおらず、刻みなどによって押さえていると考えられ、幅広のものに比べ立体的になるが剥落も激しい。78は波状口縁部で大きく口縁が内湾している。浮線文は単節RLの縄文を横方向に施文後に、4列横方向に施文しているが4列目は剥落している。79は横方向に施文した浮線文の間に刺突列が施文されている。地文は横方向の単節RLの縄文である。80は横方向に浮線文を施文し、地文は横方向の単節RLの縄文を施文する。81は浮線文を施文後に地文を施文するため、浮線文上に縄文が残る。地文は単節RLの縄文を横方向に施文する。82はごく細い浮線文を文様を作り出して施文するが、文様構成は剥落のため不明である。浮線文上には刻みの他に、刺突を施す。地文は無節のLの縄文を横方向に粗雑に施文する。

83は底部で、胴部部分には撚りの細かい単節LRの縄文が横方向に施文されている。84は地文のみが残るもので、単節RLの縄文を横方向に施文する。

第2類（第70図85～101）

諸磯C式を一括する。85、86は地文の集合沈線のみを残す深鉢形土器である。口縁部は横方向に施文し、胴部は縦方向に施文する。87は波状口縁部で口唇部に刻みをいれ、口唇下に巡らす2本沈線の間には爪形文を施文する。胴部は集合沈線が施文される。

88～98、101は地文に半裁竹管による集合沈線を施文するもので、貼付文を施文するものが多い。88～93は口唇部の残る口縁部の破片である。88は口縁部にそって貼付文が施文され、間には円形の小さい貼付文を施したのち、円形の上から刺突する。89～91は内外面にかけて貼付文を施文するもので、肉厚な縦長や円筒状の貼付文の間に偏平な円形の貼付文を施す。90、91の器面には貼付文の剥落した痕跡がある。93も貼付文は剥落しているが、89～91と同様であったと考えられる。92は口縁部が内側に段をつけないで細く立つもので、口縁直下に半裁竹管によって斜めに刺突を施される。口縁部は92以外は内面に折れて段を作り出しており、地文の集合沈線は内面の段の上まで施文される。地文の集合沈線は88、89、93は口縁部は内外面とも斜め方向、その下は横方向に施文する。90、91は内面は斜め方向、外面は横方向に施文する。92は内面は施文されず、外面は横方向に施文される。

94～98、101は口縁部から胴部にかけての破片である。94は口縁部の屈曲する部分で、縦長と円形の貼付文が施文される。円形の中心は円形に刺突される。地文は斜め方向に施文される。95は胴部の破片で縦長や中心を円形に刺突される円形の貼付文を施文する。地文は縦方向に施文した間を矢羽状に施文していく。96、101は口縁部が内湾する部分で、96は円形、101は縦長の貼付文を施文する。地文は96は内湾部分に斜め方向で、屈曲する部分は横方向に施文する。101は矢羽状に施文する。97は地文を浅く横方向に施文するもので、小さい円形の貼付文を施文する。98はゆるやかに屈曲する胴部で縦方向の施文の横に矢羽状の施文が残る。

99は無文の土器で底部に近いもので、内面は縦方向のなでた痕跡がある。100は面を持つ口唇上に櫛歯状の施文具で刺突を行なうもので、貼付文の上にも同様に刺突を行なう。

第Ⅴ群土器（第71図102～142、第74図212）

中期中葉の勝坂系、阿玉台系の土器を一括する。

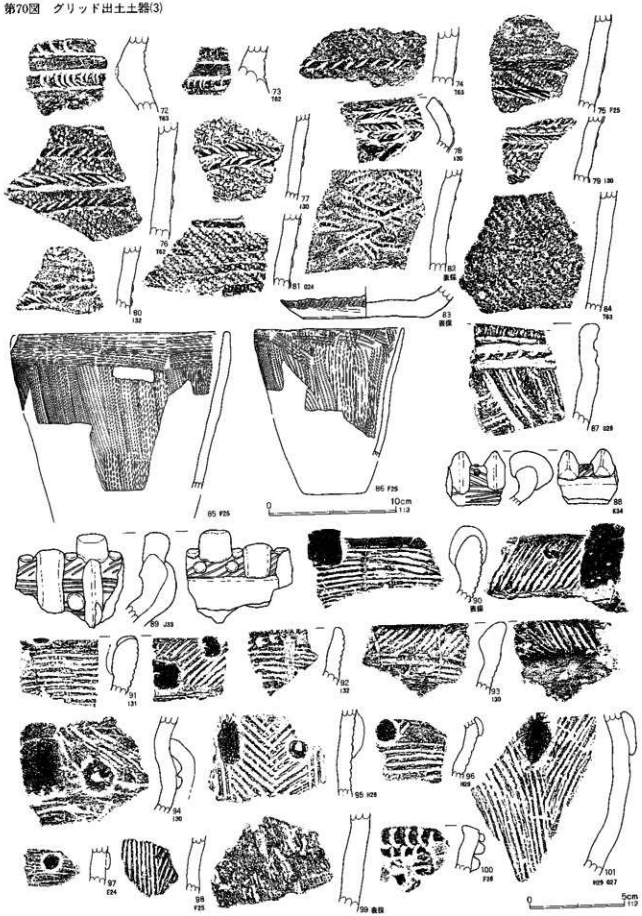
第1類（第71図102～113）

古い様相を示すものを一括した。藤内段階のものや阿玉台Ⅰ～Ⅱ式のものが含まれる。

102～104は阿玉台系のもので、102、103は口縁部の破片である。胎土には金雲母が多量に含まれる。隆帯の間に結節沈線文が施文される。104は2列の爪形文が施文される胴部の破片である。

105～112、114～116は勝坂系である。105は口縁部で横方向に細かい角押文を施文し、その下に細かい爪形文を施文する。106は口縁部の楕円区画文の下に2列の爪形文を施文する。地文は横方向と斜め方向に単節RLの縄文を施文する。107は細かく施文する爪形文列を4列残す。108は隆帯の両側に角押文を施文する。角

第70図　グリッド出土土器(3)



第71図　グリッド出土土器(4)

押文に沿って爪形文が1列残る。隆帯上には刻みが施される。109は隆帯上に刻みを施す。隆帯の間には半裁竹管を、縦方向に連続して押し引きした後刺突によってC字状に縁取っている。110は縦方向に隆帯を施文し、両側に角押文を施文する。区画された内側には爪形文が施文される。111は爪形文を縦方向に施文し両側をC字状に半裁竹管によって刺突を施す。区画された内側は細い施文具で爪形文を波状に縦方向に施文する。112は隆帯による区画内に波状沈線を施文する。114は沈線によって区画された内側を爪形文で縁取る。115、116は隆帯によって区画された内側に爪形文を施文する。

113は焼町系の土器の口縁部である。口唇は内側に折れて、口縁はやや内湾する。文様は隆帯によって立体的に施文され、隆帯の両側は深く沈線を施文する。隆帯による楕円区画内は列点状の刺突を施文する。

第2類（第71図118～142、第74図212）

勝坂系の井戸尻から中峠段階の上器を一括する。区画する隆帯上には刻みが加えられ、両側に沈線が引かれるようになる。

117は内湾する無文の口縁部を持つもので、頸部は隆帯で区画する隆帯上には深い刺突状の刻みを施す。118、212は直線的に無文の口縁部が立つもので、沈線によって頸部は区画され、胴部に沈線で渦巻文などを施文する。地文は118は横方向に単節RLの縄文を施文し、212は斜め方向に単節RLの縄文を施文する。119は口縁は内湾する。口唇部から隆帯を施文し、沈線によって2分割され一方の隆帯上に刻みを施す。地文は横方向に単節LRの縄文を施文する。120、121は外反する狭い無文の口縁部を持つもので、120の胴部文様は沈線を施文し、間に爪形文を施文する。121は隆帯によって区画し間は沈線を施文する。122～132は円筒状の胴部の文様帯と考えられる。文様は隆帯によって区画され、その内側は沈線や爪形文などを施文する。122～124、127、128は隆帯上の刻みが細かく密に施文される。122は区画内に円環状の隆帯を施文し、隆帯上に刻みとまわりは縁取りを施文する。125、129～132は隆帯上の刻みが太く、粗く施文される。125は区画内は沈線で縁取られたのち列点状の刺突を施文する。131、132は隆帯上の刻みが矢羽状に施文されるもので、132は沈線の間の爪形文も矢羽状に施文される。126は隆帯がないが、爪形文が矢羽状であることから隆帯上に矢羽状の刻みのあった可能性がある。

133～136はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部と考えられる。いずれも隆帯によって区画された内側に沈線文や爪形文を施文する。135は半円筒状の隆帯から2本の隆帯を垂下させ、2本の隆帯上には矢羽状に刻みを施す。

137～141は頸部から胴部の破片で、137、138は頸部の隆帯が残る。地文は137は複節LRLの縄文を横方向に施文する。138は横方向に単節RLの縄文を施文する。139は隆帯の両側の沈線にそって爪形文と半裁竹管の刺突を加える。140、141は胴部の破片で縦方向に刻みを持つ隆帯が垂下する。どちらも地文は単節RLの縄文で、横方向と縦方向に変えて施文している。

142は有孔鍔付上器で、鍔の部分を穿孔している。無文で赤彩の痕跡はわからなかった。

第Ⅵ群土器（第71図143～146、第72図、第73図178～201、213、214）

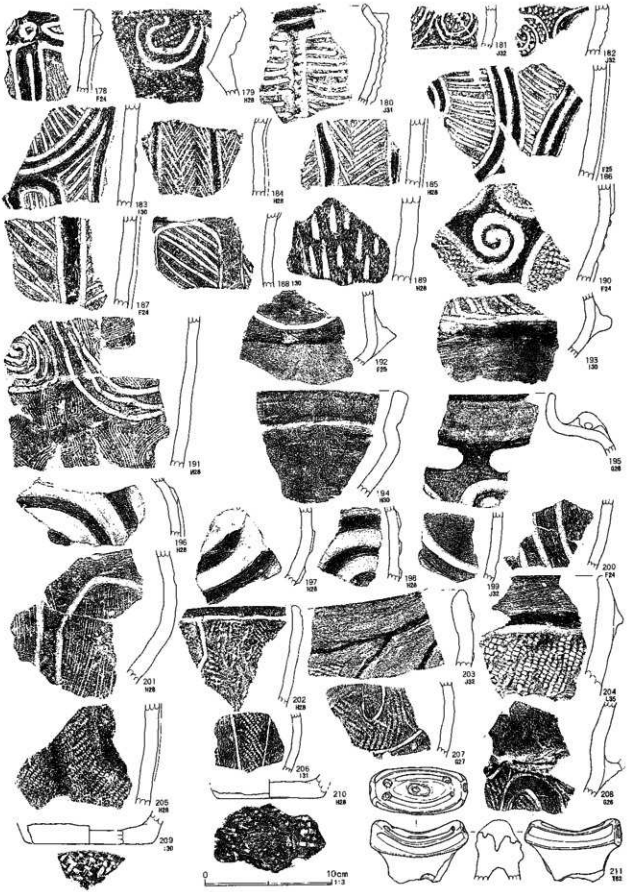
中期後葉の上器を一括する。加曽利E Ⅰ～E Ⅲ式にあたるが、口縁部の破片が少なく細かく区分しなかった。連弧文系、曽利系の土器も一括して含めた。広木上宿遺跡の住居跡の主体となる上器群である。

第1類（第71図143～146、第72図147～168）

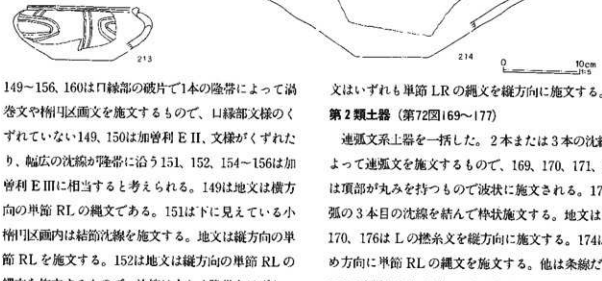
加曽利E系のキャリパー形の深鉢形土器を一括した。143～156は口縁部の破片である。143～146は口縁部を2本隆帯で文様を施文するもので、加曽利E Ⅰに相当するものと思われる。地文はいずれもLの撚糸文で、143、146は縦方向に144、145は横方向に施文する。147、148は頸部が残る破片で、147は頸部無文帯が残る。148は頸部無文帯の部分も隆帯に重ねて地文を施文する。地文は147は横方向の単節RL、148は口縁部、頸部とも縦方向の単節RLの縄文を施文する。

第72図　グリッド出土土器(5)

第73図　グリッド出土土器(6)



第74図　グリッド出土土器(7)



149～156、160は口縁部の破片で1本の隆帯によって渦巻文や楕円区画文を施文するもので、口縁部文様のくずれていない149、150は加曽利ＥⅡ、文様がくずれたり、幅広の沈線が隆帯に沿う151、152、154～156は加曽利ＥⅢに相当すると考えられる。149は地文は横方向の単節 RL の縄文である。151は下に見えている小楕円区画内は結節沈線を施文する。地文は縦方向の単節 RL を施文する。152は地文は縦方向の単節 RL の縄文を施文するもので、沈線は大きく隆帯をけずり、隆帯は微隆起状になる。154、155の地文は単節 RL の縄文で横方向に、155の胴部は縦方向に施文する。156は斜め方向に単節 RL の縄文を施文する。153は狭い口縁部文様帯を持つもので、波状口縁部である。口縁部は隆帯によって区画され区画内は縦方向の沈線を施文する。胴部は地文 R の撚糸文を縦方向に施文し、沈線を枠状に施文する。160は区画内を雨だれ状の短沈線で矢羽状に施文する。

157～159、161～168は胴部の破片で、157、158は頸部無文帯が残る。胴部の区画は157は隆帯で158は沈線で施文する。地文はどちらも単節 RL の縄文を縦方向に施文する。159、161～163は胴部の文様を隆帯によって施文するものである。地文は159は縦方向に施文する単節 RL と LR 縄文を交互に施文して矢羽状に作り出している。161～163は L の撚糸文を縦方向や斜め方向に施文する。164～168は胴部に沈線で懸垂文を施文するもので、164、165は磨り消しを行なわない。164の地文は条線で、165は縦方向の単節 RL の縄文だが165は上部を欠損後に擬口縁を作り出し再利用している。166～168は沈線間を丁寧な磨り消しを行なう。地文はいずれも単節 LR の縄文を縦方向に施文する。

第2類土器（第72図169～177）

連弧文系土器を一括した。2本または3本の沈線によって連弧文を施文するもので、169、170、171、174は頂部が丸みを持つもので波状に施文される。175は弧の3本目の沈線を結んで枠状施文する。地文は169、170、176は L の撚糸文を縦方向に施文する。174は斜め方向に単節 RL の縄文を施文する。他は条線だが、173は連弧文を施文後に地文を施文する。

第3類土器（第73図178～191）

曽利系の土器を一括した。178はやや内傾する口縁から直線的に底部にいたる器形で、胴部は隆帯に沿って沈線が枠状に施文される。地文は条線である。179は頸部から口縁部が大きく開くもので、口縁部には沈線によって渦巻文が施文される。地文は単節 LR の縄文を横方向と縦方向に施文する。180は波状口縁を持ち口縁部から内湾して底部にいたるもので、隆帯の区画内は沈線を施文する。181、182は沈線の渦巻文内を列点状の刺突を施文するものである。183～191は胴部の破片で、隆帯や沈線で懸垂文や渦巻文などを施文する。183、186は大形の渦巻文を施文する。183～189は区画内を短沈線で施文する。184、185は綾杉状になる。190は単節 RL の縄文を斜め方向に施文する。191は沈線によって大形の渦巻文が施文される。地文は流水状の条線である。

第4類土器（第73図192～201、第74図213、214）

深鉢形土器以外の器形の土器を一括した。

192～194、213、214は浅鉢形土器で192、193は肩部に文様を施文する。213は胴部が内湾するもので沈線

第75図　グリッド出土　土製品・石製品

によって楕円区画文などを施文する。赤彩の痕跡がある。195～200は屑部の張る壺形の土器で湾曲する胴部には渦巻文が施文される。195～198は同一個体と考えられる。201は胴部が内湾する鉢形土器で沈線によって区画された内側に条線を施文する。

第５類土器（第73図209、210）

底部の破片を一括した。底部に網代痕の残るもので広木上宿遺跡の中期の遺構内からも同様に網代痕の残る底部があるため中期後葉とした。

第Ⅴ群土器（第73図202～208）

中期末葉から後期初頭の土器を一括した。202は口唇直下に巡らした沈線から沈線の蛇行懸垂文が垂下している。地文は単節 LR の縄文を口唇下の一部は横方向に、胴部は縦方向に施文する。203は波状口縁部を持ち、微隆起状の隆帯によって区画される。口縁部を区画する隆帯は波頂部で口唇部とつながる。区画内は無節の R の縄文を施文する。204は微隆起状の隆帯が口縁部を区画するもので、胴部は縦方向に区画される。地文は単節 RL の縄文を胴部は斜め方向に、口縁部の隆帯直下の一部は横方向に施文する。205は微隆起状の隆帯が胴部に施文されるもので、地文は単節 RL の縄文を縦方向に施文する。206、207は沈線で区画されたあと、区画内を形にそって地文を施文する。206は単節 LR の縄文を斜め方向に、207は単節 LR の縄文を渦巻文内に形にあわせて施文する。208は両耳壺の破片である。胴部は沈線によって施文され、区画の内側は磨り消される。地文は単節 LR の縄文を縦方向に施文する。

第Ⅵ群土器（第73図211）

後期の堀之内式の深鉢形土器の把手部分である。把手の上面を沈線で施文し、沈線の両端に円孔を施文する。中央には深く円孔を施文する。把手の左右の面には円孔を施す。

（２）グリッド出土土製品・石製品（第75図）

１～５は土製円盤である。いずれも胴部の破片を使用し、打ち欠いて形を整えている。周縁は良く磨られて丸みを帯びる。１は単節 RL の縄文を縦方向に施文し沈線の懸垂文が器面に残される。２は縦方向の沈線文が残る。３～５は無文部を使用している。時期は中期中葉から後葉と考えられる。７は抉状耳飾である。左側を欠損するもので不純物が入っており石質は良くない。６は土鈴である。第８号住居跡と重複していた第７号住居跡内より出土した。完形品で側面は方形に近く４面を作り出す。上面に２本と側面の２面に１本ずつ隆帯を貼付する。施文は細い沈線で上面をのぞく５面に施文される。側面は鋸歯状文など直線的に施文し下面は渦巻文を施文する。X線写真（図版43）によると内部には20数個に及ぶ小石がつまっており、ふると音がする。時期は中期後葉と考えられる。

（3）グリッド出土石器

広木上宿遺跡からは石器が多量に出土している。早期から前期の土器が出土している62グリッド付近からも、打製石斧や礫器などの石器が出土している。それらの石器の中には中期の石器と異なるものもあり、それらは早期から前期の石器群として、とらえることができる。また頁岩やホルンフェルス製の剥片類が遺跡全体から多量に出土していることも特徴的で、これらの剥片は掻器などとして、そのまま使用されたものも多くあったと思われる。ここでは完形品を中心に、図示することとする。

1．石鏃（第76図1～10）

10点を出土した。基部は無茎で、平基のものはなく抉りが入るものである。1～3は基部の抉りが比較的浅い。側縁は1はやや緩湾状になるもので、直線的に開く。2は側縁がゆるやかに外湾する。3は側縁が鋸歯状になるもので、やや抉りが入る。4、5は基部の抉りが1～3に比較して深く入るもので、4は黒色の強い黒曜石を用い、基部の抉りは丸みを帯びる。5は三角形状に直線的に基部の抉りが入り先端は鋭く尖る。黒曜石製で透明な石質である。6は基部を欠損するもので、調整は粗い。7は左側縁と刃部と基部の先端を欠損する。調整は粗い。8～10は未製品と考えられるものである。8は表面に大きく自然面を残す。9はおおまかな二次剥離が施される段階で、形は整っていない。10は第一次剥離面が大きく残るもので、二次剥離の痕跡がある。いずれも他の出土している製品よりも小形のもので、これから製品を作り出すかは不明である。

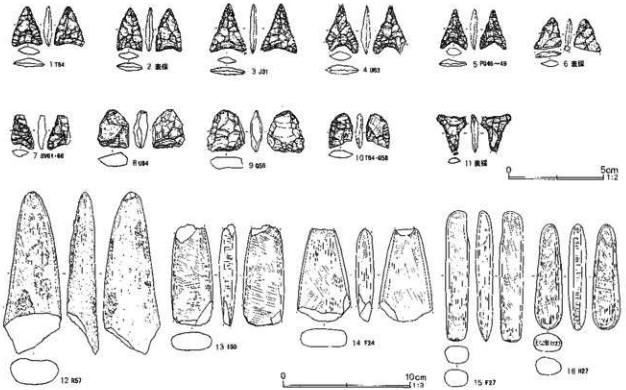
2．石錐（第76図11）

1点のみ出土した。製作工程は石鏃と変わらないが、刃部部分は厚みを持って作りだしている。

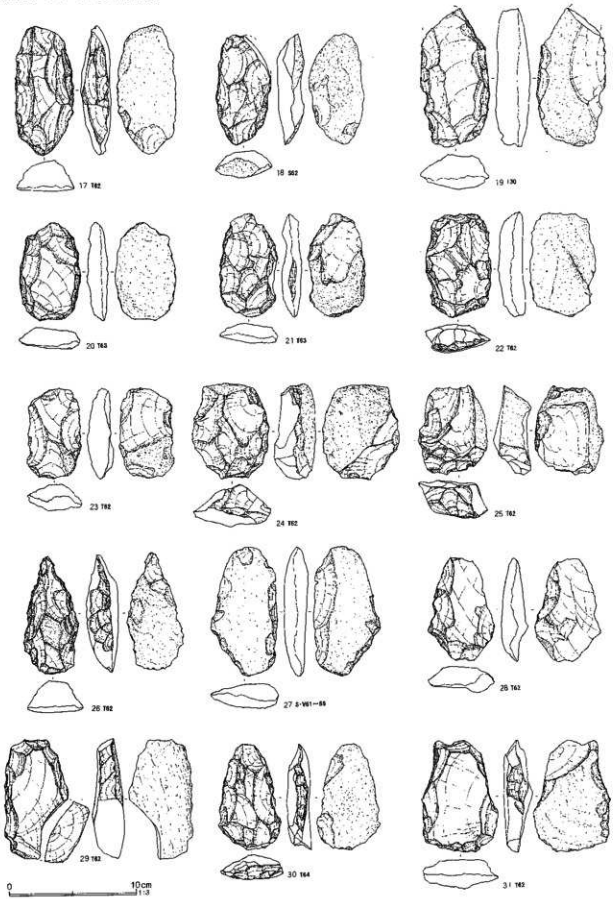
3．磨製石斧（第76図12～16）

5点出土した。12以外は精緻な小形のものである。12は刃部を欠損するもので、基部は尖頭状になる。側縁は対称的ではなく、器形がゆがむものである。剥離調整部分は敲打を加えた後、研磨を施している。13、14は小形のいわゆる定角式のものである。13は丁寧な

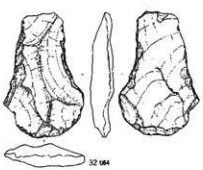
第76図　グリッド出土石器(1)

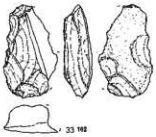


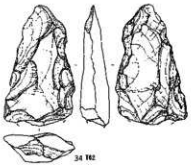
第77図　グリッド出土石器(2)

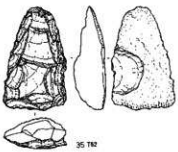


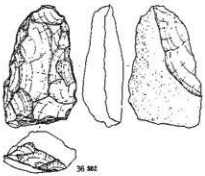
第78図　グリッド出土石器(3)

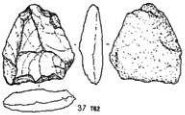


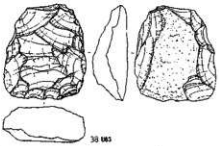


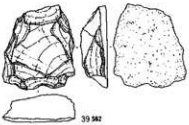


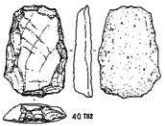


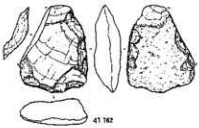


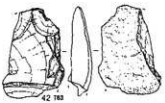


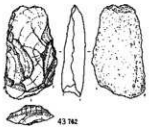


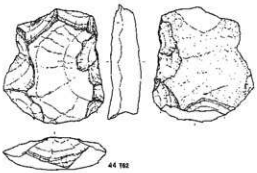


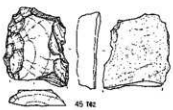




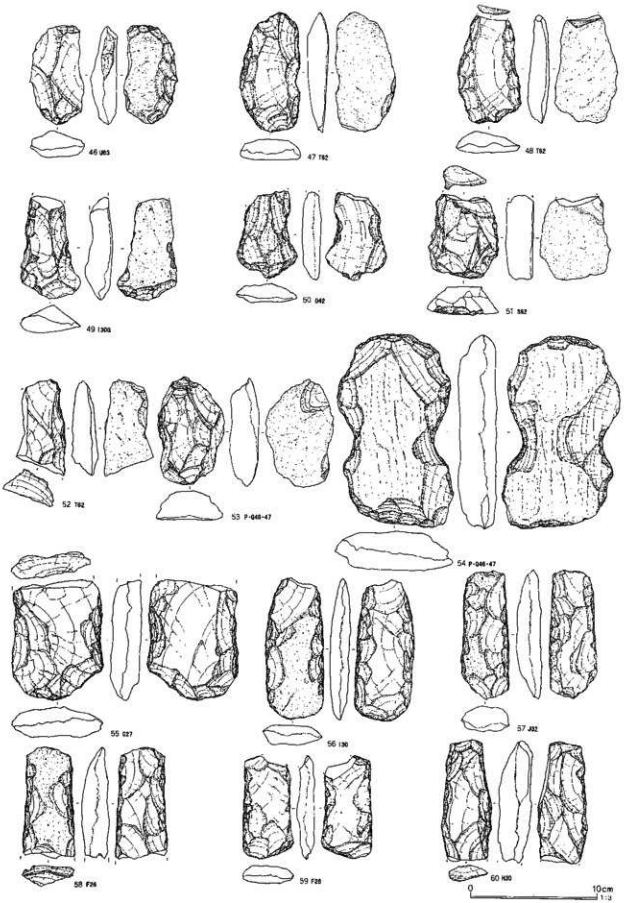




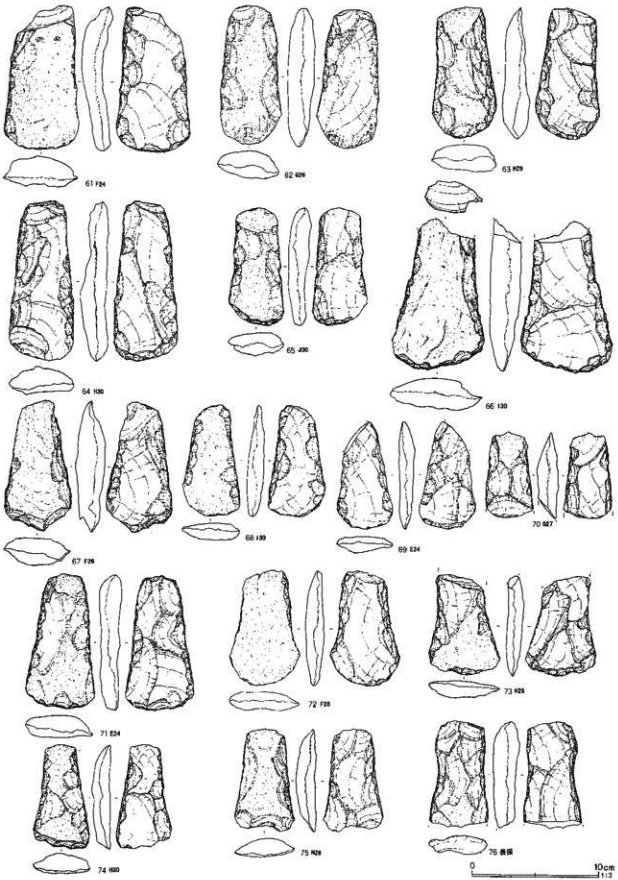




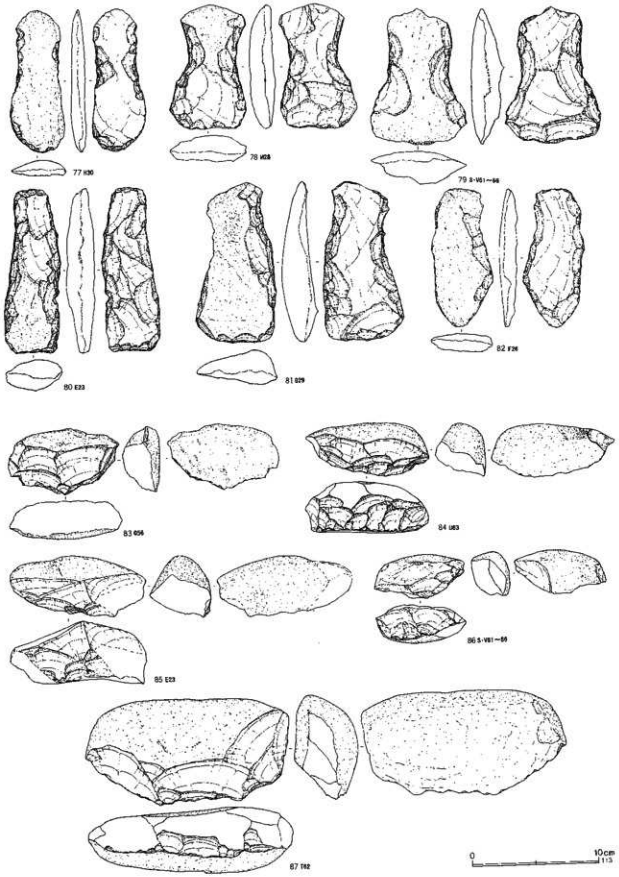
第79図　グリッド出土石器(4)



第80図　グリッド出土石器(5)



第81図　グリッド出土石器(6)



研磨を器面全面に施す。基部先端と刃部先端を欠損する。刃部は欠損後も使用されたらしく端部が潰し状になる。14は13と比べると刃部幅が広くなるもので、基部先端と刃部が欠損する。刃部は再利用のため調整剥離が残るが、使用はされていない。15、16は幅が細く縦長のもので、15は基部と刃部の幅に差はほとんどなく、直線的に側縁が作り出されている。側縁は定角式状に角張り、先端部に両刃の刃部を作る。刃部は丁寧な研磨により鋭く作り出しており、刃こぼれ状の痕跡がある。16は刃部に最大幅のくるもので、側縁は横方向の研磨痕が残り面を作り出す。刃部は明確に作り出されていないが、器面全体に擦痕状に研磨の痕跡がみられることから、製作途中のものとも考えられる。12以外は中期の遺構や上器が検出されるグリッドから出土しているが、撚糸文系の土器もごく少量だが出土しており、15、16が形状から早期のものである可能性は高い。

3．打製石斧（第77図～第80図、第81図77～82）

広木上宿遺跡出土の石器の中で多量に出土するものの一器種である。打製石斧は平坦な装着側に自然面を利用するものと、表面に曲面を持つ自然面が来て第一次剥離面が平坦な装着側となるものとに二分される。刃部は前者は片刃状で後者は両刃状である。前者のほとんどが出土する62グリッド周辺は早期から前期の土器が出土する部分と重なる。また後者のほとんどが中期の遺構が検出されるグリッドより出土している。これらのことから、前者は早期から前期の時期で後者は前期後半から中期の時期と考えられる。

第１類（第77図、第78図、第79図46～53）

平坦な装着側に自然面が残るものである。剥離調整は自然面側にはほとんど行われない。表面側にのみ刃部が作られる片刃のものである。厚みのある石器となっている。また、それらのことから母岩から剥離して素材を得たとは考えにくく、平らな面を持つ偏平な自然礫を利用したと考えられる。そのため礫器との区別が困難なものもある。早期を中心とした時期と考えられる。また石材は主としてホルンフェルスを使用しており、次に頁岩を使用する。第３類と違い砂岩はほとんど使用されない。

側縁部は刃潰し状に細かい調整はあるが、磨滅しておらず鋭いままである。また、刃部も磨滅していないものが多い。磨滅して鋭さをなくすものも、石全体が風化しているため、使用のためのものかは不明である。

17～23は基部幅と刃部幅が変わらないやや縦長のものである。基部先端は丸みを帯びる。刃部先端は、17、18は尖頭状になり、19～23は丸みを帯びる。剥離調整は裏面から角度をつけておこなっており、厚みのある石器となる。自然面側には剥離調整の痕跡はほとんどなく、表面側の調整剥離は粗く施されている。24、25も基部、刃部幅の変わらないものだが、形は正方形に近く刃部の角度が鈍いもので、礫器に近い。24は基部から裏面にまわりこんで自然面が残るもので、25は側縁周辺に自然面が残る打製石斧でこの残りかたは遺跡内ではほとんどみられないものである。

26～45は刃部幅に最大幅のあるもので、いわゆる撥形である。26～34は刃部が丸刃となるものである。26は基部が尖頭状になる。27は両面に自然面を残すもので、調整剥離はほとんど行われていない。素材に偏平な自然礫を利用している。28、32は両面とも自然面はなく、34は基部の側縁部の一部に自然面の残るものだが、形状などからこの類に含めた。刃部の先端を欠損する。29は表面に大きく一次剥離を施し、その周縁を調整剥離を行なうもので他にも同様な手法で作られているものがある。36～41は刃部が平刃となるもので、35、36以外は側縁部分が短くなり、短い幅広な形状となる。42～45は基部や側縁部、刃部などを大きく欠損するものだが、残存部から刃部に最大幅がくるものと考えられる。

46～53は内湾する側縁と外湾する側縁を持つ非対称的となる石器で、そのために刃部が偏るものである。46～50は右側縁が内湾し、51～53は左側縁が内湾する。46、47は基部、刃部ともに先端が丸くなるもので、幅が変わらないものである。48～51は基部を欠損する。48～50は刃部に最大幅がある。51は刃部の角度

が90°に近いもので、刃部は側縁から真上方向に向かって剥離がなされている。礫器との判別が難しいものだが、厚さや大きさなどから打製石斧とした。52は刃部、左側縁が欠損するものである。53は最大幅が基部側にあるもので、基部、刃部の先端は丸くなる。

第2類（第79図54）

両側縁に大きく抉りの入るいわゆる分銅形のものである。大形のもので、自然礫の素材の形を生かして最小限の調整を加えている。刃部はやや偏るもので平刃となり、基部の先端は丸く最大幅は基部側にある。この形状のものは広本上宿遺跡からは第84号住居跡から1点のみ出土している。形状や剥離調整などから、中期のものではないと考えられる。また後期以降に出土する分銅形の打製石斧とも言えない。礫器状であることなどから、早期から前期のものである可能性がある。

第3類（第79図55～60、第80図、第81図77～82）

自然面が表面にくるもので、裏面は一次剥離面を大きく残す。ほとんどの石器に自然面が残存する第1類に比較すると、自然面が残らないものも多い。剥離調整は両面に施され、表面のみ施した第1類とは大きく違い、刃部は両刃状となり側縁や刃部の角度が鋭くなる。側縁部は刃潰し状の調整を行い、ほとんどの側縁部の先端は鈍く磨滅している。刃部の先端も磨滅するものが多い。これらは76、79の2点を除くと、中期の遺構が検出されたグリッドで出土している。時期は遺構と変わらないと考えられ、中期を主体とする打製石斧と考えられる。石材は第1類とは逆で、砂岩が多用され、次にホルンフェルスを使用する。

55～60は基部幅と刃部幅の変わらないもので、いわゆる短冊形である。55は大形であったもので、基部側の半分を欠損する。側縁は直線的で両面に一次剥離面を大きく残す。56、57は刃部がやや丸みを持つ。58、60は刃部を破損するもので、60は厚みを持ち、側縁がやや外湾する。59は基部、刃部ともに欠損するが、刃部は再調整を加えて再利用している。56～58は表面に自然面を残すもので、他は自然面が残らないものである。

61～79は刃部に最大幅がある撥形のものである。刃部はやや偏るものもあるが、丸みを持つものが多い。61～73、77は刃部が丸みを持つものである。74、75、76、79は刃部が平らに近いものである。61は断面が裏面に大きく反るもので、自然面はほとんど調整剥離はされていない。62は風化が激しい。64は自然面が残らないもので、刃部の調整は裏側にのみ残る。65は刃部欠損後に剥れ口を再調整して再利用している。67は刃部の先端がやや尖頭状になる。69は自然面が残らないもので、刃部の加工は裏側に簡単な調整があるのみである。70は刃部が欠損するものだが、剥れ口をそのまま刃部として再利用しており、刃部に刃こぼれ状の痕跡が残る。72、73は抉りは入らないが、側縁が刃部の直上で外反するものである。72は側縁の刃潰し状の細かな調整以外は、自然面のある表面に調整剥離などは施されない。74、75の平らに近い刃部は、刃部欠損後に調整剥離を行って再利用しているもので、原形の刃部の形状はわからない。76、77は側縁部にゆるやかな抉りの入るもので、76は刃部を欠損する。77は一次剥離によって、目的の形をほとんど作り出しており、刃部の細かな調整と側縁の抉りのための細かな調整以外は、二次剥離などの工程がなされていない。78、79は側縁にやや深めの抉りが入るもので、長さに対して幅が広いもので、表面に自然面が残る。刃部は粗く調整剥離を行い、丁寧に作り出されていない。

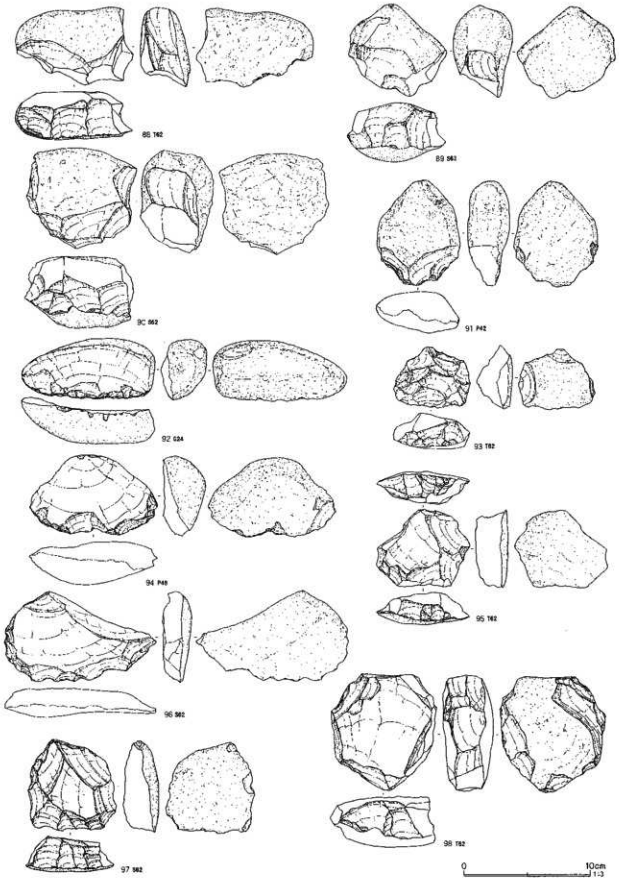
80～82は非対称的な内湾する側縁と外湾する側縁を持つものである。そのため刃部が偏る形となっている。80、81は左側縁が内湾するもので、82は右側縁が内湾する。刃部は80、81は平刃で、82は尖頭状である。いずれも自然面を表面に残すものである。

打製石斧の平面形態は第1類と第3類とは共通していて、いわゆる短冊形、撥形、また側縁が非対称的なものなど平面形には時期差があまりあらわれていないことがわかる。

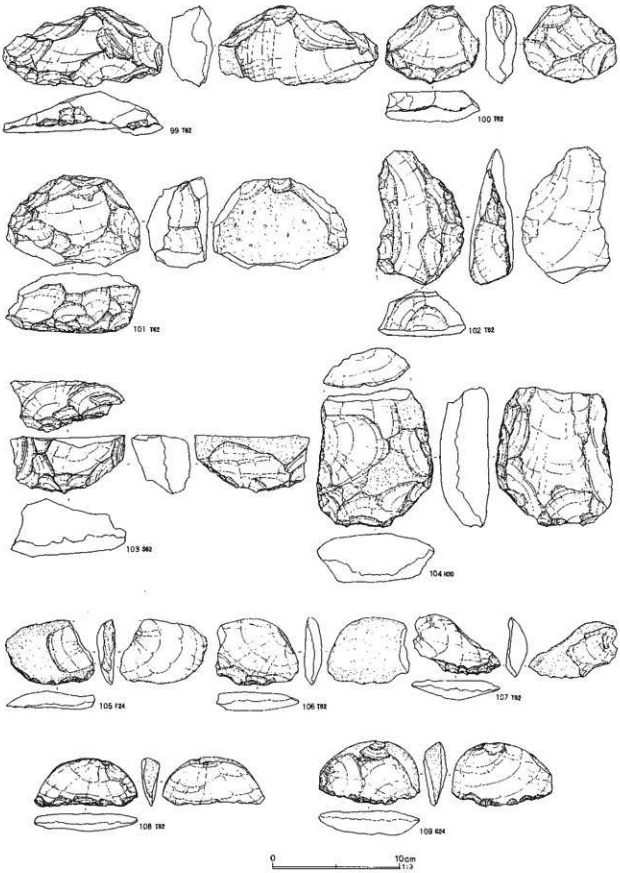
4．礫器（第81図83～87、第82図、第83図99～104）

礫器も打製石斧と同様に多量に出土している。主に

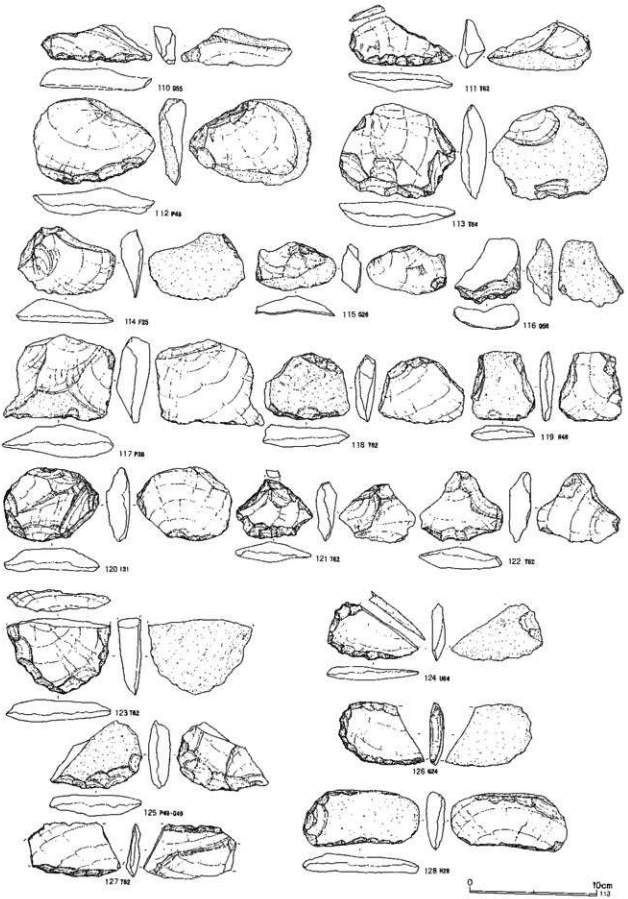
第82図　グリッド出土石器(7)



第83図　グリッド出土石器(8)



第84図　グリッド出土石器(9)



自然礫の一部に刃部を作り出すものである。ほとんどが表面のみで刃部を作り出す片刃のものである。打製石斧の1類と区別が困難なものもある。刃部の形状は礫の形状に合わせて丸みがあるものが多く、平らなものはほとんどない。

83～91は自然礫の一部に刃部を作り出すもので、刃部以外は剥離を施さず、裏面と表面にも自然面が残るものである。83～88は自然礫を横長に使い刃部を作るものである。84～86は裏面から刃部がほぼ直角に近く作られるものである。86はやや小形のもので、裏面に剥離痕が見られる。87は大形のもので刃部の中央部分に細かな調整を加え、刃こぼれ状の痕跡がある。88は横長の自然礫の右側の一部を打ち欠いている。90は両側を打ち欠いて刀形状に作り出している。89、91は自然礫を縦長に使用するもので、基部の頂部は自然礫の一角を用いて角状になる。89は裏面からほぼ直に刃部を作るが、91は45°程度の角度で刃部を作り出す。

92～98、101は表面に大きく一次剥離面が残るもので、自然面が表面側には残らないものである。刃は表面側にのみ作り出された片刃のものである。92、94、96は横長のもので、一次剥離によって形状を整え刃部に調整剥離を加える。92の刃部はやや平らに近いものである。93、95、97は平面形が三角に近いもので、表面は一次剥離後に二次剥離を周縁から施して形を整える。やや小形のもので、97は第1類の打製石斧と区別が難しい。98、101は裏面にも側縁からの二次剥離を加えて形状を整えるもので、98は方形に近く101はやや横長のものである。98は自然面が基部の頂部にも残るものである。

99、100は両面とも調整剥離を加えるもので、自然面がほとんど残らないものである。99は裏面に横方向からの剥離面が大きく残るもので、刃部は剥離によって鋭く作り出されている。100は裏面は形を整える調整を施すだけで、細かい調整剥離は刃部側にのみ施す。

102は裏面に一次剥離面のみを残すものである。縦長に礫を使用するもので、刃部を欠損する。側面は細かい刃潰し状の調整を加えるが、形は整っていない。

103、104は裏面からも刃部の調整剥離を行うもので、両刃のものである。103は基部側に面を作り調整を加えて、刃部状に作り出している。礫器としたが用途などは不明である。104は基部を欠損するものである。

礫器の時期は104は形状や刃部の調整などから中期と考えられるものである。他の礫器については片刃であることや石材はホルンフェルスを多用するなど、打製石斧の第1類と使用する石材が共通すること、また主に出土するグリッドが早期、前期の出土したグリッドと重なることから、早期から前期の礫器であると考えられる。

5．掻器（第83図105～109、第84図）

母岩から剥りとった剥片に刃部をつけるもので、横刃のものである。広木上宿遺跡からは多量の剥片が遺跡の全体から出土している。大きさも様々で砕片状のものもある。剥りとっただけで使用にたえるものが多く、そのような剥片も掻器とするならば打製石斧や礫器よりはるかに多く出土していることになる。実際に使用されたかどうかは判別は困難である。そこでここでは刃こぼれ状の使用が明確な剥片や、刃部を作り出す調整を加えているものを、掻器として図示することとした。

105～119は礫から剥離した剥片の鋭利な端部を刃部として利用しているもので、刃部や基部には調整剥離を簡単に施す。105～107、111、113～119は表面または裏面に自然面を残すもので、106、114、116は自然面に剥離調整は加えられない。108～110、112は側縁部に自然面を残すものである。114、115、117～119は刃部が剥離のまま使用されたもので、刃こぼれ状の細かい剥離が残る。他は簡単な剥離調整を刃部に施している。剥片はほとんどが横長に用いるが、119は縦長に用い側縁に調整を加え形を整えている。

120～122は自然面が残らないもので、剥離の後に側縁より調整剥離を加えて形を整えている。121、122は形状は石匙状のもので、つまみ状に基部が作り出される。

123～127は刃部が側縁に沿って周縁を巡るもので、

127以外は表面または裏面に自然面を大きく残すものである。123、124、126は片刃のもので、自然面に調整は施されない。123、124、126は刃部の調整剥離のみが表面に残るもので、調整順序や平面形状が似通っている。125は両面から刃部調整を行い、刃部に両刃を付けるものである。126は上下に刃部を付けるもので、上下の刃部は面を変えて一面ずつ付ける。

128は横長剥片の長辺の一方に刃部をつけるもので、自然面が残る基部には刃潰しを行う。刃部はゆるやかに内湾する。中期の横刃形石器である。

掻器は剥片利用の調整が粗雑なものと、丁寧に調整するものとにおおまかには分けられるが、それが時期差であるか機能差であるかはわからない。また掻器は遺跡全体にわたって出土しており、その時期は確定できない。

6．砥石（第86図146）

砂岩製のもので砥石の一部が出土した。表面の中央付近は使用のためか厚さが薄くなっている。裏面も使用している。被熱のため器面が変色しており赤色化している。

7．磨石（第85図、第86図138～145、147～149、第87図150～153）

磨石も広木上宿遺跡から多量に出土する石器である。磨石は磨面のみ残るものはなく、敲打痕の残るものや器面に凹部の残るものがあり敲石や凹石との分類が困難なものである。そこでここでは大きく磨石と凹石とに分け、使用痕については個々に説明を加えることとする。

129～136は比較的偏平な自然礫を使用するものである。平面形状は円形または楕円形になるものである。129、130は磨面は表裏2面で、周縁部分には敲打の痕跡が残る。131は表裏の２面に磨面があるもので、中央部分は敲打により浅い凹部が作り出されている。132は丁寧な磨面が残るもので、周縁の一部には敲打の痕跡がある。133～136は欠損しているもので、133以外は表裏の2面の磨面を持つ。133は面を作る側縁を持ち磨面とする。周縁には敲打痕があり、136は特に顕著であった。134、136は中央付近に敲打のためやや浅い凹部を持つ。

137～145は厚みをもつもので、球状に近い形になるものもある。137～141は厚みを持ち表裏面の曲面に磨面を持つ。138は周縁の一部と表面の中央付近に敲打痕がある。器面全体が被熱のため変色し赤くなる。139は周縁が激しい敲打によって形の変わるもので、敲石に近いものと考えられる。140、141は軽石製のものである。142～145は小形のものである。142は平坦面に磨面が残る。143、144は軽石製で曲面全面に磨面が残る。145は周縁の一部に敲打痕がある。

147～153は縦長の棒状になるものである。147～149は両側縁を四角に面を取るものである。磨面は両側面も加え、４面を作り出す。148、149は両側縁も四角く面を取る、立方体状のものである。148は両端部に著しく敲打痕が残り、また4面の磨面の中央部付近は敲打のための凹部が残る。149も端部に著しい敲打痕が残る。敲石としての機能が主体なのか、磨石としての機能が主体なのかは不明のため磨石として分類した。

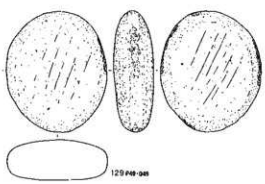
150～153は側面は丸みのあるものである。150は円筒状のもので、全体が磨面として使用されている。右側縁の一部に敲打痕が残る。被熱のため赤色に変色している。151は右側面に面が取られている。両端部と両側縁と表裏面の中央付近には敲打の痕跡がある。152は磨面は全周するもので、表裏面の中央付近に敲打による凹部が残る。また側縁が狭くやや歪る左側縁には敲打痕が残る。153は右側縁を形が崩れる程敲打を加えているもので、表裏面の中央付近には凹部が残る。

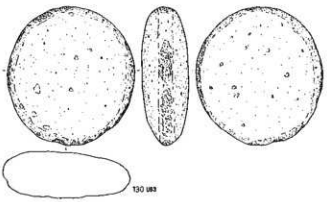
8．凹石（第87図154～158、第89図164、166）

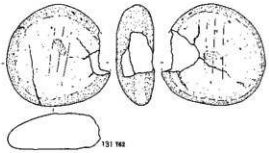
磨石と区別は難しいが、凹部が深くしっかりとつくもので、断面にも明確に窪みがつくものを凹石とした。石材も磨石は安山岩や凝緑岩が多いのに比べ、凹石は絹雲母片岩などの片岩類を使用することが多い。154～158は比較的小形のもので、164、166は大形のものである。磨石と同様に敲打痕が側縁を中心に残る。

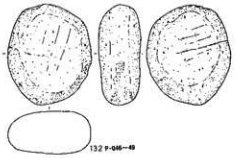
154～156は厚みが薄い偏平なもので、平面形は楕円状である。表裏面には磨面が残る。154は裏面が大きく

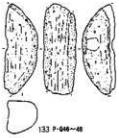
第85図　グリッド出土石器(1)

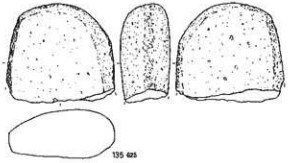


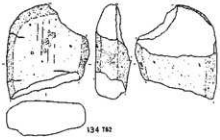


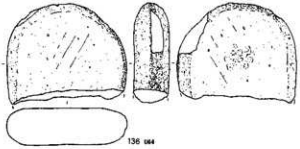


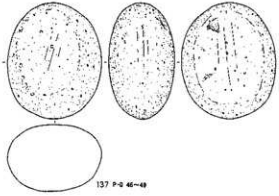




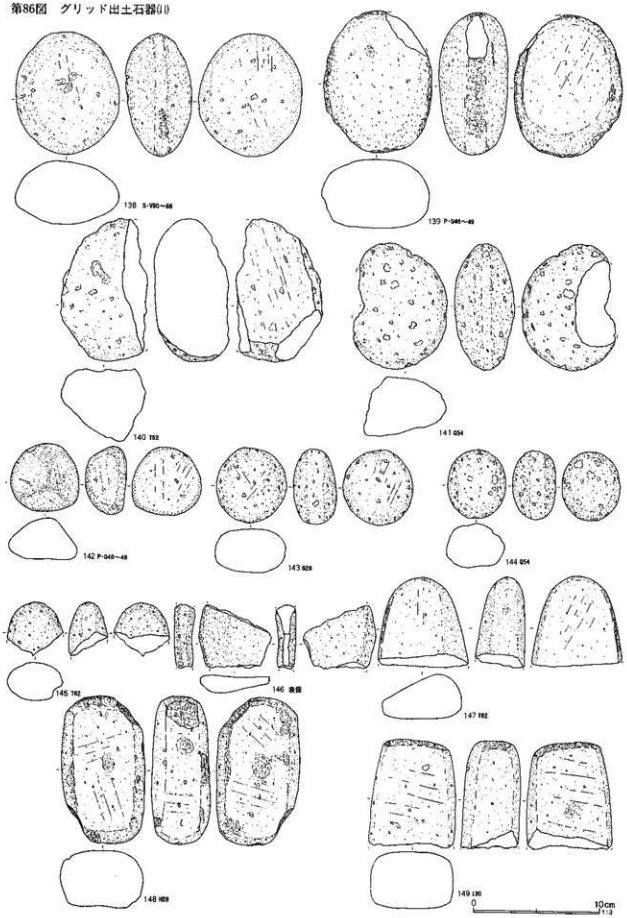




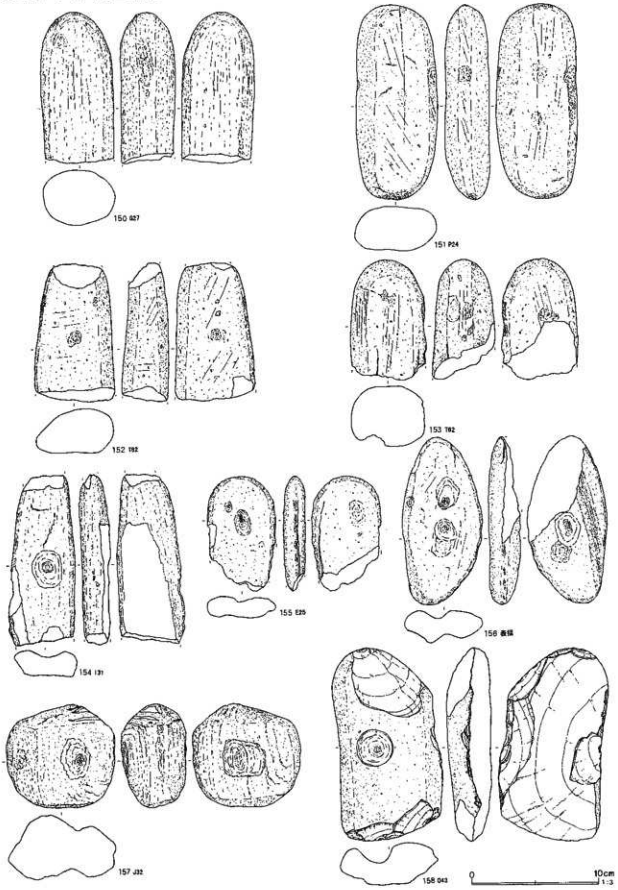




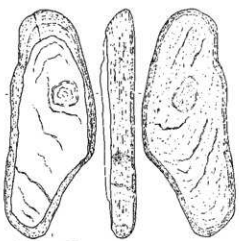
第86図　グリッド出土石器(1)



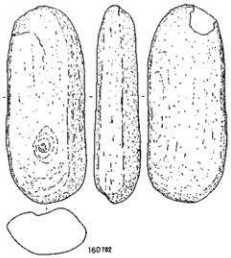
第87図　グリッド出土石器(12)



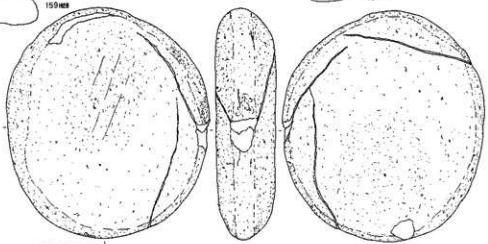
第88図　グリッド出土石器(13)



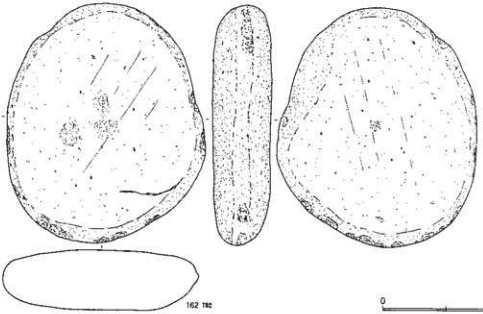
159 H28



160 T82



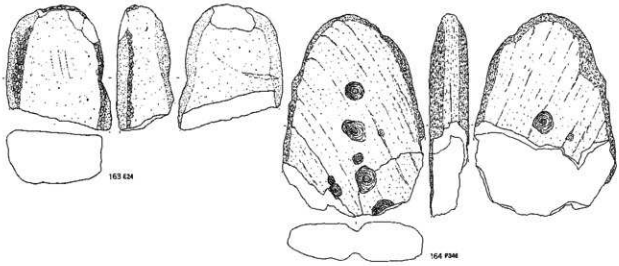
161 F25・26

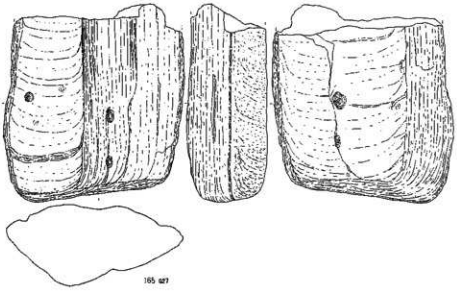


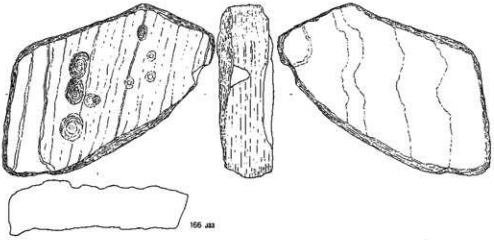
162 T82

0　10cm
1:3

第89図　グリッド出土石器(4)

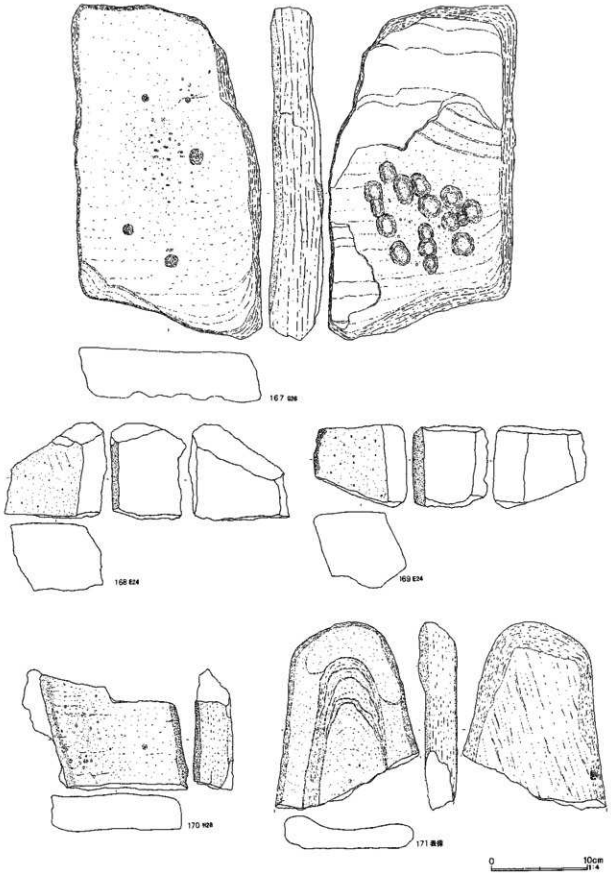






0　10cm
1/4

第90図　グリッド出土石器(15)



剝落する。155は側縁は敲打によって一部が欠けている。168は裏面の一部が剝落する。表裏面とも深い凹部を持つ。裏面の筋状の窪み部分は砥石のように縦方向に磨かれて窪むものである。157は平面形が正方形に近いもので、両側面に浅い凹部が残る。158は表面に大きく深い凹部があるものである。裏面が剝落した後、調整を加えており、両側面には刃潰し状の磨滅が残り、端部も刃部のように作り出し先端が使用による磨滅が見られるもので、凹石を打製石斧として転用して使用していた可能性がある。159は表面が剝落している。面を持つ側縁部分にも磨面がある。160は両面と左側面に磨面があり、面のない左側縁の稜線上には敲打痕が残る。凹部は1個所のみで、磨石かどうかは区別がむずかしい。164、166は大形のものである。164は表面の中央に深い凹部を縦にならべるもので、半分を欠損している。裏面は1個の凹部が残る。被熱のため赤い変色が全体に見られる。166は表に複数の凹部があるもので、裏面は大きく剝落している。側面には自然面が残る。166は石皿であった可能性がある。

凹石は小形のものと大形のものとに分けられ、小形のものは、縦長で偏平なものが多く、持ち運びに容易である。凹部は一つの面に1個所か2個所で面のほぼ中央付近にあり、複数個所つくものはない。それに比べ大形のものは凹部が複数個所つけられ、166のように不規則に多数の凹部を付けるものもある。

出土範囲は磨石と同様に遺跡全体に及び、時期差は捉えられなかった。

9、石皿(第88図161、162、第89図163、165、第90図167〜171)

グリッド出土石器では中央が窪む定形的な石皿は171のみであった。他は円形または方形の平坦面に磨面を持つもので、持ち運びに不適当な大形のものである。窪みはほとんどなく、形状は円形のものは磨石によく似ている。方形のものは形状は不定形である。石材は、片岩類や安山岩などが多く、磨石や凹石と使用する石材は共通している。

また大形になると考えられる破片についてもここに含めることとした。

161、162は円形の偏平なもので、表裏の2面が使用されている。使用面はよく磨かれ、平滑なものである。161の表面はやや窪む。161、162とともに周縁に敲打の痕跡がある。161は中央部にも敲打の痕跡がある。163は表面が平らに良く磨かれており、光沢も持つ。側面から裏面は使用はされておらず自然面のままである。使用面の周縁は敲打痕が顕著で、周縁の形が変形する部分がある。全体の半分を欠損すると考えられる。165は形の安定しないものである。上部を欠損している。表面の中央に縦方向に溝状の窪みが残る。窪み部分は良く使用されていて、特に中央付近は良く磨かれている。溝の両側の平坦な2面にも使用面が残る。側縁と裏面は自然面である。表面と裏面に凹部がいくつか残る。167は方形に近い大形のもので、表面は良く使用され、下半部は使用のためごく浅い窪み状になっている。表面には凹部が4個所ほど残る。また中央付近は敲打による細かな孔が多く残っている。裏面には凹部が多量に残るが、みな同じ深さで不規則に並ぶものである。裏面の一部が剝落するが、形状は完形のものである。168、169は磨面を持つ大形の破片で一面に磨面が残り、他は破損している面である。170も側面の一部と表面の一部のみが残存する破片である。使用面は表面で、横方向の擦った痕跡がある。171は表面の中央部が窪むもので、窪みのまわりは縁取るように高くなる。形状は楕円広がる楕円形になるものである。裏面の平坦面に自然面を残すもので、他は整形している。

第5表　グリッド出土石製品・土製品一覧表

図版番号		出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
第75図	1	H-28	土製円盤	3.33	3.42	1.35	14.79	
第75図	2	F-26	土製円盤	2.08	2.00	1.00	5.07	
第75図	3	表採	土製円盤	3.32	2.92	1.22	10.70	
第75図	4	H-28	土製円盤	2.87	3.12	0.78	8.29	
第75図	5	I-30	土製円盤	2.81	3.04	1.10	11.90	
第75図	6	SJ-7	土　鈴	2.45	2.65	2.45	12.32	
第75図	7	H-27	抉状耳飾	2.97	2.50	9.50	6.94	

第6表　グリッド出土石器一覧表

図版番号		出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備　考
第76図	1	T-64	石　鏃	2.09	1.62	0.46	0.99	チャート	
第76図	2	表彩	石　鏃	2.29	1.35	0.40	0.97	チャート	
第76図	3	J-34	石　鏃	2.59	1.91	0.38	0.99	チャート	
第76図	4	U-63	石　鏃	2.54	1.74	0.52	1.26	黒曜石	
第76図	5	PQ-46～49	石　鏃	2.10	1.42	0.38	0.64	黒曜石	
第76図	6	表彩	石　鏃	1.70	1.43	0.37	0.71	チャート	
第76図	7	SV-61～66	石　鏃	1.83	1.22	0.42	0.66	黒曜石	
第76図	8	U-64	石　鏃	2.00	1.68	0.75	2.14	チャート	SJ-46・47
第76図	9	Q-56	石　鏃	2.20	1.95	0.65	3.26	チャート	
第76図	10	T-64	石　鏃	1.81	1.28	0.38	0.68	黒曜石	SJ-52・55
第76図	11	表彩	石　鏃	1.97	1.62	0.38	0.83	チャート	
第76図	12	R-57	磨製石斧	12.76	4.53	2.53	166.35	凝灰岩	
第76図	13	I-30	磨製石斧	8.00	3.23	1.40	62.27	凝灰岩	
第76図	14	F-24	磨製石斧	7.31	4.22	1.45	74.39	凝灰岩	SJ-7
第76図	15	F-27	磨製石斧	10.22	1.87	1.36	48.91	蛇紋岩	
第76図	16	H-27	磨製石斧	8.30	2.20	1.40	41.61	蛇紋岩	
第77図	17	T-62	打製石斧	10.20	4.65	2.38	128.74	ホルンフェルス	SD-21
第77図	18	S-62	打製石斧	8.68	4.40	2.11	86.06	ホルンフェルス	
第77図	19	I-30	打製石斧	10.85	5.50	2.75	184.22	ホルンフェルス	
第77図	20	T-63	打製石斧	7.70	4.90	1.65	70.46	ホルンフェルス	
第77図	21	T-63	打製石斧	8.11	4.62	1.58	60.99	ホルンフェルス	
第77図	22	T-62	打製石斧	8.29	5.22	2.24	100.17	頁岩	SD-21
第77図	23	T-62	打製石斧	7.10	4.35	2.05	64.96	ホルンフェルス	SD-21
第77図	24	T-62	打製石斧	7.50	6.19	3.30	152.14	頁岩	SD-21
第77図	25	T-62	打製石斧	7.00	5.48	2.95	108.60	ホルンフェルス	SD-21
第77図	26	T-62	打製石斧	9.21	4.48	2.55	100.90	ホルンフェルス	SD-21
第77図	27	SV-61～66	打製石斧	10.15	5.35	1.95	120.05	点紋緑泥片岩	
第77図	28	T-62	打製石斧	8.10	5.30	2.10	69.65	ホルンフェルス	SD-21
第77図	29	T-62	打製石斧	9.45	5.10	2.48	129.38	ホルンフェルス	SD-21
第77図	30	T-64	打製石斧	8.28	5.01	1.95	85.98	ホルンフェルス	SJ-52
第77図	31	T-62	打製石斧	8.80	6.00	2.30	143.60	ホルンフェルス	SD-21
第78図	32	U-64	打製石斧	9.79	6.40	1.82	97.44	砂岩	SJ-46・47
第78図	33	T-62	打製石斧	7.36	4.30	2.20	62.40	ホルンフェルス	SD-21
第78図	34	T-62	打製石斧	9.45	5.65	2.30	108.78	ホルンフェルス	SD-21
第78図	35	T-62	打製石斧	8.11	5.05	2.50	102.21	ホルンフェルス	
第78図	36	S-62	打製石斧	9.58	5.85	3.30	174.07	ホルンフェルス	
第78図	37	T-62	打製石斧	6.35	5.80	1.85	56.76	ホルンフェルス	SD-21
第78図	38	U-63	打製石斧	7.50	6.52	2.81	165.50	ホルンフェルス	
第78図	39	S-62	打製石斧	6.10	6.47	2.10	97.63	ホルンフェルス	
第78図	40	T-62	打製石斧	7.21	5.02	1.50	74.96	ホルンフェルス	SD-21
第78図	41	T-62	打製石斧	6.86	5.40	2.05	87.69	ホルンフェルス	SD-21
第78図	42	T-63	打製石斧	7.02	5.00	1.92	61.03	ホルンフェルス	SD-21
第78図	43	T-62	打製石斧	7.25	4.50	1.90	60.18	ホルンフェルス	SD-21
第78図	44	T-62	打製石斧	8.15	8.89	2.26	188.05	ホルンフェルス	SD-21
第78図	45	T-62	打製石斧	6.15	5.30	1.80	69.16	ホルンフェルス	SD-21

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第79図 46	U-63	打製石斧	7.78	4.30	2.15	74.26	ホルンフェルス	
第79図 47	T-62	打製石斧	9.40	4.78	1.65	88.46	ホルンフェルス	SD-21
第79図 48	T-62	打製石斧	8.39	4.96	1.70	72.58	ホルンフェルス	SD-21
第79図 49	I-30	打製石斧	8.02	4.81	2.12	73.61	ホルンフェルス	
第79図 50	O-42	打製石斧	6.91	4.82	1.50	54.21	緑泥片岩	
第79図 51	S-62	打製石斧	6.63	5.63	2.25	98.71	ホルンフェルス	
第79図 52	T-62	打製石斧	7.60	4.00	2.10	64.21	ホルンフェルス	SD-21
第79図 53	PQ-46・47	打製石斧	8.50	5.38	2.30	113.05	ホルンフェルス	SD-21
第79図 54	PQ-46・47	打製石斧	15.20	9.33	3.10	539.01	絹雲母片岩	SQ-2
第79図 55	G-27	打製石斧	9.51	7.25	2.50	236.25	ホルンフェルス	SQ-2
第79図 56	I-30	打製石斧	11.10	4.70	1.60	109.21	砂岩	
第79図 57	J-32	打製石斧	10.11	3.80	2.05	92.45	砂岩	
第79図 58	F-26	打製石斧	8.80	4.20	2.20	97.80	砂岩	
第79図 59	F-26	打製石斧	7.98	3.98	1.40	54.25	ホルンフェルス	SJ-10
第79図 60	H-30	打製石斧	9.60	3.98	2.60	117.27	砂岩	SJ-27
第80図 61	F-24	打製石斧	11.30	5.90	2.40	150.86	砂岩	
第80図 62	G-26	打製石斧	10.90	4.90	2.10	139.00	ホルンフェルス	
第80図 63	H-29	打製石斧	10.30	5.10	2.10	118.86	砂岩	
第80図 64	H-30	打製石斧	12.62	5.10	2.20	152.25	ホルンフェルス	SJ-27
第80図 65	J-30	打製石斧	9.32	4.39	1.80	80.54	砂岩	
第80図 66	I-30	打製石斧	11.90	7.30	2.40	224.87	砂岩	
第80図 67	F-26	打製石斧	10.20	5.30	2.20	127.30	ホルンフェルス	
第80図 68	I-30	打製石斧	8.76	4.55	1.35	57.48	砂岩	
第80図 69	E-24	打製石斧	8.31	4.41	1.25	46.58	ホルンフェルス	
第80図 70	G-27	打製石斧	6.75	3.82	1.78	47.75	砂岩	
第80図 71	E-24・25	打製石斧	10.45	5.30	1.75	117.10	砂岩	
第80図 72	F-26	打製石斧	9.10	5.58	1.48	85.17	砂岩	SJ-10
第80図 73	H-28	打製石斧	7.72	5.60	1.35	55.05	ホルンフェルス	
第80図 74	H-30	打製石斧	8.20	4.50	1.60	59.71	砂岩	SJ-27
第80図 75	H-28	打製石斧	8.10	4.75	1.50	65.03	ホルンフェルス	
第80図 76	表採	打製石斧	8.45	4.65	2.10	99.25	砂岩	
第81図 77	H-30	打製石斧	11.20	4.35	1.20	69.75	ホルンフェルス	
第81図 78	H-28	打製石斧	9.80	6.10	2.10	138.05	ホルンフェルス	
第81図 79	SV-61～66	打製石斧	107.00	7.60	2.65	203.27	砂岩	
第81図 80	E-23	打製石斧	12.90	4.50	2.20	157.05	砂岩	
第81図 81	G-29	打製石斧	12.60	6.40	2.80	219.90	ホルンフェルス	
第81図 82	F-26	打製石斧	10.90	4.90	1.41	77.55	砂岩	SJ-10
第81図 83	Q-56	礫器	5.20	8.90	3.00	150.29	ホルンフェルス	SJ-64
第81図 84	U-63	礫器	4.12	9.80	4.00	188.55	頁岩	
第81図 85	E-23	礫器	4.81	10.80	4.90	254.55	頁岩	
第81図 86	SV-61～66	礫器	3.50	7.20	3.00	83.22	ホルンフェルス	
第81図 87	P-42～44	礫器	8.31	16.25	5.20	857.20	ホルンフェルス	
第82図 88	T-62	礫器	6.18	9.30	4.00	256.26	ホルンフェルス	SD-21
第82図 89	S-62	礫器	7.20	7.80	4.70	242.49	ホルンフェルス	
第82図 90	S-62	礫器	8.00	8.70	5.70	502.97	ホルンフェルス	
第82図 91	P-42	礫器	8.30	6.60	3.35	198.43	ホルンフェルス	SD-2
第82図 92	G-24	礫器	4.80	10.59	3.60	231.12	点紋緑泥片岩	
第82図 93	T-62	礫器	6.12	4.90	2.75	78.17	頁岩	SD-21
第82図 94	P-48	礫器	6.30	10.10	3.40	208.97	ホルンフェルス	SJ-36
第82図 95	T-62	礫器	6.08	7.40	2.55	121.98	ホルンフェルス	
第82図 96	S-62	礫器	7.15	12.90	2.30	190.94	ホルンフェルス	
第82図 97	S-62	礫器	7.25	7.00	2.80	169.98	ホルンフェルス	
第82図 98	T-62	礫器	9.12	8.30	4.05	421.43	ホルンフェルス	SD-21
第83図 99	T-62	礫器	6.30	12.70	3.50	243.19	頁岩	
第83図 100	T-62	礫器	6.18	7.45	2.45	127.99	ホルンフェルス	
第83図 101	T-63	礫器	7.18	10.63	4.85	436.15	ホルンフェルス	SD-21
第83図 102	T-62	礫器	10.70	7.00	3.55	263.56	ホルンフェルス	SD-21

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第83図 103	S-62	磨器	4.60	9.11	4.60	180.99	ホルンフェルス	
第83図 104	H-30	磨器	11.00	9.28	3.88	542.37	安山岩	
第83図 105	F-24	掻器	5.03	6.97	1.50	53.87	ホルンフェルス	
第83図 106	T-62	掻器	5.30	6.55	1.40	58.93	頁岩	
第83図 107	T-62	掻器	4.69	7.00	1.60	38.29	ホルンフェルス	SD-21
第83図 108	T-62	掻器	3.80	8.15	1.41	45.54	ホルンフェルス	SD-21
第84図 109	G-24	掻器	5.00	8.00	1.90	70.12	ホルンフェルス	
第84図 110	Q-55	掻器	2.92	8.80	1.70	37.17	ホルンフェルス	
第84図 111	T-62	掻器	3.80	8.25	2.00	43.96	ホルンフェルス	SD-21
第84図 112	P-48	掻器	6.76	9.62	2.15	140.77	ホルンフェルス	SJ-37
第84図 113	T-64	掻器	7.41	9.18	2.00	138.18	ホルンフェルス	
第84図 114	F-25	掻器	5.35	7.70	1.80	54.38	頁岩	
第84図 115	G-26	掻器	3.80	6.31	1.50	27.24	ホルンフェルス	SJ-15
第84図 116	Q-56	掻器	5.21	5.20	2.00	43.12	頁岩	SJ-64
第84図 117	P-38	掻器	6.75	8.78	2.60	148.21	頁岩	
第84図 118	T-62	掻器	5.23	6.76	1.80	70.40	ホルンフェルス	SD-21
第84図 119	R-48	掻器	5.45	5.03	1.12	36.99	ホルンフェルス	
第84図 120	I-31	掻器	5.80	7.52	1.80	82.61	ホルンフェルス	
第84図 121	T-62	掻器	4.68	6.03	1.62	38.35	頁岩	
第84図 122	T-62	掻器	5.50	6.58	1.68	56.80	ホルンフェルス	SD-21
第84図 123	T-62	掻器	6.00	8.30	1.80	83.74	ホルンフェルス	
第84図 124	U-64	掻器	4.55	7.25	1.05	31.84	ホルンフェルス	SJ-46·47
第84図 125	PQ-49	掻器	5.40	7.26	1.70	63.17	砂岩	SD-15
第84図 126	G-24	掻器	4.95	6.85	1.10	43.53	砂岩	
第84図 127	T-62	掻器	4.29	7.35	0.90	35.54	点紋緑泥片岩	SD-21
第84図 128	H-28	掻器	4.52	9.20	1.50	77.92	砂岩	
第85図 129	PQ-49	磨石	9.66	8.05	3.18	358.42	安山岩	SD-15
第85図 130	U 63	磨石	11.00	10.15	3.70	565.12	安山岩	
第85図 131	T-62	磨石	8.00	8.30	3.00	274.44	安山岩	SD-21
第85図 132	PQ-46～49	磨石	7.96	6.71	3.40	269.85	安山岩	SQ-2
第85図 133	PQ-46～49	磨石	7.11	2.63	2.55	57.30	安山岩	SQ-2
第85図 134	T-62	磨石	7.52	6.60	2.80	139.42	安山岩	SD-21
第85図 135	G-25	磨石	7.80	8.63	3.92	446.97	閃緑岩	
第85図 136	U-63	磨石	7.93	9.60	2.92	351.65	閃緑岩	SJ-46·47
第85図 137	PQ-46～49	磨石	9.18	7.50	5.25	482.38	安山岩	SQ-2
第86図 138	SV 61～66	磨石	9.70	8.20	5.29	501.28	安山岩	
第86図 139	PQ-46～49	磨石	11.21	8.60	5.43	729.73	閃緑岩	SQ-2
第86図 140	T 62	磨石	11.26	6.80	5.85	249.98	軽石	SD-21
第86図 141	Q-54	磨石	9.95	7.50	4.70	228.24	軽石	SJ-73·74
第86図 142	PQ-46～49	磨石	5.32	5.50	3.23	121.52	安山岩	SQ-2
第86図 143	G-28	磨石	5.90	5.60	3.40	92.13	軽石	
第86図 144	Q-54	磨石	5.41	4.60	3.48	46.14	軽石	SJ-73·74
第86図 145	T 62	磨石	4.22	4.45	3.10	58.64	閃緑岩	SD-21
第86図 146	表彩	砥石	5.00	5.74	1.65	41.36	砂岩	
第86図 147	T 62	磨石	7.10	7.20	3.50	249.90	閃緑岩	SD-21
第86図 148	H-28	磨石	11.70	6.60	4.70	577.55	安山岩	
第86図 149	J-30	磨石	8.52	6.90	4.65	498.51	閃緑岩	
第87図 150	G-27	磨石	11.83	5.76	4.32	486.50	絹雲母片岩	
第87図 151	P-24	磨石	15.30	6.45	3.50	615.63	砂岩	
第87図 152	T-62	磨石	10.89	6.38	3.75	380.46	閃緑岩	SD-21·22
第87図 153	T-62	磨石	9.40	6.03	4.98	379.04	安山岩	SD-21
第87図 154	I-31	凹石	13.32	5.30	2.50	258.74	絹雲母片岩	
第87図 155	E-25	凹石	9.02	5.53	1.73	119.93	点紋緑泥片岩	
第87図 156	表彩	凹石	13.20	6.33	2.53	247.27	点紋緑泥片岩	
第87図 157	J-32	凹石	8.19	8.60	5.20	520.38	絹雲母片岩	
第87図 158	O-43	凹石	15.72	8.80	3.60	653.56	砂岩	SB-9
第88図 159	H-28	凹石	17.90	7.32	2.80	511.36	絹雲母片岩	

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第88図 160	T-62	円石	15.60	6.40	3.72	562.70	点紋緑泥片岩	SD-21
第88図 161	F-25	石皿	18.20	16.18	4.90	2196.50	閃緑岩	SJ-10・14
第88図 162	T-62	石皿	18.90	15.82	4.70	227.84	安山岩	SD-21
第89図 163	E-24	石皿	13.10	11.18	6.10	1390.49	砂岩	
第89図 164	表彩	円石	21.35	15.15	4.20	1656.41	絹雲母片岩	
第89図 165	G-27	石皿	20.90	19.36	8.50	4510.00	絹雲母片岩	
第89図 166	J-33	円石	18.22	22.70	6.05	3006.87	絹雲母片岩	
第90図 167	G-26	石皿	35.20	20.10	5.80	7210.00	点紋緑泥片岩	
第90図 168	E-24	石皿	10.00	10.75	8.05	1123.54	安山岩	
第90図 169	E-24	石皿	8.72	9.90	8.00	1004.91	安山岩	
第90図 170	H-28	石皿	12.72	17.55	4.20	1185.55	緑泥片岩	
第90図 171	M-39	石皿	19.78	15.23	4.10	1507.77	点紋緑泥片岩	

4　その他の遺物

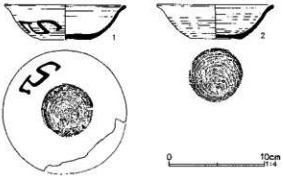
第91図に図示した遺物は、古代・中世編へ未掲載のもので、追加資料として本書に掲載した。

1・2とも第01号住居出土遺物で、いずれも須恵器坏である。

1は外面に墨書が認められる。風化により器面が荒れているために文字は不鮮明であるが、「弓」と読める。ただし縦長できわめて大きな文字であり、数文字が書かれている可能性も否めない。大きさは口径13.8cm・底径5.2cm・高さ3.7cmである。調整は不明瞭であるが、内外面ともに轆轤によるナデが施されている。底部は糸切りされ、周囲にケズリなどの調整は施されていない。胎土には白色粒子・黒色粒子・片岩が含まれ、焼成は普通である。色調は灰色で、残存率は85%程度である。注記番号は1148で、床面直上から出土している。

2の大きさは口径12.4cm・底径5.4cm・高さ3.6cmである。器面は風化によって荒れており、調整は不明瞭であるが、内外面ともに轆轤によるナデが施されている。底部は糸切りされ、周囲にケズリなどの調整は施されていない。胎土には白色粒子・片岩が含まれ、焼成は普通である。色調は灰色で、残存率は80%程度である。注記番号は1149で、床面直上から出土している。

第91図　その他の遺物



第7表　遺構新旧対照表

報告番号	発掘番号	報告番号	発掘番号	報告番号	発掘番号	報告番号	発掘番号
第83号住居跡	第A号住居跡	第45号土壙	第46号土壙	第 97号土壙	第100号土壙	第148号土壙	第157号土壙
第84号住居跡	第B号住居跡	第46号土壙	第47号土壙	第 98号土壙	第101号土壙	第149号土壙	第158号土壙
第07号掘立柱建物跡		第47号土壙	第49号土壙	第 99号土壙	第102号土壙	第150号土壙	第159号土壙
		第48号土壙	第48号土壙	第100号土壙	第103号土壙	第151号土壙	
SB07-Pit09	第90号土壙	第49号土壙	第50号土壙	第101号土壙	第104号土壙	第152号土壙	
SB07-Pit13	第89号土壙	第50号土壙	第51号土壙	第102号土壙	第105号土壙	第153号土壙	
SB07-Pit14	第91号土壙	第51号土壙	第52号土壙	第103号土壙	第106号土壙	第154号土壙	第 12号墓壙
SB07-Pit15	第93号土壙	第52号土壙	第53号土壙	第104号土壙	第107号土壙	第155号土壙	第 13号墓壙
第01号土壙	第01号土壙	第53号土壙	第54号土壙	第105号土壙	第108号土壙	第156号土壙	第 14号墓壙
第02号土壙	第02号土壙	第54号土壙	第55号土壙	第106号土壙	第109号土壙	第157号土壙	第 15号墓壙
第03号土壙	第03号土壙	第55号土壙	第56号土壙	第107号土壙	第110号土壙	第158号土壙	第 16号墓壙
第04号土壙	第04号土壙	第56号土壙	第57号土壙	第108号土壙	第111号土壙	第159号土壙	第 17号墓壙
第05号土壙	第05号土壙	第57号土壙	第58号土壙	第109号土壙	第112号土壙	第160号土壙	第 01号墓壙
第06号土壙	第06号土壙	第58号土壙	第59号土壙	第110号土壙	第113号土壙	第161号土壙	第 02号墓壙
第07号土壙	第07号土壙	第59号土壙	第60号土壙	第111号土壙	第114号土壙	第162号土壙	第 03号墓壙
第08号土壙	第08号土壙	第60号土壙	第61号土壙	第112号土壙	第115号土壙	第163号土壙	第 04号墓壙
第09号土壙	第09号土壙	第61号土壙	第62号土壙	第113号土壙	第116号土壙	第164号土壙	第 06号墓壙
第10号土壙	第10号土壙	第62号土壙	第63号土壙	第114号土壙	第117号土壙	第165号土壙	第 09号墓壙
第11号土壙	第11号土壙	第63号土壙	第64号土壙	第115号土壙	第118号土壙	第 01号溝跡	第 01号溝跡
第12号土壙	第12号土壙	第64号土壙	第65号土壙	第116号土壙	第119号土壙	第 02号溝跡	第 02号溝跡
第13号土壙	第13号土壙	第65号土壙	第66号土壙	第117号土壙	第120号土壙	第 03号溝跡	第 03号溝跡
第14号土壙	第14号土壙	第66号土壙	第67号土壙	第118号土壙	第121号土壙	第 04号溝跡	第 04号溝跡
第15号土壙	第15号土壙	第67号土壙	第68号土壙	第119号土壙	第122号土壙	第 05号溝跡	第 05号溝跡
第16号土壙	第16号土壙	第68号土壙	第69号土壙	第120号土壙	第123号土壙	第 06号溝跡	第 06号溝跡
第17号土壙	第17号土壙	第69号土壙	第70号土壙	第121号土壙	第124号土壙	第 07号溝跡	第 07号溝跡
第18号土壙	第18号土壙	第70号土壙	第71号土壙	第122号土壙	第125号土壙	第 08号溝跡	第 08号溝跡
第19号土壙	第19号土壙	第71号土壙	第72号土壙	第123号土壙	第126号土壙	第 09号溝跡	第 09号溝跡
第20号土壙	第20号土壙	第72号土壙	第73号土壙	第124号土壙	第127号土壙	第 10号溝跡	第 10号溝跡
第21号土壙	第21号土壙	第73号土壙	第74号土壙	第125号土壙	第128号土壙	第 11号溝跡	第 11号溝跡
第22号土壙	第22号土壙	第74号土壙	第75号土壙	第126号土壙	第129号土壙	第 12号溝跡	第 12号溝跡
第23号土壙	第23号土壙	第75号土壙	第76号土壙	第127号土壙	第130号土壙	第 13号溝跡	第 13号溝跡
第24号土壙	第24号土壙	第76号土壙	第77号土壙	第128号土壙	第131号土壙	第 14号溝跡	
第25号土壙	第25号土壙	第77号土壙	第78号土壙	第129号土壙	第132号土壙	第 15号溝跡	第 15号溝跡
第26号土壙	第26号土壙	第78号土壙	第79号土壙	第130号土壙	第133号土壙	第 16号溝跡	
第27号土壙	第27号土壙	第79号土壙	第80号土壙	第131号土壙	第134号土壙	第 17号溝跡	
第28号土壙	第28号土壙	第80号土壙	第81号土壙	第132号土壙	第135号土壙	第 18号溝跡	
第29号土壙	第29号土壙	第81号土壙	第82号土壙	第133号土壙	第139号土壙	第 19号溝跡	第 19号溝跡
第30号土壙	第30号土壙	第82号土壙	第83号土壙	第134号土壙	第142号土壙	第 20号溝跡	第 20号溝跡
第31号土壙	第31号土壙	第83号土壙	第84号土壙	第135号土壙	第143号土壙	第 21号溝跡	第 21号溝跡
第32号土壙	第32号土壙	第84号土壙	第85号土壙	第136号土壙	第144号土壙	第 22号溝跡	第 22号溝跡
第33号土壙	第33号土壙	第85号土壙	第86号土壙	第137号土壙	第145号土壙	第 23号溝跡	第 23号溝跡
第34号土壙	第34号土壙	第86号土壙	第87号土壙	第138号土壙	第146号土壙	第 24号溝跡	第 10号溝跡
第35号土壙	第35号土壙	第87号土壙	第88号土壙	第139号土壙	第147号土壙	第 25号溝跡	
第36号土壙	第37号土壙	第88号土壙	第89号土壙	第140号土壙	第148/149号土壙	第 26号溝跡	
第37号土壙	第38号土壙	第89号土壙	第91号土壙			第01号基壇状遺構	第 01号平場
第38号土壙	第39号土壙	第90号土壙	第92号土壙	第141号土壙	第150号土壙		
第39号土壙	第40号土壙	第91号土壙	第94号土壙	第142号土壙	第151号土壙	第01号配石遺構	第 01号集石
第40号土壙	第41号土壙	第92号土壙	第95号土壙	第143号土壙	第152号土壙		
第41号土壙	第42号土壙	第93号土壙	第96号土壙	第144号土壙	第153号土壙	第 01号埋甕	第 01号埋甕
第42号土壙	第43号土壙	第94号土壙	第97号土壙	第145号土壙	第154号土壙		
第43号土壙	第44号土壙	第95号土壙	第98号土壙	第146号土壙	第155号土壙		
第44号土壙	第45号土壙	第96号土壙	第99号土壙	第147号土壙	第156号土壙		

V 結 語

1 縄文時代中期の遺構と土器について

広木上宿遺跡は北東方向に向かってゆるやかに降りていく丘陵上に立地している。縄文時代中期の遺構は，調査区の北半部から住居跡17軒，土壙13基，埋甕1基が検出されている。集落は検出された住居跡から標高110～120mの間の比較的平坦な丘陵の中段を利用し，先端部分に向かって弧を描くように広がっていくと考えられる(第92図)。周辺の縄文時代中期の遺構では同じ丘陵上の，広木上宿遺跡の約300m北東方向に位置している瓶蓋神社前遺跡（中村 1980）から，阿玉台II式の住居跡が1軒検出されている(第92図)。同じ時期の住居跡は広木上宿遺跡からも検出されている。

遺構は密集して検出され，一部重複している住居跡や土壙もあることから，いくつかの時期にわたって集落が営まれていたことがわかる。そこで遺構の重複関係および，遺構内出土の土器からその変遷を時期ごとに分類したところ，Ⅰ～Ⅵ期の時期に分けることができた。

とくにⅢ期～Ⅵ期に関しては今回検出された広木上宿遺跡の集落の中心となった加曽利EⅡ式から加曽利EⅢ式にかけての時期で，近年県内で再検討がなされている時期でもある。そこでここでは金子直行氏の大山遺跡での加曽利E式土器の分類（金子 1997）において，基準の一つとなった連弧文土器や磨消懸垂文に注目し時期ごとに分類してみた。

1期（第93図）

第28号住居跡がこの時期にあたる。1は住居跡の床面からつぶれるような形で出土した土器で，口縁部はやや外反し頸部で括れ，胴部が膨らむ形状をしている。口縁部の楕円区画文内には角押文が区画に沿って，2列施されている。胴部には輪積痕が1段残っているが，文様などから阿玉台II式と考えられる。周辺の遺跡では前述したように，同じ丘陵上に位置する瓶蓋神社前遺跡の34号住居跡は阿玉台II式とされている。出土している土器は胴部の輪積痕以外は色調や文様など似通っており，同時期と考えられる。

II期（第93図）

II期は勝坂式の終末期に相当する時期である。住居跡では第20，23，24号住居跡の3軒，土壙では81号土壙，第82号土壙の2基がこの時期と考えられた。隆帯上に刻み目のかわりに縄文を施文する土器（第24号住居跡2，第81号土壙1）や，外側に大きく張り出す口縁部に文様帯を持つ浅鉢形土器（第23号住居跡1，第81号土壙2）などが特徴としてあげられる。土器の上下関係が不明であった第81号土壙1は本来は開く口縁部をもち胴上部が膨らみ底部に到る土器と考えられるもので，周辺の遺跡では児玉町新宮遺跡（恋河内 1996）の第14号土壙出土の深鉢形土器が本来の形に近いと考えられる。

III期（第93図）

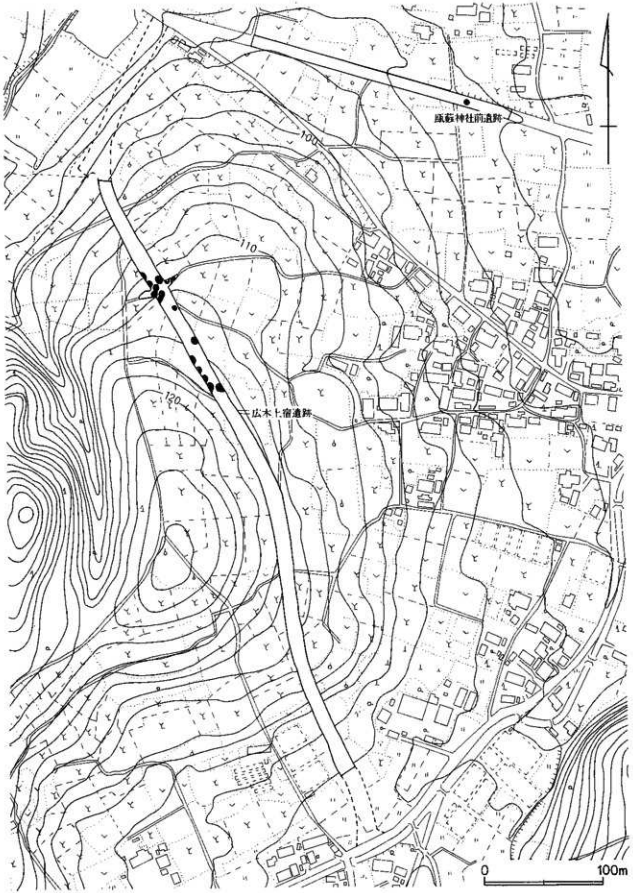
第9号住居跡がこの時期に相当する。連弧文土器，磨消懸垂文ともに出現しない時期である。1，2，4のように頸部に無文帯を残す土器が多い。地文は撚糸文のものが多く，沈線や隆帯によって胴部に懸垂文が施文される。曽利II式土器が共伴して出土している。

IV期（第93図）

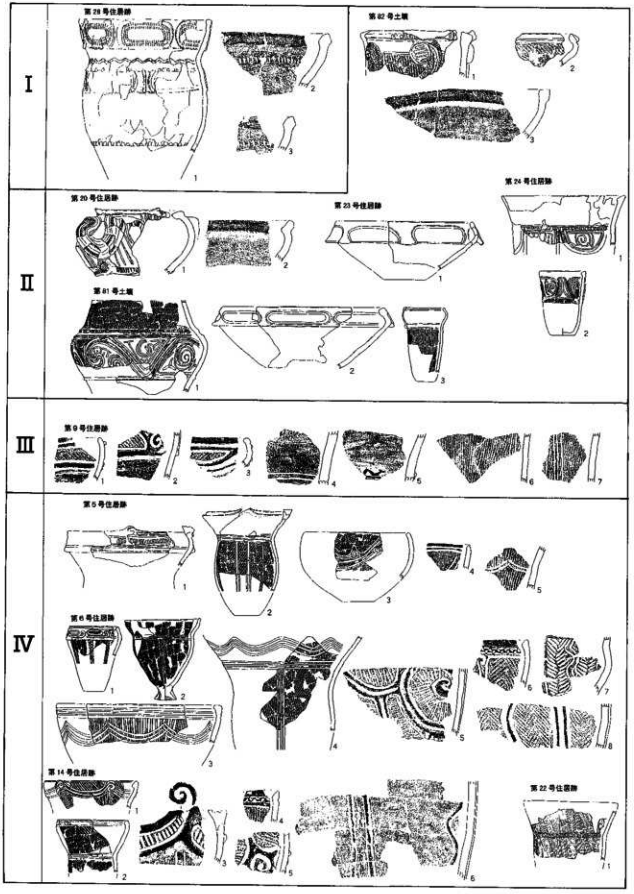
連弧文土器は出現するが，磨消懸垂文のない時期である。広木上宿遺跡においては胴部渦巻文土器が出現し（第6号住居跡5），住居跡によっては地文に羽縄縄文が施文される土器（第6号住居跡6，8）が多く出土する時期である。この時期には第5号住居跡，第6号住居跡，第14号住居跡，第22号住居跡が相当する。

第5号住居跡1は頸部に無文帯が残る深鉢形土器であるが，同様の土器は周辺では花園町古耕地遺跡（鈴木他 1983）第29号住居跡や児玉町将監塚遺跡（石塚 1986）第34号住居跡などから出土しており，連弧文土器や口縁部つなぎ弧文土器などが伴って出土している。また第5号住居跡からは連弧文土器片（第5号住居跡6，7）も出土し，頸部に無文帯が残る土器が連弧文

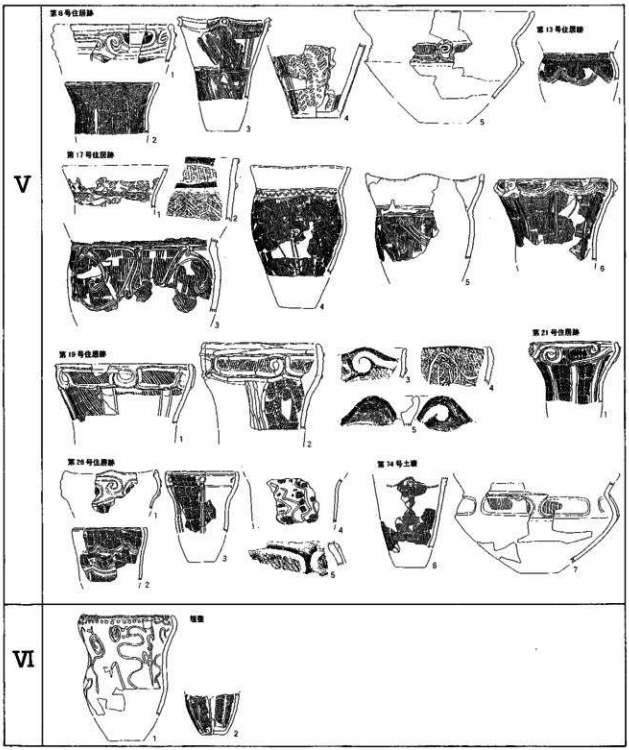
第92図　中期の住居跡と遺跡周辺の地形



第93図　広木上宿遺跡出土の縄文中期土器(1)



第94図　広木上宿遺跡出土の縄文中期土器(2)



土器の出現期にも存在すると言えることからⅣ期とした。第6号住居跡2は台付土器であることから，混入したものとも考えられたが頸部から胴部に施文される文様の構成は，第6号住居跡6と同様で他にも同じ文様が多数出土していることから同時期とした。周辺の遺跡では深谷市島之上遺跡第3号住居跡から同様の土器が出土している。底部は破損のため不明だが開く口縁部から頸部で括れる土器で，胴部を枠状に沈線で区画しその間に渦巻文を施文しており，第6号住居跡2とほぼ変わらないものである。連弧文土器が伴出して

いるが磨消懸垂文はみられない。第14号住居跡2の土器は形状は連弧文土器だが，口縁部，胴部ともに連弧文様は省略されている。他の出土している土器からⅣ期とした。第22号住居跡は炉体土器の1以外は小破片が数点出土したのみで，時期の分類は困難であったが，1の連弧文上器の器形で頸部区画のみで連弧文様が施文されないのは，第14号住居跡出土の2と同様であることから，Ⅳ期とした。

Ⅴ期（第94図）

施文された沈線文間を磨り消す，磨消懸垂文を持つ土器が出現する時期である。連弧文土器や口縁部つなぎ弧文土器の文様は崩れがみられ，口縁部と胴部の区画がなくなっているものもある（第8号住居跡2，第17号住居跡6，第26号住居跡2，第74号土壙6）。キャリパー形土器は口縁部文様の隙帯には幅広の沈線が隙帯を削るように両側に施文されるのが特徴的である（第8号住居跡1，第19号住居跡1，2，第21号住居跡2，第26号住居跡1）。この時期に相当する遺構は第8号住居跡，第13号住居跡，第17号住居跡，第19号住居跡，第21号住居跡，第26号住居跡，第74号土壙である。

第17号住居跡からは加曽利E系のキャリパー形土器は小破片しか出土しておらず，磨消縄文を持つ復元可能な土器も出土していない。炉体土器である1や入り口部埋甕の4は，雨だれ状の短沈線の使用や文様のくずれなどからⅤ期に相当すると考えられるものの，他の土器群については時期は明確ではなかった。しかしⅣ期とした第6号住居跡と一部重複しており，新しい時期である第17号住居跡に復元可能な古い土器が混入するとは考えにくいことから住居跡に伴う土器であると考えられた。そこで同様の土器群が出土している周辺の遺跡の遺構と比較したところ，児玉町の将監塚遺跡第71号住居跡の土器群をあげることができた（第95図10～14）。第17号住居跡4と第95図12は，器形はほとんど同じ土器で地文も撚糸文である。文様は第17号住居跡4はくずれが目立つ。第17号住居跡6と第95図13は，口縁部に隆帯によってつなぎ弧文が施文されるもので，地文は口縁部から連続して縦方向に条線が施文される。胴部の文様は違うもののほぼ同時期と考えられる。将監塚遺跡ではこれらの土器に伴い，磨消懸垂文を持つ加曽利E系のキャリパー形土器が出土している（第95図11）。また第95図11は器形のみを見れば，第17号住居跡6とほとんど変わらない。これらのことから，将監塚遺跡第71号住居跡と同じ土器群を持つ第17号住居跡も磨消懸垂文が出現する時期であるということができる。また第13号住居跡は第6号住居跡と近接しており，時期差が考えられた。唯一出土している炉体土器である1は，第95図12の将監塚遺跡第71号住居跡出土の土器と同じ連弧文のモチーフを持つもので，器形も同様と考えられることから，Ⅳ期の第6号住居跡よりも新しいⅤ期とした。Ⅳ期の第14号住居跡の中に重複して検出された第74号土壙は，土器から第14号住居跡よりも新しい時期であった。磨消懸垂文を持つ土器は出土していないが，第74号土壙6と第26号住居跡4の胴部には縦方向の波状の沈線文が複数施文される土器が出土しており，また第74号土壙7と第26号住居跡5は屈曲した肩部に文様帯を持つ浅鉢形土器で，文様などほぼ同時期のものと考えられ，同様の浅鉢形土器は第8号住居跡からも出土しており，Ⅴ期とすることができた。

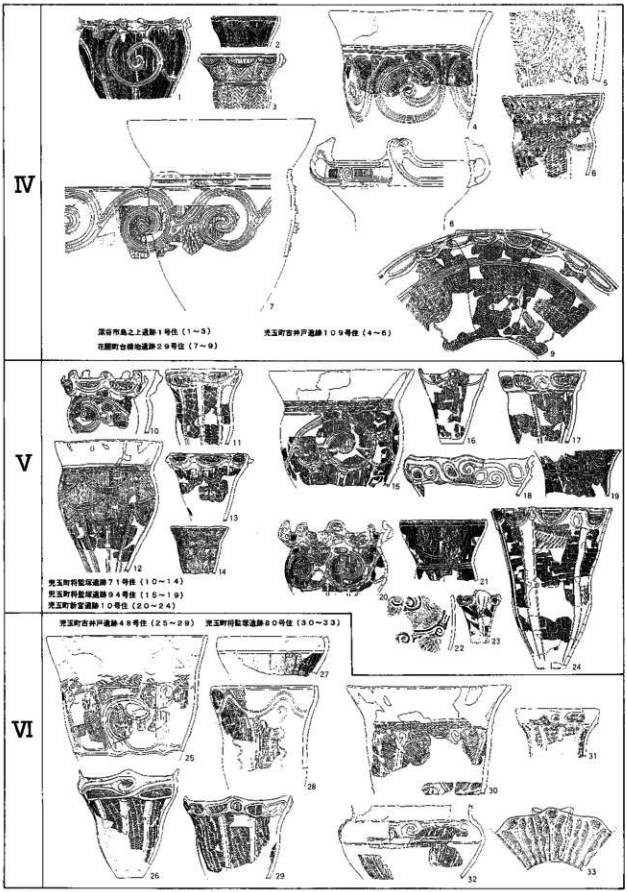
Ⅵ期（第94図）

この時期としたのは単独で検出された埋甕遺構出土の2個体である。器形や文様のモチーフなどからⅤ期よりも新しい時期としてⅥ期として区分した。住居跡はなく，今回の報告の広本上宿遺跡の集落はⅤ期で終了していることになる。

以上の分類から，広本上宿遺跡の集落はⅠ期の阿玉台Ⅱ式にはじまり，Ⅱ期の勝坂終末期までは連続し，その後Ⅱ期とⅢ期の間にはその連続性が窺えず，Ⅳ期からⅤ期にかけて再び集落はピークを迎え，Ⅵ期には住居跡が検出されていない。しかしながら今後の調査によっては集落の様相が変わる可能性も考えられる。

ところで金子氏の分類を参考に，連弧文土器や磨消懸垂文に注目したⅢ期からⅥ期の分類であるが，連弧

第95図　周辺遺跡出土の縄文中期土器



文土器は本遺跡からは出現期から多量に出土しており，盛行する時期との差が明瞭ではない。一方磨消懸垂文については，胴部に磨消懸垂文を持ち口縁部の崩れなどから時期の目安となる加曽利E系のキャリパー形土器は出土の割合が少ない。また出土していても小破片しか出土しない遺構も多い。以上よりすれば本遺跡においては連弧文土器や磨消懸垂文は分類基準とはなりにくいことがわかった。そこで新たな目安として，広木上宿遺跡でも出土し，また県北西部に多く出土する唐草文土器など中部地方の土器との関連性が考えられる無文の開く口縁部を持つ胴部大形渦巻文土器を参考に再度分類し直したい。ところでこの土器は集落を全面的に検出した児玉町の古井戸遺跡(宮井　1989)，将監塚遺跡等から出土しており，それらをまとめ作成したのが第95図である。それではこれらを参考にIII期～VI期について考えていきたい。

第1段階（第95図1～9）

胴部に渦巻文が施文される土器が出現する段階である。4は頸部の区画から垂下するように渦巻文を施文するものである。1は谷井彪氏によって大木式系土器として論じられた土器である(谷井　1991)。沈線による施文や口縁部の形態などの差はあるが，胴部は同じ形状を示し胴部の渦巻文様も4は下半分を欠損するものの同じ文様構成になると考えられ，また1と同じ沈線によって施文された同じモチーフの胴部破片（5）が出土していることから，同時期とした。広木上宿遺跡の第93図第6号住居跡5も隆帯によって同じ文様が施文されている。頸部から垂下した胴部渦巻文の他に7のように胴部に横方向に渦巻文を連続して施文するものもある。この段階では渦巻文の連結部分は1カ所のみで他は連結しない。伴出する土器は連弧文土器（2，6）や口縁部つなぎ弧線文土器（3，9）で，口縁部と胴部の区画がしっかりとされるものである。また頸部に無文帯を持つキャリパー形土器（8）や，地文に羽状縄文が施文される土器（8）が伴って出土している。

第2段階（第95図10～24）

1段階の1と7の文様のモチーフを折衷し，様々な文様を施文していく段階である。15に見られる様に渦巻文間の連結部分が1カ所ではなく数カ所に及び，連結する部分の隆帯上に沈線で渦巻文を施文するものが多い。広木上宿遺跡では第94図の第17号住居跡3の胴部渦巻文土器がこの特徴を持つ。20は胴部の文様の特徴からこの段階に含めた。口縁部は複数の突起を持ち一部橋状になるもので，1や8との関連も考えられるが，突起の間を弧状の隆帯で結び区画内を縦方向の沈線を施文するなど，口縁部つなぎ弧線文との関連も考えられる。10は20と類似する土器だが，口縁部の突起に橋状部分はなく胴部の沈線で施文された渦巻文はやや崩れた文様となっている。伴う土器は加曽利E系の口縁部は文様の崩れ（18）がみられるようになり，磨消懸垂文を持つ土器が出現する(11，24)。連弧文土器はいろいろな形状した連弧文が土器に施文され，一部文様に崩れがみられる（12～14，19，21)。

第3段階（第95図25～33）

頸部の括れや胴部の張り出しが緩やかになり，文様も大きく崩れる段階である。頸部の区画は雨垂れ状の短沈線によって施文され(25，30)，連結部分に施文された隆帯上の渦巻文は幅広になり(25)，ボタン状に丸く施文される土器もある。伴う土器は加曽利E系のキャリパー形土器は口縁部の湾曲が緩やかになり，口縁部文様帯は崩れながらも残り，胴部の懸垂文は口縁部文様と整合しなくなる(26，29，31)。27や32などは大宮台地では谷井・細田氏（谷井・細田　1995）らの加曽利EIII式の類型である吉井城山類や梶山類と伴出する土器である。しかしながら26，29，31などキャリパー類の口縁部文様帯が残る土器が多く，吉井城山類系も28のように同じ文様構成を持つ連弧文土器は出土するものの，主体的ではない。

以上周辺の遺跡における胴部渦巻文土器の変遷と広木上宿遺跡の変遷を比較してきた。その結果この地域においては，胴部渦巻文土器は連弧文土器とほぼ同時期幅で存在し，連弧文土器と違い段階ごとに変遷することが確認できた。つまり出現する段階，盛行する段

階，文様に崩れがみられる段階へという変化である。これは連弧文土器からの出現，盛行，崩れの段階が明確ではない広木上宿遺跡などにおいては，胴部渦巻文土器が一つの分類の目安として，有効性を持つと言えよう。以上胴部渦巻文土器の変遷を参考にすると，連弧文土器や磨消懸垂文から分類した広木上宿遺跡Ⅳ期は第1段階に，Ⅴ期は第2段階，Ⅵ期は第3段階に相当すると思われる（第95図）。Ⅵ期については資料が少ないため，最後で位置づけてみたい。ところでこの胴部渦巻文土器の文様の変化に関しては，大木式土器や唐草文土器や曽利式土器などさまざまな要素が含まれると考えられる。また梶山類との関連性も考えられる。それらについては今後の課題としたい。

最後に時期的な問題を整理すると本遺跡のⅥ期，胴部渦巻文土器からの分類では第3段階にあたる時期は吉井城山類が出現する時期で，谷井彪・細田勝両氏によって加曽利EⅢ式古段階とされた時期と思われる（谷井・細田　1995）。また金子直行氏の分類では加曽利EⅢ式新段階とされており（金子　1997），区分の名称が定まっていない時期である。広木上宿遺跡および周辺地域に関し若干この問題についていえば，吉井城山類や梶山類は主体的に出土しておらず，器形や文様の崩れた連弧文土器や胴部渦巻文土器や加曽利E系のキャリパー形土器が出土しており，新しい様相は見られず，1つの時期のはじまりに設定しにくい状況である。磨消懸垂文の出現にも注目し地域的な胴部渦巻文土器や連弧文土器の変遷など総合的に分類し，時期設定すべきであると考えられる。

まとめると広木上宿遺跡のⅢ期～Ⅵ期は，Ⅲ期は頸部無文帯の残る加曽利EⅠ式直後の加曽利EⅡ式古段階の時期，Ⅳ期は加曽利EⅡ式新段階で連弧文土器が出現しこの地域では胴部渦巻文土器が出現する時期，Ⅴ期は加曽利EⅢ式古段階で磨消懸垂文が出現する時期，Ⅵ期は加曽利EⅢ式新段階の時期と考えられよう。

2　出土石器について

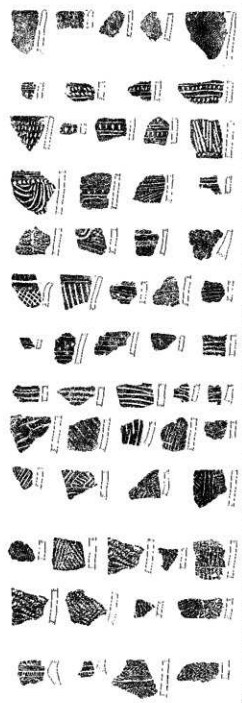
（1）　グリッド出土石器について

広木上宿遺跡の調査区南端の60～66グリッド間では，早期の沈線文系土器の田戸下層式が集中して検出されていることから，同じグリッド間から出土している石器群（第96図）についてもほぼ同時期であると考えられるが，量的には少ないものの他時期の土器も出土している。そこでここではほとんどの時期で出土し他の石器と比べると変化が追える打製石斧の時期について簡単にふれることとする。出土した打製石斧は特徴的な形状をしており，偏平な自然礫の片面のみを加工する礫器に近いものである。これらの形状の打製石斧については早期後葉の条痕文系土器に伴うことが知られている（小薬　1983）。県内の遺跡でも条痕文系土器に伴って出土する例は多い。しかし同じ美里町の甘粕山遺跡群の東山遺跡（水村他　1980）や浦和市の梅所遺跡（菅木他　1984），北宿西遺跡（青木他　1986）では沈線文系土器から条痕文系土器にかけての包含層から同様の打製石斧が出土している。また沈線文系土器に先行する撚糸文系土器に伴う打製石斧の形状は，神奈川県の大丸遺跡（芹沢　1957）から出土した100を超える打製石斧によると，長楕円形の自然礫の端部を片面加工して刃部を作り出しているものである。県内では川本町の四反歩遺跡（金子　1993）から大丸遺跡と同様の形状の打製石斧が撚糸文系土器に伴って検出されている。それらからいえば広木上宿遺跡出土の打製石斧の形状は撚糸文系土器の時期では，主体を占めていないようである。以上少ない類例ではあるが広木上宿遺跡の60～66グリッド出土の形状の打製石斧の時期は，沈線文系土器から条痕文系土器の時期に多く出土することがわかった。広木上宿遺跡からは条痕文系土器が出土していないことから，打製石斧は田戸下層式時に伴う時期であると考えられ他の出土石器も概ね同時期と考えることができる。

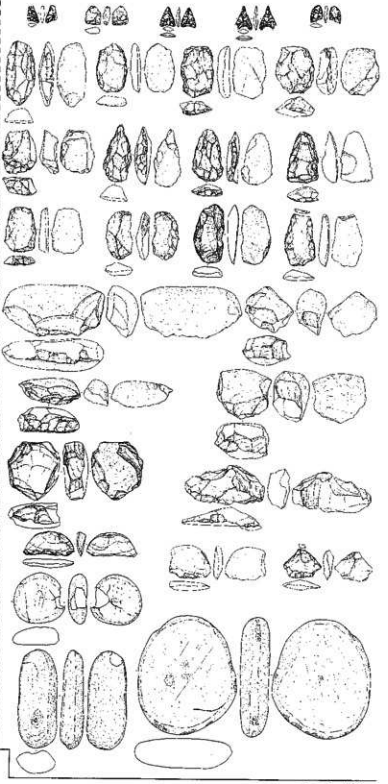
広木上宿遺跡の60～66グリッド出土の早期の打製

第96図　グリッド出土土器石器

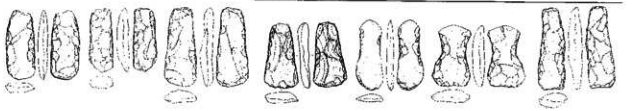
60～56 グリッド内出土土器

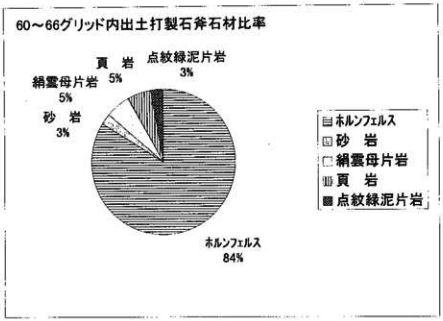


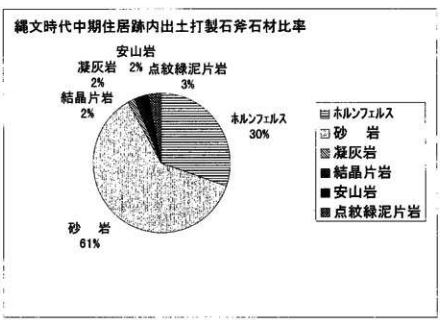
60～66 グリッド内出土石器



23～32 グリッド内出土打製石斧







石斧と中期の打製石斧の違いに関しては，形状の違いの他に使用された石材の差が特徴的であった。石材比率グラフに見られる様に，60～66グリッド出土の打製石斧の石材がホルンフェルスが大部分であるのに対し，中期の住居跡内出土の打製石斧は砂岩の使用がホルンフェルスを上回っている。この使用石材の違いは，使用目的の違いによる製作工程の差などが石材をあらかじめ選択しているとも考えられる。

以上簡単に打製石斧について記したが，時期や石材に関しては他の遺跡出土のものとも比較しなければ不明な点も多く，それらに関しては今後の課題としたい。

（2）　剥片について

広木上宿遺跡の遺構内やグリッドからは多量の剥片が出土した。その中には縁辺の一部が簡単な刃部を作り出していたり、刃こぼれ状になるものが多く見られた。明らかに刃部を作り出すものは掻器として図示したが、使用された可能性のある剥片のごく一部に過ぎないと思われる。本来ならばそれらの剥片も掻器類として分類すべきであるが、使用に関しては不明確でありここでは剥片と呼ぶこととする。これらのような剥片を使用する掻器類は広木上宿遺跡の周辺では、美里町甘粕山遺跡群の東山遺跡(水村他　1980)、岡部町東光寺裏遺跡(中島他　1980)、寄居町甘粕原遺跡、ゴシ

ン遺跡（並木他　1978）、児玉町古井戸遺跡（宮井 1982）などから出土している。時期は早期から中期にまでわたり、時期的には限られないようである。不定形な剥片の一部分をほとんど加工せずにそのまま使用する性格上、その認識が難しく、図示されてないものも多いと考えられる。量的には打製石斧などの石器を上回る可能性が高い。また使用段階については明確ではなく、剥片に関しても石器製作時に発生したものを利用するのか、使用する目的で剥片を作り出していたかは不明である。広木上宿遺跡では細かい剥片や砕片も多量に出土しており、これらは早期の礫器や打製石斧が出土しているグリッド60～66間の出土がほとんどで、石器製作時に発生したもので使用はされないと考えられるが、大きめの剥片は使用の可能性もある。石器製作時に発生した大きめの剥片を使用するのか、目的に応じて剥片を作り出したかは不明であるが、両方の可能性も考えられる。

広木上宿遺跡出土の使用されたと考えられる剥片を形態ごとに分類し、いくつかのグリッドに分割してまとめたのがグリッド別出土剥片形態表である（第8表）。形態の分類は以下のようにした。

A　表面または裏面に自然面を残すもの（第83図105）
B　側縁部に自然面を残すもの（第83図108）
C　自然面を残さないもの（第84図120、127）
I　剥片を縦長に使用するもの
II　剥片を横長に使用するもの
①　長さ4cm以上7cm未満
②　長さ2cm以上4cm未満
③　長さ1cm以上2cm未満

A、B、Cは自然面の残存部を表すもので、（ ）内は図示した掻器の番号である。I、IIは剥片の使用された刃部と考えられる縁辺を下に向けた時の剥片の形状である。また剥片は三角形状をするものが多い。①～③は刃部を下に向けた時の長さである。縦長に利用するものに①が多いのはそのためで、剥片自体の大きさは大差ない。③はチャート製のもののみで、他の石材は使用が不明確なため入れなかった。石材の内訳はグリッド別出土剥片石材表に示した。圧倒的にホルンフェルスが多いが、これは鋭い縁辺を作り出す石材を使用するためと考えられる。分類した表からは、形態差は不明確である。これは剥片を作り出した時点で、鋭くなった縁辺部をそのまま利用しているためでこれらの剥片が、打製石斧や礫器などのように一定期間の使用を目的として作り出されていないことを表しているとも考えられる。

また剥片を自然面の残存部によってA、B、Cに分類したが、それらの数量をグリッド別出土剥片自然面別分類グラフに示した。グラフから、Cの数量は60～69グリッド間では圧倒的に多い。前述のようにこのグリッド間は小剥片も多量に出土しており、石器の製作時に発生した剥片である可能性も高い。他のグリッド出土の剥片はA、B、Cともに量的な差はない。60～69グリッド内出土の石器群は早期を主体とすると考えられることから、この差は時期的な差の可能性もある。しかし中期の遺構内や中期の遺構が検出されるグリッド間からも、これらの剥片が検出されることから周辺の遺跡で見られるようにこの剥片利用の石器が中期に至ることは確実だと言える。水村孝行氏は甘粕山遺跡群の東山遺跡出土の使用痕のある剥片について目的的剥片として、一定の技術によって剥離されたものとし、2通りの剥片剥離工程を示している（水村　1980）。広木上宿遺跡の剥片は自然面の残存部より、東山遺跡の剥片剥離工程に当たるものもあると考えられるが、A、B、Cの自然面の残存部位による量的な差はなく明確ではない。

以上から広木上宿遺跡出土の剥片については、形態など不定形であり、剥片の鋭い縁辺部分があればそれを便宜的に使用しているようである。また石器製作時に作り出された剥片も使用していた可能性もある。多量に残る剥片からの使用は一時的なものに過ぎないようで必要に応じてその都度作り出しているようであり、そういう意味では目的的剥片として作り出されたものもあったといえる。しかしながら打製石斧や礫器などの石器の製作とは、明らかな相違がある。

第８表　剥片分類表

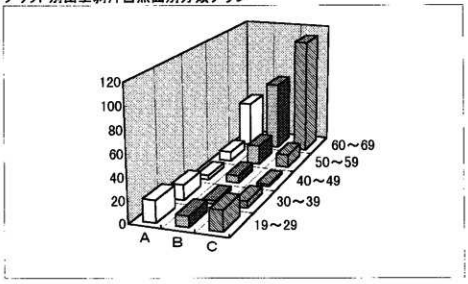
グリッド別出土剥片形態表

形態＼グリッド	19～29	30～39	40～49	50～59	60～69
A－Ⅰ－①	7	5	1	2	13
A－Ⅰ－②	1	2	0	4	6
A－Ⅱ－①	6	1	0	0	14
A－Ⅱ－②	6	6	3	3	10
B－Ⅰ－①	3	0	1	4	22
B－Ⅰ－②	2	2	1	6	12
B－Ⅱ－①	2	1	3	0	6
B－Ⅱ－②	3	0	2	8	25
C－Ⅰ－①	2	0	0	1	22
C－Ⅰ－②	7	0	0	8	57
C－Ⅰ－③	0	0	0	0	3
C－Ⅱ－①	0	3	1	0	4
C－Ⅱ－②	10	3	1	3	21
C－Ⅱ－③	0	0	0	0	4

グリッド別出土剥片石材表

石材＼グリッド	19～29	30～39	40～49	50～59	60～69
ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	28	13	6	23	173
砂岩	7	6	1	5	28
頁岩	6	2	3	4	5
安山岩	0	0	1	0	2
ﾁｬｰﾄ	13	3	0	7	6

グリッド別出土剥片自然面別分類グラフ



参考文献

青木義儲他　1984 「梅所遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会

青木義儲他　1986 「北宿西・北宿南遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会

石塚和則　1986 「将監塚－縄文時代－」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集

岡本孝男　1982 「笑里村忘度川遺跡群の調査」 第15回遺跡発掘調査報告会発表要旨

岡本孝男他　1983 「白欠・柳町・森浦・向田・向・東宮平・峯・栗山」 美里村遺跡発掘調査報告書第１集

小薗一夫　1983 「縄文時代早期後半における石器群の様相－南関東地方を中心に－」『研究論集Ⅱ』 東京都埋蔵文化財センター

柿沼幹夫他　1978 「東谷・前山２号墳・古川端」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集

金子直行　1993 「阿反歩遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集

金子直行　1997 「大山遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第180集

栗原文蔵　小林達雄　1961 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその縄年的位置」『考古学雑誌』 第47巻第２号

黒坂禎二他　1985 「北塚屋（Ⅱ）」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団第48集

笹森健一　1977 「前畑・鳥之上・出口・芝山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集

佐藤忠雄　1979 「大寄Ｂ遺跡・西浦北遺跡」 岡部町教育委員会

雲谷浩之　坂本和俊　1977 「北貝戸遺跡発掘調査概報」 美里村教育委員会

鈴木次郎　1983 「打製石斧」『縄文文化の研究』 第７巻

鈴木敏昭他　1983 「台耕地（Ⅰ）」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集

恋河内昭彦　1996 「南美和・新宮遺跡」 児玉町遺跡調査会報告書第６・７集

芹沢長介　1957 「神奈川県大丸遺跡の研究」「駿台史学」 7

滝口　宏・桜井清彦他　1980 「宥勝寺北浦遺跡」 宥勝寺北浦遺跡調査会

谷井　彪他　1982 「縄文中期土器群の再編」「研究紀要」 1　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

谷井　彪　1991 「鳥之上遺跡出土大木式土器の周辺」「調査研究報告」 第４号　埼玉県立さきたま資料館

谷井　彪・細田　勝　1996 「関東の大木式，東北の加曽利Ｅ式土器」『日本考古学』 第２号

中島宏他　1980 「伊勢塚・東光寺裏遺跡」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集

長瀧歳康　1991 「白石古墳群・羽黒山古墳群」 美里町遺跡発掘調査報告書第七集

中村倉司　1979 「白石城」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第36集

中村倉司　1980 「飯能神社前遺跡・一本松古墳」 埼玉県遺跡調査会報告第39集

荒木　隆　1978 「甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告書第35集

美里町　1986 「美里町史」 通史編

水村孝行他　1980 「甘粕山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集

水村孝行他　1981 「清水坂・安光寺・北坂」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第１集

宮井英一　1989 「古井戸－縄文時代－」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集

附　　篇

広木上宿遺跡出土土器胎土分析鑑定報告

㈱第四紀 地質研究所　井上　巌

目　　次

1　実験条件
2　実験結果の取扱
3　X線回析試験結果
　3-1　タイプ分類
　3-2　石英—斜長石の相関について
4　化学分析結果
　4-1　SiO2-Al2O3の相関について
　4-2　Fe2O3-MgOの相関について
　4-3　K2O-CaOの相関について
5　まとめ

図表目次

第1図　三角ダイヤグラム位置分類図
第2図　菱形ダイヤグラム位置分類図
第3図　Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム
第4図　Mo-Ch、Mi-Hb菱形ダイヤグラム
第5図　Qt-Pl図
第6図　SiO2-Al2O3図
第7図　Fe2O3-MgO図
第8図　K2O-CaO図
第1表　胎土性状表
第2表　化学分析表
第3表　タイプ分類一覧表
　X線回析試験チャート（巻末）
　化学分析表（巻末）
　写　真　集
　土器及び断面写真
　BEI（反射電子）写真

X線回析試験及び化学分析試験

1　実験条件

1-1　試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回析試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2　X線回析試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回析試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回析装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target：Cu，Filter：Ni，Voltage：40kV，Current：30mA，ステップ角度：0.02°

計数時間：0.5秒。

1-3　化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧：15KV、分析法：スプリント法、分析倍率：200倍、分析有効時間：100秒、分析指定元素10元素で行った。

2　X線回析試験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回析試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回析試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回析試験で得られたムライト（Mullite）、クリストバライト（Cristobalite）等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1） Mont-Mica-Hb 三角ダイアグラム

第1図に示すように三角ダイアグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont，Mica，Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト（Mont）、雲母類（Mica）、角閃石（Hb）のX線回析試験におけるチャートのピーク強度をパーセント（%）で表示する。

モンモリロナイトはMont/Mont＋Mica＋Hb*100でパーセントとして求め、同様にMica，Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1～4はMont，Mica，Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各項点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

2） Mont-Ch，Mica-Hb 菱形ダイアグラム

第2図に示すように菱形ダイアグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト（Mont）、雲母類（Mica）、角閃石（Hb）、緑泥石（Ch）の内、

a） 3成分以上含まれない

b） Mont，Chの2成分が含まれない

c） Mica，Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムはMont-Ch，Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch，Mica-HbのそれぞれのX線回析試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えばMont/Mont＋Mica＋Ch*100と計算しMica，Hb，Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1～7はMont，Mica，Hb，Ch 4成分を含み、各辺はMont，Mica，Hb，Chのうち3成分、各項点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回析試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト（Mullite）は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバライト（Cristobalite）はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。これらの事実に基づき、X線回析試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをⅠ～Ⅴの5段階に区分した。

a） 焼成ランクⅠ：ムライトが多く生成はガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。

b） 焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

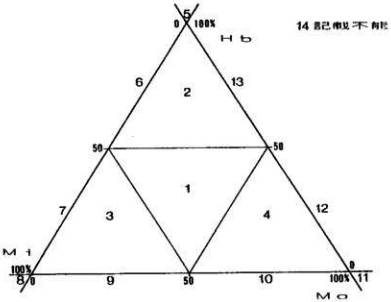
c） 焼成ランクⅢ：ガラスのなかにクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、薬状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

d） 焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な薬状を呈する。

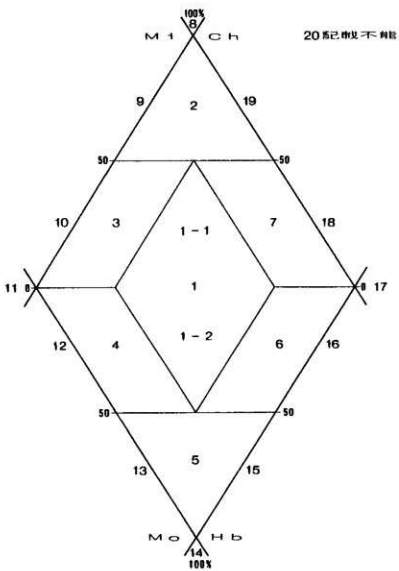
e） 焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

第１図　三角ダイヤグラム
位置分類図



第２図　菱形ダイヤグラム
位置分類図



2-3 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法（10元素全体で100%になる）で計算し、化学分析法を作成した。化学分析表に基づいて Sio2-Al2O3, Fe2O3-MgO, K2O-CaO の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

3 分析結果

3-1 X線回析試験結果

3-1-1 タイプ分類

第1表胎土性状表には既分析の将監塚遺跡と共に広木上宿遺跡の土器を記載してある。タイプ分類はこれら2遺跡の土器で新たにおこない、第3表タイプ分類一覧表を作成した。

第3表に示すように土器胎土は A～K の11タイプに分類された。

Aタイプ：Mont, Mica, Hb, Ch の4成分を含む。

Bタイプ：Hb, Ch の2成分を含み、Mont, Mica の2成分に欠ける。

Cタイプ：Hb 1成分を含み、Mont, Mica, Ch の3成分に欠ける。

Dタイプ：Mica, Hb, Ch の3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。

Eタイプ：Hb, Ch の2成分を含み、Mont, Mica の2成分に欠ける。

Fタイプ：Mica, Hb, Ch の3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。組成的には D タイプと同じであるが、検出強度が異なる為に、タイプが異なる。

Gタイプ：Mica, Hb の2成分を含み、Mont, Ch の2成分に欠ける。組成的には E タイプと同じであるが、検出強度が異なる為に、タイプが異なる。

Hタイプ：Mica, Ch の2成分を含み、Mont, Hb の2成分に欠ける。

Iタイプ：Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Ch の3成分に欠ける。

Jタイプ：Mont, Mica, Ch の3成分を含み、Hb 1成分に欠ける。

Kタイプ：Mont, Mica, Hb, Ch の4成分に欠ける。主に、nAl2O3・mSiO2・1H2O（アルミゲル）で構成される。

最も多いタイプは D タイプで、14個の土器のうち広木上宿遺跡の土器が5個、将監塚遺跡の土器9個が該当する。次いで、F タイプの12個で、広木上宿遺跡と将監塚遺跡の土器各6個が該当する。E タイプと G タイプの各7個、C タイプの5個、B タイプの3個、A タイプの2個、H、I、J、K の各1個となる。

3-2-2 石英（Qt）-斜長石（Pl）の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を造るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂は各々固有の石英と斜長石比を有していると言える。第5図 Qt-Pl 図に示すように I～IX の9グループに分類された。

Iグループ：将監塚遺跡の加曽利 E の連孤文土器が集中する。

IIグループ：広木上宿遺跡の加曽利 E、勝坂、阿玉台の土器が混在する。

IIIグループ：将監塚遺跡の加曽利 E が集中し、唐草文と連孤分土器、広木上宿遺跡の加曽利 E 直前と加曽利 E の土器が混在する。

IVグループ：広木上宿遺跡の加曽利 E が集中し、将監塚遺跡の曽利系の上器が共存する

Vグループ：広木上宿遺跡の加曽利 E が集中し、将監塚遺跡の曽利系、連孤文の土器が混在する。

VIグループ：将監塚遺跡の加曽利 E が集中し、唐草文系の土器が混在する。

VIIグループ：広木上宿遺跡の加曽利 E が集中し、将監

第１表　胎土性状表

試料No	タイプ分類	地成	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物																								
		クラス	Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Chl	Fe	Ch	Mgt	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-feld	Halley	Kali	Pyroxe	Au	ガラス	備考		
広本上段-1	E		6	20		133	166					2431	1294	107								須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-2	A		1	1	250	152	89	256		89		2007	1054									須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-3	D		6	10		128	130	195				2527	1148									須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-4	A		1	1	196	118	100	221				2395	1239									須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-5	G		7	20		127	90					1949	295	154								須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-6	G		7	20		128	121					2006	514									須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-7	F		7	9		102	85	167				2397	632									須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-8	J		10	19	219	149		226		72	212	482										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-9	B		5	11			93	170				1993	399									須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-10	F		7	9		146	109	288		59	217	639										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-11	F		7	9		125	81	141		69	247	499										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-12	D		6	10		96	116	218		47	288	1069										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-13	F		7	9		140	105	179			254	983										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-14	H		8	8		136		194			158	486	118									須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-15	E		6	20		105	165				221	801										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-16	F		7	9		170	94	182		86	218	474										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-17	B		5	11			262	136			114	743										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-18	I		8	20		112					308	620										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-19	C		5	20			79				290	732	126									須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-20	G		7	20		93	88				243	491										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-21	G		7	20		114	76				222	309	246									須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-22	C		5	20			97				221	477										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-23	C		5	20			89				242	524										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-24	F		7	9		147	137	186			98	408										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-25	D		6	10		94	107	169		49	120	510										須恵	凝文中期勝坂		
広本上段-26	D		6	10		115	248	283			125	473										須恵	凝文中期阿玉台		
広本上段-27	C		5	20			183				156	622	71									須恵	凝文中期加曽利E產銅		
広本上段-28	G		7	20		186	100				233	1189										須恵	凝文中期加曽利E		
広本上段-29	D		6	10		118	204	254		69	228	830										須恵	凝文中期加曽利E		
狩籠堀-1	D		6	10		193	171	164			154	1059	118									須恵	凝文中期加曽利E-Ⅲ	加曽利E	
狩籠堀-2	E		6	20		111	140				181	691										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	加曽利E	
狩籠堀-3	D		6	10		181	245	172			262	727										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	磨棄文	
狩籠堀-4	D		6	10		200	210	290		200	254	700										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	加曽利E	
狩籠堀-5	K		14	20							153	1092										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	加曽利E	
狩籠堀-6	D		6	10		223	260	223		77	142	512	137									須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	加曽利E	
狩籠堀-7	C		5	20			146				260	781										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	加曽利E	
狩籠堀-8	F		7	9		166	113	205			277	539										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	加曽利E	
狩籠堀-9	D		6	10		136	199	152			216	1168										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	曽利	
狩籠堀-10	F		7	9		167	166	222			144	1082										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	磨棄文	
狩籠堀-11	E		6	20		133	178				131	1813	166									須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	連孔文	
狩籠堀-12	E		6	20		101	117				285	702	165									須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	磨棄文	
狩籠堀-13	F		7	9		167	139	270		115	269	636										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	加曽利E	
狩籠堀-14	G		7	20		247	194				235	1158										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	曽利	
狩籠堀-15	F		7	9		267	230	276		222	272	2082										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	加曽利E	
狩籠堀-16	B		5	11			154	220			224	379										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	曽利	
狩籠堀-17	D		6	10		162	219	200			108	633	136									須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	連孔文	
狩籠堀-18	D		6	10		146	193	192			105	1030										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	連孔文	
狩籠堀-19	G		7	20		166	143				175	943										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	加曽利E	
狩籠堀-20	E		6	20		99	129				312	1281	146									須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	連孔文	
狩籠堀-21	F		7	9		167	125	268		88	212	620										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	連孔文	
狩籠堀-22	D		6	10		140	175	166			170	473	162									須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	連孔文	
狩籠堀-23	F		7	9		278	134	257		167	274	1249										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	磨棄文	
狩籠堀-24	D		6	10		184	185	273		191	182	1852										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	曽利	
狩籠堀-25	E		6	20		156	202				122	1327										須恵	凝文中期加曽利E-Ⅱ	連孔文	

第2表　化学分析表

试样编号	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	NiO	Total	备考		
岳本上宿-1	1.05	1.32	29.72	54.09	2.96	0.98	1.78	0.00	7.80	0.31	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-2	0.64	0.83	27.85	60.08	1.24	0.86	1.36	0.05	7.09	0.00	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-3	1.11	1.26	27.67	58.83	1.73	1.00	1.60	0.00	6.56	0.23	99.99	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-4	0.77	0.40	25.33	58.22	1.41	0.81	0.96	1.00	11.10	0.00	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-5	0.55	0.17	29.04	59.20	1.00	0.37	1.74	0.00	7.55	0.40	100.02	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-6	0.87	0.20	31.58	56.20	1.05	0.45	1.61	0.02	7.98	0.03	99.99	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-7	1.15	0.56	25.13	61.54	1.16	0.59	1.17	0.00	8.70	0.00	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-8	0.46	0.23	32.57	57.29	1.02	0.59	1.53	0.00	5.97	0.34	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-9	0.83	0.60	27.62	59.59	1.17	0.43	1.52	0.00	7.99	0.26	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-10	0.99	2.20	24.92	58.95	1.66	1.06	1.38	0.00	8.76	0.08	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-11	0.95	2.26	24.01	59.97	3.12	0.85	1.33	0.00	7.50	0.00	99.99	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-12	1.45	2.07	23.49	61.15	1.80	1.04	1.68	0.00	7.24	0.08	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-13	1.47	2.31	22.02	59.08	1.65	1.02	1.28	0.00	11.17	0.00	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-14	0.66	0.54	33.95	53.91	1.11	0.54	1.47	0.25	7.38	0.19	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-15	1.03	2.84	28.27	51.69	1.79	0.61	1.20	0.16	12.40	0.00	99.99	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-16	0.61	0.57	30.29	58.23	1.26	0.51	1.41	0.00	7.13	0.00	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-17	1.04	4.09	25.22	48.17	1.43	1.89	1.88	0.00	16.28	0.00	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-18	1.28	0.09	23.65	59.66	2.12	0.53	0.73	1.11	10.82	0.00	99.99	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-19	0.96	1.07	25.33	59.15	2.53	1.01	1.36	0.00	8.52	0.07	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-20	0.89	0.34	24.09	62.98	1.51	0.78	1.49	0.06	7.81	0.06	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-21	0.84	0.58	25.76	57.19	1.86	0.45	1.45	0.00	11.65	0.24	100.02	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-22	0.84	1.01	32.97	49.24	1.13	1.16	1.28	0.00	12.37	0.00	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-23	0.77	0.24	29.25	59.10	0.80	0.61	1.44	0.00	7.79	0.00	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-24	1.12	2.34	23.92	50.39	1.71	1.21	1.07	0.00	17.58	0.65	99.99	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-25	1.48	2.10	27.35	52.26	1.24	2.05	1.06	0.00	12.33	0.13	100.00	深鉢	縄文中期勝坂	
岳本上宿-26	0.72	5.52	22.95	50.07	1.86	1.39	1.43	0.00	15.81	0.26	100.01	深鉢	縄文中期阿玉台	
岳本上宿-27	0.50	4.10	28.49	44.30	0.94	0.93	1.72	0.24	18.53	0.25	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E直前	
岳本上宿-28	1.16	0.72	27.07	58.53	1.78	0.87	1.17	0.00	8.52	0.18	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E	
岳本上宿-29	0.97	3.33	22.86	58.50	2.11	1.27	1.31	0.00	9.66	0.00	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E	
											0.00			
将監塚-1	0.70	2.95	26.68	49.14	2.07	1.19	1.28	0.38	15.51	0.09	99.99	深鉢	縄文中期加曽利E-II	加曽利E
将監塚-2	0.75	1.38	32.41	45.55	1.07	1.03	1.54	0.08	16.19	0.00	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E-II	加曽利E
将監塚-3	0.89	3.57	24.06	53.66	2.40	1.01	1.32	0.11	12.74	0.24	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E-II	唐草文
将監塚-4	1.02	3.84	24.00	54.68	2.29	1.18	1.12	0.00	11.79	0.09	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E-II	加曽利E
将監塚-5	0.76	0.69	34.30	49.25	0.80	1.00	1.42	0.00	11.68	0.11	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E-II	加曽利E
将監塚-6	1.07	3.44	25.81	49.54	2.00	1.37	1.27	0.14	15.34	0.00	99.98	深鉢	縄文中期加曽利E-II	加曽利E
将監塚-7	0.96	1.44	28.56	51.21	1.45	1.28	1.13	0.00	13.97	0.00	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E-II	加曽利E
将監塚-8	0.48	0.41	28.73	60.52	1.39	0.87	1.18	0.10	6.06	0.27	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E-II	加曽利E
将監塚-9	0.65	1.74	27.70	51.30	1.58	1.04	1.18	0.01	14.47	0.32	99.99	深鉢	縄文中期加曽利E-II	曽利
将監塚-10	0.58	2.42	28.81	49.84	1.74	1.06	1.27	0.38	13.90	0.00	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E-II	唐草文
将監塚-11	0.71	1.18	31.18	46.39	1.35	1.34	1.49	0.00	16.21	0.15	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E-II	連孤文
将監塚-12	0.97	0.95	25.13	57.10	2.50	0.65	1.36	0.00	11.22	0.13	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E-II	唐草文
将監塚-13	0.82	1.12	28.70	58.25	1.58	0.88	1.51	0.00	6.70	0.44	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E-II	加曽利E
将監塚-14	0.60	1.43	31.43	48.80	1.91	0.78	1.40	0.21	13.22	0.23	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E-II	曽利
将監塚-15	0.97	2.69	24.24	54.19	2.37	1.36	1.18	0.34	12.38	0.28	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E-II	加曽利E
将監塚-16	0.41	1.00	27.53	46.35	1.54	0.75	1.71	0.20	20.52	0.00	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E-II	曽利
将監塚-17	0.95	2.44	27.32	49.71	1.70	1.32	1.16	0.36	15.02	0.02	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E-II	連孤文
将監塚-18	0.77	2.72	28.66	49.18	1.83	1.03	1.15	0.23	14.42	0.02	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E-II	連孤文
将監塚-19	0.52	1.39	30.06	50.25	1.73	0.84	1.45	0.00	13.75	0.01	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E-II	加曽利E
将監塚-20	1.24	0.70	31.21	49.93	1.23	1.04	2.01	0.34	11.99	0.31	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E-II	連孤文
将監塚-21	0.77	2.26	27.21	50.24	2.12	0.76	1.44	0.28	14.93	0.00	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E-II	連孤文
将監塚-22	0.50	2.14	25.80	50.51	1.64	1.37	1.62	0.39	15.37	0.65	99.99	深鉢	縄文中期加曽利E-II	連孤文
将監塚-23	0.77	0.81	30.99	58.59	1.00	0.58	1.27	0.09	5.49	0.42	100.01	深鉢	縄文中期加曽利E-II	唐草文
将監塚-24	0.46	3.22	26.04	52.20	2.15	1.17	1.29	0.16	13.19	0.10	99.98	深鉢	縄文中期加曽利E-II	曽利
将監塚-25	0.72	1.71	30.40	47.03	1.72	1.28	1.09	0.58	15.36	0.11	100.00	深鉢	縄文中期加曽利E-II	連孤文
											0.00			

塚遺跡の唐草文系の土器が混在する。

Ⅷグループ：将監塚遺跡の加曽利Ｅと曽利系の土器で構成される。斜長石の強度が高いことが特徴である。

Ⅸグループ：将監塚遺跡の唐草文と連孤文系の土器で構成される。

広木上宿遺跡の加曽利系の土器はⅤ、Ⅵ、Ⅶに集中し、一部はⅡとⅢグループに分散する。将監塚遺跡の土器のうち加曽利Ｅ系の土器はⅢとⅥの２グループに集中する。連孤文系の土器はⅠグループに集中し、明らかに加曽利系の土器とは異なる。唐草文系の土器は加曽利系の土器と共存する。

広木上宿遺跡の加曽利Ｅ直前、勝坂、阿玉台の土器はQtの強度の低いⅡとⅢグループに混在し、加曽利系の土器とは異なる。

4　化学分析結果

第２表化学分析表に示すように、広木上宿遺跡の土器と将監塚遺跡の土器を化学分析した。

分析結果に基づいて第６図 SiO2-Al2O3図、第７図 Fe2O3-MgO 図、第８図 K2O-CaO 図を作成した。

4-1　SiO2-Al2O3の相関について

第６図 SiO2-Al2O3図に示すように広木上宿遺跡と将監塚遺跡の土器は A-A'線を境として明瞭に分れる。A-A'線より左側の SiO2の値の低い領域には将監塚遺跡の土器が集中し、Ⅰ～Ⅲの３グループに分れる。右側の SiO2の値の高い領域には広木上宿遺跡の土器が集中し、ⅣとⅤの２グループを形成する。広木上宿遺跡の加曽利Ｅ直前の土器と勝坂、阿玉台系の土器は将監塚遺跡の領域にあり、Qt-Pl の分類と同じ傾向を示す。

4-2　Fe2O3-MgO の相関について

第７図 Fe2O3-MgO 図に示すように A-A'線を境として Fe2O3の値が低い領域には広木上宿遺跡の土器が集中し、Ⅰ～Ⅲの３グループを形成する。

A-A'線を境として Fe2O3の値が高い領域には将監塚遺跡の土器が集中し、Ⅳ～Ⅶのグループを形成する。広木上宿遺跡の加曽利Ｅ直前、勝坂、阿玉台の土器は将監塚遺跡の領域にあり、広木上宿遺跡の土器とは異質である。将監塚遺跡の連孤文系の土器と加曽利Ｅと曽利系の土器は異なるグループを形成するのが特徴である。

4-3　K2O-CaO の相関について

第８図 K2O-CaO 図に示すように、広木上宿遺跡と将監塚遺跡の土器はⅠ～Ⅷの８グループに分散する。広木上宿遺跡の土器はⅡ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅷの４グループに集中する。将監塚遺跡の土器のうち加曽利Ｅと曽利系の土器はⅤとⅦに集中し、連孤文系の土器はⅣグループに集中し、明らかに異なるグループを形成しているのが特徴である。広木上宿遺跡の土器のうち加曽利Ｅ直前、勝坂、阿玉台は将監塚遺跡の土器と同じグループに属し、明らかに異質である。

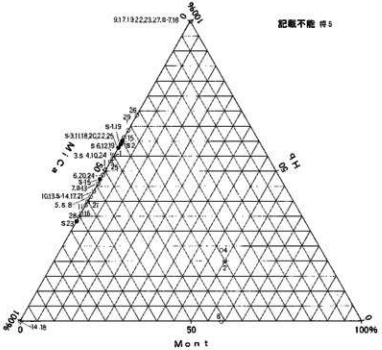
5　まとめ

1)　土器胎土はＡ～Ｋの11タイプに分類され、Ｄタイプは14個、Ｆタイプは12個、ＥとＧタイプは各７個で、これら４タイプで54個のうち40個が該当し、70%以上を占める。

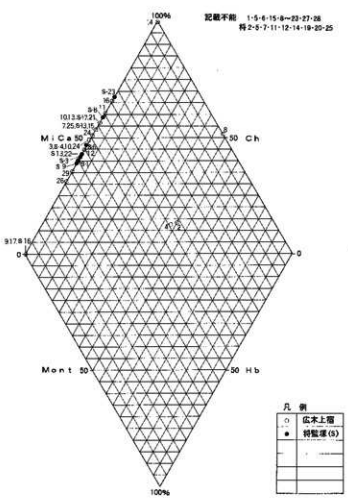
2)　Ｘ線回析試験に基づく Qt-Pl 相関では広木上宿遺跡の土器はⅤ、Ⅵ、Ⅶの３グループに集中し、将監塚遺跡の土器とは明らかに異質である。将監塚遺跡の土器のうち加曽利Ｅ連孤文系の土器は異なるグループを形成し、明らかに異なる。広木上宿遺跡の加曽利Ｅ直前、勝坂、阿玉台の土器は将監塚遺跡の土器と共存する傾向が認められる。

3)　化学分析結果では広木上宿遺跡の土器は SiO2、Fe2O3の値が高く、CaO の値が低い。これに対して将監塚遺跡の土器は SiO2, Fe2O3の値が低く、CaO の値が高い。広木上宿遺跡の加曽利Ｅ直前、勝坂、阿玉台系の土器は将監塚遺跡の土器の領域にあり、将監塚遺跡の土器との関連性が伺われる。将監塚遺跡の土器のうち連孤文系の土器は加曽利Ｅや曽利系の土器とは異なるグループを形成し、異質である。

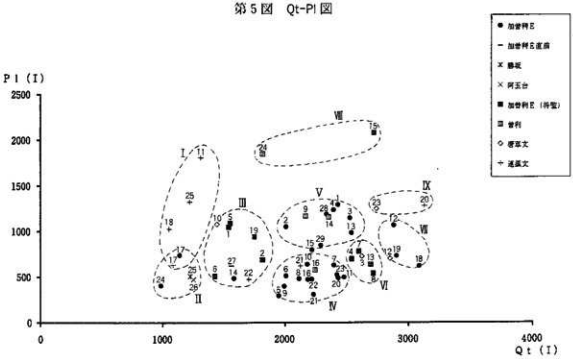
第３図　Mo-Mi-Hb
三角ダイヤグラム



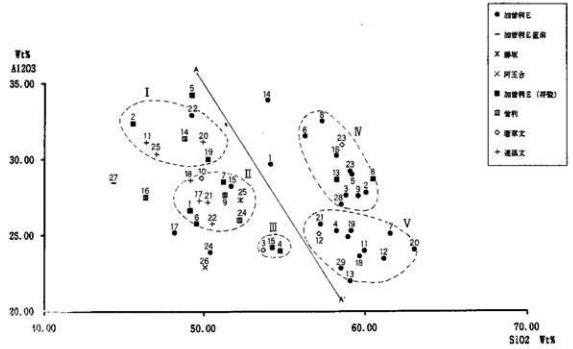
第４図　Mo-Ch, Mi-Hb
菱形ダイヤグラム



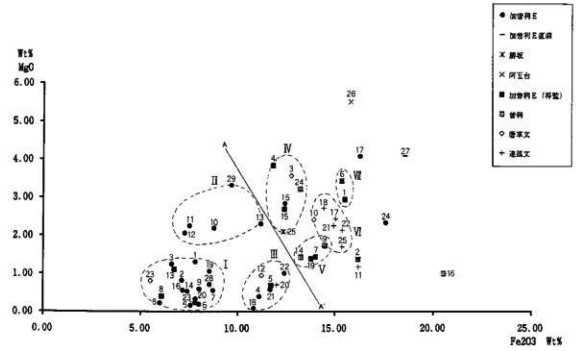
第5図　Qt-Pl図



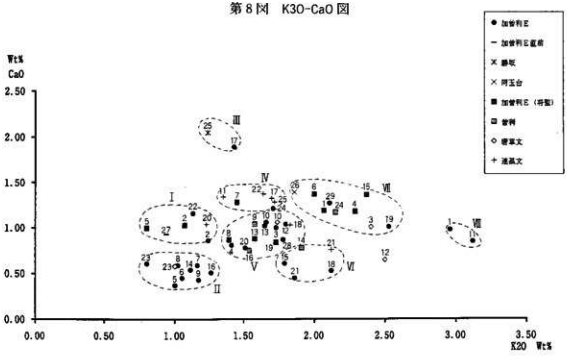
第6図　SiO2-Al2O3図



第７図　Fe2O3-MgO 図



第８図　K3O-CaO 図



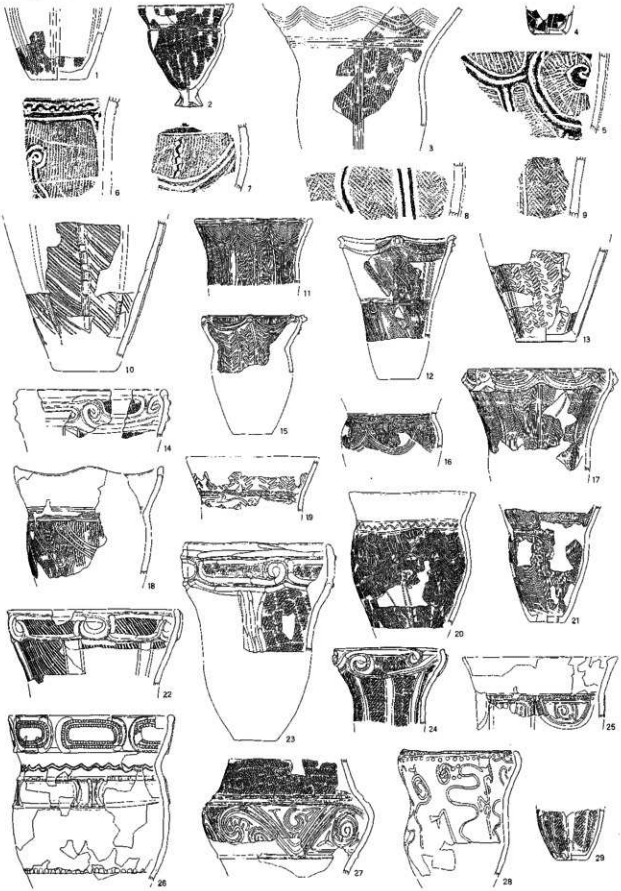
第3表　タイプ分類一覧表

試料No	ﾀｲﾌﾟ分類	時　期	試料NO	ﾀｲﾌﾟ分類	時　期
広木上宿- 2	A	縄文中期加曽利E	将 監 塚-11	E	縄文中期加曽利EⅡ
広木上宿- 4	A	縄文中期加曽利E	将 監 塚-12	E	縄文中期加曽利EⅡ
広木上宿- 9	B	縄文中期加曽利E	将 監 塚-20	E	縄文中期加曽利EⅡ
広木上宿-17	B	縄文中期加曽利E	将 監 塚-25	E	縄文中期加曽利EⅡ
将 監 塚-16	B	縄文中期加曽利EⅡ	広木上宿- 7	F	縄文中期加曽利E
広木上宿-19	C	縄文中期加曽利E	広木上宿-10	F	縄文中期加曽利E
広木上宿-22	C	縄文中期加曽利E	広木上宿-11	F	縄文中期加曽利E
広木上宿-23	C	縄文中期加曽利E	広木上宿-13	F	縄文中期加曽利E
広木上宿-27	C	縄文中期加曽利E直前	広木上宿-16	F	縄文中期加曽利E
将 監 塚- 7	C	縄文中期加曽利EⅡ	広木上宿-24	F	縄文中期加曽利E
広木上宿- 3	D	縄文中期加曽利E	将 監 塚- 8	F	縄文中期加曽利EⅡ
広木上宿-12	D	縄文中期加曽利E	将 監 塚-10	F	縄文中期加曽利EⅡ
広木上宿-25	D	縄文中期勝坂	将 監 塚-13	F	縄文中期加曽利EⅡ
広木上宿-26	D	縄文中期阿玉台	将 監 塚-15	F	縄文中期加曽利EⅡ
広木上宿-29	D	縄文中期加曽利E	将 監 塚-21	F	縄文中期加曽利EⅡ
将 監 塚- 1	D	縄文中期加曽利EⅡ	将 監 塚-23	F	縄文中期加曽利EⅡ
将 監 塚- 3	D	縄文中期加曽利EⅡ	広木上宿- 5	G	縄文中期加曽利E
将 監 塚- 4	D	縄文中期加曽利EⅡ	広木上宿- 6	G	縄文中期加曽利E
将 監 塚- 6	D	縄文中期加曽利EⅡ	広木上宿-20	G	縄文中期加曽利E
将 監 塚- 9	D	縄文中期加曽利EⅡ	広木上宿-21	G	縄文中期加曽利E
将 監 塚-17	D	縄文中期加曽利EⅡ	広木上宿-28	G	縄文中期加曽利E
将 監 塚-18	D	縄文中期加曽利EⅡ	将 監 塚-14	G	縄文中期加曽利EⅡ
将 監 塚-22	D	縄文中期加曽利EⅡ	将 監 塚-19	G	縄文中期加曽利EⅡ
将 監 塚-24	D	縄文中期加曽利EⅡ	広木上宿-14	H	縄文中期加曽利E
広木上宿- 1	E	縄文中期加曽利E	広木上宿-18	I	縄文中期加曽利E
広木上宿-15	E	縄文中期加曽利E	広木上宿- 8	J	縄文中期加曽利E
将 監 塚- 2	E	縄文中期加曽利EⅡ	将 監 塚- 5	K	縄文中期加曽利EⅡ

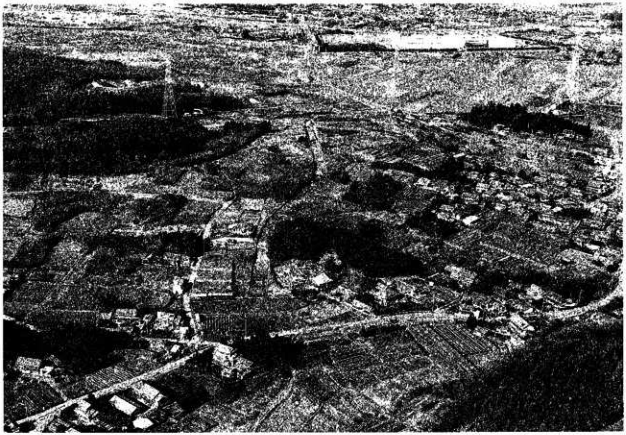
第4表　広木上宿遺跡胎土分析土器一覧表

番号	図版番号	出土地点	器種	備考
1	第12図 5	第6号住居跡	深鉢	炉体
2	第12図 2	第6号住居跡	深鉢	
3	第12図 3	第6号住居跡	深鉢	
4	第12図 4	第6号住居跡	深鉢	
5	第14図76	第6号住居跡	深鉢	
6	第14図67	第6号住居跡	深鉢	
7	第14図52	第6号住居跡	深鉢	
8	第15図88	第6号住居跡	深鉢	
9	第15図97	第6号住居跡	深鉢	
10	第21図 9	第8号住居跡	深鉢	
11	第20図 6	第8号住居跡	深鉢	炉体
12	第20図 5	第8号住居跡	深鉢	
13	第21図 8	第8号住居跡	深鉢	
14	第20図 2	第8号住居跡	深鉢	
15	第20図 3	第8号住居跡	深鉢	
16	第29図 1	第13号住居跡	深鉢	炉体
17	第36図 1	第17号住居跡	深鉢	
18	第36図 3	第17号住居跡	深鉢	
19	第36図 5	第17号住居跡	深鉢	炉体
20	第36図 2	第17号住居跡	深鉢	埋甕
21	第37図 9	第17号住居跡	深鉢	
22	第42図 1	第19号住居跡	深鉢	埋甕
23	第42図 2	第19号住居跡	深鉢	柱穴内
24	第43図 1	第21号住居跡	深鉢	炉体
25	第48図 1	第24号住居跡	深鉢	炉体
26	第52図 1	第28号住居跡	深鉢	
27	第63図 1	第81号土壙	深鉢	
28	第65図 1	第1号埋甕	深鉢	
29	第65図 2	第1号埋甕	深鉢	

第９図　広木上宿遺跡胎土分析土器

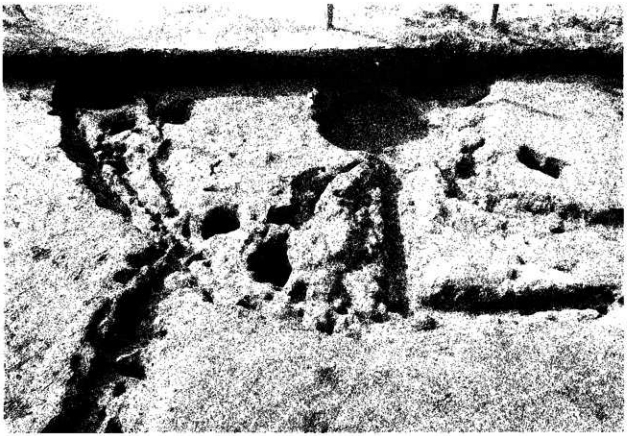


写真図版



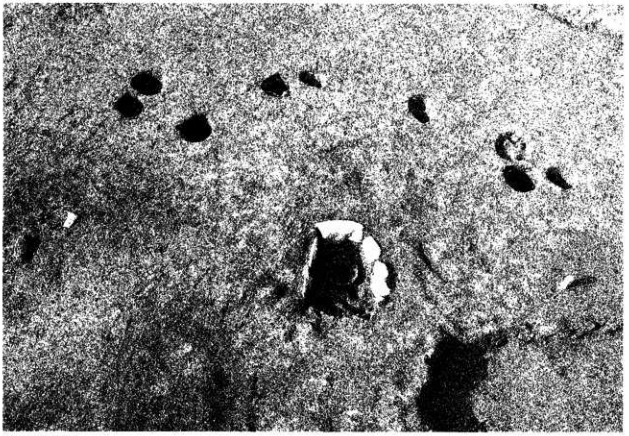
広木上宿遺跡航空写真

広木上宿遺跡航空写真

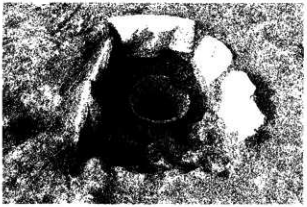


第5号住居跡

第6号住居跡



第 8 号住居跡



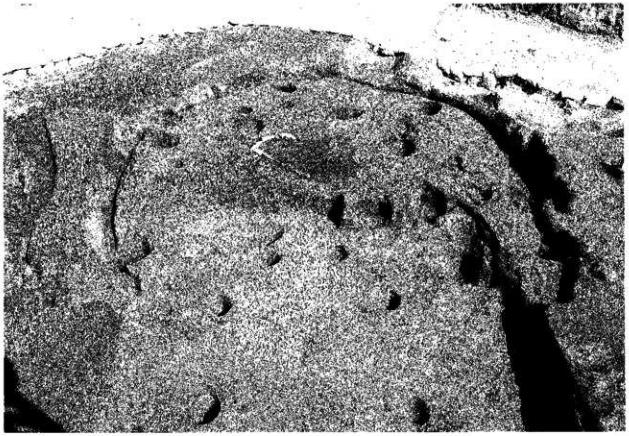
第 8 号住居跡

第 8 号住居跡炉跡断面

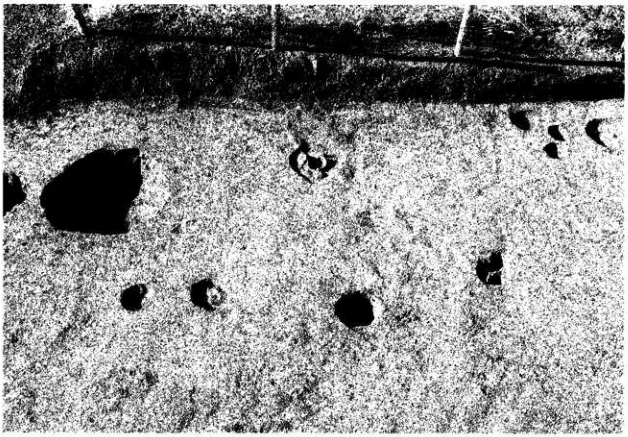
第 8 号住居跡土器出土状況

第 8 号住居跡土鈴出土状況

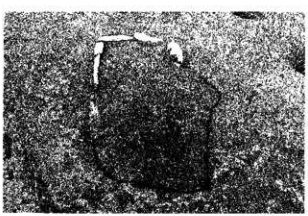
第９号住居跡土層



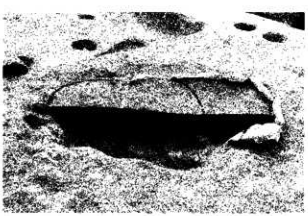
第９号住居跡全景



第13号住居跡全景



第 9 号住居跡炉跡



第 9 号住居跡炉跡断面

第13号住居跡炉跡

第13号住居跡炉跡断面